

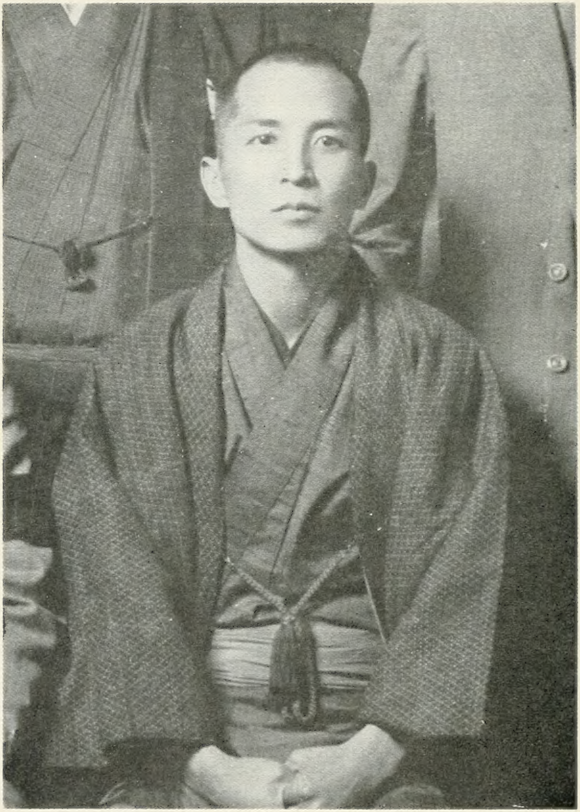
長塚節全集

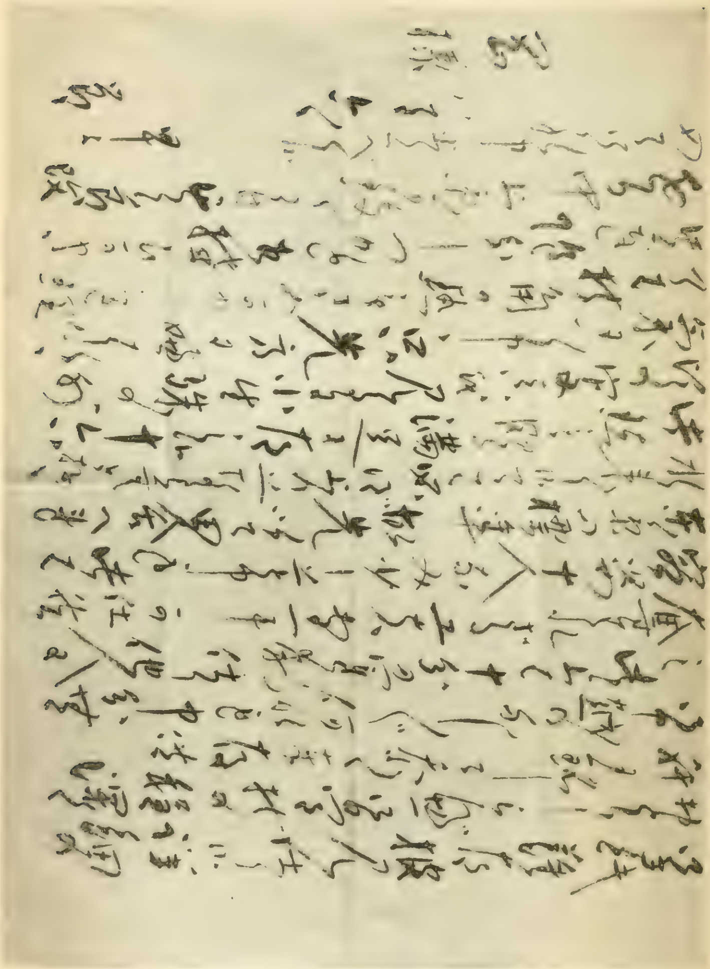
第五巻

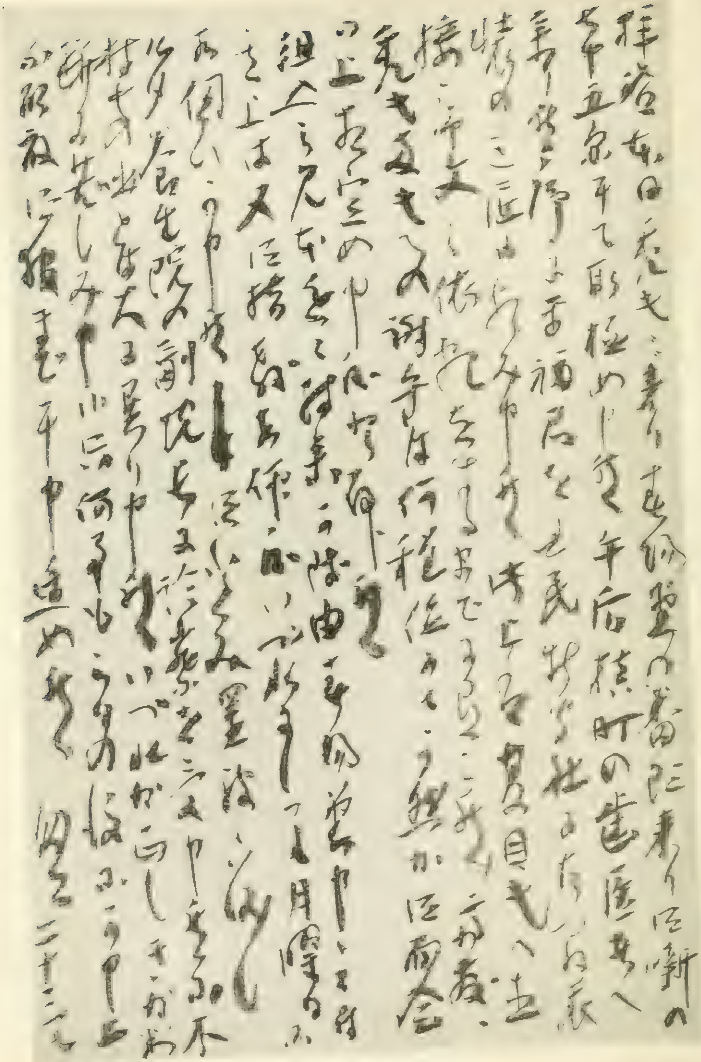
長塚節著

書簡集 上

東京
春陽堂版







アニ・ギの一周年出版あ[illegible]へあげるやうにし[illegible]兵わ[illegible]を務めさんでいてください[illegible]

にぎ[illegible]様　私なぞも九月以来の[illegible]

か出ま於た、[illegible]ましは大覚えさしてもらい

様りで[illegible]に世帯かに[illegible]のいい事ほ任作る所出て来るなら[illegible]

いわさい、[illegible]の[illegible]やお目のまかぬ[illegible]出来る[illegible]ほども

げて[illegible]物のいい方が団扇[illegible]自分目いも一尾おかまない困り[illegible]

、何のよりも可つて気を出して[illegible]君がいけないくらい[illegible]ます

学校出の人を皆、うんなじゃない[illegible]思いますでせう私も出

いたら純十般僅いると思います[illegible]から[illegible]学校から出ながか

あるらませんお目[illegible]どんな[illegible]出来ないの

りめ十四や二十の[illegible]とか[illegible]出来る[illegible]

ですもの[illegible]彼人の[illegible]私も[illegible]ても出来ない[illegible]

ますます[illegible]心あり[illegible]

来ない[illegible]きこえるが勉強[illegible]年つ経つ[illegible]

兵を[illegible]ますよ、私[illegible]よ[illegible]

何一寸気もる[illegible]てから[illegible]十六七年の[illegible]ます、一時もどんどん勉強した

うと[illegible]ましたのを[illegible]して生来[illegible]出来ません[illegible]

ども[illegible]なのでず、[illegible]とよしとして[illegible]ます[illegible]

[illegible]やなません、[illegible]私の望むのも非常の[illegible]通ります[illegible]

立派な[illegible]でならぬ[illegible]許せないのです[illegible]しいでせう、

十二月廿日　朝　あたまが　いたい

長塚節書簡集上目次

長塚節書簡集 上

母堂宛

其一

○

大黑柱の處の書物は源三郎に荷造のことを命じ置候へども如何に候や。荷造の上は大至急石下の停車場の通運（驛の直接取扱には無之候）へ賴み、

東京市赤坂區青山南町青山腦病院

齋藤茂吉

宛の荷札をつけてお出し被下度候。差出人は勿論私のこと、くれぐれもこれは取急ぎ御願申上候。

荷札は其様に大きくなくても宜敷只明瞭に御書き被下度候。

○

前の吉三郎奥田へ見舞に行くと申居候故私止め申候。父上も御喜びに相成間敷候へば、行かれれば却つて手不足の奥田が厄介にて迷惑故行かぬ様にと母上よりもわざわざ御きかせ被下度候。

○

昨日朝危機一髪にて汽車に乗り申候。源三郎へ十錢お遣し被下度候。

○

岩吉へ小遣五十錢あづけ申候。

○

金藏へ五十錢貸し申候。

○

母上樣食物を愼み、此處身體に障らぬ樣にして年內一杯御奔走願上候。

○

今日父上よりの御手紙拜見　今少し奧田が世話しくれ候由何よりのことに存申候。尤も今日井村學士相訪ね候處一日に行ける樣ならば、轉地の方があの寒い處より宜しからんとのこと、然しながら幾分づつ宜敷處ならば矢張動かぬ方可然かとも存申候。井村氏は決して二三ヶ月にて死ぬ樣のことなしと順次郎へ申候由、或は今は不明なれど肺結核と極つても老年故大丈夫とも申され候由に候。

○

今日小布施より牛肉果物を國生宛に送り申候。肉は母上樣少し御食用に成りて、

3

あとを改めて奧田へ御送り相成候樣希望仕候。果物も同樣に候。

○

美濃德へ參り候處、一時よりは三割下げの由春まで待ち候が大丈夫と申候。東京の博覽會前には開會中よりも却て前景氣がよく成るならんと申候。順次郎利子丈は拵へくれ候。今夜あたり老人へ申込む筈に有之候。

○

私の病氣は矢張り再發に候へども、只一度器械にてつまみ取ればなくなる由、然し今東京は寒き故暫く平塚あたりへ行き居り潰瘍が大きく成らねば其儘におきて春手術し、大きく成る樣ならば今手術すること、根岸の養生院へは入院せずして神尾學士の手にて手術を受くること、潰瘍（カイヨウ）は米粒の半分位なれど、實際の處癒るまでには始めてから一ヶ月かかると申し候。一昨年とは異り今度は早く見つけ候故樂に有之候。明後日あたり平塚へ參り候。二週間たつて復た神尾氏に見せ變化なければずつと暖地に居る筈に有之候。それ程心配のことは無之候。

私も一昨年の様に心配致不申候。兎に角久保夫人へも問合せ同氏上京ならば一度診察を受くる筈に有之候。平塚海岸は養生院へ一緒に入院致居候人も有之都合宜しと存申候。

○

松村へも御出被下度候。

○

私のことは別段御心配なく願上候。必ず手術しても一ヶ月にてよく成り、且つ根岸のやうでなく經費もかからぬことと存じ候。

○

以上書き列ね候ことはよくよく御よみ被下度お忘れなき様願上候。おからだ御注意の上御盡力願上候。

廿四日夜

節

5

牛肉のことお直へはなし候に母上にて皆めしあがつて下さる様と申候。果物丈先方へおとどけ願上候。（大正二年二月二十四日　東京市小石川豐川町小布施氏方より　封書　茨城縣結城郡岡田村　母堂宛）

其二

堆肥、さつまの蔓の分は今二回位切り返すまではかびぬ樣水をくれてよくよく注意すること。煙草、土草の分も水を一度やる必要あり。さつまの蔓の分を切返す時はこゝへ出しの毛をよく交ぜること。たなの裏の竹の枝は重ねて置きし分は葉が落ちたるべく、これはすべての仕事の都合宜しき故其竹の葉はこれまで同樣全部掻き出して宅へ引き取り堆肥にすること。竹の葉を積みたらばかびぬ注意尤も肝要なり。

藏の屋敷の先頃堆肥を入れし場所に土が本當にかかり居らぬ所あるかなきか能く見てからぬ處あらば十分に掛けておくこと。

店の裏の此間伐りし部分は三尺おきに堀にほつて堆肥を入れて置く。一反步と見て木の葉のを殘らずと、こゝへ出しの青刈豌豆と青草の殘りの分丈とにて宜しかるべし。それでも千貫匁に足らねば麥藁のを足すこと。但し堆肥はどの分も何百何十貫匁と明瞭に區別し、出した月日も併せて記し置くこと。これは淸の手帳へ控へさせること。

栗畑は早く片附て國松に開墾させること必要。松粗朶を卯屋が欲しき由、尤も全部にて卅五束の割にして貰ひたしと鼻龜申し居りしが篤と御相談肝腎に候こと。眞木は全部何程出來候や松は五十五圓以下に賣らぬがよろしく候。鼻龜の周旋は少々注意して御相談宜しく候。

垣根はだんだんに先へおくつては際限なき故、思ひ切つて結はねば駄目に候。西

の出入口は斷然塞がねば宜しからず。今度はその御積に願上候。あれへ口を開けて置くは禍のみに候。門の畑の垣根も同時に結ばねば見づらく候。門の畑の萩、菖蒲等苅り取る必要有之候。

竹の庭及び裏の山に積みあるものは前新田の吉重へ相當相場に讓りしあとも成るべく賣却して然るべく候。吉重へはおたけの給金の全部は渡さぬが宜しく、而して給金以外など貸すことは出來不申候。前の淸五郎へも貸さぬ由申せばそれは一言にして十分なるべく候。鼻紬周旋したがれどこれは餘程注意を要し候。前新田の元吉などにもそれとなく相場を積らせ候こと緊要に候。彼も世間の賣買も知り居る故大變の相違もなかるべく候。そして商人にも見せ、世間の相場より一束五厘安に渡せば大事無しと存じ候。山田安公にも一寸見せて何氣なく値積りさせ、又篠山の才助なども呼びて見せるが宜しく候。何にしても鼻紬は安買の人間故あてには成り不申候。あれでは今後の商賣は駄目に有之候。又彼は宅などのものは

安く賣らせて買手よりよくいはれたき人間故迂濶には參らず候。店の裏の分も宅にて用ゐる分卽ち最下等のものを除き前の淸五郎へも讓ること、其以前に十分安公などにも値積りさせ、時宜によりては一杯買つて（五十錢位やり候）忠助などにも見せて宜しかるべく候。どちらも篠山の才助に見せて然るべく候。

大變に掛けし粉炭、餘り多くかかり居る處は少しかつぱいてやること。冬ばりは既にすみしことと存じ候。かつぱくのは踏む時にてよろしく候。然し餘り後れては宜しからず候。

納屋屋敷の女竹も浪活に見せて宅に必要の分だけ除きあとは賣却のこと。女竹もなかなか高く候。小助は駄目故話を組まぬが宜しく、向石下の茂十さんなどにも見せて宜しく候。同處のは延びもありなかなか宜敷品に候。只根ばき故一年生のもの有之これは安く候。棚竹はよきものは一束五六十錢の小賣に候。

湯殿あたりの戸締は嚴重にせねば宜しからず。錠前は水海屋にて買ひしもの行燈

部屋あたりに有之候。すべて戸締りは私より申遣したりと清へ命令致し置くこと第一よろしと存じ候。

一寸手すきに釜場の壁だけも塗らねば見にくく此は大變宜しからぬ儀に候。億劫にすればどこまでも駄目に候。

うら庭の唐萩も苅つて捨てること。

本年度だけは小作の奬勵米は從前通りに出すがよろしと存じ候。但し去年の饅頭屋の如きは引いて出して可然候。

古舍の松も眞木に伐りてよろしかるべく候、源三郎に敎へさせればもとやま等も直ぐ分り可申候。前の萱立の堀ぶちにも少々あり。前屋敷の萱立の處にも少々有之候。

煙草のからの禮に友右らへは非常に手間かかりて損失の話をして四十把位古舍の分渡して相當と存じ候。政市へは同四十把、喜助へは十把、彌市へは反三十三四

把の割にてよろしく候。彌市は多分五畝歩と存じ候故十七把にて十分に候。
兎に角、堆肥小舎の壁を塗るだけの土をつけて置くこと。これは先も長きこと故氣長にやること。然し棄てて置いては運び不申候故、小荷駄と約束して暇の時に段々につける樣致し度候。

屋根替したらばふるき萱草には煤つき居るべきに付大事にぎつと縛つて雨にあてぬ樣仕舞ひおくこと肝腎に候。

中宿屋敷のへり木、及び竹の中の樫は全部伐採して眞木にするがよろしく、なま木で賣るなど申しても買手はなく駄目に候。それよりも眞木にして宅へ引きとり小屋積など宜しかるべく候。又よき買人あらばすぐ賣るも宜しく、炭燒へ賣るが一番はけよしと存じ候。中宿屋敷のへり木と申してもゐるでとたらんぼは伐ること成り不申、これはもとやまへ十分御注意願上候。これを伐られては大變に候。忘れては飛んだこと故しつかり御願申上候。梨畑元屋敷の分も竹の中の木は伐る

必要有之、納屋屋敷の道ぶちのそねの木も伐採栗畑のうしぐみの垣根の中の樫や栗も同様に候。

傭人の男、女はまだ話合相成らず候や。男は庄六とすれば仕事に世話なき代り女の方の關係少し世話と存じ候、若し同人の世話する政次といふものの娘を置き同人も置くとすれば馬場にて兩人は何の關係もなきかどうかよくよく聞き質す必要有之候、おとよの母親にふくませ一郎を呼び出し中宿の婆などに本當のこと聞かせれば宜しく候、おつまならば申分なけれど此は九分外れ候ことと存じ候、榮吉の子か五箇の木挽の子ならばそれ程心配無之と存じ候、尤も榮吉の子も兩親とも系統が系統故むやみに安心も成り兼ね候、然しこれは人間がおとなしき故一年位は愼み可申候、豊治も望みとあれば五日なり十日なり置くも宜敷候へども丸奉公でなければ夜遊びの味を覺え朋輩を感化する心配も有之候故、置くとなれば其邊源三郎立會の上十分申渡す必要有之候。

おつぎと清は据置のこと。おつぎなど何とか申候はば他へ出せば男の心配ある旨兩親へ申しきかせ岩吉にも其旨含ませ、説得すれば纒り可申候。これは策略には無之實際の話本人の爲めに有之候。約束の時は三郎立會の上おつぎへも十分戒めねば駄目に候、清へも申きけおつぎの注意おこたらぬ樣致させること得策に有之候。

およしも置いてやる方よろしく、兎に角病氣もまだ全治せず自宅へかへして再發など致す樣にては世間態も惡しく只今の樣に誰も一人疑はぬ内癒させたくと存申候。癖故少々づつは出可申候へども本人も心をきりかへ置いて貰ひ度由申居候。十分戒めて置いてやるが相當の處置と存申候。又本人の藥なくなりし時は清次に早速下妻梅屋にて買はせ候樣御注意下され度、段々宜しき時は一度清次が本人をつれて奧田へ行けば此上もなく候。朝一番の汽車にて宗道發行きどまりが下館故間違もなくあれから二里歩いて診察を受け日がへりは樂と存じ候。下館にて切符

買ふも何も清次があの調子にて開けばこれも間違有之間敷候。

駄目とは存候へどもおつまの方も十分力を入れ候て宜しくと存じ候。

小三郎の悴金十郎の件は本人や親へ申すより直接巡査へ話して邸宅内へ押し込むことだけの注意をさせ候こと尤もよろしと存申候。私方よりも武藤氏へ直接それだけのこと申込む積に有之候。

おとさは何としても置かぬがよろしく一つはあの様なる堕落者をおきし結果若い衆も入り込み申候。少し注意して頼めばあれ以下のものは有之間敷候。

若し其内都合出來れば私方へ一人お遣し願上度く汽車賃片道七十八錢(上野まで)上野から歩いて萬世の方へ來て末廣町の電車停留場の處の二軒向きあつた黒燒屋のすぐ南の横町を西へはひるとすぐに候。一番汽車でくれば日がへり十分に候。

尤もこれは又此次に詳しく可申上候。

助太郎の件は極り候こととは存じ候へども如何に候や、私へ御手紙下さる時も暑

い寒いなどは要り不申、只助太郎事件極つたら極つた、皆柴の二人へ十五圓、角治へ五圓やつたらやつたとだけ御書き被下ならば手間もかからずと存じ候。ちよいちよいと御知らせ被下度願上候。

私も一昨日手術して潰瘍の處は全部取り申候。只小豆粒位とり申候。大に樂に相成申候。一昨年來惡き處へ今度出來申候もの故以後は一層注意必要に候。退院すれば一寸歸宅して更に轉地致可申、熱も非常にさがり申候。食慾も十分にて今日は元旦の雜煮自分ながらおどろく程たべ申候。其かはり醫者からは消化藥をくれ候へども毎日三四回づつ靜坐して時間にしては一時間以上に相成申候。

別紙は手紙雜誌などへつけて私へお送り被下度此間の附箋は誠にへまに有之候。

胡桃澤勘内君よりの荷物まだ當地へとどき不申宅へは來らず候や伺上候。以上の内助太郎の件此の胡桃澤君の荷物の件丈は大至急御返事願上候。必ず御他行の時は早く用をすまし、日の高い内に歸宅して十分火をたいておあたり被下べく候。

さすれば大事なく濟み可申候。（大正三年一月一日　金澤醫院より　封書　母堂宛）

其　三

拜復。太師堂南桑畑趾のあき間の陸稻は門畑と同じ配合にてよろしく候。薩摩趾あまり下等ならば早く苅り取り陸稻を蒔きてもよろしく候。但し配合は前同樣。さつま趾の分七郎平屋敷へ入れ候こと至極よろしと存候。餘りを女竹の間へ施すことも結構と存申候。門畑七畝步梨畑元屋敷へしき込み候ことも至極と存申候。梅畑の陸稻趾の分藏の下大工の前へ入れ候ことも思ひつきと存申候。餘分の處置は如何樣とも御願申上候。仁右衞門屋敷へ入れることなどは殊によろしきことと存申候。納屋の屋敷の女竹の明間へ餘りを入れしことも思ひつきと存申候。屋根替の節の分は私歸宅まで御待被下度候。味噌蓋は陸稻へ入れしこと此上もなく存じ候。大豆一俵も私歸宅まで御待願上候。

陸稲蒔付の際毛肥しを入れ候はばアンモニヤの必要無之と存申候。

陸稲蒔付は堆肥三百貫匁アンモニヤ一貫匁但しこれは改めて買ふ必要有之間敷候。

灰六貫匁

大豆蒔付には新開地は堆肥二百貫匁リンサン二貫匁灰二貫匁

豌豆趾及び豊作の分は堆肥百貫匁リンサン一貫匁灰二貫匁

すべて前便に申上候へども念のため書添申候

○

須賀、馬鈴薯、六畝歩

堆肥　六百貫匁

骨粉　三貫匁　　三月廿七日植付、間一尺五寸

灰　六貫匁

ヌカ　二　斗

堆肥六百貫匁の内百貫匁へ金肥を交ぜる

○

大師堂西、大麥竹林の中の里芋、六畝歩

堆肥　六百貫匁　　植付は四月廿八日、間一尺五寸
骨粉　三貫匁　　麥の出來によりて四月廿八日よりおくれてよし
灰　六貫匁
植付の時は堆肥三百貫匁、あと三百貫匁は追肥とす
三百貫匁の内五十貫匁へ骨粉三百貫匁と灰六貫匁を交ぜる

○

桁畑、里芋
反當り
堆肥　五百貫匁　　四月廿八日頃植付
骨粉　五貫匁
灰　十貫匁
これも堆肥反當り二百五十貫匁にて植つける

○

大師堂西、ゴールデンの中甘藷
堆肥　百五十貫匁　間一尺五寸
骨粉　三貫匁　　五月十八日頃植付、尤も苗の成長の加減と麥の工合にておくれる
糠　一斗八升
灰　十二貫匁
麥の出來にて植付の時無肥料にするか全部施すか

○

梅の肥料

一本に對し、堆肥五貫匁、骨粉五十匁、灰百匁

枝を張つただけの廣さに穴を堀つて施肥す。

梅畑の西の櫟の根堀りをする

○

納屋の屋敷の境の竹の根堀りを十分にして一杯に土を埋め置くべし

○

蠶豆へマンガン反當り一貫五百匁を二回に施す

そら豆は花の持ち樣にて實をとる

○

蔘の土入は彼岸頃から二週間おき位に三回位

○

門の茶の木へ堆肥五十貫匁を施す

○

豌豆種取の場所

堆肥百五十貫匁

リンサン　四貫匁

骨　粉　四貫匁

カ　　リ　　二貫五百匁
灰　　　　　二貫五百匁
　但しキピアトは堆肥二百貫匁

○

陸稲追肥
堆　　肥　　二百貫匁
リンサン　　三貫五百匁
灰　　　　　六貫匁
　あとは人糞

○

食用大豆
堆　　肥　　二百貫匁
リンサン　　十貫匁
灰　　　　　十五貫匁

○

アブラ虫のつきたる梅の木へとりもちを塗ること。
七郎平屋敷の眞竹と篠との間に堀をほること、同時に眞竹の方へ出る篠の筍を必

ずとること。
栗畑の南手の若篠を堀りとること、同時に大豆の中の篠の筍をとること、竹の根は栗畑、七郎平屋敷、仁右衛門屋敷へ植ゑる事。但し右は去年の通り一間おきにして根と根の間は去年の倍位にしてもよし。
竹の根があれば納屋の屋敷へも植ゑる。
陸稲は必ずあつい處は抜いてうすい處で植ゑる。一番うなひにて下肥をやる。六月下旬頃追肥をやる。（大正三年春　金澤醫院より　母堂宛）

其四

昨日十二時半上野着、のどの方は格別のことは無之由。橋田先生昨日水戸へ行き留守、今日相談の結果熱のさめるまで御厄介に相成ることに致申候。食事も流動食の由手當が進申候。看護婦の附添もあればよしとのこと、此は尚相談してきめ

可申候。熱さめて轉地致すこと、此は私おさう心づき友人の學士へも電話にて相談せしところそれがよろしとの返答に候。それに就き白地の單衣、かいまき至急御送り願上候。其節は帳場の本箱の一番上の棚に手紙葉書澤山有之候。それを殘らず同時に、單衣はこちらにて洗濯可致候。手紙類はわからぬことは無之候。一番上の棚より外手をつけては相成り不申候　かいまきこれまでのはよごれて駄目に候。（大正三年三月十四日午後　橋田病院より　ハツネ　姉常宛）

其　五

荷物今日とどき申候。私入院の翌日より熱もさがり一時は氣管支加答兒の樣にも申居候ひしが今日それもなく相成申候由に有之、今日はおそくも順次郎朝鮮より歸るべしとのこと、一兩日中には面會相叶ひ候ことと存申候。彼岸過には暖かに相成可申、其上は下妻へおいでの程希望仕り候　拍根終ればすぐ梅へ施肥のこと、

門際の垣根も一寸のこと故結ぶこと、花菖蒲の古葉早速刈りとること、樟の霜よけ時期を見計らひ取り除くこと。（大正三年三月十八日　福田病院より　ハガキ　母堂宛）

其　六

拜啓私別に變りも無之熱も最高七度五分位に有之候。順次郎にも逢ひ申候。偖而私の本棚（ガラス戸棚）の上より第二番目の棚の本の上か、又は本の向側に細き新聞紙づつみに相成居り候和亭の松の畫有之、此は上京の前日一寸持ち出し御枕元にて新聞紙へつつみ申候ものに有之候。必ず御わかりに可有之候。それを開いて細い棒、女竹を切つたので宜しく候に付、十分に新聞紙を巻きつけそれへ彼の畫を巻きつけて小包郵便にてここへ御届被下度願上候。上づつみは必ず木紙（キガミ）をつないで張りつけること、すべて包紙は十分丈夫に非れば困り申候。此間の衣類の如きも油紙古きため途中づたづたに相成申候。かやうの

時は品物なければ買ひよせて可然、儉約と申すはあの樣なる粗末なものを用ゐ、うつかりすれば中身に障ると申すことにては無之候。それから右の晝には小さき木札を造りてつければ便利に候。小包は書留のことに候。

○

屋根替の時の屑物小屋等へ仕まひ置候ものは其儘に願上候。

○

梅の肥料から、馬鈴薯の植付等すべて淸へ申きけ候通りに願上候。源三郎へは申つけ候へども、梅は枝の廣がつた丈の大さに輪をつくりて穴を堀り施肥すること。

○

かやの根の切り屑も全部さらひおくこと。

○

書院の庭の水盤をもとへもどしおくこと。梅のまはりのかこひをとりはづしおくこと。

三月廿三日

御　母　上　様

手紙類はすぐ御まはし願上候。錦町を綿町などと書いては困り申候。（編者曰、この文、封筒へ記入）（大正三年三月廿三日　東京神田橋田病院より　封書　母堂宛）

其　七

拜啓。今日御手紙拜見仕り候。私こと入院翌日より工合よろしく最高の熱度七度五分までに有之候ひしも、二三日以來最高七度か七度一分に相成申候。左肺の小氣管支に加答兒有之候ひし由なるも、既にわからぬ樣相成申候。此から少したつて藥卽ち熱さましをやめて、それで熱なければ本當のものに候由申され候。食事も相當に參り候故私の分は心配更に無之候。母上樣の御容態如何に有之候や。今日の御手紙などにも只一行にて宜しき故御書添下されば折返し御尋ね申す必要も

なくそれが少しも書いて無之、私方のやり方は何事も此様の不注意おほく候。門間君からの小包は悔みがへしの茶故私に用は無之候。同君は私に對しては非常の同情者にて、三日程前にも山形の梅羊羹を贈りくれ、昨日はまた在京中の令弟を以て立派なる果物籠を見舞はれ申候。令弟のはなしに私のことは家内中が心配致され候樣子に有之候。

黑大豆は此間中整四郎へ照會し、同人の方は一先づ斷り太田幸平へ改めて照會致申候、整四郎も思ひの外に駄目の男に有之、あれでは出世六かしかるべく候。私もふと考へつき不安心に存候ひし故照會致し候ことに有之候。

私は當院へ參り候時、院長より何處にても君の好きな部屋にせよと申され候て、大分結構なる一室を與へられ申候。ふと氣がつけば特等故此は大變な處へはひり候ものかゝ順次郎歸京の上は飯田樣になりはなしをして貰ふ積の處、私十幾年前窒扶斯にて入院の當時附添に相成候安達と申す看護婦、今は久しく婦長に成り居候

もの、三等の入院料にて宜しき故會計と談合致しくれ候由申され大に意外に存申候。私方よりはまさか三等とも申兼ね候。附添もここらは安く一日七十錢故宿屋に居ると大差なく氣樂に有之候。三等は一日一圓五十錢、何や彼や小遣等にて二圓五十錢はかかり申候へ共、十分の手當なれば極めて廉價に有之候。私手もとは十分故其邊の御心配無之候。

此次御手紙の節は六かしい文句は全く不必要にて、私讀むにも如何にも骨が折れ居りては苦痛に感ぜられ候に付、一寸一行づつにてよろしくたとへば、

　梅の肥料何日にやる。馬鈴薯は何日に植ゑる、

等書く時は何事も明瞭致し候。代筆させ候時は必ず一應御らん被下度候。今日のにも案じ居り候と書く處が安じ居り候になり飛んだ反對のことに成り申候。すべて一寸一行に書くことと御忘れ無之様願上候。一行づつ色々のことかけば家のことすべて明瞭に相成申候。（大正三年三月廿五日　東京神田橋田病院より　封緘ハガキ　母堂宛）

其八

和亭の書今朝到着仕り候。此は父上より△△へ禮に差遣す筈の品に候が私一寸考へ表裝してやる方宜しかるべくと存じ此間友人に尋ね候處五六圓かければ箱まで出來るとの事、さうすれば此儘やるよりも十五六圓方立派に相成申候譯故至急御送相願候次第に有之候。△△への禮としては表裝してやれば洵に恰好の品に有之候

私容態昨日申上候通りに有之昨日は最高が六度九分に止り申候、食事も追々すゝみ申候故御安心被下度候、御願致し候新聞紙の袋は此間の士といふ雜誌を入れて私へ送りし袋と見えからゝに有之候。下の方破れて居候こと故今少し注意すればこんなこと無之候。枕元など十分整理の必要有之候。又茨城縣内ならば只結城郡にて宜敷候へども縣外へ出す郵便には必ず茨城縣結城郡と認むべきに有之候。(大正

三年三月廿七日　橋田病院より（ハガキ　母堂宛）

其九

拝啓。漸次御恢復の由、何が何と申候ても五十以上の人には大變のことは無之候。私此五日はじめて外出、久保博士の旅宿上野精養軒へ參り診察を受け候處、患部を燒くが宜しとのこと、然るに東京には其人一人も無之、一昨年燒きし個所は全快の例も有之、且今度のは最新の療法にて今回の醫學會にも器械をわざわざ持參して特別講演致候ものの由、かたがた五月にも成らばまた九州へ參ることに致申候。轉地よりも何よりも今はそれが大切の條件に有之候。當院には本月一杯位は靜養致度候心得に有之候。五十圓は神崎より送金致す樣取計らひ可申候。寺田は義俠心ありて賴もしき人物に候。此事は歸宅の上御話可申上候。單衣は差支なく御用意願上候。（大正三年四月八日　橋田病院より　母堂宛）

其十

拜啓大変のことにて御手紙に有之候へ共私も去る十日咽喉の醫者へ參り候處一寸熱も七度程に相成それから少し風邪引き候工合にて出發に大事となり申候に付遂馬車屋は私の窓の外に當り居候へども外出も不致昨日はためしに入浴して見よとのことにて入院後三十一日目にて風呂にはひり申候。夜は七度ばかり有之只大事大事と心掛け居り候。氣管支加答兒はなくなり候由なれどうつかりすればもどり可申候。現に一月中金澤醫院に居りし際はあれ程目に見えて體量も增し候を今度はなかなか左樣に不參今日以後は宜しかるべく候へ共丁度一ヶ月は無駄致し候程故一寸無理して失策れば一週間二週間餘計病院に居る樣に成るは目に見え申候。さうすれば費用もかさみ苦痛も多く候。三十俵の麥にてはどちらにしても二三十圓の狂ひに候べく私身體を惡くすれば其位の損はすぐに候。氣長に何時やつても

よき事ならば折を見てと申すこともあれど至急にてはいくら近くても困り申候。本人には逢ひしこともなく改つて色々話す内には時間もかかり可申どうも氣が進み不申、今日天氣よければと思ひ候も昨夜來の吹降にてこんな時は復た風邪を引かぬとも限り不申候。仙吉の話などは百に一つも信用すべきものなしとの、御覺悟にて御考被下度安くとも仕方なければ時の相場に從ふ外は無之一錢も心配なき方へ捌くことが第一と存申候。今年の麥は收穫幾らも無之故三十俵の内飯料に殘してあとは賣却致し候が宜しく搗いて賣るなどは不得策と存じ候。飯料にして米が損ならば全部賣却可然面倒にてもよろしとならば改良俵へ入れ候はば少しは値段も出て可申と存じ候。それも手數ならば全く賣却の外無之候。時の相場と申すことは是非もなきことこれに迷ふは宜しからずと存候。明日にも天氣よく氣進めば一應は馬車屋へもはなし可致心得に候へども、此はあてに成り不申候。必ず迷はずに手續の面倒でなく安全のことをやるが肝要に有之候。

竹の葉は堀込み候て可然と存申候。麥や豌豆蠶豆などのこと一行位にいいとか惡いとか簡單に御通知下さる樣申上げ候ひしが更に御通知無之如何致し候ことに候や、六かしい長文句は不要に候。どうしてそれが書けぬものに候や、さうして又なぜさう冷淡にして御出られ候かと不審に存候。長文句にすれば面倒故只一寸づつさうしてわかる樣に御書き下され度く候。何時まで待つても御通知なきは何程心持惡きか知れ不申候。（大正三年四月十四日　橋田病院より　母堂宛）

其十一

其後私少しくぶり返しの氣味に候故今月一杯の退院六かしきことと存申候。尤もたいしたことは無之候に付御安心被下度候。それこれにて麥のことは到頭話致不申候。在宅中いらせ置候米糠先頃のやうに新聞紙へ平らにつつみてお送り願上げ候。二四合にて宜しく候。同時に帳場の本箱の一番上の棚の左手に二册ある『十』

を一冊、チャブダイの上の北側にある『芋掘り』二冊と一つにして御送願上候。農作物のことも一寸御通知被下度候。暫く前順次郎の話に〇〇銀行は大變な騒ぎに相成居候由故見舞の品もまだ贈り不申△△氏は照會致申たく存居り候ひしが遂其儘に相成申候。何とか御聞及びも有之候や思ひ掛けぬことに有之私も驚き申候。其内此事申上ぐる積にて何時も書きもらし候。寺田より此狀とどき候頃には五十圓送金相成候ことと存申候。（大正三年四月十八日　橋田病院より　母堂宛）

其十二

拜啓袷一枚正に落手仕候。蠶豆は如何樣にも御取計らひ被下度、其あとへは陸稻可然と存じ候。五年目の連作ゆゑ十分試驗に相成候ことと信じ申候。肥料の配合等は追而可申上、或は私其内歸宅相叶ひ候かとも存じ候へども十分療養の必要有之候につき一寸相後れ可申かも知れ不申候。△△へ禮に遣す和亭の書表裝出來申

候處、六七十圓の値打の由故誠に好都合に有之候。結城紬は去年汗に成りし儘故一寸御覽被下度候。九州へ參る際は單衣の頃と存じ候につき今より用意專一と存申候。（大正三年四月廿九日　橋田病院より　母堂宛）

其十三

拜啓、今日漸く入院相叶ひ申候。何しろ地勢上の關係から朝鮮あたりより來るものもおほくそれに急病を先にする道理なればなかなか病室のあくこともなく遂今日に及び博士も非常に心配致しくれ申候。雜居の處ならば世話もなきことながら單獨の一室故大層の繰合に有之候。のみならず官費に致しくれ候こととて博士の厚意は感謝の外無之候。尙ここは痰を檢査して黴菌の居るものはすべて入院を許さずかかるものは遠方の隔離室へ收容致すことながらそこは穢くして且雜居の上餘りに距離ありて每日の治療六か

しく候などいろいろにて私の分は特別の詮議に有之候。痰には菌を認め候由に有之候。すべて博士夫人の談にて承知致申候。入院に就いての身元保證人も久保博士なる上只今の部屋も昨夜まで二人を收容しありたるものらしく一人は退院一人は久保先生の友達が入院する故以前の雑居にもどりくれとて出され候由是は其患者が私の宿より參り候ものとて今日荷物を持つて送り來り候。宿の小僧へはなし候とて小僧の話に有之候。私參り候時寢臺二つ有之候ひしを一つ片附けて私をいれ申候。毎日病院へ通ふに他の人は木の札に名前を書きたるものを一々持つて來ねば成らぬを私はそれもなく、昨日の如きは咳止めの水藥を貰ふに醫員も忙しく處方を書くに大分暇取れ申候を博士の手にて小使を遣し急に藥を拵へさせて私へ遣しくれ申候。これまで藥はいつも唯に候。先生の懇意と申し看護婦などの氣受も違ひ申候容子に候。金を出しても一日一圓の病院故食事の粗惡は驚くばかりに候。夫人は只ではひつてそれだけ御馳走をたべたらいいぢやありませんかなど最初に

申され候。附添も必要なき容子故すべて食用の方へ廻し申度考居り候。夫人さんは私も日々何か持つて行つてあげますなど申候。只今柳原伯爵家からこちらの鑛業家へ御嫁入りになりし人、今上陛下と本當の從妹に當り候が博士夫人と姉妹の如く懇意にて其人耳の手術を受けて入院中、夫人も時々見舞に參られるらしく其序には私の病室へもおとづれくれ候に極り居り候が先生の夫人さん故雜居の室にては話するのも一寸氣が置けることと存申候　それに博士も雜居の處にては世話甲斐なしと思はれ候こととなるべくそれこれ大層のことに有之候。內科の方にてはまた東京に居る友人の親友が助手を致居るもの有之其人の手にて武谷といふ博士の診察を受け申候。これも勿論無料に有之候

明日は日曜故休みそれから兩三日中には愈本當に燒いて貰ふこと出來可申候。其折もまた重ねて可申上不取敢入院の順序丈御知らせ申上候。

長屋門の西南の端の雨漏りにて下地の腐れ行くことに就き何處かの瓦屋のはなし

とて嘉吉が申候旨此間申上候ひしが御注意被下度候。忙しくともほんの少しのこと故陸稲は厚き處は抜きてうすき處へ植付け候樣御指圖被下度願上候。必ず必ず竹の根の植付はいまだに有之候やこれはおそくも七月五六日頃までに切りあげること、陸稲の間引き蒔付は梅雨季節を過さず此の狀着次第取急ぎ候こと肝要に有之候、竹の根はそれからにても間に合ひ申候後れて植ゑるには昨年の如き十分立派の根を見出す必要有之候。店の庭に宜しきもの有之候由、然しこれも餘り後れては面白からず候故すべての仕事の工合にて緩急の度の御見計らひ第一に有之候。（大正三年六月十三日　福岡より　母堂宛）

其十四

拜啓。下關より申上候如く十日午前當地着、午後早速久保博士夫人訪問仕候處、時間外にも不拘診察のことに取計らひくれ二時半病院にて博士に會見仕り候。其

後毎日診察致しくれ明日入院のことに相成申候。只今あき間なくと申して少々後れ申候。それは私の爲に單獨の部屋を與へくれ候譯に有之候。こちらへ參りては申様もなき待遇に有之候。目的の治療相受け候上は復た可申上候。

先便にも申上候が汽車中の麥商人の談は非常に面白く中國筋の田麥――大抵は裸麥ながら――まるで普通の出來は無之此間の暴風故とは申せ莖のくたくたなるには驚き申候。根が腐りて十日も早く枯れし故結實十分ならず大抵は牛毛と申候。大麥も岡山縣には大栽培地ありて關西師團への供給地と申候へども同様に候。四國も同様と他の乘客申候。尾張地方などは殊に甚しき由商人は申され候。何にしても今年は非常の不作の上一時の安價にて東北地方が喰込みに相成居候故今年は高價に達すべく小作麥は賣るまじきものと申され候。此間途に彌市の話に今年の麥は鎌が切れずと有之候が、それは枯れ方が早き故にて私も今年の成熟の早さに最初は怪しみ申候　小作はなるべく十分よきものを受取り置くこと必要に有之候。

尤も今年は實が悪き故却て持つならひね麥が宜しなどと彼の商人は申候程に有之候。反對に小麥の豐作には一驚を喫する由、汽車の沿道皆快き色に成熟致居り候。陸稻の堆肥の追肥は必ず六月一杯には終ること肝要と存候。廿日過にはじまりて可然さすれば今年梅雨は多少後れ可申に付十分肥料分功を奏すべくと存候。大師堂、南梅畑の如き瘠地へは下肥間に會ひ候はば二回位施して漸く宜しかるべく候、今年は陸稻の外れ年には非ずと存じ候故十分其邊に御注意の程願上候。門畑の菖蒲の中のすすきを除くこと手後れに相成候ては菖蒲うせ可申候につき丁寧に堀つてまたもとの處へ植ゑ置く樣願上候。
竹の根は如何致し候や
いよいよ源吉の件處分致候節は方法等私へも御聞かせ被下度候。（大正三年六月二十日　九州醫科大學西二病棟より　母堂宛）

其十五

入院して八日目の昨日愈最新式の方法で咽喉を焼いてもらふ筈でしたが、助手の注射した藥が足らなかつたので不成功でした。復た明日やることに成つてます。何しろ私は身元保證人が先生である位ですから看護婦などの扱も違ひます。夫人も時々食事の菜だの珍らしいものなどを下女に持たしてよこしてくれます。橋田病院に居た時よりも食事が十分に行けますから大によろしいと思ひます。入院したくても容易な病氣では入院させない有様なのですから、私は一人で一室占領して居るなどは大變なことであります。母上樣はまだ中岫へはお出ではありませんか、あの注射も人によつては肥える相ですから、是非おやりに成る方がいいと思ひます。

順次郎が疾に來る筈でまだ參りません。同人が金策をしてくれる筈なのですから待遠であります。それがないと非常に困り入ります。

左の品々を御郵送願ひます、そそつかしくなくここに書いてある文句をよく見て丁寧に探して下さい。決してわからないことはないのですから。

○

『芋掘一冊』これは帳場の茶ブダイの上にあります。

○

「米糠」いつたのが押入れのブリキ箱にある筈です。

○

『作物の肥料割當のおぼえ』帳場の本箱の一番上の棚の左手の何よりも上に無理に押し込んだ樣に成つてると思ひます。此の品は私が始終いぢつてた西洋紙の横綴のものですからおわかりに成る筈です。

○

『参謀本部の地圖』佛壇の下の戸棚の東の方をあけるとすぐ辭引などの大小の厚

い本がぎつしり立ててあります。其奥に澁紙代りに私が張つた紙に薄く大きな包みにしてあります。其内北陸道の部だけお送り願ひます。若し見出すのが御面倒ならば殘らず送つて下すつてもようござんす。あれは二つ折ですから多くも二三枚位づつにして四つ折にして、あの儘折るとおかしく癖がつきます、包の中にある小さな方の裏に字の印刷してあるものは別のですから送つては困ります。

○

『奈良』『京都』博物館陳列品目錄

これは矢張佛壇の下のぎつしり立てた厚い本をとり出しておくを探すと、うすい小さな表紙が紫ッぽい本ですからお分になります。若しおわかりに成らなかつたらこれは分らなくつても宜しいのです。

右本を取り出したらあとは必ずもとの樣に片付けて置いて下さい。さうしないと

私がこちらに居ても不快でたまりません。また出し放しは私が歸つてからでも知れます。

荷造の包紙はしつかとしないと遠い所ですから破れて中のものが出ます。

○

陸稻はどんな風ですか。竹はうらはことしは出まいと思ひますが、納屋の屋敷はどうでせう。藏の屋敷は以前ぎつしり出て居て去年肥料をやつた處は出ましたらうか。鳥屋の屋敷は其後驚く樣に出たと思ひます。

陸稻の間引と植付は是非やつて下さい。

雨の中をお出歩きはいけません。からだを惡くします。私は宅のことしの陸稻は面白からうと思つて居ます。　（大正三年六月二十八日　九州醫科大學附屬病院より　封書　佳堂宛）

二三日中に順次郎に逢ひ可申候（編者曰、此文封筒へ記入）

其十六

私其後暑氣のためには困り申候へども診察の上に別段に變りも無之由に有之候。三四日前直接久保博士の室へ參り一度焼いてくれ候樣望み申候處非常に奥の方にて危險なりなど申候ひしが其ため翌日すぐに焼いて吳れ申候。これにて大抵焼くだけは焼き申候樣に有之候。他の助手に此事語り候に患者自身にて望むなど申すことは例なきことと笑ひ居り候。

依然博士夫人よりはときどきの贈物にて一昨日は西瓜を昨日は東京の煎餅を味ひ申候。各地旱魃のやうに候へども國生邊は如何に候や。ことしは陸稻はとれ候樣に存候ひしが駄目に相成可申候や作物の容子一寸御知らせ願上候。大師堂豌豆あとへは蕎麥を十二三日蒔く位にし苅入を少し青苅りにすればよろしかるべきかと存じ候。肥料の割當等は後便に可申上候。（大正三年七月二十九日　福岡大學病院內より　福岡

其十七

只今御手紙拜見仕り候。

私別に變化も無之昨日第二回目の手術を受け申候。先便にて申上候ことと存候へども方法は久保博士が獨逸留學中の先生にて只今世界第一の大家キリャン教授の考案にて懸垂喉頭檢査法と申し頭を倒にして器械を口入に差入れ舌の根にて引き釣つて罷ひ申候。單にこれだけにては分り不申候へども一言にして申せば如此に御座候。私も自身でされたるだけにては本當には分り不申候。まだ二年にしか成り不申候故日本にては他に此の方法を知れるもの無之由に候。

時々内科の診察も受け申候へども東京の友人の親友と申すに紹介され此人非常の好人物にて最初に博士の診察など受け申候。當分は病院に在り其内日向の青島と

いふ處へ轉居致度と存居り候。物價安くよき所の由宮崎から四里、宮崎には私の知人の武井學士居りて此間照會仕り候。青島に暫く居りて歸途復た診察を受け申度心組に有之候。順次郎へも其旨申傳へ申候

母上樣漸次御快癒の由何よりのことに奉存候。扨而竹の植付は御多忙ならば御控へ被下度最早後れ申候。それに私は決して七月半までなどと申上げ候覺え無之五六日迄とは申上候。私の間違か否か分り不申候へども時々私の意志に反したることにもふくみ被下候こと有之候に付私は大變注意致居る積に有之候へども尚御注意被下度候。

門畑七反四畝歩の陸稻も勿論五年目故に候へども決して深耕せざることも大原因と存候。然し今年は反割必ず一圓までの金肥にて村一の作柄など申す畑あることは快い事に有之候。必ず村民の心に響き可申と存申候。梅雨にて大豆など澤山とれ候ては人は不思議と申すべく候へども私は最初よりとれ候ことと存申候。又株

間の厚過ぎること禁物に有之候。其ため去年は非常の損失致申候。陸稻の間引も必要に候ひしが大事無之候や。何にしても私方のは肥料代金の僅小なる故面白き農事と存申候。

竹の出方は今年柄是非もなき次第に有之候。當地も時々降雨、風に少し凌ぎよく相成申候。（大正三年七月十二日午前十時　福岡大學病院より　兩親宛）

其十八

拜復。大豆への石灰は必要無しと存申候。竹根の植付は只今はまだ暑氣去り不申候に付九月に入りて致し候方可然と存じ候。十分宜しきものを擇び今年の若竹ならば少し幹を殘しても宜しかるべくふるきものは根本より切斷致す事に有之候。根が十分宜しく候はば取扱上にも今年のものも全部切斷致候方却て便宜に可有之入手少き折と申せば全部切斷致す樣御計らひ被下度願上候。場所は栗畑、七郎兵

衞屋敷、仁右衞門屋敷等なかなか大抵のことに無之と存じ候。梅の枯死致候ことに就いては私も原因しかと判明不致候へども堆肥の爲とは百姓共の臆測に不過と存じ候。何故と申候はば中沼齋藤氏の栗の如きは五年七年を過ぎても枯死するものこりて困る由同氏の直話に有之私も昨年實地を一見致候。然し同氏は仕事ばかり多くて到底あの栗畑へ施肥を十分ならしむることは思ひも不及小竹金次の如きも施肥せざることを嘆笑致居候程なれば全く堆肥等の影響等には無之幾分は土質の關係も可有之と存申候。私の梅も昨今兩年の如きは左程の肥料も無之それに茄子を害したりと申す堆肥が私のの如き完熟のものなりとは請取り難く他の百姓のものは必ず酸多き不熟のものと存申候。それこれ堆肥過剩說尙當らずと存じ候。二三年來の旱魃など大なる原因ならずやと存じ候へども如何のものに候や。それに苗の時の力にもより不申やと考へられ申候廉も有之候。苗の勢十分なりしものは枯れ不申候。百姓などは奇異の感のみ懷き分相應に疑ひ居候處笑止に有之候。

今年の大師樣の麥の如きも蒔付の後れたりしと、意外の天候の障害等の爲めに十分ならざりしものに候へども、それを知らねば何や彼やと申候。旱魃にも不拘國生地方は雨十分の由私は何となく今年は陸稻が大丈夫の樣に感ぜられ梅畑の仕付も望み候次第天與の幸と存申候。肥水にしても門畑三畝歩村一と申すこと何にしても反一圓の金肥にては愉快の事に有之候。實は私も今年丈夫にて在宅致居候はば陸稻の苗を燻炭にて作り非常に立派のものを植付けて十分の成績を擧げ申度心得に有之候ひしも是非なき次第に有之候。私方などにては燻炭も面白きことと存居申候。反二三圓の金肥にて陸稻十俵位はとれ可申かと考へ居り候。大豆は必ず斯くあるべしと存候に付、陸稻へ一圓の處を一圓四十錢施し申候。厚蒔は遺憾に候へども昨年よりはとれ申ことと存じ候。昨年は一石三斗弱にとれ申候。一石五斗もとれ申候はば、人をおどろかし可申候。これは先長きことに有之候へども陸稻跡等へ仕付の作物によりて成るべく早く手入れの用意肝要と存申候。今年は麥

もとれ候樣致度希望仕り候。必ずとれ可申候。磐四郎よりの藥は何と申しても病院にては煎じ出す不便と他に服藥おほく困り申候に付轉地の上と存じ同人へも其旨申し候。體質に適應して效を奏し申すことならば幸と存申候。順次郎よりも吸入藥八日分にて四圓と申すを贈られしもこれも退院の後を期し申候。私こと明日退院日向へ參り可申今明日中串木野金山より順次郎參り申候に付すべて相談致度存居り候。私の患部に大部分宜しき由にて一個所腫れ居り其ため自分には以前のやうに感ぜられしものらしく只々あまりいたり候故暫時手をつけまいとのことかたがた九州に倘暫時滯留の必要有之候。今日助手に見てもらひ轉地の後博士へねだる材料を見出す覺悟に有之候。先は不取敢右まで匆々。（大正三年八月十三日朝　福岡醫科大學西二ノ一より　封書　兩親宛）

其十九

拜啓。季節故是非もなきことながら私も日向にては散々に有之候。先月十八日より海上も險害に陷り定期の航路も全く攪亂せられ候由なるに其十八日は私が宮崎縣にて夜の明けたる日に有之候。それ故青島にては食ふ物もなく困り候上腦病らしと申して三軒も宿泊を斷られて當惑致申候。其前は毎日の灘にて漁はあり低廉の宿料にて十分生に飽くことを得申候由申し候。此の十五日に宮崎の南五里餘、青島より一里餘南の内海港より乘船致度存候處其前日まで非常の荒れにて警報相次で到る有樣船も不參久しく相待申候處十五日の朝より風西に變りて意外の灘に相成十六日漸く九時出帆十七日の九時此の別府の温泉へ參り申候。十四日青島を出立致候へば長き御手紙は拜見致候へども、吸入器は落手不仕候。尤も縣の土木技師に知合に相成候もの有之其者より博多へ轉送のこと依頼致置候へばすべて間違等は無之候。

御手紙の御模樣にては鬼怒川の洪水おどろくべきもの有之候由。それにしても彼

の沿岸中國生地方は天惠のおほき地と存申候。陸稻の俯伏は殘念に存じ候。私も生え出し際餘りに厚きを懸念致候ことに有之候へども多忙と申せば是非もなく然しながら何とや申しても母上は薄蒔は出來ぬ人にて去年の蕎麥の如きも厚きに失して踏み切り道の薄きには及び不申候ひしがこれは困り候問題に有之候。只里芋の上出來は愉快に存じ候。此は然るを期したること故尚更に有之何にても一作非凡のものあれば他の刺戟にも相成結構のことと存申候。

扨て季節も迫り來り候に付肥料豌豆の蒔付に就いて一寸申上候。

栗畑の開墾地は石灰は不足なれば用ゐざるも害無しと存じ候。蒔付は十月五六日頃ならば一反步

堆肥　二百貫匁　精過　五貫匁

加里　一貫匁　（例年二貫匁を用ゐ候へども此にてよろしかるべくと存じ候）

灰　あれば二三貫匁

斯くすれば蒔付早き故十分の生育を見ることと存申候。同所他の分は連作故石灰

の必要有之候。若し全く石灰の不足を告げ申候はば購入の手數位は厭ふまじきものに有之候。此分も施肥料は前段纏りなくて宜しかるべく都合によりて堆肥百五十貫匁にても宜しきかと存じ候。何にしても蒔付早ければ施肥は左程に無之とも翌年可驚結果を見可申と存じ候。藏の屋敷道端は最早何も蒔付の必要無之と存じ候。それとも種に餘りありて手も足り候樣ならば堆肥百貫匁位に前同樣配合して蒔付致候ても宜敷と存じ候。藏の下も蠶豆を蒔くにしても堆肥は百五十貫匁にてそれへ前の配合、蠶豆の蒔付季節は去年は十月十四日に有之此れが最上の樣に有之候。豌豆を五日頃に始め候はば蠶豆迄には切上り可申さすれば麥蒔にも差支無之と存候。昨年の麥の不作は氣候の障害の上に蒔付のおそきが第一原因に有之候。粟黍の趾にも大豆か小麥可然、いづれにしても收穫後早速深耕の必要有之候。麥のことは追て可申上候。

私も明一日當地に滯在福岡へもどり今一度手術を受け其上歸國の途に就き申度考

に有之候。何分にも熱去り不申困り居り候へども、秋冷に赴きては幾分宜しからむと存居り候。肺金湯所持致居候へども宿屋にては服用の機會も無之其儘に有之候。いづれ福岡には多少時日を要し候ことと存候故其時試み申度心得に御座候。旅中にては斯様の煎藥などは誠に勝手悪しきものに有之候。入院中とは異り只今食事は十分故それのみ聊か心強く存じ居り候。歸鄕の上は少し考も有之候故實行致可申それまでは咽喉の方は第一と心掛申度候。安達家も不幸つづき同情に不堪候へども主婦なる人の溫情なき性情も多少の原因に相成可申候。つまり源造氏の件の如きは嘆かずとも濟むべきことを自ら招き申候。（大正三年九月十九日　別府溫泉より　兩親宛）

其廿

拜啓。二十三日第一回の診察を受け二十四日は休日、二十五、六と今日までに三

回診察を受け申候、患部は以前と變りも無之由、廿四日午前博士夫人を訪ね候處夫人へも左樣申され候旨語られ申候。然し今一回電氣熱灼を希望致候に付くれぐれも夫人へ依賴致申候　博士は非常に多忙の人故病院の殊に診察室などにては迚も談話は出來不申其上男同志にては一旦承諾されざる時はそれ限りのものに候へば夫人へ依賴致申候。其內夫人を訪問してしかと取きめ申度思ひ居り候。いづれにしても尙多少滯在日數を要し可申かと考へられ申候。何に致し候ても博士の好意は忝く候、昨日も一寸藥を貰らひ候處やはり無代に有之候

吸入器はこちらにて役に立ち順次郎より送られし藥品にて昨日よりはじめ申候、

袷羽織、袷等御用意被下候や　羽織は伊勢崎のものと大島と、袷は銘仙と伊勢崎とこれだけに襦袢を添へて御郵送願上候、袷羽織一枚とネルの單衣は持參致居り候、包紙は十分丈夫のものを必要と致申候。こんどは氣候も餘程定まり申候に付荷物の延着等甚だしきことは無之と存申候、此は餘計のことに候へども包紙には

實は從來の油紙は以ての外に有之あれば直ちに氣候の加減にて黴を生じ臭くて始末に困り申候。その爲か近來は澁引き或は蒟蒻引きさらしき丈夫のものも出來申候。

蒔物のことに就いては豌豆は前回申上候如く堆肥を多く使用致候ものならば此に越したることは無之加里も灰にて代用相叶ひ候はば金もかからず結構と存申候。燐酸の用量一反步五貫匁は必要に有之候。それに手數の點も有之候へども前も申上候如く作る必要なき地は其儘に致候方却て得策と存申候。藏の屋敷の道端の如きに全く必要なき地に有之候。それにしても、

栗畑　新開地　四反步
同　從來の分　二反步餘
同　嘉吉作の分　二反步位かと存じ候

此にて八反步それに仁右衞門屋敷七郎平屋敷を加へて約一町步に相成可申店の裏藏の下等を合せては蠶豆の分はありとしても一町四五反步には相成可申候。若し種子に剩餘を生じたる時大師南の今年の陸稻跡、梅畑の南の部へも蒔付致し候時

はなかなかのことに相成可申候。其邊の處十分御勘考被下候様母上へも御はなし被下度候。今秋は右蒔付をどうしても十月の十五六日頃までに終りて麥の蒔付大麥はどうしても二十五日頃のことに致度さすれば堆肥を十分に用ゐてアンモニャの要もなく至極經濟と存申候。少し後れては濕地とて生育十分ならざるに凍てのために必ず損害を蒙り申候。多少後れを取返さんとすればなかなかのアンモニャを要し候。然しこれは危險にて失敗すれば非常の不利益を來し申候。何よりも天に從ふこと第一に候へば豌豆も無理の處はやめて麥の蒔付肝要に有之候。七郎平屋敷仁右衞門屋敷の如きも都合によりて如何樣にても宜敷候。麥の畑はやはり大師堂附近と里芋甘藷の跡此は餘程手を廻さねば季節に後れ可申候。須賀此は立派の場所故今年の陸稻跡を十分早く耕して第一番に廿五日頃蒔付けて可然と存申候。此が約一反歩、前の場所が一反二畝歩合せて二反二畝歩來夏の仕事の竹林の方手を省き得るものとすれば今秋の麥少し餘計に作りて差支無之門畑の陸稻跡も思切

つて作り候ては如何かと存じ候。若し門畑へ蒔付け候ならば此より後れては却て蒔かぬ方ましに有之候。何にせよ必ず麥は廿五六日迄に蒔くといふことにて御手配被下度候。大師つづきの粟黍趾も小麥など蒔けば蒔くことに致して可然何にしても延ばせる仕事は措いて畑を耕し置くこと第一に有之候。右全部の蒔付を終るとすれば五反歩位に相成可申候。肥料は反當り

堆肥　五百貫匁
精過　七貫五百匁
灰　　十貫匁

何處も此にて御試し被下度候。灰が不足ならば五貫匁にても宜敷又堆肥は二回に施して蒔付は三貫匁ならば手數も省け可申候。何よりも種を早く落すが肝要に有之候。

別封アララギの九月號には鈴木三重吉氏の私に對する批評有之候故御目にかけ申候。世間には如此同情者も有之候ものかと驚かれ申候。然し私のことは他人へ

は餘り御吹聽被下らぬ樣願上候。（大正三年九月二十六日　福岡より　封書　兩親宛）

其廿一

今日父上の御手紙九月卅日附のもの拜見しました。母上には風邪氣とのことですがたいしたことではないと御察し致します。然し風邪は非常によくないのですから御注意に成らなくてはいけません。決して一寸の間でもキドコロネはしてなりません。父上もこちらへお出のやうですが以前のやうでなく本氣に見られることと思ひます。昔のはまるで正氣の沙汰ではありません。衣類は全部張屋に在る相ですが日向からあげた私の手紙を見ない内にやつたのですか、本年の土用頃に賴んだとすると毎日の晴天でしたから出來ない譯はないと思ひます。それはいづれにしても何月には何を着るといふこと位はいつでも分つて居なければ困ります。大島の羽織は洗張にやる必要はないと思ふのですがどうなんですか　あれはほん

のまだ何度といふ程しか着なかつたのです。九州のこと故ネルと羽織で當分凌げますがそれにしても急いで下さい。本當は洗張は單衣着る節に成つたらすぐやらなければいけないのです。何事も用意が惡いと差支だらけです。

それからもう豌豆の節に成りますが決して無理に澤山の土地を作らずにやつて下さい。つまらないことです。麥の方は父上にお目にかかつたら申上げます。

梅畑の陸稻が大分よくとれた樣ですが、金肥一圓の百姓では他人ならばたいした儲けの譯に成ります。反五俵に當るやうですが此には人々も驚くだらうと思ひます。門の一反四畝步が反四俵の割に成りませう。今年の麥も反一圓づつですが前申上げたやうに早く畑をこしらへて早く蒔けば乾度とれます。（大正三年十月二日 靜岡市より 封書 母堂宛）

其廿二

昨日衣類、胴着二枚、袷一枚、襦袢一枚とゞきました。三十日附の父上の御手紙には右全部張屋に在る旨記載してありましたから大島の如きは何故張屋へやりしことかと不審にも思ひ、今時出來ぬ樣に全部張屋に預け置くとは如何のものかと思ひました。父上はどうしたのでせう。それも小包の上書は御自身で書かれたのです。一體酒のために頭が餘程惡く成つてゐるのです。「申越され候衣類の内大島の羽織伊勢崎の羽織伊勢崎の袷襦袢其他銘仙の袷は張屋へ疾くに賴み置き候へども……」かういふ文句なのです。品物を受取つてみれば文句の書落しがあつて……伊勢崎の袷襦袢は送つた、其他は云々と書くつもりに相違なかつたと想像も出來ますが、最初手紙を見たばかりでは全部張屋へ行つてゐるとしか思はれません。父上は從來手紙を讀み返さない癖でしたがよくないことなのです。ましてあんなに頭が惡く成つて居ては餘計に注意しなければ駄目です。

整四郎は今日出發と父上からお知らせがありました。母上の風邪氣はどうしまし

たか　どうもあのよく横に成つてうとうとすることが非常に惡いことなのです。横になつて氣をゆるめると體溫がさがつて忽ちに風邪を引くのです。どんな場合でも横になるには十分溫暖を保つ衣類の用意がなくてはいけません

其後、須賀、大師南、門畑桑趾の陸稻はどの位とれましたかわかつたらお知らせ下さい。反別も書かなければわかりませぬ　今迄思つて遂申上げませんが大根へは下肥が必要であつたのです、、大正三年十月四日　福岡市平野旅館より　母堂宛、

其廿三

爲替金今日とどきました。大に窮乏して居た處ですから大助りであります。順次郎の手紙に父上は十四五日頃こちらへお出でに成るだらうといふことですから待つてゐます。作物の蒔付に就ては門の一反四畝歩は其後私も豌豆に致した方がよいと思ひつきましたから昨日あたり其ことを申上ようと思つてた處でした。昨年

の陸稻に就いては私に作り方の考もあります。麥は成るべく無理をしないで少し蒔いた方がよいと今になつて思ひます。來年も麥小麥が澤山では困ることが出來ると思ひます。芋あと、さつまあと、門の桑畑趾等に麥を蒔いて（須賀は勿論）十分と思ひます　大師堂めぐりは出來たら小麥を蒔いて下さい。間に合はなかつたら遊ばせてもいいと思ひます。大師南の陸稻趾も豌豆ではどうですか　梅畠の南の方もそれから大豆あとも蒔ければ豌豆を蒔いて下さい。藏の屋根の方は前にも申上げた樣に無理はしないで下さい。こちらは大分寒くなりました。どうか外套胴着其他冬物御用意願ひます。私の方から夏物を小包で送りますからそしたら其包紙へ包んで送つて下さい　夏物はうすき浴衣は洗濯して下さい。あとはすぐにしまつて下さい。（大正三年十月十二日　福岡市平野旅館より　母堂宛）

其廿四

拜啓。父上一行十八日に御到着二泊して昨日御歸りに相成申候。私は久保博士へ迫り候結果愈明後日燒いてもらふことに相成候に付御報申上候。夏衣のこと先便にも申上候へども、今回發送致候に付、冬衣を此紙につつみ此綱にて括り御送り願上候。遠方への小包は凡て丈夫に非れば危險多く候（銘仙の袷はとゞき申候）冬衣の内半袖の綿ネルのシャツ、六疊か私の八疊の簞笥の抽斗に有之候故同封願上候。但し御わかりに不相成候はばそれにてよろしく候。先便の通り間違なく御願申上候。（夏衣つき候はば直ちに）

蒔付は嘸かし御忙しきことと存申候。大根は如何に候や。麥は早ければ餘り種子おほくして宜しからず候。私來月にはひり候はば成るべく早く歸宅の途に就き可申それにしては費用少し不足に候故あと三十圓ほど御用意願上候。間に合ふことならば今月末の頃御差出願上候。局は博多東公園郵便局のこと。福岡局にては大

變遠くして困り申候。公園ならば大學の門前に候。はな子へは日向よりかへりて消息致し候に返事も無之候。奥田へは入院の當時申送り候に何とも申來らず候。これは何らか返事ある筈のことに候へども音沙汰なき次第其後も私よりも手紙書き不申候。私の手紙はわかる處におしまひ置被下度候。（大正三年十月二十一日　平野旅館より　母堂宛）

其廿五

拜啓。先々便にて申上候洗濯を要するうすき浴衣と申すは小包の目方の都合にて別に郵送可仕候。小包は一個一貫六百匁までにてそれ以上は少し多くても取扱不申候。先便シャツと申上候があの外にメリヤスのズボン下必要に付新しき方一つだけ御送り願上候。今回のはなかなか品物澤山に付前以て目方をはかること肝要と存じ候。さもなき時はまたつくり直す樣のことに相成申候。私も僅か二十五匁

にて通らず彼のうすき浴衣を除きて再度の荷作致申候。爲替の指定局は博多東公園郵便局に候故御忘れなく願上候。〇〇氏は非常の多忙なる身を以て長男の病氣のため久保博士の治療を受け居り候。一ヶ月を全く費して收入に大關係有之候由世の中には如此子供の心配をする親も有之候。（大正三年十月廿二日　福岡平野旅館より

ハガキ　母堂宛）

其廿六

拜啓、先便御覽被下候ことと奉存候、綿入などさう何枚もいり不申候に付昨年の上下同じ節糸のものと口綿のものあれば一枚胴着それ丈にて宜敷候、其他マント、シャツ、ヅボン下等有之候はば澤山に有之べく候。先日申上候日取に手術を受け申候が今回は三十分もかかり候程にて、大分あとがよろしき樣に有之候。これにてよろしとならば私も來年半ばまでには歸宅仕度心組に有之候。すべて其御用意

願上候。當地は昨日は誠に暖かにて本當に九州らしき感じに有之候。此までの御手紙には無之候へども別府の溫泉より差上候按摩器は御落手被下候や、彼の樣な時は藥書にて一寸御知らせ被下候こと必要に有之候。風邪ひかぬ樣おからだ御大切に願上候。手紙のうらには必ず日附をおかき被下度候。（大正三年十月三十日　福岡平野旅館より　ハガキ　母堂宛）

其廿七

拜啓　昨日衣類配達相成候。インバネス（外套）はいづれにてもよろしき樣に候へども此地朝夕非常に冷えて日中とは異り申候につきある方がよろしく候。直ちに御送り被下候はば十分間に合ひ可申候。又今日は爲替金御送り被下難有御禮申上候。私の咽喉も手術の效果今度は滅切り見え申候樣感ぜられ候。近き内に手術の際の傷も癒り申べく其上歸國致度考に有之候。荷物も大概に片づき候ことと奉

存候。來年の成績必ず宜敷事と存申候。風邪ひかぬ様御大切に御願申上候。ツベルクリン效能ありと申す醫者は無之か。（大正三年十一月二日　福岡より　ハガキ　母堂宛）

其廿八

拜啓。爲替は昨日着今日受取申候。難有奉存候。先便葉書にて申上候如くも一度手術を要し申候に付、手紙にて申上候よりも幾らか日數もかかり可申と存じ候。それに付ては尙金子も要し候ことに候へ共、此は急ぐには及び不申候。只御都合御惡き處へ申上候こと心苦しく候へども、あとはさう長びくことも無之と存候に付其御用意願上候。

靑島陷落致候へども、死傷者中整四郞の名は見え不申候に付、無事と存じ私も安心仕り候。母上にも定めし御安心の御事と奉存候。彼も無事ならば勳等も進みて何よりのことと存じ候。父上よりは一向に御便りも無之、何時お歸りに相成り候

ものか更にわかり不申候。
百姓の方も大概手後れの分は蒔付等も終り申候ことと存じ候。私も外出致不申候に付、すべて周圍のことわかり不申候。
はな子はまだ出産不致候や、今回は無事なれと祈り申候。先は右まで。匆々。

十一月十一日　　節

御　母　上　様

此程申上候手紙は改めて手術のことはまだ知らぬ内に申上候。只今頃はそろそろ歸國の用意致しうることと存候に付、いそぎ申候次第に有之候。（大正三年十一月十一日　九州より　封書　母堂宛）

其廿九

拜啓。前夜思ひつき候まま一寸申上候。二三年來の計畫に候へども北原の櫟林一

町二反ッ程は此冬より來春へかけて必ず開墾致候こと尤も必要に有之候。損益の上に大なる關係有之候に付まだ季節には早く候へどもそろそろ契約致置候て可然と奉存候。模などは問題に無之何事も將來と目前とを考へ合せねば成り不申候。全體の上から考へぬものはうまき結果は得られ不申候。詳くは歸宅の上可申上候へども必ずその御積りに願上候。すべてつまらぬ物惜みとつまらぬ考は禁物に有之候。（大正三年十一月十二日夜　平野旅館より　ハガキ　母堂宛）

其卅

書留の御手紙今日拜見仕り候。御申の如く私在宅ならば小山田へ話樣も可有之候へども只今それも出來不申、二百圓ばかりの金錢となるならば捨て置き候方ましに有之候。尚訴訟などはこれこそ以ての外に候っ（中略）このことだけは自分の心得次第にて如何樣にも成り申候。自分の手ぬかりは差置き候て怒り候時は訴訟は必ず

出來可申候。然し私には身を斬らるるやうにいやに有之候。（中略）さもなくば如何なる場合にも訴訟沙汰には及ばぬやう御覺悟被下度よくよく父上にお話し願上候。小山田の一條もそれなりに手をお引き被下度つまらぬ人に頭を下げて騒ぐこと見苦るしく存候。小保川へは私よりも一寸手紙差出可申候。それは「私へ昨春御約束に成りし山林に就いて宅より申し來り候ところによれば他へ御賣却の手筈の由それにつき他人を煩はして申入れしとのことなれど私在宅なれば左樣のことは致し不申何とか其邊の消息も推知すること出來たるならんも只今は致方なしと存じ候。實のところ御意向が他へ賣却と定まり候てはそれまでのことゆゑ此上は御都合よろしき樣取計らはればと……」と申すやうの文意にて極めて丁寧に書き送り可申候。埋地の方は如何樣にも御計らひ被下度候。只竹の根付はもはやおそく結果面白からずと存じ候に付來春にいたし度く候。鳥居の女竹は勿論根ばきに有之候。私は御わかりに相成樣認め候積りに候へどもおたづねに相成り意外に存

じ候　大根は濕地故には非ずやと存じ候。私の手術は昨日受け申候。來月に入れば早々に歸途につき申度存じ候につきあと廿圓程お送り被下度願上候。すぐ御送り被下時は電報の要は無之候。女竹の七十五圓は是非なき處と存じ候。助次などには買はれ不申候。先は不取敢右申上候。（大正三年十一月二十一日　福岡市外平野旅館より　封書　母堂宛）

其卅一

拜啓。當地は寒きことと暖きことと有之昨今は夜冴えて晝は曇りに相成多少不快に覺え申候。鄕里の如く西風等は無之身體にさはることも無之候　母上樣にも風邪引かぬ樣御用心被下度願上候。扨而私の病氣に就ては更に手術の必要有之十二日ごろに相成可申博士と直接取極め申候。場所がなかなか危險のところ故一時に燒くことも叶はざるが如く相見え申候。然しながら燒けば必ずそれだけの功は有之らし

く先月二十日は手術後「上の方はよく成つた」など申され候。少しづつ燒くこと故十二日頃の手術にて歸國差支なく相成候ものかは不明に有之候、親切なる醫員此は學士に候がまた參ることも大變故成るべくならば辛抱しては如何など申され候事實それに相違無之候、十二日頃燒いても其前十日位は手當の必要有之候に付此の一回にても十分としても本當の年末に相成萬事都合宜しからず候、それ故一層のこと心を落つけて新年になりて出立致度多分は一回にては納り不申と存申候。若し左樣に相成候時は尙相應に費用も要り申候。私も近來隨分儉約致居候へども必要だけは致方無之候。何卒一ヶ月以上餘計に相成候ものと思召し御用意願上候、此間送り被下候分は拂渡局を只福岡縣博多と致しありしため東公園局にて受取ること叶はず矢張り以前の市の中央局なる福岡局へ參り昨日受取り申候。誠に不便にて困り申候、博多東公園局は大學の門前故それへあててと二度も詳しく申上げ候ことにて前回も其通りにして御送金被下候に今回はもう間違申候。宗屋局振出故誰

か使の者にて用を辨じ候ことと存じ候がそれにはいつもの如く只口上にて御遣し相成候ことには無之候や。何も知らぬものには口上丈にては記憶六かしく遂には博多のみを申候結果に非ずやと存じ候。それならば例の母上様の御病にて私在宅中も一筆書いてやらねばわからぬことを面倒にして只母上のみにて使を遣し候こと始終のことに候があれば使の者の迷惑何程ともわかり不申用をいひつくる者には何事もわかり候へどもいひつけられる者にはわかり不申候　若し今回の間違がそれからとすれば餘程御注意被下度一家の疲弊するには雑多の原因も有之候へども如此ことも小に似て大事に有之候。又間違がそれならずとすれば二回までも詳しく申上候ものを御忘れに相成候とは如何にも物事が疎末に相成居り候ことと申す外無之候。些細のことながら念の爲め申上候。筆にて書いてやりしものを郵便局が間違ふ理由は無之候。芦ヶ谷のそば屋へ賣却の竹林は仰の如く土地のものには出し切れ申すまじく存じ候。それにても高きものには無之候へども先づ人に笑は

るることは有之間敷と存申候。後々の爲めも有之候に付大凡何束位伐出し候か嘉吉へなり吹き込みたしかの處御控へ被下度これも例の筆とるが面倒にては困り申候。どこか一寸わからぬ處へ半切の端などへ書いて置くことも私大嫌ひに有之候。私歸宅の上心持を惡くする樣のこと無之樣願上候。又とうね竹を伐られぬ要心も大切に有之候。麥の蒔後れは致方無之候。只本年は暖氣故など申され候ては私には涙の出る程情なく感ぜられ申候。百姓するものが何故にかく年々のことがわからぬものに候や。麥蒔の節は暖氣には極り切つたることに有之候。暖い暖いと申す内に一時に寒く成りて惡い土地はすぐ霜害にかかり申候。如此は毎年のこと故決して御忘れ被下間敷後れたならば後れたにて宜しく仕事の都合にてそれは是非なきことと其點に私一言も不足は無之候。現在毎年私自身に指圖してそれに有之候。今年は暖氣など申すこと本當にかく御考相成居候ならば餘りに有之、また私が何とか申すことを憚りてのことならば誠に申譯無之候。季節のことは今少し御呑込

被下ずては困り申候。常々舊暦などのみ口にする樣にては到底駄目に有之候。追々傭人出替りの季節に相成申候へども出來候ことならば男女共成るべく据置く樣に致し度男の方は殊に左樣致し度、満など生意氣に相成候形跡有之候ならば十分訓戒して可然此點私方にては餘り遠慮に過ぎ申候。本人の爲め決して默つて居る必要は無之候。女の方はお松は○○ありては暇を出して可然と存じ候。其後○○と申しても其心あるものは機會を得れば必ず手を出し申候。おつぎも嫁に行かぬならば置き候方宜しかるべく少々威張る由なれど此も場合によりては藥にて不申訓戒大事と存申候。およしも置いて相當と存申候。本人には他の心配無きにあらず候へども本人がしつかりもの故其積りにて注意致候はば其方は大事無之と存申候。それに私など歸宅致候ても不馴のものなどに替り居り候ては、不快に候故其邊もとくと御考へ被下度候。其上喜代次へはまた竹など貸つけ候時はおよしの給金は心配無之大分好都合と存申候。竹はうらの林に赤く『二』の字を記しつけ

たる明治四十二年度のものにて今年にて六年目故伐つても宜敷尤も私不在故全部伐つては困り候へども赤い二の字の分を源三郎などと見わけ候はば間違も生ずまじくさうして本人を傭ひ候様なし下され度今回は私も一昨年とは異り歸宅しても身體疲れ申候ことと存候へば一昨年のおとひの如きものにては全く致方無之かたがた只今より源三郎へ申つけ取きめ置候こと肝要と存申候。尙竹は納屋の屋敷にも多少伐つて宜しきもの有之候ことと存申候。

女三人は傭ふこととすれば馬場のおつまも只今の内口を掛け候時は賴むこと叶ひ可申と存じ候。屋根替當時參り候時本人も來年は參るべき旨申居り候。只今の主人へも既に二年勤め候上は私方へ參りてもいひわけ立ち可申候。これは後れては詮なきこと故取急ぎ御手配被下度此事うまく參り候はば今年はお松一人入れ替にて事濟みに相成り可申と存申候。前にも申上候如くおよしに對する他の心配は少しの注意にて案ずるに及ばずと存申候。

最後は小保川への手紙は私にも心得有之候に付出し不申候。いづれ一兩日中差出すべき文面相認め御目にかけ可申候。其上にて差出し可申決して不行屆のことは致不申候。只餘りに騷ぐことは御控へ被下度宅にては少し騷ぎ過ぎ申候。くれぐれも備人はかはらせぬ樣成し被下度願上候。（大正三年十二月四日夜　平野旅館より　母堂宛）

其卅二

止むを得ず横臥の儘認め申候。私ことといつか申上げ候ごとく先月半ばの寒氣にあてられ風邪ひき申候てより一時は忽ちによく相成申候も其後また引き返しにて熱出て喉頭の痛みも非常にひどく相成困り居り候ところ内科の助手に高崎と申す人あり、アララギ同人の一人が同窓にて非常の懇意故福岡へ參らば兼て訪ねくれと申され居りし人にて昨年六月も私の參るを待ち受數次久保博士にも尋ねられ候ほどにて爾來非常に世話致しくれ此人また多數の醫員の中にても恐ろしき好人物に

て顏にも表はれ居り候が、今回も熱出で候由手紙にて申入れ候に幾度も私宿へ參られ自身內科の助手たるを幸ひ兎も角も當隔離病棟へ收容致しくれ候。此前手術の時（父上樣御出の時）も此人非常に盡力してくれ久保博士へも懇願致しくれ申候程に有之候。それに耳鼻科なる曾田と申す醫員も非常の好人物にて最初より私に好意を表しくれ候が、入院に就ては內科の高崎君と共に先生に懇願するなど感謝に不堪候。當隔離の患者は一切外出を嚴禁隨つて四日の夜分入院致し候が翌日は先生自身早速に來られ以來は曾田氏毎日參られ候。高崎氏の機轉にて耳鼻科より入院致し候ため博士の好意にて復た官費に致し候。內科からにては最初はそれが出來不申由に候。大に助かり申候。それにも不拘昨日は內科の武谷（タケヤ）博士の廻診あり高崎氏自身の友人なりと申入候結果同博士の特別の診察も有之候。曾田氏も文學好きかたがた當地へ參りて如此手厚き待遇は多少にても私を承知致し居られ候故に有之他に原因は無之候。難有次第と申す外無之候。病院は非常に

暖く宿屋の不愉快なるとは同日の談に無之高崎君も非常の骨折故其内熱下り可申さすればまた喉頭の手術も受けられ可申候。今日曾田氏の談に私の潰瘍（カイヤウ）は極て淺きものの由ひどき人は喉頭の諸機關を崩して行く程ひどきものと申候。不相變久保夫人は親切にて大晦日の日などには神戸の牛肉の味噌漬などかなりの樽を贈られ申候。十二月中旬發熱當時早速入院致し候ものならば早く恢復致すべき筈に候へども、高崎君もそれほどには思ひ不申、私も一時熱さめ候ゆゑ平氣にて半年たち申候こととなれば少々手間どれ可申と存じ候に今日あたりは餘程熱もさめ申候に耳鼻科の患者ながら高崎君も毎日參られ候ゆゑ内科と兩方にて兩持のやうなる姿に相成申候。實は倹約倹約と心掛け候結果寒さのために風邪引きて遂大事にいたり申候。母上樣も風邪引いてふせるやうにてはそれこそ大變故いつもながら御注意願上候。

電報爲替も三日の夜に到着難有奉存候。官費なれども附添五十錢其他食物を求め

ざれば不叶候に付少々ばかりかかり申候。それにしても官費と申すことは感謝の外無之候。（大正四年一月十日　封書）

これは本日午後私が訪問申上候際兄上より托せられたるものにて恐らく絶筆と相成候につき失はぬやう願上候。書留とせるも其爲めにて候。兄上の書きたるものは何卒此際一と纏めとなしおかれたく候。實は私も昨年手紙など集め候ひしが其後大に散亂せしめ候事今更殘念に存じ候。

兄上は六日（多分六日と記憶致居候）入院し七日にこれを書き更に幾分書續くる希望は有之候も遂に疲勞のため擱筆せるものにして其後は熱も毎日高く遂に久保博士は高崎氏と相談の結果私へ電報にて照會有之候次第に御座候。午後病院へ參る前高崎氏を御訪問申上種々御尋ね致し已に兩肺共上部は空胴になりたりとのこと故所謂第三期と申すものなるべく助からぬものなることを承知致して病院にても涙のみ出でて兄の顏もよく見られず候。今日は不思議にも熱が朝晝夕共七度以下にて候。私參りしことが大なる慰安と相成候ことと存じ候。小生は宿にかへりただ涙のみこぼし居り候。母上樣などは今回の御通知にて御病氣にならせられはせずやとそれのみ心痛致居候。入院後今日までの熱度表は明日寫して御覽に供すべく候。（一月十日夜。父上樣母上樣。順次郎拜）（編者曰、此手紙は兩親に宛たる最終の手紙也）

其一

拝啓。昨日本所豫審廷へ證人として、召喚され候ため序に上京仕り候。御留守には書狀等堆積致し居候へども、毎日毎日御歸宅のほども計られず候に付、空しく保管致し居候。留守中も此度の如く長時日のこととは存ぜざりしため困り申候ことのみにて、今朝宅よりも別封伊藤へあてたる手紙の中に封入致し有之候　小生は黒船町へは參り不申候に付、書狀にて右申上候。十一日が縣會閉會故其前に是非共一度御歸宅下され度願上候。早々。（明治四十年十一月七日　東京本所伊藤左千夫氏方より　封書　東京市淺草黒船町十五飯田氏方　厳父宛）

其二

拜啓。雨のために空しく一日を費し案内者と篤と相談の上一昨廿五日雨中を出立六里ばかり深山を分けて案内者が岩魚（イハナ）釣りに來て雨露を凌ぐ小屋に一泊仕り候。小屋はカハグルミといふ木の皮にて掩ひ極めて低く小さく莚二枚敷けばあとは榾を焚く丈の隙間のみに候。案内者は此處に五六泊しては釣つたる岩魚を負ひて八里程の山道を草津へ賣りに行くことに候。昨日は幸に晴天にて早く此地に着き申候。途中道もなき箇處數多にて、案内者は身長に餘る草を踏み折り踏み折り進み申候。昨日雨なりしならば全身ぬれしならむと存じ一昨日も昨日も平竹（ヘイチク）と申す藪の中をあるくこと數里、而して鬱々たる深林の事とて頗る陰氣に感じ申候。昨日は秋山のうちの屋敷といふ所の祭、今日も他の字（アザ）の祭、明日和山といふ所の祭に候。此は餘程妙なるものの由に就き午後より參り見る積に有之候。此切明の宿の嫁の爺さんといふもの客に參り居り候て魚釣致居候。老人年七十今年の春も熊突

きに出て候由申候。素より歯は缺けたる老人に有之候。兼ねて御話申上候坑夫は今年にて十八年此溪に居住致居りその辛抱容しからず山は昨年賣れ候て、只今は坑夫頭になり得意に相成居候。（明治四十一年九月廿七日　信州秋山切明より　ハガキ　嚴父宛）

其　三

拜啓。昨日松山市の小西といふ店より名物五色素麪一折送らせ申候。味は如何か相分り不申候へ共、見ては誠に綺麗に有之候。茹で方なども記載致しある由尚長く保存も相叶ひ申候。私は十九日別府の港より九州を離れて伊豫高濱に上陸直ちに道後溫泉へ參り四泊、昨日この高濱へ引返し申候。正岡先生の伯父なる人など相訪ね昔の住ひなども見申候。農業銀行の頭取なる村上といふ人、以前よりの俳人にて種々厚意を表され一夕此の高濱にて饗應を受申候。正岡先生の住ひなどへも此人一々案内致しくれ申候。此地には寺院の古きもの有之高濱より半里の處な

る太山寺には後冷泉天皇より近衛天皇まで六代引きつづき即位の時納めたりといふ觀世音六體皆國寶にて決して當時には開扉せずと申すを執念く請うて今日六時過ぎ參詣の絕えたる時分特に開扉する筈に相成申候。此狀御覽の上直ぐならば高松市外宮脇村堤樣方宛御たより下され候はば間にあひ申可と存申候。此城は二三年前漸く陸軍より市が借り受けて公園としたるものにて完全に保存され候ものの由に候。加藤嘉明の造營なりしが其餘りに大規模なりし爲め德川に睨まれ外濠は開鑿するに及ばず業半ばにして表面加增榮轉といふ名目にて會津へ逐はれたる由申候。(明治四十五年七月廿四日　伊豫高濱港より　高松城の繪ハガキ　賢父宛)

其　四

御封書昨日夕方拜見仕り候。竹の根は如何樣にも御處置願上候。本年日傭少き由、此は年を追うて左樣相成可申然しながら私方の仕事も來年前半期を以て七八分以

上を終り可申候に付別段の苦心を要せずと存申候。筍の發生は今年外れ年に相當り居候故不思議無之候。私こと月曜日に第一回の手術を受け申候。何の苦痛もなく最新の治療を受け申候。懸垂喉頭檢査法とか申居り當今日本に只一人の技術者に候。一昨日(手術の日)順次郎參り博士にも夫人にも逢ひ申候。いづれも折角遙遙來りしもの故何とかして治してあげたいと申され候由、博士の宅へは櫻桃二箱藤村の鑵詰羊羹を持參致候。私へも櫻桃を贈られ候。然るに順次郎居る内夫人より電話にて私の許に櫻桃ありや否やと問ひ來り候。なしと申せば即時女中に持たせ分與する意味に有之順次郎も驚き申候。一昨年昨年ともに左樣に候へども博士は小生を一回も助手の手に掛け不申候。(大正三年七月一日　九州より　ハガキ　嚴父宛)

其　五

拜啓。當地はなかなかの暑さにて夜分八十六度位のことも有之病室はなかなか苦

しく候へども私は其ために別段どうと申すことも無之候。只久保博士の技倆と誠意とを手頼に致居るのみに有之候。扨て當病院構内に海岸に近く松林有之絶えず涼風を送り來り候に付、ハンモツク（釣床）をつりて休息致さば宜しからむなど申され候。私の押入の東の方の上の棚の行李の中に有之候間何卒御郵送被下度願上候。私其後は手術は無之候へども毎日必ず教授自身の治療を受け居候。（大正三年七月三日　九州醫科大學附屬病院より　ハガキ　嚴父宛）

其六

宮崎縣へ來てから近頃は方々歩いて見る樣に成り舟や車の便のある處を南へ南へと參りました。景色のいい處であります。また青島へ戻つてこんどは汽船で大分まで參りそれから汽車にて博多へ參らうかと思つて居ります　この十四五日頃に成らうかと思ひますが御手紙はあの宮崎郡青島村松山松田方へ宛て御差出しを願

ひます。青島の宿はかはりますが松田方へ御出しに成れば却て便利であります。私は少し氣分のいいことがあるやうに成りました。歸宅の頃には袷の必要が生ずるかと思ひます。羽織も共に洗張りして御仕立置下さる樣に母上へ御願ひいたします。私から手紙を差上げた折御郵送下さるやうに御用意を願ひます。（大正三年九月四日　日向油津港より　梅ケ濱の繪ハガキ　嚴父宛）

其七

吸入器も落手仕り候。金子は明日受取申す心得に有之候。

拜啓。私も漸く今日博多の地へもどりつき御手紙も拜受仕り候。先便にも申上候如く、日向は誠に間の惡き季節に參り海陸共に非常の不便に候へば、歸りたくも意に任せず、遂に思ひ掛けぬ日子を費し懷中も甚だ苦しく相成申候。順次郎の厚き心づかひにて今日まで凌ぎ參り候へども、明日診察を受けての結果にて如何相

成可申や再び宜費入院相叶ひ候ことならば、誠に好都合に候へども、通ひに相成候はば下宿料等まだ相當にかかり申候ことと存じ候。順次郎よりも尙送金有之候等と存じ候へども、宅にても多少の處御用意被成下度、今急と申すことには無之候。明日診察の模樣まだ逐つて可申候。

豌豆の肥料は堆肥二百貫匁或は百五十貫匁と申上候は、手數を如何かと思ひ候故に候へば、何程にてもよろしく候。又灰に燒くことも宜敷樣願上候。一反步五六貫匁は必要と存申候。（大正三年九月二十二日　福岡市外より　封書　嚴父宛）

其八

拜啓。今日手紙差出し候あとへ書留郵便配達相成難有拜受仕り候。局名は『博多東公園』が正しく、私はまだ一度も福岡市外東公園博多局とは不申上、如此はたしかに母上の御記憶違ひと存申候。地名人名等は間違つては成り不申こと故私の前

に申上候ことを手帳様のものに書きとめ候か又は私の手紙を御保存下され候こと是非左様なくては叶はぬものを其いづれも無之ものと相見え申候。些少のことながらよくよく御注意被下度願上候。問題は其時の次第にていづれにも適宜御願申上候　野口氏今息は誠に御氣の毒の至りに奉存候。平素丈夫の人の時々ふいと死去するを見申候へども命數は實に測るべからざるものと恐ろしく感ぜられ申候。
野口氏は私一二度の面識故別に弔み状などは差出不申候。
母上様今年は御丈夫の由何よりのことに奉存候。いつも申上候ことながら風邪を引いてはそれこそ大事故夜具は日中必ず干して、夜分決してきどころ寢など遊ばさぬ様嚴重に御戒心被下度候。あまりひどく寒き時は外出も御見合せ被下度只々御注意願上候。今年寒さに負け不申候はば來春は餘計に丈夫に相成り遊ばすことと信じ申候。先は右まで申上候。匆々。（大正三年十二月二十五日　福岡市外東公園平野旅館より　ハガキ　嚴父宛）

長塚順次郎宛

其一

一昨日京都より吉野へ參り候。花は少しく後れ申候へどもやはり面白く候。吉野は櫻よりも麥と菜種多く、櫻の林の上に菜の花黃色く見え申候。吉野は見ぬうちは深き山のやうに思はるれど極めて淺き感じに候。今日吉野を立つて多武峰より初瀨の花を見て奈良へ參るべきか、直ちに奈良へ行くべきか思案致し居候。廿日に京都へもどつて、廿四五日頃整四郎をたづね一泊の上、東京へかへる積に有之候。今日は其許歸朝の日なるを思ひ出でて此葉書を書き申候　十八日朝　（明治四

十一年四月十八日　吉野山より　吉野川急流筏流しの繪ハガキ　東京小石川豐川町小布施順次郎宛）
（編者曰、令弟順次郎氏當時小布施氏を冒せり）

其　二

小包昨日落手難有存じ候。二組とは驚き申候。當地も昨日あたりより晴天に相成其前は四十日位の間日々の曇雨霜等にて散々の思いたし候。また少々熱いで困申候に付、入院を希望致し醫員なども盡力致くれ候へども、空床なくしてまた暫時待たねば成り不申候。佃煮も思ひがけぬ處に有之、先は御挨拶までに右申上候。
（大正三年十二月三十日　福岡市外より　ハガキ　小布施順次郎宛）

其　三

近來當地は何分にも寒氣ひどく身にこたへ申候。其爲か數日前ふと發熱致し候に

付、再び入院致度希望に有之候。此のことについても只一日病院へ參らざりし處、博士は發熱と察して夜分醫局の學士の歸りがけに立寄らせ申候。如此もの二日つづき申候、熱は二日にて去り申候へども、何分にも先月以來ろくろく照ることなく寒くて困り候故、入院を希望いたし居候ことは前述の如く、博士もそれを贊成せられ候にも不拘、空席なく內科の方とも談じ候結果隔離室にでもはひればとのこと、非常に窮屈と申せど暫時のこと故暖き處が宜しからんと、尙醫員共相談中に有之候。向後一二ヶ月は辛抱致さねばとても旅行に立つことは出來兼ね候と存じ候。此地には碌な品物なく差當りシャツに困り居り候。御許のふるきものにて宜敷候故、毛の暖きもの御送り被下候ならば幸に存申候。決して新しきものの必要無之候。乘船券は今日事情を述べて直接山岡樣へ返戻致し候。同氏は遠からず社長に昇進の噂もありとて彼の地の新聞に記載有之候。

整四郎は守備として四月頃まで彼地に在る由申參り候。右用事申すすめ候。シャ

ッは成るべく暖きを希望致し候。病氣してから寒がりに成り驚き申候。（十二月二十一日夜）（年未詳十二月二十一日　小布施順次郎宛）

〔備考〕封筒なし。發信地、受信地不明

其　四

拜啓、吸入器に就いての御手紙一昨日落手仕候。吸入器は博多を立ちてこちらの宿に落つくまでにかなりの時日を要すべく考へ候に付前以て宅へ吸入器を郵送のことを頼み置き候處まだ到着不致それに青島にては王軒共肺病らしとて逐ひ出され候程故頗る困り申候へば吸入器が來りしとて使用は不可能なりしかと存じ候。此間縮葉書にて申送り候如く最早博多へもどり可申汽船にて別府あたりまで參り候はば馬車や汽車にゆられ候よりも宜しと存申候。但し費用も少し餘計に相成可申候。日向は未開の地にして料理を知らずそれも漁のある時ならば安い費用にて

刺身を十分に味ふことを得可申候へども然らざれば食物に全く事缺き申候。青島には本當の宿屋は無之候故尚更のことに有之候。座蒲團もなければくくり枕もなき家も有之候。それでも前申し候如く漁あればよけれど丁度季節の變り目に日向へ來り青島へ行く早々五日間の大時化それ以來海あれ昨日も潮風にて曇る程に候ひき「今日は意外に風もなぎ申候故すぐ海も平穩に相成可申と心強く存じ居り候。昨日とてもたまらなく成り、宮崎へ逃げて參り稻葉健之助氏に晩餐の饗應など受け申候。季節の上から日向は失敗致候へどもそれも病院にて暇どり候こと故是非もなく候。

手もとも少し不足致し候に付、久保博士方小生あてに幾分御送金相成度御願ひ致し候。今一應の手術を希望致し候故博多にて多少暇とれ候ことと存申候。（大正三年九月十日　日向國宮崎町武井準氏方より　小布施順次郎宛）

其五

拜啓。汽車中よりの封緘葉書昨日拜見致し候。整四郎出征の趣不意に感ぜられ候へども、新聞紙上の〇〇師團云々を見たる時ふと十三師團に非ずやと胸に浮び候ことに候が、果して然りしも不思議に存じ候。何にしても本人元氣にて喜び居り候ならば先づ此上は無之候。昨日は不取敢本人へ手紙を出し申候。何處にて乘船致すことか、若し門司あたりならば近き故小生參るべきに就き其旨通知ある樣との文意に有之候。小生も成るべく出征の際一目逢ひたき希望に有之候。

先便にも申述候通り小生の患部は當分は手術無之らしく候へども熱落ちつき候はば再び懇請致す積りに有之候。昨日の如きは氣分も近來になく食事もうまく熱度も六度六分位に有之候。自分も驚き申候。此分にうまく進めば宜しく候に付隨分注意致す覺悟有之候。整四郎出征の報を得るに熱度下降するなど本人の前途も案ずる程なかるべしなど思はれ昨夜は牛肉など澤山たべて同人の爲め祝福致し候。

（大正三年十月一日　平野旅館より　小布施順次郎宛）

其　六

九月二日附の靜岡よりの封緘葉書着手披見仕り候。大阪より乘船にてはとても面會叶はずそれも致方無之候。今日日曜に就き一寸久保博士宅を訪問致し候が歐洲戰に於て墺太利の大敗より戰局に重大の關係を及ぼし意外に早く終局を見るも知れざるに就き青島も急ぐならむなど申候。隨つて例の强襲法によるなるべく敵兵の寡少といふに二個師團を送るが如き其意解すべく候。整四郞は樺太軍のときも先發にて宿割に青森に參り候。其時は妹等二人も同道小山にて逢ひ申候。若き少尉にて普通車の二等室に居り候が可愛らしく見え申候。今回も宿割とは面白く候。どうか無事にて凱旋してくれ候やうにと念じ候。旅順以上の要塞といへばたとひ規模小にして兵數足らずとも攻擊軍の損害は多大なるべく一箇師團の增派は如何

にもと存ぜられ候　須賀川の木村氏のためにも本人の安全を祈り申候。今日博士を訪問致し候は手術の事に候が博士は胸部に異狀甚しくては却て宜しからずと申候故然らざれば手術しくだされと懇請致し候故それならばさうといふことに相成り申候。電氣にて燒くことはせずに今回は患部を切つて取る（それとて一寸器械にてつまんでとること）方に致す由に候　博士は傷を拵へると癒るまでは一週か十日もかかるなど申され候へば小生は今月一杯は滯在の見込なりと申候に納得せられ候。其内決行を迫る積りに有之候。（大正三年十月四日　平野旅館より　小布施願次郞宛）

其七

昨日宿願を果して燒いてもらひ候。自分にも苦しさを感ぜず大分前回よりは工合よろしく候。小生の如く押强くねだれる患者は嘗て有之間敷其旨昨日早速博士夫

人へも申送り候。大里氏よりの說明書昨日着以前の方法と大差なき故今朝よりはじめ申候。只同氏は一切の肉類及びソップ玉子をとるなと申せど當地の下宿にては野菜缺乏して高價なるため到底魚肉を廢することは不可能に有之候。以來鳥獸の肉玉子はとり不申候。吸入もうまく相成申候。

次に小生のためには耳鼻科の人々は皆親切に候へども中にも醫學士三人特別に候一寸何か贈り申度東京の羊羹の罐詰などならば非常に結構と存じ候。若し御都合惡しからずば三個程御郵送被下度相願申候。（大正三年十月二十四日　平野旅館より）

其八

拜復。眞木は仕切の安きは小生も意外に存じ候。然し此も致方無之ものならばそれまでに存じ候。運賃も恐ろしく嵩み候樣なれど束數多き故間違は無之ことと存じ候。何にしてもつまらぬことに相成殘念に候。國にて賣れば殆んど倍に相成候。

矢張間の悪きものと申す外無之候。

薬は十四日の朝例の如くにして用ゐ候ところ幾分食慾を妨ぐるが如き感有之候ひし故一寸の間と思ひ休み居り候に十九日に至り突然大里より別紙の如き葉書來り候に付早速問ひ合せ申候。まだ返事無之候。此前も大里より説明來る筈にて來らず今回も來る筈にて漸く十九日につき申候ことなれば或は返事も後れるかと存じ候。大里も今少し本氣にやつてくれねば駄目に候。只説明の來るを待つのみに候。

小生も漸く博士を攻め落して今日燒くことに相成り候。九時に病院へ行きモルヒネの注射をいたすことに候。手術後は手紙を書くこと一寸困難と存じ候に付今朝床の中にて此を認め申候。(御手紙は昨夜着)手術は此が最後と存じ候につきあとの傷がなほれば歸國可仕來月早々のことと存じ候。

つくづく小生の病氣も醫薬のみにては捗々しからず候に付歸國の上は高輪なる藤田靈齋氏に就き修養致度存居候。日下中島松次郎氏子息の鼻を治するため月はじ

めより來り居られ候が同氏は岡田式にて如此立派になられ候由然し只今は岡田氏は餘り忙しくて殆んど一言の話も出來不申候。中島氏令息の次の床にやはり鼻を治しに參り居る男は藤田氏に從ひしことありと申し賞賛致居り候。藤田氏ならば懇々話も出來申候につき藤田氏に參る氣になり申候。中島氏はどちらにてもよきゆゑただ一心にやれと申され候。（大正三年十月十三日　福岡より　小布施順次郎宛）

其　九

拜啓。最早唯今頃は歸國相叶ひ候ことと存居候ひしに更に手術を要することに相成候に付少々後れ申候。博士は非常に多忙の上大事をとり候故なかなか取りかかり不申前回も左樣に候へば今回は餘程强請せねば成らずと存候。夜分にても博士を訪問して至急決行を迫り可申候。それにしても歸京の上は只管藤田靈齋といふ人を手賴りて强健の法を講じ可申候。ここを去りては他に人は無之と存じ候。

扨而青島も陷落して死傷者中整四郞の名を見ず無事のことと喜び居り候。彼も今になりて見れば一寸の骨折にて勳章など儲けものに相成可申彼の爲には豐年に可有之候。先は右まで。匆々。（大正三年十一月十二日　平野旅館より　封書　小布施順次郎宛）

其　十

年内漸次恢復すべしと存じ候に付母へはあまりひどく不申候へども、小生舊臘半ばより餘りの寒さに感冒に罹り一時小康を得たりしも其後新年に入りて九度以上の熱出で困却致候に付漸く內科の助手にも盡力を請ひ當病棟へ一昨夜入院いたし候。今日熱餘程引き候へども疲勞を感じて困り申候。併し頭も其時以來急に疼痛を增し難儀に有之つくづくと寒氣の恐るべきを感じ申候。當病棟は本院よりも非常に遠けれど昨日は早速久保博士も來診毎日小生懇意の醫員治療に參られ申候。宿屋より遙かに暖くそれのみうれしく存じ候。何分にも苦しきには閉口いたし候。

それにつきいつかの薬書の端に書きつけ候北里研究所の志賀博士の注射液、まだ發表せざれど非常のものの由、十一月十七日の報知新聞に有之候が、如何に候やお尋ね被下度候。いつぞやの佃煮まだ澤山有之候。小生歯が悪き上あの位のものにても喉頭を刺戟する故たべてもほんの少しづつなれば容易に減るまじく候　何でも好きなもの充分たべろと申さるれど、當地に何もなく眼をつぶつて病院のまづき粥を無理にたべ居り候　菓子などにても補ひにたべんと存じ候へども當地のカステラなどは論外にて候上カステラは餘りに腹に溜り申候　腹に溜らぬ西洋菓子など博多に無之候　毎々御迷惑故澤山は要せず少し機會あらばお贈り願上候　久保博士は、一昨夜入院候に昨日早速來診せられ候　高崎と申す内科の助手懇意にて此人非常の好人物なれば此入院も大層の盡力に有之候。そのため今日は内科の武谷博士も診察致しくれ候　そしてもとより官費附添はいり申候へども私費とは大へんの相違有之難有次第に有之候。何にしても夜眠れざること三十餘日これ

が困り候ことゆゑここへ參りて十日も居るうちには、眠れもし熱もひき食慾も出で候ことと存じ候。それのみ樂みに思ひ居り候。西洋菓子はやはり生がうまく存じ候。（大正四年一月六日夕　福岡大學病院南隔離病棟六より　封書　小布施顧次郎宛）
（編者曰、此封書は令弟に宛たる最後のものなり）

橋詰孝一郎宛

其一

拜啓。東山も嵐山も雨に見申候。京は到着の日より今日までに五日、其三日は祇園に遊び申候。例の一力の席上にて風流懺法の仲居、おつやさむ、三千歳、喜小

福、松勇など見申し候。三千歳はかりの名にて千賀菊と申し候美人に有之候。老妓來吉の話などは歸鄕の上可申候。昨夜は舞子二人に手を引かれて祇園の夜櫻を見申候。二人とも年十二、左右より「何ぞいいもんかうとくれやす」と申し候。小生は頭大の風船玉を與へ申候。其一人岸勇と申すは其美殆んど言語に絕し候。詳しくは角藤へ報じおき候。同君もおどろき候ならむと存じ候。嵐山大悲閣の花一片封じ申候。花は手がとどかねばとれ不申候。此にてあとは御免蒙り申候。

明日晴雨に不拘吉野行に決し申候。小生一人に有之候。匆々。（明治四十一年四月十五日

京都五條通鶴利方より　封書　橋詰孝一郎宛）

（編者曰、櫻花の花梗及小枝のつきたるもの封入）

其二

吉野ノ花ヤツクラアンタハンホンマニ高カウテ取レヘンサカイニ取ラントカンニンシトクレヤス。十八日。

吉野は馬の背の如し。ここは殊に然り。吉野の山は花の山といふよりも麥と菜種の山といふべし。櫻の林よりは遙か上に麥青くして菜の花の黄なるを見る。十五日に吉野の奥雪ふり十六日に山々白かりしが昨日は大分消えたり。今日は金剛山の雪もなくなるべし。今日奈良へ。（明治四十一年四月十八日　吉野山温泉より　吉野川急流筏流しの繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其　三

明九日は下妻に參るべく候。十二月八日（明治四十一年十二月九日　平泉より　高信の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其　四

一日夜二時水戸を出で平泉一泊。今日日暮れて此地につく。碧梧桐先生細君を呼びよせて冬籠せし地なり。明治の芭蕉は豪きものに候。一の關以北山水皆平凡一見荒涼たり。野邊山附近牧場やや見るべし。

繪葉書買ひに出て漁者らしきに逢ふ。東にしはどちらかときくに分らず。おてんとう様はどつちから出るといつたらすぐ分り候。十月三日夜。(明治四十二年十月三日陸奥淺虫温泉より　淺虫温泉場材木岩の景の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛)

其五

拜啓五日を以て此處へ入院仕り候。今日から岡田博士の手術を受くる筈に有之候。患部を切つて取り去るものの由、如何に成り行くものに候か。不自由と退屈と寒さとに困却致居候。十二月八日。(明治四十四年十二月八日　下谷養生院より　ハガキ　橋詰孝一郎宛)

其六

伊賀の上野で荒木又右衞門の鍵屋が辻を見てこゝへ參り候。梅は七日は後れたれど彼岸の中日故近在からの人出多く、百姓の娘等ながらどうして下妻あたりのおしやれは及び不申候。今日は名古屋から。（明治四十五年三月二十二日　月が瀨より　月が瀨の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其七

昨夜京へ來て（月が瀨から笠置を經）今朝すぐに卅三間堂と博物館とを見る。京は寒くまだ花もなければ、淋しけれどこんな名作を頭の痛くなる程見ることが出來るのと、京もこれで五度目だと思ふとそれだけでも生涯に於て滿足することが出來申候。死んでも悔がないというても妨ないと申すことに候。三月廿三日。（明治四十五年三月二十三日　京都より　三十三間堂國寶風神の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其八

ふと此處へ入院致候。其に付今年は思ひかけぬ京の花見致可申候。御報までに右申すすめ候。三月廿六日。（明治四十五年三月二十六日　京都醫科大學病院耳科より　三十三間堂の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其九

御手紙難有奉存候。丁度晝飯の時に開封、何となく胸一杯に成つた樣にて飯も半分ほどたべ申候。病氣を苦にすることは無之候へ共、唯天に任せるより外は他に道もなく、癒る癒らぬはいま考ふる暇も無之候。

花は毎日見てあるき候。昨日嵐山へ行つてはじめて絶好の勝地なるを知り申候。都合によつては吉野へ二度の花見に參り申さんかとも存じ申候。只今體重は兩三

年前の丈夫な時に比べて少しふえ居り候へども、更に日方もつき候様と成るべくうまい物くふことにつとめ居り候。四月八日。（表面）
繪葉書を書くのが勤めのやうで京へ來てからもう五十枚程書き申候。それだけ方方からの郵便を受取つて樂みに致居候。
こんなにぶらぶらして居ることを思へば病氣も風雅なれど、それは客觀してのはなしに候。しかし客觀することのみはゆるし不申候。
此ライオン今は一人前に成り申候。一昨年の生れなり。此間生れし子二頭は近頃に見せる見せるてまだ見せ不申候。何でも愛らしきもののやうに思はれ申候。京に居るうち、或は九州からかへりには見られ可申候。（裏面）（明治四十五年四月九日京都大學病院耳科より　動物園ライオンの子の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其　十

廿八日登山仕り候。
鹿兒島は意外に寒き處にて、袷に單衣位は襲ね申候。御連中へ宜敷願上候。廿九日。（明治四十五年四月二十九日　鹿兒島より　開聞嶽の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其十一

開聞嶽へ向ふ汽船の甲板上にて、天草の女の博多節を唱き、長崎へ渡る甲板上に數多き天草の女を見る。彼は內地に於ける醜業婦にして、此は公然浦鹽へ渡る賣春婦に候。大隅國の山中熊襲の穴居の蹟おほき邊に美人を見る。此は溫泉宿の病身の娘に候。五月九日。（表面）

太宰府の蹟は天下の靈地なり。國寶の佛像廿餘體、奈良を除いては價値に於て及ぶものなからむか。更に一度も二度も參り可申候。

小生當分ここに滯在のことに候間、御たより可被下こともあらば賜りたく候。今

日箱崎八幡、香椎宮に詣で申候。（裏面）（明治四十五年五月九日　福岡市外東公園武井氏方より　筑前觀世音寺佛像持國天の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其十二

昨日御手紙拜見。當然のことと小生は惑はざりし自己に信頼の度を高め申候。然しながら今更多少の感慨なき不能。凡夫は是非も無之候。

咽喉の患部は大分よく癒り居り候て、只一ヶ處組織に疑はしき處ある故念のため燒くべしとのこと、月曜からはじめる手筈にて間二日ばかりひま故、武藏溫泉へ參り候。天拜山の下にて停車場から三丁、明日は天拜山上から見た水城の趾までぐるぐる見てあるくべく、今日午后から雨、すずろに大隅の溫泉宿の病身の娘を憶ひ出し候。

實は小生過日のお手紙によりて惑ふことはなかりしも、聊か心を動かす處も有之、

人が若しそんなに同情を寄せてくれる程であるならば、餘所の女などには冗談一ついふまじきものと、小生は以前もさうなれど極めて愼んで旅行致居候。それ故今少し深く觀察すべかりし温泉宿を後にして去り申候ひき。惜しかりし次第に候。五月十一日。（編者曰、裏面には場所の説明丁寧に施しあり）（明治四十五年五月十一日　筑前武藏温泉より　筑前天拜山より武藏温泉及太宰府を望む繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其十三

芥屋は漫々たる大海を擁して風光の壯快なるは七つ釜に勝りたれど、彼が如き八貫匁の黒金の筐に類したる傳說はなき樣に候。昨日波少しく立ちたれど舟をうけ申候。何か御消息給はり度切望仕り候。（表面）

博多節の謠

筑紫名所は名島に宰府芥屋の大門の朝あらし　（裏面）（明治四十五年六月十二日

（福岡東公園武井氏方より　芥屋の大戸の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其十四

常陸の國から想像した處では大變でせうが、博多からは十時間位ですからね。六月廿五日。（明治四十五年六月二十五日　對馬殿原より　對馬農人風俗繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其十五

耶馬溪の名物まき柿一つ差上候。但し既に時節の悪い時に成り申候故、虫のついて居るかも分り不申、其時はそつと中の方だけでも御笑味被下度候。處々へ繪葉書を出した數も今日では隨分おほく成申候。半日以上の暇をつぶすことも有之候に付、今後はもう少し休養致度候へば、たよりもこれにて絶ゆ可申候。匆々　七月十六日。（表面）

新耶馬溪は天下の勝地であります。強雨を衝いて探勝を試みしに無數の瀑が懸つて居ました。(裏面)(明治四十五年七月十六日　別府温泉より　新耶馬溪坂の上の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛)

其十六

文展を見たあとで私は表慶館で眼を洗ひました。去年京都で栖鳳に失望したのですが、この美人にも失望してしまひました。繪はかういふものを描いても差支ないばかりでなく、むしろ着目する處おもしろいのですが、然し出來たこの畫は只失望あるのみです。(大正元年十一月頃　下谷那須館より竹内栖鳳氏「繪になる最初」の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛)

其十七

今年も嵐山の春にあひて心ゆくばかりながめ申候。昨年より掛けて朝鮮製の古鐘を見ること十三口、内十二口は國寶、他の本朝製のものを合せて國寶の鐘廿餘口、然かもまだ潮來の鐘を見ず候。此鐘東北には唯一なるべきか、知る人恐らくは少かるべく候。茨城縣下の佛像未だ一つも見ず。俚諺の眞理なるを感じ申候。四月十三日。（大正二年四月十三日　京都五條飄利方より　京都保津川の落合の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其十八

過日は御手紙難有存じ候。あの時の下妻行槊をなして熱も八度七分まで昇り非常に痩せ衰へ申候故、轉地の積にて上京致候處、兎にも角にも一時定まるまでと心づきしまゝ、ここへ凝然と横臥して附添の世話に相成居り候。安靜と一口に申居候が其功著しく翌日より熱も下降し、氣管支に加答兒を起したるが如くなりしも

既になくなり申候由に候。一寸博覧會など見て何處ぞへ參り度と存居り候。三月十八日。（大正三年三月十八日　神田區橋田病院より　ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其十九

昨夜は御訪ね下すつて難有う存じます。

京都といふ處は部分的に見なければ駄目な處です。私達にはたとひ案内の坊主や小僧がどんなであつても、そんなことには頓着なく、只もう目的の藝術品に接觸し得る事が樂みなのです。三十三間堂でも太秦の廣隆寺でも私には非常に面白い處です。嵐山も一寸見たのでは興味がありません。然しあの急斜面の谷に生えた松の思ひ切つて延びたところ、それから風のない爲めに、あの軟らかな趣を保つて居る處迄でも外にはありません。對岸の龜山の公園など何ともいはれぬ妙味があります。私も嵐山は四五回行つて漸く面白くなりました。五月八日。（表面）

今日はもう非常に心持もよく成りました。暫くぶりで外出したいと思つて居ります。

藝術の地へ行つては自分の藝術は成り立ちません。どんなでも作品を得ようとしたら他に求めねば成りません。

壁に貼りしいたづら書の赤き紙に埃も見えて春行かむとす

また少し歌が出來相に成りました。（大正三年五月八日　神田區橋田病院より　東京大正博覽會横山大觀氏若葉の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其廿

よひよひに必ずゆがむ白蚊帳に心落ち居てねむるこの頃

白蚊帳にけふちくたうを思ひよせ只こころよく其夜ねむりき

博多へ來てから四十日、病室の人に成つてから三十日何よりも暑い暑いと思つて

です。懸垂喉頭檢査法で咽喉を見てさうして焼いてくれました。此法を能くするもの現今日本に久保博士只一人のみです。博士及び同夫人の好意は筆にし難い程です。焼いたところが癒れば退院して轉地します。大抵日向の青島へ行くことに成りませう。ことしはからだが惡く成りつつあるので困ります　それでも三年以來中絶の歌は復活といふよりも、新生涯に入つたやうな氣がします。（大正三年七月十六日九州大學附屬病院より　封書　橋詰孝一郎宛）

其廿一

暑し暑しと人のかこつのみにて日を暮し申候。

夜雨氏小生の情事をあやまり傳へて煩悶の結果發狂すべしなど申來り候。御暇も有之候はば御たづね下され度願上候。（大正三年七月二十一日　九州大學附屬病院より　博多

其廿二

日向の油津から葉書をあげた樣に思つてますがとどきましたか。私は約四十日でもどつて來ましたが、どうしても風雨の季節で大失敗でした。只甲板から見た日向のけしきは格別なだけです。細島といふ港の附近には、奈良の嫩草山のやうな草山がありました。

當分こちらに居ます。國の方に何か面白いことでもあつたらお知らせ下さい。十月一日。（表面）

昨日は夜來の雨なので千代の松原はこんなに潦が一杯でした。

私も五月頃から大分歌を作りましたが、氣に入らなくなつたので少しやすみました。さうすると雜誌の方から大苦情です。私のが有るとないでは大變な相違なん

だ相です。妙なものだと思ひます。（裏面）（大正三年十月一日　福岡市外東公園平野旅館より
雨中の東公園の繪ハガキ　橋詰孝一郎宛）

其廿三

御手紙拜見しました。勝田氏の消息にはおどろきました。病み出して間もない事なのでせう。さうするとどれ程この病氣の恐ろしいものかといふことはおわかりでせう。私はどうもよくなくて困ります　それに日向行は非常の失敗なので尚更いけなくした樣です。然し當分は大丈夫です。もう少し過ぎると足掛五年もつことに成るのですが此等は珍らしい方なのでせう。十一月には歸ります。此からが問題です。十月九日。（裏面）

爲櫻今日とどきました。本當のことを書いたものには意外におもしろいものがあります　然し今の世間の惡感化を受けて生意氣なことをいふのが交つてますが、

此も是非もないといへばいへることでせうが、只何處までも眞面目でなければ成らない。寸毫も巫山戲てはならぬといふこと丈はくれぐれも敎へて置いていただきたいと思ひます。大切なことなのです。中で蛙だの兎だのそれから最初のものなどなかなか面白いと思ひます。只足りないのだからこんな生徒にはよく說明してやると、大變よく理解するだらうと思ひます。月の沈む頃といふのは月の出のことなのですか。それにあの文章には夕暮らしいところが少しもないのが大缺點です。（裏面）

××は馬鹿者で色情狂に成りかかつて居るらしいのです。何たる悲慘な滑稽事でせう。あれで女が欲しくて堪らない。それもいい加減あてがつてやるなどでは、人を侮辱するといふらしいのです。つまらぬ奴等から大家だの先生だのといはれて、いい氣に成り過ぎて到頭こんなことに成つてしまつた。世間が幼稚な時代に虛名を博したつて何にもなりはしないのです。そこに考を及ぼさないと世間から

捨てられて、どれ程煩悶したつて見返るものはありやしません。文士位みじめなものは其點に至つては決してありません。それで彼は八ツ當りに當り散らさうとするらしいのですが、其結果たとひ悶死したつて世間には何の反響もありやしません。彼は精神も變に發達して來て居るので、人がいつてもだめらしいのです。可哀想も可哀想ですが困つた人物です。一つは浮氣のあばづれ等が煽てたのが惡いのです。（表面）（大正三年十月九日　福岡市外大學通平野旅館より　福岡多々羅川の大橋の繪ハガキ橋詰孝一郎宛）

其廿四

手紙には必ず封筒に日附することをおわすれなく願ひます。もう今頃は歸るつもりであつたのですが、思ふ樣にも成らず、文展も見られないのが殘念の一つです。外にはないのだけれど七面鳥を見たいと念つたのです。中

村不折の如きはペンキ屋の親方位の程度のものにきまつてますから見ない方がましでせう。それでも世間では豪いものだと思つてるものもあるのでせう。虚名といふものは大變なものです。

光明寺におあひに成つた相ですが、あの人もどうも宗教家らしくもなく、何事も身にしみぬらしい振舞が誠に困つたものです。私も年來の友人だし、緣者のかたはしにも成つたりして居るのですが惜しいものだと思つてます。私は近來理窟のわかつたなどといふことは難有いものでなく成りました。もうそんなものを超越したものでなければ、滿足が出來なく成つたのです。尤もそんなことといつても相手に成るものはないのでせうが。

奈良へよつてまだ見ない名畫の數點を見て伊勢へまはつて、今月中には歸りたいと思つてます。（大正三年十一月八日　福岡市外平野旅館より　封書　橋詰孝一郎宛）

恐入りますが何かおたよりを下さい。

其廿五

たびたびおたよりをいただいて厚く御禮を申します。まだ九度ばかりの熱を出して當分居据りです。室のあき次第また入院させてもらひます、寒くて仕方がないのです。

アララギの一月號へ歌を六七十首出して見ましたから御らん下さい。直接あなたへ送る樣にいつてやりました。先月末から原稿を整理するのに非常に頭を使つたものですから、到頭夜ねむれなく成つていまでもさうです。只一句が二ヶ月も困つて居て落ついたなどがあります。それでも碌なものは出來ません。さうして熱を出した原因もそれから來て居るかと思ふと、能力のないものの努力といふものは全く無意義なものに成ります。慘憺たるものです。十二月二十一日夜　（大正三年十二月二十一日　福岡市外東公園平野旅館より　ハガキ　橋本孝一郎宛）

三浦義晃宛

其一

莊内は美人多しと申せど、三日の旅に一人も美人らしきを見ず。昨日象潟に來り田舍臭き宿に氣さくな綺麗な女中に逢ひ申候。一つは疲れた足を休め、田圃の中に昔の島々を見て歩くため一日滯在致し候。今夜も此女中がお給仕に出る約束に候。十八かと聞いたら廿だと申候。若々しいあどけない子に候。生れは莊内と申候。手首に灸のあとのあるのは、リウマチスの爲なりと申候。痛ましく候。昨夜猿芝居を見申候。古驛の猿芝居感おほく候。（明治四十年十月十八日　羽後國象潟より　象潟風景蚶滿寺の鐘樓の繪ハガキ　三浦義晃宛）

其　二

祇園の一力で雜魚寢をやつた。朝眼がさめたら舞子はまだ眠つて居た、皆美しかつた。昨夜舞子二人に手を引かれて夜櫻を見た。おどろいたらう。（明治四十一年四月十五日京都烏丸通五條の旅舍より　三浦義晃宛）

其　三

此の如き野暮な葉書を買つて居る所へ山を越して出て、それから又澁峠の難道を經て草津へつき申候。此宿に美人あり、小生の給仕は此の女に候。今日は遂一日滯在いたし候。明日は澁野(?)の山麓をさして出發可致候。（明治四十一年九月六日上州草津より　信州野澤温泉珠垂の瀧の彩色繪ハガキ　三浦義晃宛）

其　四

本願寺の山門の金具は大きな目をむいて汽車からまけ出された旅客を睨み申候。左官も大工も忙しげに且つ悠長に働き居り候。（明治四十三年十二月廿日　京五條より　京都東本願寺の繪ハガキ　三浦義晃宛）

其　五

我々は數次孔雀が尾を張つた儘端然として立つて居る處を見た。見る人は皆手を打つて嘆稱するし、彼はまた諸鳥の上に君臨して居るやうな態度で、時あつてびりびりつと其尾をふるはすことがある。然しながら彼等の尾は決して他を搏撃する武器ではない。のみならず彼等は粟や稗に活きて更に不足をいはうとしない。さうして檻の中に凝然として悶えもしなければ、騒ぎもしない。彼等は印度あた

りの原産地で、どんな生活をしてゐるか、どんな敵のために苦しめられることがあるか知れないが、彼等が雨季を過ぎようとする時、みなぎり落つる瀑布の上にテンクルテンクルと舞ふといふことを聞いて居る。彼等は遂に優しい美しさによつてのみ傳へられる運命を有つて居るのである。彼等が尤も其身を安んじて居られる處は檻の中に限られて居る。

然らざれば直ちに他の爪牙の禍を免れ得ない。

昨日智恩院で降誕會があつて印度からの新歸朝者來馬琢道といふ人の咄をきいたが、印度には宗教あつて政治がなかつた。政治家がなかつた。それで國は亡びたといつた。それは印度の不幸であつたに相違ない。然しながらそれも國の運命で仕方があるまい。宗教家は矢張宗教の檻の中に居て、萬人の精神を支配し君臨して居るがよい。一歩檻の外に出れば必ず他の爪牙に掛る虞がないとはいひえない。宗教家の強味は岩石に對する水の流れである。それが尊い所以であらう。俗界に

踏み込んで事を成さうとするならば、俗界の有力者誠意ある有力者に從ひ給へ。大洪水は大なる破壞力を有して居るが、さらさら水の流れは大巖巨石を動かす力がないではないか。（裏面）

暫くぶりにて此葉書差上申候。もう少しで小生も京を立つて當初の目的に從ひ可申候。

裏面に書いたことは昨日動物園で此の葉書を得て、ふと思ひついた故に認め申候。極めてわかり憎き文字に相成申候、甚だ失禮にあたり申候へども、わかるだけの處を御よみ被下度、わからねば其儘に被成下度、小生もいま痛切に精神上の打撃を受け居候へども、貴兄にも心を安んずること能はざる、或事情の存在を否む不能と存じ候。自己の領域を越ゆる勿れ、若し誤つて越えたならば、其主權者に服從せよと衷心より御すすめ申上候。（表面）（明治四十五年四月九日　京都醫科大學醫院より孔雀の繪ハガキ　三浦義晃宛）

其六

過日は失禮のこと申上御氣障には無之やと存申候。汽車は日向の一角を掠め候故、九州も豐後を除くの外すべてを通過致候。然しながら太宰府に及ぶ處一つもなく實に同地は天下の靈地と存じ候。國寶の佛像廿餘體、梵鐘の如きも本邦第一なるべく候。今日も一寸參る積に候。

暫時こちらに滯在故おひまも候はば御たより願上候。（明治四十五年五月十日　福岡市外東公園武井氏方より　筑前觀世音寺國寶納曾利陵王納曾利の繪ハガキ　三浦義晃宛）

其七

此間筑後の鑛泉へ一寸行つて見ました。

筑前といふ國は實に何ともいはれぬいい國と思ひます。（明治四十五年六月八日　福岡市

其　八

拜啓。裁縫女學校に就き御尋ねに有之候へ共、まだ聞取る處無之、內容等は一向分り不申候。されど外見よりするときは裁縫が主要の科目にて、時に何か教授の聲をきくことも有之候。唱歌などもきこえ申候。何よりも小生には場所が面白く有之、千代松原の松の中に建てられたる二階立にて、其二階の南面を開け放ちて涼しげに裁縫しつつあるを見うけ申候。それと何となく下妻あたりより繁昌の地なれば、人の心も相應に忙しかるべく無闇に聞耳立て、或は目に角立て居る樣のこともなきかに思はれ申候。內容卽ち仕組は今の處分り不申候へ共、建築が周圍と相俟つてさつぱりとして居ることと、大市街の內外を吸收することが出來るのとで、立ち行けることと存申候。經營者が如何なる人かは後日に非れば知るに由

なく、小生は實は表記には止宿せず候。先頃も御手紙にて此事御申越なりしが、小生はかういふことに頭を使つて詳細の手紙を書くことは、今は好ましからぬ故、歸宅の後ゆるゆる御尋ねにも預らむと存じ、其儘に致置候ひし次第、何よりも自己の工夫程大切のことは無之、小生は素人、君は兎に角今は專門家の地位に立つもの、只漫然どんなものかといふ御尋ねは餘りに疎漫ならずやと存じ候。今一應個條書にしてなり御遣し被下度候。（明治四十五年六月十七日　福岡市外東公園武井氏方より　ハガキ　三浦義晃宛）

其九

かういふ處を散々にのぞいて明日は四國へわたり升。（明治四十五年七月十八日　別府より　濱脇藥師溫泉女湯内部の繪ハガキ　三浦義晃宛）

其十

讃岐の國へ來て弘法大師の誕生地の善通寺で親鸞聖人の木像を拜すといふことは思ひ掛けぬことであつた。住持から其いはれを聞くと又面白い。右の背後に、

六衆暫寄鎌田無、晨夕法談最宿緣、
爲作眞容今與子、隨身待我樂邦天、

と刻んである。技術は巧といへないが如何にも念佛宗の高僧の相貌である處が又面白い。

もう諒闇に入つて暦も秋である。明日は大阪へ向けて四國の地を去るのである。

（大正元年八月九日　高松より　弘法大師御誕生所善通寺見眞大師御尊像繪ハガキ　三浦義晃宛）

其十一

長い旅行とはいひながら、僕は此の奈良までに三百八十枚以上の繪葉書を書いて

了つた。さうして今勘定して驚ろいた。もう何處へも葉書は出すまいと思つたのだが餘り嬉しいから君に一枚贈るのである。大に同情して見て呉れ給へ。此の殘暑のひどい中を五六日せつせと奈良近傍の寺院の最優秀な佛體を拜んで歩いた。處が昨日櫻井から多武峯への途中下村といふ處で非常にいい觀音樣を拜むし、さうして其の近くで安阿彌作の絶大な文殊菩薩を拜んだ。日本三大文殊の中でも隨一の名作である相だ。時代は鎌倉だが天平藤原とならんで矢張第一流である。脇士の二體は博物館に出て居る。童子の合掌して走らんとする姿勢もすばらしい。本尊は獅子共二丈餘。僕は寺の和尚さんと獅子の足の股をくぐつた。何しろ非常な大きなもので又非常な傑れたものだ。君の處の本尊樣が安阿彌だと思つて居たから餘計に君に報告したいのである。僕は今懷中も覺束なし土産を買うて行くことは出來ないのだから、せめて此の一枚を受けて下さい。此の瓦の天人は一昨年の暮に僕に大なる敎訓を垂れた。今度復た博物館で此の恩師に逢うたのである。

（大正元年八月廿三日　奈良より　大和岡寺岡本寛殿腰瓦繪ハガキ　三浦義晃宛）

其十二

私も病氣はどうでも既に歸らねば成らぬ時期が來ましたから明日出立することに成りました。それで兼ねて御依賴の女學校のことを聞き得た丈お知らせ致し升校長といふ婦人に逢ひました　四十に成るか成らぬに見えますが相當の年齡たのでせう　十六の時に橫濱あたりへ行つて敎育を受けた相で、敎鞭を執る位の智識は蓄へ得たらしいのです。それから出生地のこちらへ歸つて明治廿六年の頃、親戚に二三人引き續き嫁入するものがあつたのでそれを預つて、新しい裁縫の術や何か敎へたのが抑も人を敎へるはじめだ相です。漸次五人來る六人來るといふ普通の針屋と同樣であつたが、二十八年の頃福岡大學の最初の醫科大學長大森博士——此人は大學の前身縣立病院時代より獻身的に努力した人で、無慾恬淡全く人

格の人で、今でも福岡市の内外の人は大森さんといへば尊敬して居る。奇行逸話多く丸で子供のやうな處もあるが、皆感佩すべき事實である。――の夫人が友達の間柄であつたので、或時勸められたといふのは、小學校の裁縫教育の志願者を預つて敎へてくれてはどうかといふことでありました。どうも其頃腕は出來ても學術が薩張行かないので、どうしても合格するものがなかつた。それで彼女は自分にそんなことが出來るかどうか分らないが、一緒に研究する積でやつて見ませうといふので、短時日の間だが一生懸命にやつた相です。さうしたら卅人ばかりの生徒の内から十八名の合格者を出して、縣全體の合格者の數が廿名少し上だつたので殆んど自分の手から供給し得た譯だつたのです。まあこんなことで出來るならといふのでそれか(ら、脫?)も引受ける。第二回も好成績でずうつと其受驗生の絶えることは無い相です。其内漸次人が殖えて來る。さうすると小學校で折角敎つたものが唯裁縫ばかりして居て、學科を全く忘れて畢ふのも惜しいといふこと

から大森博士の夫人にも話すと、全くさうだといふことで、遂に同夫人にお願すると、博士の留守中は自分の時間だから差支ないと快諾してくれて、夫人はそのために態々綿服迄作つて毎水曜日必ず出て來て國語數學といふ樣なものを教へてくれた。尤も無給なのは勿論であるのみならず、古い本やら器具やら始終持つて來てくれた。そんなこんなで教師も要る。つまり彼女一人では迚てもやり切れなく成つたのである。然し教師といつても決して他からは入れない。卒業生をそれに充てて全部無報酬といふことにしたのです。それといふのは彼女は人に教へることに興味を有つて來て、近所に子守や下女の多いのを幸、それを一つ仕込んで見たいと思つて、傭主や父兄に夜分一時間でも二時間でもいいから貸してくれないかと申込んで、字の一字も書ける樣、襦袢の一つも縫へる樣と勵んだ相で、彼女は最初から俸給といふものを自分の懷（に入、脫？）れたことがなかつた。自分が經營者の地位に立つて居るが、經濟は全く開け放しで支出等のことも他の職員と

相談して、一錢も隱蔽することなく皆投げ出して居たのだ相です。此は今日でもさうなのですが、さうして自分は近所の子供や下女の爲めに夜まで働くといふのですから、誰にも不平の起りやうはないのだ相です。其内に福岡縣立病院は大學組織になつて、大森博士の骨折が甚むに從つて夫人も時を定めて教授に來ることが出來なく成つた。それで此も手蔓があつて小學の女教員のいいのを見つけて、放課後に立寄つて貰ふことにして引きつづきやつて居た。以前は市外に居つたのだが、市内へ引移らなければ家が狹いやうな場合に成つて來た。それが卅四五年のこと。卅九年の頃には定員五十名と定めたのが八十名以上も來て、斷らなければ仕樣がなく成つた。さうすると縣當局者から是非共女學校の認可を經なければいかぬといふことに成つた。從來女學校などといふ目的でなく全く寺小屋式でやつて來たので、教員も他からは入れないしして居るのだから、それでよければ女學校といふことにしませうが、六かしいことなら解散したつてちつとも惜しいこ

とはないといふと、尤も縣視學も知人だつたとかで大抵のことは大目に見るからといふことで、女學校といふ名目にはなつたといふのです。二三年してゐる內に借家は他へ賣られて立ち退くといふ場合にも立ち到る。生徒は多いのだから一寸さう家も見付からなくつて困つたこともあつた。さうすると父兄の有力者が一つどこかへ學校を新築したらどうかといふ相談を持つて來た。寢耳に水である。從來一錢も錢では蓄積がない。全くの無資産の人間で學校が立ちますかといふと、何でもいいから卒業生が何人あるかといふ。其時以前から自分の手で書かせた入學者の名簿があつたから出して見せた。素より履歴書などといふものは取らずに名前だけ書かせて入學させて居たのだ相です。毎年年始狀をよこすものが其時五百人以上あつた相です。發起者は卒業生へ手紙を出す。意外にも立ろに千圓以上の寄附があつた。それで發起者は相當の身分の者だからまかり間違へば自分が背負つて立つといふ覺悟はあつたのである。半分の金が出來ればあと半分は銀行から

借りるといふ方針で、彼女がどうなるのか分らぬ内に、發起者が普請を始めてどんどん進行して畢つた。これまでどれ丈の家賃を拂つたといふから丗圓は拂つたといふと、此からもそれ丈は拂へるかといふ。それに出來ませうといふと、それでは其金を毎月拂つて行け。さうすれば遂には校舍は全く學校の所有に歸するからといふので現にさうして居る。何でも自分には分らないが今五年ばかりすると借財がなく成るのだ相ですと、彼女は語りました。開校は現在の處は去年から。現在百廿人の定員なのが百五六十名の生徒があつて、寄宿も五十名といふのを八十名頼まれて居る。食費が一ヶ月四圓五十錢で他に校費といふものが一圓それつきり。通學生は普通科が六十錢、受驗科が一圓、高等女學校卒業者で裁縫ばかり習ひたいといふものが隨意科というて一圓、受驗科の生徒には彼女が一から十まで何でも自分一人でやる。今では事務を扱ふ人がなければ成らぬ樣に成つたので、中老の教師を一人傭うて置く。此人が國語數學を受持つて事務も擔當して居る。

米が高く成つて來たので四圓五十錢——其内から下女一人傭うて置くので給料だけはねなければ成らぬ——では米代丈だがどうしても増したくないといふので、廿年も米を買つてる田舍の百姓と談判して勉强して貰つてる　どうもまづいものをたべさせておくが皆がふとつて居る　それで皆さん痩せたら食費を增しませうが兎に角休暇前はこれで通さうというて居ますといふ　自分はちつとも經濟の方を覗きません　生徒寄宿生でも交代に勝手元を働くから帳簿も見るし、よく一校の收支のことも了解するからどうしてからが不平はない　とかういふことでありますす　彼女には夫があつて聯隊へ行つて語學を教へて居る。其俸給で彼女の一族は食つて居る　彼女は最初から壹錢も自分の俸給といふものを受けない　只かうして學校の中に住んで居ますから家賃が自分の手から出ない（脫?）のがまあ結構な事です。私共のやうなものには病氣で寐るといふことが一番禁物ですが、母も八十二に成りますが丈夫で子供の守はしてくれますし、まあ皆が丈夫ですといふ。

彼女も如何にも元氣で樂し相に見えます。

一、彼女は兎に角大小は別問題だが自分の地位相當に新らしい智識を蓄へてそれを尤も有利に應用したこと

二、彼女は營利といふことを眼中に置かないで只敎へることが樂しい容子に見えること、隨つてあれでは生徒にも父兄にも氣がおけないこと

三、營利的でないから、それと骨身を惜まないから他の同情が加はること

四、經濟を開放的にして居るから決して他の疑惑を招かないこと

五、彼女は虛心で敎育に從事して居るから他の同情者の忠言を何時でも快く受け入れることが出來ること

六、彼女の生徒は卒業生の緣故のものか其敎へた生徒のみで一度も募集をしたことがない。のみならず四月の入學に一月頃から願書を出して置くやうな狀況に在る

彼女の學校は將來そんなに規模を擴張する事が出來る性質のものではないだらうが、長い年月の間に不智（知、？）不識生長したのでどうもあぶな氣がない。さうして彼女は家族と共に幸福であるのでせう。どうも心配な容子がない。彼女と語つて私はかういふことを聞きもし感じもしました。急いで書くので薩張り要領を得ませんが、あとは御面會の折にして今日は氣がせいて仕樣がないのですし、明日立つので今一度病院へ行つて見て貰はなければ成りません　も少したつて出掛けねば成りません。それにまだ色々用事もありますからぞんざいな書方をしました。學校の內容等に就いてはどこも大差はないと思ひます。第一が其土地の狀況に從はなければ成りませんし、それに門外の人間ですから、分らないとて小言は御免を蒙ります。七月四日朝八時。

　も一つ今迄に一人でも手におへない生徒を預つたといふことがない相です。

（大正三年七月四日　福岡市外東公園武井氏方より　封書　三浦義晃宛）

其十三

こゝも暑い暑いてねられぬ晩があります。咽喉は燒いてもらつた處はよほどよく成つて居るといひます。其うち日向の海岸へ行かうと思つてます。（大正三年七月二十日　九州大學醫院西二ノ一より　博多港の夕照の繪ハガキ　三浦義晃宛）

久保猪之吉、久保よりえ宛

其一

御葉書難有う。私も疾に轉地轉地と申して歸國したのがくされ空や雨にとぢこめ

られて居るうちにすつかり瘦せて熱も九度過ぎまで昇る樣に成りました。それから思切つて此十三日に上京しました。喉頭の方は差當つてのことも無いとか申すのでこの病院で暫時容子を見ることにしました。院長は私達と大變な密接の關係を有して居るので、君の好きな室を何處でもいいから擇べと申されて十四日に入院しました。私が十六年ばかり前に窒扶斯で入院した時の附添が今看護婦長をして居るので大變都合がよろしいのです。熱は大抵六度九分位までの處に止つて居ますから來月中旬頃には愈々伊東の溫泉へでも行かうと思ひます。何でも去年あなたの處で御馳走に成つた頃には餘程工合がよかつたのですが、秋の頃から少しいけなく成つた樣でした。けふ來たら――尤も院長には暫く振なんですが左肺の小氣管支に加答兒があると申して居られました。それも昨日とれて聞えない相です。正月に金澤醫院に居た時は熱は七度以上づつあつたにも拘らず、ずんずん目方が殖えて三週間位に一貫目からも增して居ました。其機を外さずに三週間も辛

抱すればよかつたのですが、すつかり失策しました。けれども先頃の例もありますから伊東へ行つたらうんと肥えようと思ひます。どうです見込があると思ひますか、あなたも此度此手紙の屆く頃は無熱ですよ。さうすりや御上京に成れるのでせう。是非いらつしやい。私いいものをあげようと思つて居ます。迚もあなた方が想像したつて分りつこない品物です。是非ともあなたへ手づからお渡ししたいと思つて居ます。だが先生が御出京の後に此の手紙が屆く樣では駄目です。際どい處で筆を執ります。なんだかベットの上で書くので骨が折れていけません丁度繪葉書はなし看護婦に買はせたつて仕方がありませんからこんな紙で御免を蒙ります。博覽會の記事が毎日出ますが當分見られ相もありません　私は美術館と――これは私の友人の平福百穗君の鴨が見たいのです。私に是非見てくれと云つてました――百姓の方のいろいろのことと、女看視人に綺麗なのが居るといひますからそれと、何んでもいいから食傷新道のいろいろの名物と、各府縣の賣店

とをぐるぐる歩るいて居たり食べたり買つたりしたいと思ひます。博多の餅搗が評判の樣ですがまさかフテエガツテエとも云ひますまい。呂昇から賞められた相で、さうあなたから云つて來て下さると流石に嬉しい心持がします。それでは愈紅葉書へでも書きませうか　處が近來ちつとも作らないから書く歌もありません し、毛筆も暫く手にしませんから御約束が出來ません。病院に居ると髭が長く成つて困ります　餘計病人臭く成つて厭です　だが何といつてもあなたが御上京ならすつかり綺麗に成つて御目にかかります。どうかここへ葉書なり御遣し被下樣希望いたします。先生にはどうしてもお目にかかり御診察を願ひたいと思ひます。あなたからよろしくどうか。（大正三年三月廿九日　橋田病院より　封書　久保より江宛）

其　二

私も咽喉がどうもいけません。だけれど段々後れ後れて今日まで空しく成りまし

た。然しそんなに暇どつてるうちには夏休が來ますからもうぢつとしては居られません。明日立つて東京で一寸博覧會を覗いてそれから道草くはずに行きます。あなたへ差上げるものが疾に博多へついてます。私はついたらそれを受取つて卽刻あなたをお尋します。まあいいことと御仰つて下さい。本當に私も氣に入つたんですから、あと四五日の內です。どうか樂んで待つて居て下さい。お目にかかる日もすぐですからこれだけに致して置きます。（大正三年六月四日　封書　久保よりえ宛）

其　三

結構なもの澤山ありがたう存じます。私も少し食氣がついた處ですから尙更ありがたく感じます。吉塚のをとつて食べることを覺えました。今日はおそいので今待つて居るところです。昨晩はよくやすみました。明後日あたり咽喉が燒いていただけるかも知れません。甚だ恐入りますが金澤博士の辭林を一寸拜借出來ます

まいか。國華と西洋の畫の雜誌はいま少し外國語が讀めないと駄目です。それでもルーベンス、コロー、ミレー、ターナー、レンブラントはわかりました。（大正三年六月廿四日　福岡より　封書　久保よりえ宛）

其　四

けふこそは本當に思ひ掛けない處で申上げ樣もない位であります。ここへ來てから一晩おきに眠れないんで妙です。今夜は眠れる晩でせう。午睡もしないでしまひました。丁度あれを頂戴した時に高崎君が居られたのです。そのため寢ないで仕舞つたのです。粽は一つ高崎君へお福分しました。あれは白い方が水仙粽で赭黑い方が外良粽でせう。さうぢやありませんか。私は水仙の方を取りあてました。こまかいおさかなは加茂川の白鷺ぢやありませんか。それから鑵の中のは大阪のだと思ひますが物好の私には非常に興味がありました。今晩はよく眠つて明日は

快く日をさまして愈咽喉を燒いて貰ふ筈に御約束が出來てます。私も昨年の春からでは一貫三四百匁減つてますから容易ぢやありません。薪屋の外に秤が据ゑてありますから私も毎日檢査して見ようと思つてます。高崎君の種子島の話が面白うござんした。あの島に近く無人島があつて野生の鹿と山羊とが多い相です。高崎君たちは蘇鐵の山から此等の動物を追ひ出して生捕つたり撃ちとつたりした相です。種子島にもバナナがある相です。行つて見たく成りました。三四日以來蚤を十五匹とつて一寸樂に成りましたが、まだ二三匹は居りませう。時々ちくりといひます。こんな身體をさう吸はれてはたまりませんから直ぐとりつくす積りです。腕や脚の毛がそよと動いても蚤の動いたのが知れます。ベコニャは葉は素晴しく勢がいいのですが花は意外にもろく散りました。けふ先生から白い花のを一枚いただきました　（大正三年六月二十五日夜　福岡より　封書　久保より江宛）

其五

けふのはもうわかりません。紫蘇びしほや紫蘇の實それから山葵のはひつたのなど皆結構でお粥へ添箸をつけます。山葵のは、はじめてでした。何處の當物でせう。矢張京なんですか、それとも江戸式なんですか。然し私には此がわからなくて却つてよかつたと思ひます。何故だか當てて御らんなさい。知つてれば「ナメモノシリ」に成る處なんですから、だけれど鷺しらずを白鷺と思つてた樣は本當に鷺しらずでした。昨晩は晩かつたけれど兎に角眠つて今朝も洗面後も一時間ばかりうとうとした位なものですら食べました。朝は少しですけれど晝はパンにお粥が殆ど全部、卵が小さいけれど二つ、鷺しらず、バナナ一つ、ビステキ一皿、奈良漬少し、鯛味噌少し、それから大きな胡瓜を半分、これは私の宿から屆けて貰つたので食後に食鹽をつけて食べます。齒がよくて私好きなんです。さうして幾らか滋味を持つた處もいいと思ひます。だが食べてる處は人に見せませ

ん。一寸極りが悪いから。今日も宿から大きなのを三本持つて來てくれました。今日教室で〇〇子さんが鼻を洗つてもらつてましたからお歸がけに私が鼻がお惡いんですかと云ひますと、大變眞面目になつた儘さつさと出て行かれました。あなたから被仰つたらまあと驚かれるかも知れません。其時私は他の患者と離れて獨り曾田さんのうしろの窓際に居たのでした。私はひとりで可笑しく成つてました。けれども何も惡い意味が有るのぢやないのですから、怒らせない樣に被仰つて下さい。白いべコニヤが朝看護婦が蚊帳を外したあとに一つ散つてました。蚊帳の裾がさはつたのぢやないかと思ひました。午後に午睡から醒めて見たら又一つ散つてました。能く見ると花の形が違つて居ます。それが必ず一つ處から二つ揃つて出て居るのです。雌の花と雄の花とがあるのでせう。こんどの白い方は本當に愛らしいつつましやかなのです　おくさんのよりも先生の方がお優しいんであべこべですね。燒いていただくのは明日の朝といふことに成りました。燒い

ていただいたら、又大いに食べて肥ります。今日よく食べたら昨日より五十匁殖えてます。私も去年の春が懐しくてなりません。「ここへはひつてから水のやうな歌が咽喉もとまで出て居てまだ纏つては居ません。此も咽喉の手術が濟んだらすらりと出ませう。三室に大患が居ますが、家族の人が私に噂かましいだらうと挨拶に來てホクシヤ一鉢くれました。恐ろしく丈高いのでベットで見るのは至極です。（大正三年六月二十六日夜　福岡より　封書　久保よりえ宛）

其　六

昨日到頭燒いていただきました。こんどは注射も利いて居たと見えてひどくげえげえもいひませんでした。燒くといふことには一向に苦しいことはありません。あとも少しも痛いなどといふことはありません。

昨日は其前夜の寢冷えでもあつたのでせうか。下痢がありまして夜分になつたら

八度五分の熱に昇りました。食慾がなくて不思議だと思つたらそんなに熱が出たのです。今日は何だかいいやうです。構内の松林を散歩することを覺えました。南瓜の花見も出來ます。南瓜の花見は一日の内何時の時間が一番いいかあなたおわかりですか。私は南瓜といふものは眞面目でさうして恐ろしく剽輕なところが好きです。蔓の先へ成つたばかりは小さく青白いのでせう。それが段々大きく成るに從つて日に燒けて黑く成ります。大きな葉が一杯に其を掩うてても迚も日に燒けるのはききません。然しまた彼等は餘程不作法でどれもどれも人にお尻をまるだしにしてゐます。お尻を見てうまいまづいがわかりますが、あなたはどんなのがいいとお思ひですか。昨日はまた弟にお會ひ下すつた相で難有う存じます。彼は私がまさか官費でこんなにして居ようとは思ひ掛けなかつたのでした。こちらで先生へもお願してお目にかかりました。弟は今日は串木野の金山についた筈です。自分の考案の機械が二つとも此一月二月に特許になつてるのです。二つと

も最初に串木野金山へ買れたので其結果を見るために招かれて行くのだ相です。然し其機械は無償で大塚といふ人の鐵工場へやつてしまつたので特許は小布施式でなくて大塚式であります。私達にも惜しいことをした様に思はれます。一臺三千五百圓だ相です。此手紙に添へたボール箱のは弟がもつて來てくれました。パウンドケーキとか云つた様に思つてますが私が贅澤なことばかり云ふものですからこんなのを持つて來たのです。ところで私たべきれやしません。半分だけ差上げます。それにしても私大變心配してゐるんですが、私から人にものをあげるといふことがどうかと思ふのです。只ちつとも中身へは私手をふれませんし勿論息なぞは吹つ掛けもしません。私腐らすのも殘念ですから差上げて置きます。若し何んなら女中などは食べても平氣なんでせう。若し硯のおあきがおありに成つたらお貸し下さい。硯ばかりでいいのです。少し謀反があるんですから。蚤は昨日で二十九匹目。（大正三年六月三十日　福岡より　封書　久保より江宛）

其七

エニグマへ何か差上げねばならないと思つてましたが歌はまづくてとてもいけません。それでもどういふものか私の方の雑誌へ出すのだと我慢が出來ます。それで何か旅に歌だけはアララギ以外には出さないといふ決心もあつたのです。それで何か旅行中の思ひ出でも書かうかとおもひます。二つ三つ花のことをと心掛けて居ます。只今アララギの方へ一寸した原稿を送らなくてはならないので困つて居ますから五六日待つて下さい。昨日手術をして頂いたので筆とることが出來ませんでした。十五六日頃に東京へ屆く樣にしたいのですから其方が先に成らねばなりません。何でも二頁かそこらのものが出來るのでせうが然し私には大變に辛い問題なのです。とても骨折ることが出來まいと思ふからです。兎に角にうまく行かねば捨てていただくだけのことにしてやつて見ます。昨日は折角燒いていただいたのにど

うもぐびりぐびりやつて困りました。さうやるなといはれたんですけれど出たのです。私も先生が大變仕憎いことと思ひましたが幾ら我慢しても出たのです。私の身體は餘程注射が利きにくいと見えるのですがどんなでせうか。此の四五日以來何もないのに目方がぐんぐん減りつつあります。暑くてうまくたべられないからでせうか。（大正三年七月十一日　封書　久保より江宛）

穢くていけませんが「芋掘り」一册あげます。こんなものを出したのはむしろ私の恥ですが然しこれでも春陽堂の要求通りにしたので同書肆からの借金と先年伊藤左千夫君の葬式に上京した時の拂だけは濟ましました。其點からいふと私には役に立つたのでした。

其八

今朝氣がついて飛んでもないことをして居ました。先頃拜借のベコニヤが滅茶滅

茶に成つてしまつて居ます。いままで水をやつては居たのですが日にあてないで置いたのが惡かつたのでせう。だけれどまだ活きるだらうと思つてます。お詫します。然し此間のおはなしのことは上出來でその心配がこれでなく成つた譯かも知れません。さうすると私の怪我の功名に歸せねばなりますまい。お縣念ならば一寸お引きとりをねがひたいと思ひます。どうでせうか。原稿も急がねば成りますまいか。これもどうでせう。一昨日一寸蟬鳴をきいてそれつきり惜しいやうな氣がします。(大正三年七月十七日　封書　久保より江宛)

其　九

九日に出ようと思つたのでしたが待ち受けるものがあつたのでいま三四日置いていただくことに成りました。此間の寫眞集御返却申します。あとのを一部此者へ御貸し下さい。繪畫彫刻の方なのです。私には大變便利なもので仕合に存じます。

アララギが漸くつきましたから新しいのとかへます。此間の西瓜大變結構でした皮の近く程つめたかつたのですから赤い處の少しもなく成るまで喰りました。
（大正三年八月十日　封書　久保より江宛）

其　十

けふ愈退院することに成りました。拜借の分をお返し申して置きます。ベコニヤが少し勢がつきましたがこちらの看護長へたのむ積りで其うち休暇に成る節ですからやはりあなたへ御もどし致します。私もこのベコニヤの如く一點の陽光をみとめなければ成りません。私のからだは先生に、ベコニヤはあなたにおねがひ致すことでございます。後ほどうかがひます。明日に成るかも知れませんが。（大正三年八月十四日　封書　久保より江宛）

其十一

午前中は失禮いたしました。西瓜を食べたせいか御飯を澤山たべました。不思議で成りません。私も日向から歸つたら此の宿へはどうしたものかと思つてるのですが、それにしては餘分な荷物が有るのをここへ頼んで置いては都合が悪いと思ひますから失禮ですがあなたへ御願致しておきたいと思ひます　それでだしぬけに持たせましたどうかさうして下さい。旅で荷物は本當に困ります　先程博多へ行つたら耳鼻科の看護婦が四人で玩具店に居ました　成るべく知らないやうな風をして居るのですから私が一緒に店先へ立つてやりました　買手は病棟の方の伊藤といふ子でした。それから休暇でかへるのに御みやげだらうといつたら田口といふ看護婦が姪にやるのだらうといつてました。伊藤といふ子はわかいのですけれど和服をつけては本當にわかく成りました。どうかそれではおねがひ致します

(大正三年八月十五日　封書　久保より子宛)

其十二

十九日青島村へ來ました。唯の漁村でいいやどは一軒だけ、然し藝者などつれこみのところといひますから泊りません。あとは漁師の二階にごろごろする位のものです。それも間數がないのでおほくは滿員なので漸く見つけた處からはすぐ逐ひたてをくひました。ふと知合に成つた土木の技手が内證できいたらどうも肺病らしいからお斷りを申すとのことなのです。發病以來はじめて心にしみじみして見ました。そしたら土木の技手は私を肺病とは思はないので大に宿の奴へいつてやつた相です。其上私が來る早々非常に氣に入つて保安林の中の茶店だの土地の名物店だのの二階を借りてくれて昨夜うつりました。場所は青島一の處です。今になれば却つてよかつたと思ひます、唯大時化で魚はなし食ふ物に困つて居ます
宮崎は一體に未開で風俗が淫靡だといひます。いろいろききもしましたがあとは

繪葉書に譲ります。先生へもどうぞよろしくお願ひ致します。うんぜんへはお出に成りませんか。あなたからもおすすめ下さい。それに先生がお休みでないと病院の方では大恐慌が起るのだ相です。どうしてわかるかそれは祕密祕密。（大正三年八月二十四日　封書　久保よりえ宛）

やどの硯をかりました。筆の先が落ち相でいけません。

其十三

九時半頃注射したのですからまだ利いて居ますし少し苦しいのですが一寸申上げます。夫人さん喜んで下さい。今日は燒いていただきました。例によつて先生には仕憎くかつたらうと思ひますが私も幾らか馴れたといふのでせうか舌の工合を考へました。さうして慥かにぐびりぐびりも先程ではありませんでした。入院の時からの宿願が漸く叶つたのですからこんな嬉しいことはありません。あなたが

お立に成つてからお宅で先生にねだりました。第二内科の助手の高崎君からも先生にお願致しますし其上でのことなのです。普通の患者だつたらどんなに立派な身分の人でも私のやうに押强くねだれることが出來ませうか。私は其處へ行つては何といつて感謝していいのでせう。日本國中何處へ行つたつてこんな待遇を受けることは出來ません。私のことを一寸でも聞く人は驚いて居ます。さうして私をまあ何といふ結構な人でせうといひます。堤さんの紹介で先生を手頼つて來た東京の中島といふ人(今朝一寸お宅へ伺つた筈です)も私が居たので大變よかつたといひますしそれから私を治外法權だといつて驚きました。助手の人達だつて看護婦だつて私に對しては本當に違ふのです。西卷さんや曾田さんはいふまでもないことですがあの〇〇などといふ人でも私には丁寧でやさしいのですから私は却て氣の毒に成つて仕方がありません。何にしても宿願を遂げたのですから有難いのです。藥が利いて居るので手の工合が惡くて本當には書けませんが一言あなた

へも御禮かたがた喜んで下さるやうにと此手紙を書きました。（大正三年十月二十三日午後三時　封書　久保より江宛）

其十四

早速御禮を申上げねば濟まないのでしたが遂ねむくてとうとうとして居たもんですから延び延びに成りました。

一昨日は本當に思ひ掛けない處でした。仰の通り私は越の雪には大分贔負なんです。實際にあの長岡の市中に一軒だつてあの眞似をする菓子屋がないんですから製法の精粗がおわかりに成りませう。其位だからあれは三年置いても大丈夫です。私は越後の山奥で三年もとつて置いたといふのを出されましたがちつともかはりませんでした。只さう置くと箱のまはりだけが糸を引く相です。あれは道明寺だ相ですけれど原料の米が違ふと私は思ひます。口へ入れてすつと消えてくつつか

ない處も妙です。あゝいつたものは私の國あたりでも鹽竈といつた菓子がありま
す。二本松の鹽竈もなかなかいいものですほんの御禮に右申上げます。（大正三年
十二月十四日　福岡より　封書　久保より江宛）

「生くる日に」は一首もありません。「夏より秋へ」の作者は品位といふこと
がちつともわからないのです　アララギ十二月號私の處へはとどきません。
もしお手許におありに成つたら一寸拜借出來ますまいか。

其十五

あんまり寒かつた所爲ですか少しやられました。それにつけて先生から御心配し
ていただいて何とも申上樣もありません。どうも寒いものですから病院行を休ん
で居ます。申し上げるのが後れましたけれど何分よろしく先生へ御願致します。
いまは少し日が射しかけて來ましたが近來は何といふ惡い天氣でしたらうか。ア

ララギをいつまでも拜借し放しで申譯がありません、漸く御返し致します。それから他の歌集二さつも　私先月末頃から歌を考へすぎるものですから夜もねむれなかつたりして困つて居たのですがそんなのが一遍に祟つたのぢやないかと思ふのです　私古風な歌も作つて見たくなつたのですが竈山のが一首あります　此には追加してやつたのですからアララギへ出るかどうか不明です

　宵に焚きてあけのまだきの灰寒きまかまど山に石白く見ゆ（こんな序歌でも寫生をはなれない積りですよ）

それから昨晩ねむれないで居るといろいろなことを思ひ出したのですが、十二年前熱田の神宮で見た惡七兵衛景清の持つた痣丸の太刀が目の前に浮んだのです　鍔元から四五寸あがつてまるい曇りがあるのです。一度それをなくするといつて鍔元をあげたところがいつの間にか以前とおなじ様な場所へアザがまた表はれたといふ傳説がある太刀だ相です。それで私はこんなものを近頃ふる歌に配合して

歌が出來ないことはないだらうと思つたのですが六づかしくて困りました。痣丸なんて人が知らないのは構ひませんが言語の上に何の關係もない様なものを二つくつつけてしつくりと合ふ俳句とは性質が違ふんですから仕方がないのです。昨晩のですから未定稿です。

はやり夫（を）の太刀の痣丸鞘を離れ霰は庭の石打ちて寒し

初句に殊にどうかしなければ成らないと思つてます。或ひは成らずじまひかも知れませんが頭をいたくしますからもう考へません。（大正三年十二月十九日　封書　久保よりえ宛）

其十六

熱のある時に一番樂しいのは、素湯を心ゆくばかり飲むことですけれど、それがいまは咽せて咳が出て出て止まらな（編者曰、いの字一字脱）程のことがあります。ヒ

ロイン水とかいふ咳止を夜飲むのにも三十回餘にして藥飲みて樂みます。咳は二時過から少しはじまつて夜にかけます。液體を飲むはいつといふ區別はありません。どうか先生素湯を十分のめる樣に願ひます。水藥も困難な一つであります。

（大正四年一月卅一日　封書　久保猪之吉宛）

其十七

昨夕ここへ來ました。ひるから石人を見にゆく積りです。そこはまるで停車場までもどるのですがそれでもぐるぐる廻つてやはり今夜はここへ泊る積りです　今朝ここで一番いいといふ湯へはひりました。壁に盜難御用心と書いた紙が貼つてあつてそれにはすりごゆうじんと假名が振つてあります。

昨日途中で苦竹の筍がすくすくと立つてゐるのを見ました。又處々に麥を刈り倒してそれを打つてゐるのを見ました。殊に此前見た時に櫨がまだ褐色を帶びてや

つと延び出した位に思つてゐたのがもうふさふさとして一杯の茂りです　栴檀の花は到る處心持よく風にゆられてゐます　一軒の家の前で女房が道に水を打つてゐましたが手桶の外へ出てまた柄杓と一緒に手桶へつかまつてうかんだりしてゐましたゞ（編者曰、末段意味不明誤字ある歟）（明治四十五年六月一日發　船小屋より　風景繪ハガキ　久保より江宛）

其十八

其の後御病狀如何で御ざいますか。ここは螢の名所と申しますが左程のこともありません　昨夜この寫眞の邊まで歩きましたが少しは居る樣です　私も草葉の蔭に居るのを捕りました　螢が光つてゐると草と一つに引ちぎるのです（からいふと螢まで拗切るやうですが）草のにほひを嗅いだらそれは蓬でした。

來るか來るかと川しも見ればかはら蓬のかげばかり

といふ俗謠を思ひ出しました。

昨夜矢部川の土手を螢見ながら散歩して居ると川には船を漕ぎ出して盛に騒いで居るのもありました。私の前になつて行く三人連が何でも餘程嬉しく成つたと見えて『淺つたらしい』と怒鳴りました。さうしてから三人は盛に藝者の唄になりました。それから暫く經つと磯節を唄ひはじめました『船はちやんころといふのか、ちよんころといふのか『ちよんころ〳〵』炭薪やつまいか、つまんか』つまん〳〵』どういふ意味だらう『船は惡うても惡い荷物はつまん』といふことだとかういふ會話があつて最後に『縹緻は惡うてもいいお客ばかり取る』といふことだといふ意味でつけ加へました。この解釋には感心しました。三人は自分等のすぐ後には磯節の起つた茨城の人間が興味をもつてついて來て居ると云ふことは夢にも知る筈がありません。餘り廣くない川の兩岸には蛙が低い調子で懶げに鳴いてゐました。今年は三月に家を出ましたが、到底私の地方のやうな威勢のいい

蛙の聲はきかれませんてした。（明治四十五年六月一日　船小屋より　名所繪ハがき）

其十九

ここの海は非常に波ある由舟にお弱いあなたには隨分六かしき處と思はれます。博多の商人共汽車の中で酒を飲んで女の咄ばかりしてゐます　ふとしたはづみで片粕の東光院のことなど話題に上りましたら、小生を先生だと申して彼等がすつかりしよげた處はかあいらしいと思ひました。（明治四十五年六月十一日　筑紫芥屋より久保より江宛）

其廿

筑前といふ國はどうしてこんなにいい國なんでせう。今日は朝倉郡の蘇宿まで輕便鐵道で運ばれ、志波の普門院へ參りました。堂も本尊も國寶です。其秘佛と云

ふ觀音の像には全くおどろきました。普門院のすぐ近くの鹿淸寺には新羅の鐘があります。これがまた吃驚する逸品であります。それから更に南淋寺の秘佛も見せて貰ひました。（明治四十五年六月十四日　筑前武藏溫泉より　太宰府の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其廿一

洋燈の反射の隅の方で車掌と役員と三人でしきりに夏蜜柑をたべて、これは酸い酸いといつて今頃の蜜柑ぢやないと、不平らしい聲がしました。さうしたら今頃は半七さんと一人が假聲をつかつたので皆が笑ひ出しました。（明治四十五年六月十四日　武藏溫泉より　美人繪ハガキ　久保よりえ宛）

其廿二

汽船の客に縷な女が一人乘つて居ました。日が暮れたら甲板の荷物の側で船員の

一人とひそひそ咄をしてゐるのです。荷物といふのが味噌の明樽なので味噌くさくてたまらないのです。そこへ對州の者で和船の船長だといふのが物をがみがみいふ親爺でしたが船室から上つて來て嫂さん咄が上手だねといつたぎり復た船室へおりて行きました。暫くたつて女もおりて來て私たちの近くへ横に成りました。和船の船長は昨日鹿兒島から汽車で來たといひましたが頻りにボーイを呶鳴り散らして火鉢を持つて來い何處の家にも雪隱と火鉢のない處はないぞといふ。ボーイは濫々あの嘔吐の用意にしてある金盥へ灰を入れてさうして火を持つて來ました。オイ茶を持つて來いといふとそれでもここは三等ですとボーイはいふ　何でもいいから持つて來い持つて來て親切にすれば錢の十錢もやらうと思ふんだと勢よくいひました。茶は來ても到々十錢ならず一錢も出ませんでした。此親爺が側の女に先刻あなたは壹州へ上るといつたが壹州の人ですかといふ。さうぢやありませんといふと商賣は何です吳服屋ですかとがみがみさうして眞面目にきく。女

は流石に極り悪相にしてさうぢやありませんといつてやがて私はひく方なんですとそつといひました。あれでも藝者なんでせう。

對州名物とんびにからす又も名物屋根の石

然し鳶も鴉も更に見掛けぬ位であります。今日竹敷までいつて見ましたが大抵の家は瓦葺で石の載せてあるのは僅かでした。（明治四十五年六月廿五日　對馬の國より　對馬の女の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其廿三

對州でナメルといふ魚を澤山たべて來たはよかつたが船ですつかり閉口しました昨夜船からあがつて蚤にくはれ今晩もどうやら苦しめられ相でなりません。咽喉が渇いたので湯をのむ積りで砂糖が欲しいといつたら、此宿には白いのはないのでした。（明治四十五年六月二十八日　壹岐國山伏村湯本より　勝本港繪ハガキ　久保よりえ宛）

其廿四

彦山へ越える峠の下の村で一寸休む。其處でふとカッラハヅシと言ふ語を聞きました。扨てこれは耳よりだと思つて尋ねると山の者は小石やカッラが道に在るのだから歩くのには足を上げるやうにしないと蔓に引つかかつて轉げる　其歩きやうを『蔓外し』といふのだといふ意外にうまい言語の使用法であるには感心しました。そこは槻木といふ村で其家は木賃宿です。內儀さんがもどりに泊つたら唄をうたつてきかせるといふのですが今夜は彦山へ泊るのですからきく譯にはいきません（途中にて）

この石の禿倉の附近に木苺があつたので愉快でした。案內は十二三の小僧ですからすぐに手を出して困るのです。ところがこの下から私より先に上つて大便をした筈ですが、其時蛇が足の甲を渡つたから氣味が惡いといつてもう手を出しませ

ん。それで私は澤山たべました。しかし苺はもう末です。足へ傷が出來ました。刺のために。吉塚を出るとすぐ南瓜の花が澤山咲いてゐたのは愉快でした。（明治四十五年七月七日　福岡縣彦山町より　英彦山神社上宮遠望の繪ハガキ　久保より江宛）

其廿五

耶馬溪のつまらなさ加減はたまりません。巖といつたら抹香の灰を固めたやうでそれだから洞口などもどつさり落ちたのがあります。奇巖といつたつて幾らもありやしません。然し紅葉の時はいいでせう。どんな女でもお化粧をしてサラの浴衣でも着た處は相當に見えますから。耶馬溪は單に溪といふ上からでは到底多摩川の水源に近いあたりには及ばないし、左右の峰巒一つでも此はと思ふものは見られません、山陽があんなことをいつたのは一つ天下に紹介しやうといふ一種の山氣があつたのと又追憶の興味に驅られたのです。これは藥書位では一寸

つくされません。（明治四十五年七月七日　彦山町より　英彦山並木の絵ハガキ　久保より之宛）

其廿六

先頃駄菓子がお好だといふことを伺ひましたが、駄菓子にもヒッコキ、ネジリ棒、鐵砲玉、ガラガラと種々雜多ですが私が今でも忘れられないのが一つあります。木曾街道も南へさがつて仕舞には馬籠（マゴメ）妻籠（ツマゴ）と過ぎて舊道を十曲峠へかからうとする處に草葺の茶店がありました。婆さんが一人店で餡ころ餅など賣つてゐるのです。私はもう口一杯に唾がたまるやうで仕樣がなかつたから一皿二皿たべました。さうするとあの最中の皮のやうに糯米で燒いた煎餅で兩方から抑へつけて中には餡でなく砂糖と何かで固めたものが挾まれたのがありました此は何といふ菓子かと聞くと婆さんがそれは合せ鏡だといひました。（明治四十五年七月九日　彦山町より　久保より之宛）

其廿七

五日に耶馬溪へ踏み込み六日から雨、彥山に四日も居づくまつて十日に柿坂までもどり、十一日强雨を冒して新耶馬溪を探りました。思はぬ處に瀑が懸つてそれが幾つだか知れませんでした。耶馬溪はつまらぬものといひ得ますが新耶馬溪に至つては實に九州第一といふことが出來ませう。是非共一度御出でになることをお勸め致します。十月の下旬天長節の頃がいい相です。如何にもさうでせう。あの樹木が紅葉したら何ともいへないでせう。私も思はず耶馬溪で無理をしたので身體が疲れるし大變瘦せたのに氣がつきました。これから決して無理はすまいと思ひます。暑いのに困ります。

崇福寺の和尚さんのいはれた中津の自性寺へ行つて大雅堂の書畫を見ました。おどろきました。（明治四十五年七月十六日　別府より　新耶馬溪の繪ハガキ　久保より江宛）

其廿八

一昨夕別府へ來てぐつたりしてゐます。然しここにも長く居るのが厭ですから明後日松原へ向つて出發します。どうも耶馬溪で無理をしてすつかり痩せこけてしまつて自分でも驚いてゐるのですが何しろ暑いんだから困ります。早く高松へいつてゆつくりしたいと思ひます。

あなたも九州に長くお住ひに成る甲斐に新耶馬溪へ是非一度入らつしやい。私はすつかり氣に入つちやつたんですからお勸め致します。三日あれば充分ですから入らつしやい。どうですか斯ういふ處もあるのですよ。さうしてこの橋が新耶馬溪の盡きる處に架つてるのです。柿坂の宿で卵の半熟といつて拵へて來たのが、まるでぱかぱかに固くなつて居ます。熱湯へ入ればすぐ出來るがといつたら此前熱湯へ入れたら皮が割れたから今日はよい水から煮ましたといふ。道理で恐ろ

しく長い時間がかかりました。（明治四十五年七月十六日　別府より　新耶馬溪の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其廿九

十九日に別府を立つて直ぐに道後へ行つて二日ばかりごろごろして畢ひました。昨日は雨の中を伊豫農業銀行頭取で村上霽月といふ御人に案内されて正岡先生の舊宅だの夏目先生の下宿だのぐるぐる見てあるきました。夏目先生の方は表から見た計りですが大變見掛は綺麗に改造されたのだ相で大分新らしくなつてゐました。あなたの御出でになつたのはあそこなんでせう。五色素麵も氣に入りました。石手寺、太山寺には全く驚きました。よくあんないい寺が今日まで保存されてあつたと思ひます、石手寺の梵鐘などもいいものです。さうして太山寺の觀世音六體國寶に成つてゐるのは後冷泉天皇から近衛天皇まで六代共に即位の時必ず納め

たのだ相で十一月十七日とかより外は決して見せないといふのを、私は執拗く請うて漸く許を得ました。それも参詣人の絶えた時といふので今夕六時頃から再び太山寺へ行く筈です。道後の寶嚴寺の上人の木像も國寶ですが此も最初の日に和尚さんに叱られて次の日にいつて漸く見せて貰ひました。私は大に伊豫國に滿足いたします。（明治四十五年七月二十四日　伊豫高濱より　名所繪ハガキ　久保より江宛）

其卅

高濱から太山寺へ行きながら山を越えますが、この海を見下すと棧橋へつく小さな汽船の立てる波が向うの小富士の麓までとどき相に見えます。明日大三島へ行かうかそれとも止めて宮島へづつと行つてしまはうかと思ひます。興居島へも渡つて林檎や桃もたべたいと思つて八日午前に出る筈にしたら太山寺の和尚にねだられて居て暇をつぶしたから駄目になりました。佛像見た方が何程ましだか知れ

ないからそれに悔は少しもありません。然し太山寺などでも保存會へ少しだが寄附して來ますし私としては漸次贅澤な旅行になつて困ります。（明治四十五年七月二十四日　四十島繪ハガキ　久保より　え宛）

其卅一

宮島は期待した以上にいいですがどうも天氣が丸て梅雨の樣に成つてしまつたんですから困つてゐます。恢復すれば晴雨兩樣の景色を見ることが出來るのですから樂しんでゐます。平家は豪かつたものですね。（明治四十五年七月二十六日　宮島より　嚴島神社御寶物長澤盧雪の繪ハガキ　久保より　え宛）

其卅二

今朝潮が干たら廻廊のそばに鶴がひなをつれて遊んで居ました。（明治四十五年七月二

十六日　宮島より　宮島神社廻廊とそり橋の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其卅三

昨日漸く高松へ來ました。お手紙拜見難有存じます。堤の家には子供が七人もありまして大騷ぎをしてます。私を師範學校の小使に似て居るといつて笑ひます。私は伊豫の大三島へ渡つて大山祇神社の寶庫を開いて貰つて一々說明を受けました。國寶の甲冑が五十二もあつて甲冑では全國の國寶の八割を占めてゐるといひます。その中には實に孰れの方面にも恐ろしく偉いもの、隱れたものがあるのです。松山生れのあなたでも此は御存じがないことと存じます。尾の道でも立派な建築を見ました。淨土寺の多寶塔です。明治はもう終つてしまつたことを私は情なく思ひます。（大正元年七月卅一日　高松市外より　大森彥七及辨慶奉納の太刀の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其卅四

播州の書寫山へのぼり又刀田山鶴林寺といふ聖德太子御建立の太子堂に詣て高砂の相生松も見て和歌浦に一泊紀三井寺に参し、一日のうちに國寶の鏡を三ヶ所に見て和歌山城の天主に展望を恣にし粉河寺へも一寸立寄りかくして昨日高野の山に攀ぢ申候。關西の山々皆淺さにも拘らず獨り御山は鬱々蒼々として山雀の聲さへ木魂にひびき申候。ラムネを飲んだやうに何となく胸すき申候。只山上百年來三回の大火あつて荒廢に屬したるを憾みと致すのみに候。（大正元年八月十三日　高野不動の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其卅五

高野山の一番高い處かと思はれる岳の辨天といふのへ登りました。展望が如何に

も壯快な處です。途中から一匹の犬が跟いて來ました。小柄な耳の立つて尾をくるり卷いた全身狐色の純日本種です。此は當時容易に目に觸れないものです。頂上には辨當の竹の皮などが捨ててあります。犬はかうして時々お鉢などにありつくでせうが、生憎私には何の用意もありません。下りには前の途をえらびました。岐路の處で私はどうも右へ行きたかつたのを犬は勇んで左へ行きます。さうしたら二三日前に通つた女人堂のすぐ下へ出ました。一寸した茶店があつて金鍔が竝べてあるから犬にやらうと思ふともう姿は見えませんでした。茶店の女に此間途中の噂で知つた婆さんのことを聞いたら、それは百十一の年寄で赤い友禪の襦袢に赤い脚絆で若いつくりであつた相です。麓からつれて來た腰押一人が供で全く徒歩であつたのみならず荷物をつけた馬などは及ばないほど丈夫だつた相です。腰は二重に曲つて居たが皺なんぞはなかつたといひます　（大正元年八月十四日高野山より　古塔の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其卅六

法隆寺では夢殿の祕佛まで見せて貰つたし、東大寺では三月堂、寶庫、戒壇院とから入れて貰ひました。

日本一の四天王を見てそれが土を練つて拵へたのですからおどろきました。私は東京へもどつたら近角常觀さんにお目にかからうと思ひますが、まだ逢つたことのない人ですから手紙を上げるのに一寸困ります。あなたからお序の節に何分ともお願申上ます。近頃腹が減つて至極工合がよろしいのです　どうか先生へ宜しくお傳へ下さい。（大正元年八月十九日　奈良より　法隆寺四十八體の像繪ハガキ　久保よりえ宛）

其卅七

見れどあかぬ嫩草山に夕ぎりのほのぼのにほふくさ萩の花

これは明治卅六年の八月にはじめて奈良へ來た時に嫩草山一面に一種の淡い草花が掩うてゐたのを何の花かと聞けば草萩と答へたのを方言のまゝに詠んだのでした。其花こんども一面に咲いて居ます。然し私はもう殆ど歌を作りませんし自身の內容を反省して見れば誠につまらぬものであります。此前のやうに何でも彼でも歌さへ作ればいいと思つて歩いた頃とどつちがいいことか分りません。

あまたたび來んとあは思ふ斑鳩の苗なる梨の成りも成らずも

これも其時法隆寺へ行く道すがら田のほとりへ盛に梨の苗を植ゑてるのを見て作つたのでした。今年の春吉野へ行く時通つたら梨の花は一杯に白く棚の上にかぶさつて居ました。さうして只今では丈夫な百姓の女が黑い日に燒けたやうな氣持のいい色に梨は熟して居ます。

私は近角さんの添書で見てから更に一昨日此はまた非常に好都合で古社寺保存會委員で近畿の佛像に就いては此人程委しい人はないといふ新納忠之助といふ人と

法隆寺を見ました。三四日の内に夢殿の祕佛を二度も見ました。さうして住職は近衞家からでなければ見れないといふ中宮寺の如意輪觀音を見せられました推古時代で最優秀なものなんでせう。人には逢はぬといふ其若い尼さんが出て挨拶をされました。綺麗などうも廿二位にしか成るまいと思ふ方です。眉は本當の地藏眉でした。

三四日のうちに法隆寺を二度も見るなんてなんといふ幸福なことでせうか　東大寺の大佛殿の土中から發堀した劍や壺も見ましたが明日更に今一度手にとつて見ることを許してもらひました。實に美術上たいした品物なんです。私は今歌も文章も出來ませんが今度位精神に滋養を供給したことはありません。お目にかかつてお話したいやうです。明日は京都へ行きます。

最後に此の瓦に就て一言申上げたくあります。これは本當の瓦であることに御注意下さい。さうすればいいのです。私は一昨年の暮に此を見て非常な敎訓を得た

のです。

勿論この瓦の天人からの無言の教訓であります。今日も此恩人に逢ひました。

（大正元年八月二十三日　奈良より　岡本宮殿腰瓦の繪ハガキ　久保より江宛）

其卅八

奈良で大にひまどつて畢つて懐がげつそりしたにも拘らずまだぶらぶら歩いてるんですから困つたものであります。今日は宇治まで見てもどる積で日野法界寺の阿彌陀の佛畫などにおどろいて居る内に少しならず短く成つた日は待つて居ないのです。桃山驛から御陵の工事の電燈が輝いて見えました。疲れて眠い眼をこすつて二枚の繪葉書を書いたと覺召して下さい。

醍醐寺の三寶院は山の下で太閤時代の金襖やら屏風やらがあります五重塔も有ります。山の上へ行くと高野のやうに此の葉書の建物で泊めます精進物ですがここ

では砂糖を使ふから先づうまくたべられます。

此の處にみすのさがつた座敷がある。大に恐縮してお茶をのむ。晝飯をくふやがて椅子に椅つて悠然としぼんやりとする　特別保護建造物をぐるぐる見て歩く

大に赤面しつつ六十錢を出す。然る處繪葉書一組をくれる。十五錢はするらしい。

（大正元年八月三十日　京都烏丸通より　久保より江宛）

其卅九

京へ二三日の積りで來て八日も居てしまひました。明日は愈々出立、湖畔を少しめぐつて石山寺や三井寺におどろいて見たいと思ひます。一昨日鳳凰堂へ行き今日また行きました。一昨日行つた時鐘がどうも珍らしい善いのだと思つたら國寶に成つて居るんです。私は嬉れしくてたまりません。一昨年の暮見たときとは違つて堂の前の石燈籠でも今度はよく見えるんですから堪りません。私の幸福を喜

んで下さい。（大正元年八月三十一日　京都より　賀茂神社繪ハガキ　久保より江宛）

其四　十

定めし何處をどうして居たことかと御案じ下さつたことと思ひます。京都に×日居て、京都から東京まで來るのに十三日もかかつたのですから、自分も呆れてしまつてゐます。それで國へ歸つたのが先月の二十六日であります。それからといふもの一向心が落ちつかないで餘り御無沙汰になつてゐて申譯ないと思ひ乍ら遂にこんなに後れてしまつたのです。何分とも御免下さい。私も百姓をするのですから歸つて見ると何ともどうも亂雜でしやうがありません。然し籾の莚へ秋の日のあたつてゐる處などは毎年のことだが惡くないものであります。柿の節ですが、此邊柿が少く又梨子のいいのもなくて駄目です。

私の家にもありますが歸つてから日毎に雨ばかりでまだしみじみ味ひません。そ

のうちに無く成ります。百姓は麥蒔の用意に成ります。庭の葉鷄頭がまだ綺麗で此間の嵐でも格別の障りがありません。

山城の淨瑠璃寺へ行つて三重塔の聖畫などを見て和尙さんに此の吉祥天の自慢をされて東京へもどつて漸く博物館で見ました。處がどうでせう博物館ともあらう處が其時たつた一葉しか此の葉書がないのです。二枚書かうと思つたのが出來ません。（大正元年十月五日　鄕里結城郡より　吉祥天女像繪ハガキ　久保よりえ宛）（以下八通同日）

其四十一

一寸筑波山の葉書でも上げやうと思ひます。こんな淋しい處を迦つて行きます。私は一年のうちに四五回もいつたことがあります。（筑波山繪ハガキ）

其四十二

鬼怒川と利根川とが白く布をしごいて引張つたやうに見える處が人の目を惹く。私は好きな處だが、年久しく行きません。立春第一日に雪を踏んで登山したことがあります

山階の宮さんがなくなつてから、日本に只一つだといはれたこの觀測所も何だか淋しく成つた樣な感じがします。

此處から關東の平野を見るのは一寸九州路の山々にはない處だと思ひます。(筑波山頂山階宮觀測所繪ハガキ)

其四十三

此の岩の上へ私たちはのぼつたことがあります。禪定道とかいつて先達の行者が案內でなければ普通の人は行かない處ですが、私等は學校で覺えた機械體操のお蔭で平氣でのぼりました。(筑波名所天眞の原の繪ハガキ)

其四十四

此の岩が上から落ち相にして引つ掛つて居るので辨慶が若く成つたのだ相です。

（辨慶七戻り岩繪ハガキ）

其四十五

私はこのほとりで四年間そだちました。十一の春から十五の春までてした。泳ぎを覺えるまでに一度殆ど死にかかつたことがあります。（常陸下妻砂沼繪ハガキ）

其四十六

私の村落は此の川のほとりであります。ここに見えるあたりは私の村落から一里の川上であります。私の處は右岸で私は渡をわたつてここに見える左手の土堤を

幾度歩いたか知れません。土手には五月の下旬に成れば白い野茨の花が咲くのでさうした土手の中程に茅花がひらひらと靡くので私は其時が一番好きなのです。今年は大隅の國で野茨の白く咲いてるのを見てだんだん九州一杯ぐるぐると眞白い花を見てまはりました。鬼怒川の土手には今では赤い實がなつて居ます。（鬼怒川の歸帆の繪ハガキ）

其四十七

宗祐の居た城は關城といつて通つて居ますがいまでも村の名を關舘といつて居ます。セキノタテといひます。北畠親房卿が神皇正統記を書かれたのが常陸の小田城でさうして此の關城で朱を加へたとかいつてゐます。こつちの岸には相對して下妻城があります。東北に孤立した此等の大忠臣は明治四十年に漸く贈位の沙汰があつたに過ぎません。それのみならず此の水も切り落して大抵水田に成つてし

まひました。實利主義の世の中てす。（大寶湖より關宗祐の城址を望む繪ハガキ）

其四十八

此の神社の本殿は特別保護建造物て南朝の忠臣下妻政泰の居城てあります。私の東京から歸つた日は先月の二十六日丁度八月十五日夜の日にあたつたので此の神社の祭につめ掛ける近鄉近在百姓等は大變なものでした。娘等はよくそろひの飛白を着てゐますが十人のうち少なくとも三四人は女親と押問答の結果漸く拵へたのです。親の方では仲々穀高で容易なことてないといふ。娘は衣服が出來ねば友達と一所に行けぬといふ。さうしてふくれきつて仕事も碌々精を出さないとかういふことで娘の方が勝利を得て夜もろくろく寢ないでいそいそとして出て行くのであります。（常陸八幡神社の繪ハガキ）

其四十九

一等船室のお客さんは豪いもんぢやありませんか。宮島の宿でお晝にお酒を出して女中が頻りにすすめる。主人が出て挨拶をする。どうも變だと思つたら今夜十時半に立つので勘定をしてくれといふと、へえ勘定はいただきませんといふのです。どうした譯でせう。昨夜は一等の客は私一人で何だか氣の毒の様でした。明日の朝竹原へつきます。山陽の生地ですがそれは構ひません。鐘×××です。腕は存外ふとくつて胴がいかにも見すぼらしい處などはすつかり私に似て居るぢやありませんか。だが皆が少しばかり違つて居相です。（大正二年四月六日　宮島より　嚴島大願寺仁王の繪ハガキ　久保よりえ宛）（以下五通同日）

其五十

一等のお客さんはあの網ぶくろを肩へ掛けてしよぼしよぼと上陸したのです。下

駄はもうよくよく減つて居ます。然し大變穿きよくなつて居ますから捨てられません。

こんなものまで畫はがきになつて居ます。人間もうまく死ぬと大變なことに成つたものです。（大願寺所藏伊藤博文公筆の繪ハガキ）

其五十一

私はこれが見度くて仕方がないから八日に門司をたつたらすぐ大阪へもどらうかと思ひます。（高倉天皇御扇檜扇の繪ハガキ）

其五十二

この恰好のいいことあなたはどう思ひます。此の名作も宮島へ來れば見られます。（嚴島神社馬の木彫の繪ハガキ）

其五十三

こんな非常な名作でも今頃まで邪魔にされてあつた相です。これも見られます。(嚴島神社國賓犬の木彫の繪ハガキ)

其五十四

宮島にも花がありますよ。ここにも私の好きなものがあります。袷で寒いどころぢやありません。(光明院の繪ハガキ)

其五十五

丁度八日はこんな干潮で本當に滿引く潮の早鞆だと思ひました。奔湍の如く流れます。大潮てす。八日あたりからもう陰暦三月に成るのでせう。鳴門が見たいと

思ひます。（大正二年四月九日　下關より　久保よりえ宛へ（以下二通同日）

其五十六

昨日藝州竹原から下の關へ船に乘りました一等室がないので二等室へぎつしりつまつて來ましたが非常に面白く夜宮島から娘がはひつて來ました。筑前の志波あたりのもので色白でした。只コートの裾が綻びたと見えて袋のやうにふわと垂れ下つてたのを氣の毒に思ひました。（赤間宮のほとりより）

其五十七

これが女だとすると人間なら少し緣組に障る處でせう。（境の浦より　平家蟹の男蟹女蟹の繪ハガキ）

其五十八

昨夜は三時間ばかり三等室のお客さんになりました。浪花節やら茶番やらの餘興が三等室に催されたからです。藝人は皆船員です。今日は眞面目な容子して働いてゐるから可笑しいぢやありませんか。九時五十分丸龜の沖にさしかかつたと見え讃岐富士が窓から見えます。門司で乘船の際事務長からたしかに御手紙を請取りました。こまごまと有難う。然しうは書を見るとあなたも隨分お人が惡い。別府まで一等客は私一人、別府高濱とふえました。夏期になるといつも滿員といふことです。とにかく結構ですからお乘りなさい。他の船と違つて御馳走がよろしい。今朝來島の海峽を過ぎる時來島の全島桃の花が一杯であつたのと白い柱の如き燈臺と相映じて綺麗でした。節が早いから島にはまだ草が萌えません。しかし麥が青く見えるのがうれしい。（大正二年四月九日　くれなゐ丸の食堂より　久保よりえ宛）

其五十九

昨夜汽船が後れたので七時廿分に神戸へ上陸して八時の汽車に乘つておそく京へつきました。今朝博物館へはひると見て居るうちに陳列替で追ひ出された室もありましたが、お蔭で二度分一遍に見ました。檜扇が何といふいいことでせう。そつと開いた檜扇は一寸この孔雀に似て居るぢやありませんか。（孔雀繪ハガキ）

其六十

今年も嵐山の花を見ました。しかしかういふ花は一日も見ません。此の綺麗な子の口からお客に向つて『何ぞいいもん買うとくれやす』といふのです。私はそれ以外に希望のない彼等を愛します。（大正二年四月十三日　京都より　舞妓の繪ハガキ）

其六十一

誰かが藝者をよんで居ます。博多節をうたつて居ます。土地の女は『サイハヒ』といふものを着て居ます。綿の入つたちやんちやんです。（出雲大社の繪ハガキ）

其六十二

宿の娘は十四位には成りませうか。サイハヒを着てお給仕に出ます。出雲の男女はいま札打に歩きます。少女はすべて赤いゆもじを出して草臥れた容子に見えます。色は白くても大抵鼻が低いやうです。此は私の方でも大屑はありません。（大正二年四月十八日　出雲より　名所繪ハガキ）

其六十三

この山へ私は二度上りました。あなたはまだですか。來年の春東京からのもどりに思ひ切つてお登りになつたらどうです。此繪はがき東京にはあれど肝腎の宮島

にはありません。(大正二年六月十一日郷里より　嚴島神社繪ハガキ　久保よりえ宛)(以下四通同日)

其六十四

私はいつでもどうかして居るんですが、こんどはあなたもどうかしましたね。ちつともおたよりが有りません。私は咽喉のいたみがとれないでそれだけ忌々敷と思ひます。(嚴島神社廻廊の繪ハガキ)

其六十五

旅中父の大患をきいてそそくさと歸つて來ました。だが幸に數日來輕快に赴いてもう大丈夫に成りました。それで今日端書を書きます。娘のはなしも少し出ようかといふのです。ここに鶴が居ます。よく見て御らんなさい。(嚴島鏡ヶ池繪ハガキ)

其六十六

四枚目が愈々娘の話になります。出雲の鰐淵寺へ山坂を迴つてあの大事の下駄がぱかりと折れたので岩かど多い道を素跣足で歩きました。それから藁草履を求めて汽車の中もそれで通して夜おそく但馬國の××村といふのへ下車しました。さうして何でも七八町行きましたらう。宿つた宿に別に不思議は無いのですが宿帳をつけに來た娘が意外に綺麗なのです。それはお政さんといふので十八、其上が靜江さんというて二十だ相です。姉さんは咽喉が惡いとてふせつて居るとかで見ませんでした。然し姉さんの方が女らしい顏だといひます。お政さんはお化粧をしてお針に行く。姉さんはお化粧をしないで板間を働く相です。どつちがいいのでせう。（嚴島五重塔繪ハガキ）

其六十七

娘のはなしのつづきです。朝應擧の畫のある大乘寺へ行く積で勘定をして玄關を出るとお政さんが慌しく出て義理を述べます。其時私が玄關を離れて二三間しか來ない內です。一人の女の子が來て石楠の花を二枝お政さんへ渡しました。お政さんはまあといつて受取りました。藥玉のやうな紅白の石楠です。私は石楠を提げて身體を半分隱して立つて居るお政さんを振り返つて見ました。話はそれだけです。もひとつ。私は其宿につく前二三軒手前に下駄屋があつたので疎末な併しながら新らしい下駄を穿いていつたのです。だから勿論お政さんに送り出された時にも昨夜の新らしい下駄を穿いて居たのです　藥草履の場合と新らしい下駄の場合とあなたはどう違ふとお思ひですか。（嚴島大鳥居の繪ハガキ）

其六十八

『ほととぎす』の催の能に招待されたので一寸上京致しました。私は能といふもの

は六七年前に一寸見たきりですが其間に別段の變化も素人目にはわからない樣です。役者の年をとつて居るには驚きました。晶子さんといふ人がいつかあなたが見せられた婦人畫報か何かにあつた寫眞のやうな顏をして居られました。しかし本物は眞白です白粉のために。松井須磨子といふ人はおとなし相な女です。萬更でもありません。（大正二年六月二十八日　下谷より　久保より江宛）

其六十九

來年の四月にはアララギの同人へあなたを御紹介することをこつちできめて居ます。いやだといつても駄目です。（大正二年六月卅日　シーザーの繪ハガキ　久保より江宛）

其七十

アララギの同人にあなたは好評です。雜誌送つてくれたよ久保先生から六かしい

名前の雜誌だなあと齋藤茂吉君がいつてました。（大正二年六月三十日　下谷より　ブルータスの繪ハガキ　久保より江宛）

其七十一

先生は何時お歸りになりますか。此間のエニグマで日本には一のラファエルも一のレンブラントもないとのお小言を承知しましたが、然し乍ら日本人位自身の祖先に冷淡なものもないだらうと思ひます。さうして日本人位自身の祖先を理解しない國民もないだらうと思ひます。近く二百五十年前に出た俳人芭蕉の名句を味ひ得るものが幾人ありませう。まして萬葉集などに成ると萬葉學者と稱する人々にちつとも理解がない樣です。殊に美術上の作品になると何處にどういふ物があるかさへ無頓着で居ませう。それで批評が出來ませうか。血筋のつながつた祖先の藝術を理解することが出來なくてどうして外國の藝術がわかるのでせう。外國

といふことをちつとも知らぬ私達にはちつともわかりません。

今度は珍しく議論めいたことをいつて見ました。病人の譫語ばかりでもありますまい。私の處も來月半位から一里の處を汽車が通る樣に成ります。東京へ行くのが便利になつて結構です。（大正二年十月二十四日　郷里より　絹川歸帆の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其七十二

此樣な灌漑用の水が通じて居ます。私の縣に於ては有名な用水で明治の初年に此地に偉人があつて切り開きました。是には非常な美談があります。（大正二年十月二十四日　郷里より　絹川繪ハガキ　久保よりえ宛）

其七十三

私の子供の時分の記憶でよくもわかりませんが宗任が首がなくて何とかしてここまで走つて來たのが、土地の者と問答してがつかりして仕舞つて首のないのに氣がついて倒れてそれつきりに成つたとかいふのでした。誰かに聞いたら能く分りませう。此傳說には子供の時分でも大笑をしたことです。(大正二年十月廿四日　宗任神社の繪ハガキ　久保よりえ宛)

其七十四

茨城縣の田舍も御らん下さい。萱草がくづれ相に成つて居るのが御目にとまるでせう。然しあなたのおくににも恐ろしい萱ぶきの町があります。昨年私は驚きました。それは町とはいはれぬ佐賀市であります。(大正二年十月廿四日　下總名所繪ハガキ　久保よりえ宛)

其七十五

私のからだも大變惡く成つてしまつた樣に思はれたのでしたが上京して内科で診察してもらつたらさうでもないらしいのです。然し此頃に轉地はする積です。（大正二年十一月十二日　下谷車坂町より　文展しぼりの繪ハガキ　久保より江宛）

其七十六

私の附添は小柄な色白な可愛い子です。生れは上州下仁田の在だといひます。白いのも道理です。私のベットの下で此間小さな帶をくけました。若い女が側で針を持つてるのはいいものです。夜は私のベットの側へ寢ます。寢顏も可愛いものです。昨晩は何だか細い聲で寢言をいつてました。私は獨りほほゑんで居ました。私はことに恐ろしい早起で五時にならないのに床を離れます。彼女は日中眠くなる樣子ですが、其時には彼女の日は大變愛敬に富んで見えます。（裏面）

裏面に書いたことを讀んできかせたら彼女はあらまあいやだ寢言などはいひませんといひました。白いのも道理といふのは下仁田は有名な葱の產地だから其葱の白味のやうに白いといふことなのです。昨年博多で買つて來た木綿糸の眞赤な錢入れが見すぼらしくなりましたから自分で笑つて居ましたら彼女は私のをあげませうといつて出してくれました、大層いいにほひがして居ます。私は池の端の賣店でミツワ椿油を買つて來てやるのでしたが大變美術學校で時間をとつて疲れてしまつてまた熱の出るのが恐ろしいからお菓子や草紙を買つて急いで歸りました。彼女は小井土さんといひます。名は何といふのとききますと針へ糸を透してといひます、それでぬい子さんがわかりました。（大正三年四月五日　東京神田橋田病院より　慈母觀音の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其七十七

先生は立派な本を買つてお歸りですから何事もよくわかりますが先生のお歸りになる前に私は此の葉書をさし上げたいと思ふのです。唐代の陶製ですが人物が何だか洋服着て居るものの樣なのですおもしろいと思ひました。（大正三年四月五日　橋田病院より　美術學校所藏唐窯三彩馬繪ハガキ　久保よりえ宛）

其七十八

ここへ來てからふと出來た歌一首お目にかけます。今日は風があつて埃が霧の樣に立つて居ます。暮春の趣きが十分であります。私は土の黑い郷里の水田をかこんだ楢の林の若葉が好きでたまりません

ならの樹のわか葉は白しやはらかにひとへの肌に日はとほりけり

もうすぐに夏が來ます。單衣にかはつた時程女の美しくなることはありません。

（大正三年五月一日　錦町橋田病院より　大觀の若葉の繪ハガキ　久保よりえ宛）（以下二通同日）

其七十九

あの水の通つた深川にはおもしろい處があると思ひます。下町の娘も私はいいと思ひます。何だか輪廓がはつきりして居るところがうれしいのです。東京の女は一般にヘナヘナしてゐて骨のない人間のやうな氣がします。田舍から出てくると妙にあぶない樣な不安な感じがします。昔の女は羽織を着なかつたとか云ひます。下町式にはあぶな氣のない處が氣に入ります。さうしてから妖艶な趣が十分であります。（木場の娘の繪ハガキ）

其八十

奈良の藤を見て參りたく思つてゐた處がどうもはかばかしく行かないのでどうやらそれも空しき望みに成り相です。　エニグマ難有拜受しました。私も此病院へ來

てからふと少しばかり歌が出來ました。然しながら私のは全く今の人々のとは違つて居ます、秋海棠の畫賛の歌が只一首あります。千代松原にはいま松の花粉がおびただしく飛んでゐることと思ひます、昨日齋藤君のところへ行つて椽の嫩葉に風のあたつてゐる處を見ました。（ロベにの繪ハガキ）

其八十一

病院の窓からでは甍ばかりが見えて居ます。此間一寸出たらアカシヤの花が咲いてゐるのです、無花果の嫩葉がつやつやして非常にいいと思ひました私にも珍らしく歌が出來ました水の樣な味です、アララギ六月號に出ます。（大正三年五月十五日橋田病院より、花ぐもりの繪ハガキ）

其八十二

近頃毎日海は荒れて居ます。昨日も隨分ひどい波でしたが日井澤といふ所から乘船してもどりました。一時は途中へ上陸しやうかとも思つたのですが今日になつて見ればそんなことしたつて同じことでした。然し昨日は日向の海岸のいいのを見て通りました。精々五十噸位の小蒸汽なんですから搖れることは非常ですがそれでも寢て居ないでよく見ました。すべて斷崖がないのです。赭い斷崖は私の嫌な一つです。そんなに日向は青い山の脚がずんと海に踏み込んでゐるのですからいいのです。（大正三年九月七日　日向靑島より　鵜戸神宮の繪ハガキ）

其八十三

私の咽喉も一度何とか手術をしていただかねば諦めがつきません。だがもう博多へもどるにしても先生がお留守ならつまらないしどうせ其時はあなたも御一緒なんでせうからさうしたら私は何處かでも少し遊んで行きます。海で歸るなら別府

へよります。陸なら鹿兒島へまはりますから甚だ恐入りますが別府と八代との二所の郵便局へおなじものを留置にして私へ葉書をお出し下さい。それは先生がお出かどうかといふことなのです。多分海を歸るやうに成らうかと思ひます　然し海の荒れには困つて居ますがどうか願ひます。日向は丈夫で健脚をふるふならおもしろい處でせう　油津の港では生れてはじめての鰻を酢味噌でくふ料理にあひました。（大正三年九月七日　日向青島より　青島の景の繪ハガキ　久保よりえ宛）

其八十四

日向は全く間の悪い時に來たので宮崎へ逝げて來て今夜で四晩泊ります。明日は何でも青島へもどつて船に乘る工夫をしなければなりません。どうも熱が出ますから船がいいと思ひます。青島では茄子の糠味噌へ醬油をかけて其上に赤い砂糖をかける家があります。も少し上等なザラメをかけるのもあります。他へ行くと

出る喫が青島に居ると出なくなるところは妙なんですが駄目です。（大正三年九月十二日　日向宮崎町より　名所繪ハガキ　久保よりえ宛）

其八十五

到頭船にしました。幸に海上は非常ないい凪でまるで瀬戸内海を乘つてる樣な氣がしました。細島といふ港へ這入る少し手前に奈良の嫩草山のやうな草山が立つて居ました。季節が季節なものですから其草山がまるで鹿の毛皮で掩うた樣に見えます。其裾は直に海なので時々ちらりちらりと波が白く碎けて居るのが見えます。海には汽船の周圍に立つ外には白い波は一つも見えなかつたのです。私はこんな綺麗な山を見たのは生れてはじめてなんです。日向は私にはひどい處だつたのですが然し景色はいい所と長く記憶に存することと思ひます。（大正三年九月十九日　豐後別府温泉より　大分カムタン港の繪ハガキ　久保よりえ宛）

中岫友彦宛

其一

旅も既に終に候、昨日象潟に來り今日昔の島々を見て田圃の間を廻り申候。疲れし足を休めて一日ぶらぶらぶらと古趾を探り可申候、海上に飛島といふ一孤島あり島人内地の人を珍らしがりて女護島の如き由申候。夏季は毎日便船あれども只今は容易に渡るべからず、此は再遊の折に讓り申候。（明治四十年十月十八日　羽後國象潟町より　象潟風景字立石山より主夜神を望む繪ハガキ　中岫友彦宛）

其 二

ふと昨夜十二時水戸をたつてここに來る。今夜また突如として水戸に歸るべく候。（明治四十一年十二月八日　陸中平泉より　中尊寺寶物辨慶の木像の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其 三

何處でも冬は寒く且つ淋しく候。此の行只管竹の知識を得んとするが爲に候。京は今度で四度目珍しくなくなり申候。（明治四十三年十二月廿日　京都より　京都銀閣寺の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其 四

此の如き女白河村より來る。只今の如き寒さにも花を箕に盛り申候。風情ある姿には候はずや。

おたふく豆一折差上申候。噺は山々。（明治四十三年十二月廿三日　京都より　京都白川風俗花賣女の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其五

記念に一葉差上申候。昨日月ケ瀬に來り今日笠置に向ふ。此邊の百姓娘皆見あげたものに有之候。（明治四十五年三月廿二日　大和月ケ瀬より　大和月ケ瀬桃香野より雪景山を望む繪ハガキ　中岫友彦宛）

其六

二度目の登山今度は思ふつぼ、花の眞盛に有之候。藏王權現の祭典も見申候。先日の御禮に何かと求め候へどもここのものは嘗て差上申候故其内見つけ可申存居候。（明治四十五年四月十二日　吉野山より　吉野山上一目千本櫻の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其七

橋下より見ゆる向うの小山の裾に道路通じ居候故、そこをぐるりと歩いて見申候。岩國川は水清くして鮎の居り相な處に有之候。山陽線の海は洵に日のさめる樣の處にて宮島驛から宮島の赤い鳥居を遠く見申候。圖中の人物は如何なる階級のものか相分り不申候。（明治四十五年四月二十一日　周防國岩國より　周防岩國錦帶橋の繪ハガキ　中岫友彥宛）

其八

思ひ切つて登山仕り候。されどからだにさはりは覺え不申候。（明治四十五年四月廿九日　鹿兒島より　開聞嶽（薩摩富士）の繪ハガキ　中岫友彥宛）

其九

昨日肥後の三角より海路長崎に渡り、明日住の江におしげさんをおたづね仕度と存じ候。住の江は佐賀から遠く、何處の停車場からが宜敷か今思案中。尤もここの停車場に尋ね候はば相分り可申と存じ候。(明治四十五年五月三日　長崎より　長崎鳴瀧に於ける蘭醫シーボルト先生の宅址及肖像の繪ハガキ　中釉友彦宛)

其十

都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。といふ菅公の詩中の句の意がすつかり分り申候。歸つてからのおみやげは只お話だけに有之候。觀世音寺の佛像は實に奈良京都を除いては天下匹儔すべきものなかるべく候。舊太宰府の地はすつかり惚れ込み申候故二度參り申候。汽車賃十七錢の處故、今一度も二度も參る積に有之候。(表面)

先生もあまりお酒をめしあがると觀世音寺の佛像がこんな恐ろしい顔をして見ますよ、これが白い眼だと思ふと違ひます、輝々として火の様な赤い眼であります。此像は九尺といひますが。一丈六尺の馬頭觀世音の如きは、四面六臂かで惡辣な顔が前後左右にくつついてるのですから、うしろへ行つても見つかります手にも恐ろしい武器を握つて居ます。どうぞおからだを御大切にと希望致します。私も身體は今の處いい鹽梅で咽喉の方も大分よくは成つて居ると申しますが、どうなるか先のことは分りませんが、國へ歸るのにはまだ大分暇どれます。歸りみちに見る處が大變ですから。（裏面）（明治四十五年五月十四日　福岡市外より　國賓筑前觀世音寺佛像持國天の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其十一

有名なる芥屋の大門に來り記念の一葉差上申候。（明治四十五年六月十一日　筑前國芥屋よ

り　筑前芥屋大門正面並に東方之景の繪ハガキ　中釉友彦宛）

其十二

先生はお酒をお止めなされたと申すことをここに居て知りました。此は先生のおためばかりでなく心底からお祝申上げます

私も近頃博多をたつて行くことに成りました　然しそれは四日や五日のことではありません。（表面）

どこの家にも無闇に酒をのむ主人さへなければ此鏡のやうにすべてが圓滿に行くことと思ひます。この鏡は今度國寶に成ります、どうか先生の禁酒が長く繼續して、どこへ行つても先生へ杯をさす人のなくなることを希望いたします。（裏面）

（明治四十五年六月十八日　福岡市外より　筑前觀世音寺の寶物小野道風筆後小松帝寄進八稜鏡の繪ハガキ　中釉友彦宛）

其十三

到頭こんな處まで來て見ました。（明治四十五年六月廿五日　對馬國嚴原より（對島）廿四珊加農砲（雞知高濱港）の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其十四

耶馬溪から雨にふられて彦山へ來ました。今日もすこし雨があつたが登山しました。耶馬溪は天下の愚勝でせう。（表面）

天滿屋は私のやどです。十八に成る愛嬌のいい女中が居ます。彦山から少し下つた處のものだ相です。名は蔦江といひます。昨夜ねる時に蒲團を掛けてくれましたがお給仕には出ません。今日は出る筈です。戸袋のある處が私の部屋です。（裏面）（明治四十五年七月七日　彦山より　英彦山櫻馬場の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其十五

九日目が漸く耶馬溪を見てのもどりなのであります。彦山にばかり四日も居ましたから、もう身體を大事に歩かねば成りません。（表面）

右手の白い障子の室に泊る、家は第一樓と稱す。給仕の女中十八、家の娘もおなじく十八、此は光江といふ。（裏面）（明治四十五年七月十三日　豐前國より　耶馬溪耶馬橋の繪ハガキ　中釉友彦宛）

其十六

私は明日四國へ立ちます。（表面）

のぞいてる處をお日にかけます。先生此の種類の女はなんだと思ひます。（裏面）

（明治四十五年七月十八日　別府より　濱脇藥師温泉女湯内部の繪ハガキ　中釉友彦宛）

其十七

潮が引いたら廻廊の側で鶴が雛と共に遊んで居ました。（明治四十五年七月二十六日　宮島より　安藝宮島滿潮廻廊大鳥居遠望の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其十八

いまも引きつづきお酒はおやめに成つてお出のことと存じます。誠に結構のことゝお祝申上げます、私も暑いのにさう困りもしないで居ます。讃岐國も大分見ましたから明日は大阪へ向けて立ちます。此葉書がお手許へとどく頃には私は和歌浦あたりに居るだらうと思ひます。（表面）

おさけを飮んでぶうぶういふ人を、此の毘沙門天のやうにぎつとふみつけて、動かさない豪い人があればいいのですが、どうもさういかないのが遺憾です。御同感ですか。（裏面）（大正元年八月九日　高松市外より　毘沙門天尊像の繪ハガキ　中岫友彦宛）

其十九

今日は東大寺の寶庫へはひつて見ました。(裏面)

先生は坊主は嫌だといふお話でしたが、少しは好きにも成つていただきたいものですね。(表面)(大正元年八月十九日　奈良より　空也上人木像の繪ハガキ　中山友彦宛)

其廿

喉頭の難症も既に全治致し居る由、當地久保博士の診斷に有之候。御喜び被下度願上候。(大正二年三月三十一日　筑前博多より　(福岡百景)名島の風光の繪ハガキ　中山友彦宛)

其廿一

本日縁むすびの神へおまゐり致申候。(大正二年四月十七日　出雲杵築より　(出雲大社)樓門及

中岫靜子宛

其一

廿六日からこの病院へはひりました。廿七日に手術は一遍にすみましたから、さう長くも居らないでいゝだらうと思ひます。今日祇園へ行つたらもう櫻が七分盛ですからどうしても花見をして立たなければなりません。病院から暇が出たら旅行は繼續したいと思ひますが、九州へ行つたら姉さんのお咄のおしげさんの處をお訪ねして見ようかとも思ひます。先方の土地を分るやうにお知らせ願ひます。

尤もこんなに途中で暇どつて大分に旅費にひびきが來て居ますから、都合でどうなるか本當は分りませんが、行ければ行つて見たいやうにも思ひます。只私は御迷惑を掛けることが心苦しいのです。殊に今のやうな身體ですから。（明治四十五年三月末日　京都醫科大學病院より　京都風俗大原女の繪ハガキ　中岫静子宛）

其二

御手紙本日拜受難有奉存候。思ひもかけぬ御贈物御禮の申樣も無之候。一寸腰掛之積にて入院仕候處もう二週間に相成申候。櫻の花の散りつくす頃までおつと辛抱不致ては相叶ひ不申と存じ候。されど毎日外出は自由に候故格別窮屈の思も致不申、一昨日は下賀茂神社附近をぶらつき畑の百姓などと暫く咄込み、昨日はまた花賣の出る白川村へ、それから銀閣寺と散歩を試み申候。此の寺昨日で三度目に有之候。義政の像は國寶故申すまでもなきことながら、名作と感服仕り候。京

はまだ寒さのぬけないのには驚くの外無之候。先は御禮まで。（表面）
明日の日曜は天氣さへよければ嵐山へ參らうかと存じ候。嵯峨には竹の立派なものおほく其質日本第一と申し居り候。（裏面）（明治四十五年四月六日　京都醫科大學醫院より
足利義政公木像（國寶）繪ハガキ　中曲靜子宛）

其　三

今日吉野山を立つて吉野川の左岸下市まで徒步にて參り申候。此地にて有名なる鮨屋の彌助へ一寸休息此の寫眞の亭にて鮎鮨鮎の吸物などたべ申候。皆今年の新鮎に有之候。序を以て鮎のすし少々送らせ申候間御笑味被下度候。遠方へ送るには少し加減有之由申して、小生の手より送る譯には參らず時日は後れ可申候。十日間位受合の品と申候。餘りうまくは候はねど新鮎といふ處を御ほみ（め？）被下候はば幸に有之候。（明治四十五年四月十四日　大和下市より　大和下市釣瓶鮨屋庭園内の亭の繪ハガキ

南部さんへは一泊して御いとま仕り度存じ候處、參り候日に從妹の結婚式に列するためとて、停車場へ急がれ候を途中にて逢ひ申候、一夜は空しく待ち申候に付遂二泊致申候。

其四

佐賀の市に一泊し昨日太宰府を經て福岡に歸着仕り候。太宰府は九州第一の古蹟觀世音寺の佛像の如きは國寶たるもの廿體、小生は左樣のこととは存ぜず參り候て全く一驚を喫し申候。

天拜山は蔭にてきけば大業の山なれど、實際は北條の城山位のものに候。此下に溫泉あり停車場より三町と申候。當地に長く居れば今一度太宰府をたづねて入浴など致度と存じ候。(明治四十五年五月八日 福岡市外より 太宰府天拜山の繪ハガキ 中軸せい子宛)

其　五

今日博多之名物神索麵一折寶來堂より送らせ申候間、御笑味被下度願上候。昨日より電氣で燒く方法をとりて治療をはじめ申候。品物御受納被下候はば一寸御一報被下度候。（表面）

神功皇后三韓より凱旋したる當時の船の檣が其儘化石したる由申候。丁度帆柱の缺けのやうに見える處奇妙に有之候。

こちらは袷着て居る人も有之、小生にてもネルの單衣に羽織着て時には袷が欲しく成る位に有之候。（裏面）（明治四十五年五月十四日　福岡市外より　福岡百景名島の帆柱石の繪ハガキ　中軸せい子宛）

其　六

拜啓。意外の長逗留も既に歸る時期に相成申候に付五日の朝には出發仕度と存居り候。此手紙があなたの御手許に屆く頃は多分豐前耶馬溪方面へ向ひ居ることに可有之候。筑前は昨日まで殆んど雨なく博多附近は田植處か代搔きさへ出來ざる田が澤山に有之候ひしも、今日漸く雨に成り候へばどうか植付は相叶ひ可申か、茨城地方は雨おほかりし由幸のことと存申候。漸くに雨季に入りし有樣故どうやら耶馬溪も駄目に相成不申やと懸念仕り候。

神鳴がお嫌ひなりしことを思ひ出で候に付、昨日見納めに太宰府の地へ參り候序を以て雷除のお守を迎へ申候間一つ封じ申候、御受納被下度候。匇々。（明治四十五年七月二日　福岡市東公園武井氏方より　封書　中軸せい子宛）

其　七

耶馬溪の名物卷柿といふもの一つ差上申候。頗るおもしろきものには候へ共、只

今の時候に成れば虫のつき居候ものも有之候に付、其點は保證仕兼候。只どんな品物なるか位の處御らん被下候ても一興なるべく存申候。旅行も暑くて困却致居候。（明治四十五年七月十六日　豐後別府より　新耶馬溪供養松の繪ハガキ　中岫せい子宛）

中岫つや子宛

其一

此温泉へ二ばん泊つたのです。閑院宮さんが私の隣へお泊りになつたので賑かてした。宮樣は今日おかへり。小生も今日長野へ來ました。（明治四十年六月九日　長野市より　信州淺間温泉全景の繪ハガキ　中岫つや子宛）

其二

其後は御無沙汰致しましたが如何御暮してございますか。私はどうも思はしくなくて困つて居ますが、それでも幾十日以來からむでとれない熱が昨日から急に低く成りました。どうかこれが本當にさがつてくれればいいと願つて居ます。昨年あなたのお宅に御不幸のあつた頃から私は八度からの熱が出たのです。いま思ふとあの時は出て歩いちや惡かつたのでした。私のは咽喉が惡くていけないのですから當分こちらに居ります。(表面)

時々直枝さんへ葉書をあげたものですから、改めてあなたのお母様へはあげませんでした。よろしくいつて下さい。あなたは學校でお習ひに成つたことをよくおぼえてお出でですか。忘れてはいけません。よくおぼえて居た處でいますぐに役に立つのおぢやありませんが、あなたがお母様に成つてそれから十年も立つた時に

大變な役に立ちます。私は方々の家を歩いてつくづくさう思ひます、あなたが習つたことを本當に覺えて居たら立派な女なのですよ。これは私が本氣でいふのですからさう思つてきいて下さい。あなたはうつかりして居てはいけません。來年はいくつですか。思へばあなたの御宅にも近來不運つづきの樣ですが、あなたのお母樣も定めてお力落しのことと存じます。私も承知して居ながら熱が高かつたりすると遂無精に成つてすみません。どうも何處の家でも間の惡い時は仕方がありません。あなたもしつかりしてお母樣のために覺悟なさい。何でも急いぢや駄目ですよ、惡い時には餘計ぢつと辛抱して居なけりや成りません。いつまでも惡いことばかりはありません。私の弟も出征します、（裏面）（大正三年十月一日　福岡市外より　福岡百景多々羅川の大橋の繪ハガキ　中軸つや子宛）

其三

此間は御手紙をありがたう、一寸したことですが間違がありますから申上げます。御手紙には私のお弟子が出征したといふやうにありますが、私のやうな無學な人間にはお弟子などいふものは一人もありません。私には軍人に成つて居る整四郎といふ弟があります。それが今度出征したので、私の弟もと繪はがきへ書いた積です。弟子と弟とでは大變な違です。若し弟と書いたのを弟子と讀んだなら、あなたは女としてもつと注意する習慣をつけねば成りません、私は弟とかけばわかると思つたのです。又私が本當に弟子とかいたなら私も何といふ粗忽な人間だらうかと、只恥入る外はありません。どちらにしてもいいことではないのですから、あの繪葉書を出して見て下さい。私は先生などといはれることが非常に嫌なものですから、遂氣に成つてこんなことを書きました。（表面）

をととしは此の島でおひるをたべました。かなりな鯛一疋を大抵平らげたのです。ことしは疲れてどこへも行きません。

みなさんへよろしくお願致します。
直枝さんから手紙が來て居ます。私から繪葉書をあげたからです。到頭博士を攻め落して、今一度燒いてもらうことに成りました。今日も今から病院へ行つてまたねだれるんです。こちらはなかなか寒く成りました。私のからだは依然としておなじ様です。何だかもどかしい感じも致します。本當に心配してくれる友人からは必ず癒れといつて來ます。
ことしに成つて半ば頃から私にも不思議に歌が出來ます。いま一寸とぎれてますが、まだ作らうと思つてます。世間には私の歌を大變贊成してくれる人もあります。妙なことでせう。(裏面)(大正三年十月十七日　福岡市外より　筑前名島辨天島の風光の繪ハガキ　中柚つや子宛)

其四

いつかの御葉書へ迄返事もあげませんでした。此廿日以來八度以上に昇つた熱がさめないものですから、手紙どころではなかつたのです。だが餘り長く捨てて置くことに成りますから今日は押して書きます。本當の處をいへば病人に成つてからは手紙などは書かせないで貰ふ方が、お見舞を受けるよりも何よりも難有いのです。世間には大分惡い相だがどんな驪梅だか直ぐ書いてよこせなどといふ人があります。私はさういふ人は自分のことばかり考へて居て、人の苦痛などはちつとも構はぬ情ない人と思ひます。然しそれが少くはないのです。只一人私の友人で大儀だらうから決して御返書には及ばないといつて來たものがあります。此は根岸の養生院に居た時のことです。あなたもよくここの處を考へてごらんなさい。どちらが他人に對して思ひやりが有りますか。其位だから其友人は若い身で、しかも婿に行つたのに六かしい町で大變な人望であります。病人も自由勝手な長い手紙でも何でも書ければそりや平氣なものでせう。然し苦しければさうはいきま

せん。大病人のある家へ見舞だといつて行つて、うんと酒を飮むで歸る不所存者もあります。だがこれは世間一般のことで仕方はないのですが、氣のついて居る人は何とか斟酌の方法がある筈なのです。小言ぢやありませんよ人よりいくらでもまさつたおくさんに成るのには、心掛といふものが大事ですから、思ひついたことをあなたの後々の爲にお話するのです。それから弟子と書いたのは弟御の間違だといふことですが、此も一寸したことで大事ですから申します。他人の舍弟に對して弟御などいふのは相手が自分より目下の場合に限ります。だから上へ御の字をつけて見ても足りません。なぜさういふ時に下へ樣といふ字をつけることを知らないのです。それにした處であなたの樣に、私よりも私の弟よりも非常に年下の人からはすこしまづい言ひ方の樣に思はれます。それではどういつたらいいかは能く考へたり、人にきいたりしてごらんなさい。それも立派な學問に成ります。どうもだんだん小言のやうでいけませんが、私はあなたが少しも隱さな

いで間違つたことをそつくりといつて貰つたことが非常にいゝと思ひます。それは誰との間柄でも無闇に隠さないといふことは必要なのです。尤も物に度合といふものがありますから、打ちあけていゝことと、悪いこととがありますけれど、自分に内證の悪いことがないと心が晴々として居ますから、人に不快の感を與へません。どうかさういふ風にして下さい。家庭をつくつても必ず和合して行きます。大切なことです。それから私の歌といふことですが、後にしませう。私のは一寸特殊の人にでなければ受けないやうなものばかりですから、只見てもつまりません。

それぢや今日は疲れて仕方がありませんからこれ丈にします。

序にいまはもう秋の末、すぐに冬の來る時節なんですから、あの頃書く繪葉書に櫻の花の滿開の處などは不似合です。それと何か譯があつてでなければ、遠方の名所の葉書などはいけません、これも御注意下さい。

十一月三日　　　　　　　　　　　　節

つや子様

私も仕方がありません。これだけしか書かないで腹腹がいたく成りました。

（大正三年十一月三日　福岡市外東公園平野旅館より　封書　中轴艶子宛）

其五

其後一度手紙をあげようと思つて居て、遂億劫にして居るもんですから大分後れました。先頃は勝手なことばかり竝べて濟みませんでした。あんな手紙は受取つた人が大抵は不快の念を起すに極つてるのですけれど、熱があつて頭がむしやくしやして居たもんですから筆が飛んだ處へ走つてしまつた樣な譯です。いやなことだと思はれたでせうけれども、そこは不惡ねがひます、近來少し熱がさめましたけれど、寒いものですから氣分のわるいことがおほくて困つて居ます。それに

咽喉はまだ惡いものですから、此の十日か十二日にまた燒灼してもらふことに成つてます。今度燒いても迚ても十分ではないに相違ないのですから、先づ當分はこちらに落つかねばなりません。一ヶ月位の積りで來たのがもう七月目に成つて居ます。どうも病氣其ものの性質が執拗で頑固なんですから仕方がありません。然しこの久保博士は私に對しては非常な同情者で夫人も同樣です。私は垢の他人で居ながらどうしてかうだらうかと疑はれる位であります。そしていつかもいつてあげたかも知れませんが、博士は日本第一の耳鼻咽喉科の先生で同時に世界的に名聲を馳せて居ます。私の咽喉は懸垂喉頭檢査法といつて、寢臺の外へ首を倒につるして、肉眼で喉頭を見て燒くのです。日本で今一人しかこの方法を知つてる人はないのです。專門家が知らないのですから多分上野君も知りますまい。私には看護婦まで注意のしかたが違ふのですから病院では氣樂です。だけれどかう長く成つてはうまくないことばかりでいけません。だが日本一の先生に本當に

大事にされての上では、これからどう成らうと悔はないわけです。大分餘計なことをいひましたけれど、あの此間の手紙で書いてあげた手紙の書き方は其後工夫がつきましたか、御參考のために私が一寸書いて見ませう。あなたに成りかはつて丁寧ないひ方をしなければ成りませんから、私の弟としたのでは私何だか書き憎くていけません。只さういふ場合があつたとして書いて見ることにしませう。

御令弟樣でもなく、御弟御樣でもなく、そんな文字は使用せずにやることにすると大變六かしい樣で却て樂に成ります。「軍人にお成りになつてあの〇〇(地名)かにお出でのお方が今度愈御出征あそばした相でございますが、何と申上げて宜しいのでせうか、全國數ある師團の中から選拔されたのでもありませうし、御自分では定めし喜んでおいでに成つたことだらうと母とも申して居りますが、どんなことがあつても御無事に御歸りに成る樣にと蔭ながら祈つて居ります こちらでは皆々樣どれ程御心配あそばしていらつしやることかと御噂致して居ります。

私方も色々なことばかり續くものですから、遂人様のことも氣に成ると母も申して居ります。」

とこんな風ではどうです。敬語の處は私にはうまく行きません。却てあなたの方がうまい筈です。これ程のことでなくつても、まづこんな鹽梅に十分同情して書いたらいいのでせう。幸に私の弟は無事であちらに居ます。戰には出ないで山東鐵道の守備だつた相です。本人は殘念がつてますが、生きて居た方が私達には結構です。そんなことといつては誠に濟まないことですけれど

前も申上げましたが歌は私のは文字はやさしいのでわかりやすいけれど、それで居て私の歌を理解する人は幾らもありません。それから餘り人に見せようと思ひません。以前はよく人に見せびらかしましたが、今は差控へます、それでもこの七月頃の雜誌が殘つてましたから差上げます。私からは一言も説明はしませんから其積りで見て下さい。一月號には五十首以上出ませうから雜誌を餘計に貰ふこ

とが出來たらあげませう。わかつたら不思議なんですよ。（大正三年十二月四日　福岡東公園平野旅館より　封書　中柚艶子宛）

其六

御手紙拜見しました。私はまた九度ばかりの熱が出ました。二日でひきましたけれどもまだ入院さしてもらふ積りで居ます。只空席がないから半月位待たなくては成らないのでせう。あなたの御手紙前回のともよく出來てるけれども、どうも物のいひ方が同輩も目上も目下も區別がなくて困ります。何よりも第一に念を入れた御愛想がひどくいけないのです。學校出の人は皆こんなぢやないかとも思ひますが、これは書いたら紙十枚位いると思ひますから、只今のからだでは仕方がありません。御目にかかつた時申上げます。只學校から出たばかりの十九や二十の娘には、どんなにしたつて本當の歌などは出來ないのですから、他人に對して

私は歌をよみますとか、歌が出來なくて困りますなどといつてはいけませんよ。非常な勉強をして出來ないなら出來ないもきこえるが、勉強もしないものが出來ないなどいふのは心ある人には笑はれますよ。私も歌をよみ出してからもう十九年の終に成りました。正岡先生に就いてからでも十六七年に成ります。一時はひどく勉強したこともありますが、それでも決して出來さうにもしません。此間のアララギのなども碌なものじやないのです。世間に歌をよむといふ人なら幾等あるか知れやしません。然し私の望むのは本當の藝術としてであります。私には其立派な藝術品でなければ許せないのです。六かしいでせう。

アララギ一月號直接あなたへあげるやうにしました。わからぬ處は橋詰さんにきいて下さい。あの人のところにも届きます。十二月廿一日夜。あたまがいたい。

（大正三年十二月二十一日　福岡市外東公園より　ハガキ　中岫艷子宛）

奥田廩之助、奥田とし子宛

其一

今日使を以て父へ到來品差送り候序に、此間中より案じ居候こと一寸申進め候。

今年の縣會は切迫鬼怒川架橋問題も議題に上り候こと故、無理にも出席するなど申出でんも不知候へ共、先日も長の道中車上に揺らせしため夜分は九度の熱に昇りし程なれば、たとひ何樣のことありとも水戸行などは以ての外と存申候。若し右等のこと申出で候はば醫家の立場として斷然御引とめ被下度、久しき前明治廿九年には些細のことに出縣して、弄花に時を費し今日前に斃るべき祖父のあるを知りつつ荏苒として死去の報の到るまで歸るの心もなかりし程の人なれば、決して

決して引きとめて水戸へは遣すまじく何卒只今より十分御心懸被成下度願上候。
十月廿日夜。（明治××年十月二十日　封書　奥田康之助とし子二人宛）

其　二

小生よりの封狀二通屆き申候や。

拜啓　過日の御葉書正に落手仕候。御壯健の由先以て何よりの儀と存候。順次郎よりの手紙にも御壯健の旨御通知に接し候由書添有之候。
戰地も內地の三月末位の陽氣に候由十日程前に差出し候狀にて承知仕候。內地は麥の穗漸く出揃ひ梨の花少しく過ぎ申候。百姓はいま肥料の買入時にて、田は代掻きに忙しく薩摩芋の苗など餘程延び申候。桑の木茶の木芽をふき、四圍の樹木も皆綠しはじめ申候。
整四郎もいよいよ去る廿九日東京出發弘前に向ひ申候。尤も本隊は後れ候由、同

人は單獨にて參り候。とし子はまだ在宅なりしためはな子も同道小山驛まで出向き候て面會せしめ候。彼等は相見ざること四年に相成候。弘前にて一ヶ月滯在の上目的地に向ふ由本人大喜悅に候。

とし子は廿九日下舘一泊卅日歸宅候。小生方に在留中松代は驚くばかり智慧づき申候。オンブ持つて來いといへば帶を持ち來り候。オヂイさんどれといへば小生の父をさし、オバアさんはといへば小生の母をさし候。

小生宅に十五ばかりの男の子をおき候が、松代大氣にいりにて文次郞はどれといへば眞直に同人のもとへ參り候。今はまだきくを得ざれど耳は相應に發達いたし候。それに身體が丈夫なれば、風邪も引かず一刻も靜止すること無之候。尤も可笑しきは自分よりも大きな小供を「居タア」などとやり申候のみならず、近よりて抱かむと致候、大概の小供は泣いて仕舞候。それをまた松代が平氣で追ひ掛け候、小山までの汽車中彼の喜びは非常に候ひき。今日にては「今日ハ」も出來候、

これは頭をぽくりとさげ候。「ォ重ね」も出來いろいろ出來申候。とし子も此次は士用干頃に來る由に候へば、その頃は餘程面白からむと存候。當方各自皆無事御安心願上候。早々。

今日とし子宛の御書狀着奥田へ廻し申候。（明治三十八年五月一日　自宅より　封書封筒なし（戰地宛？）　奥田庫之助宛）

其　三

昨日今日（編者曰、「昨日と今日」の意ならん）戰地より其許あての郵便二通屆き申候間附箋して相送り申候。隊よりの手紙はまだ屆き不申候へば、そなたより何書差出候ては如何に候や。今日小生あて同じく戰地より郵便來候。戰地の模樣など詳しく認めあり候。無事なれば案ずるに不及と有之候。此次の戰爭迄には隨分時日を要するならむと申候。出發手當をそなたへ送り候ものまだ屆かずやなど有之候。先

は用事まで申入候。隊へ伺書は早速差出さるべく候。（明治卅八年五月二日　自宅より
ハガキ　奥田とし子宛）

其四

戰地よりの書狀廻送いたし候。そなたを案じ候樣子每回の手紙に知れ申候。心配なき由申送らるべく候。先日も小生より詳しく申送り候。海苔は一包にしたる所重過ぎ候ため、二包にして手紙は別にして書留にて送り申候。奥田の兄さん手紙を新聞へ出さるる由、兄さんは漢學は出來るだらうが、文章は極下手である故うまくやればよいがと存候。小生へ送られたる分は小生より新聞へ送り度候。兄さんのもとへの手紙も其うち小生へ貸與相成度候。

下舘へは三服おくり申候。そなたへは二週間たたねば送り難く候。

五月廿日　　節

としどの

手當金はそのうち屆き候ことと存候。此手紙にては最早屆きし頃ならむと有之候。如何に候や。戰地へ手紙書き候時は小生の許へ送らるべく候。或は本家から送り候も宜しく候。戰地へ郵便にて何か送るにはピッタリとした見てくれの小さなものにて、一つが三錢切手五六枚にて足り候だけのものを程度といたすべく候。幾包にもいたし候はば二三日づつ隔てて出し候はば宜しからむと存候。そなたの手紙言文一致はよほど注意せざれば宜しからず他人へは認め申間敷候。

（明治三十八年五月二十日　自宅より　封書（封筒なし）奥田とし子宛）

其五

六月第壹號　　海苔ハ屆キ候ヤ

拜啓。五月分第三號第四號正ニ拜見仕候。小生ハ去ル五月廿二日出立、翌日東京

ヨリ汽船ニテ房州ノ北端ナル清澄山ニ登リ同山ノ農科大學演習林ニテ炭燒ノコトニ付キ少シク研究スル所アリ。滯留一週日ニシテ下山房州ノ海岸ヲ周遊シ漸ク九日ニ歸宅仕候。今年ハ蠶ハ上出來ニテ只今上簇期ニテ桑葉ノ賣買盛ニ行ハレ價格ノ暴騰驚ク程ニ候。一駄ハ枝共ニ三拾六貫目ニ候ガ三圓四圓ヲ非常ノ相場ト思ヒシニ、七圓八圓トイフ聲ヲモ聞クニ至リ候。昨年秋蠶ノ當リニテ幾分今春ノ發育ヲ妨ゲ候上ニ、今春ハ蠶種ノ掃キ立テ多キニ氣候ノ順良ナリシヲ以テ、蠶兒ノ發育非常ニ佳ナルニ反シ、桑ハ霜害等ノタメニ蠶兒ニ伴フ能ハズ、隨テ拂底ヲ告ゲタルニ出デシナリ。平均相場トイヘバ大抵二圓或ハ二圓五拾錢ナラン、五圓六圓トイヒテハ迚テモ割ニハ合ハズ、サリトテ今二日三日ニテ上簇スルモノヲ捨テル譯ニモ行カズ。泣ク泣クノ始末ナリ。但シ今年ノ如キハ珍ラシク候。

麥ハ今刈入レ時ニテ田植モ近ヅキ候。房州ニテハ小生ノ旅中ニ盛ンニ田ヲ植エツツアリシヲ見申候。當地ハ今年ハ茶ノ生葉ハ賣レ行キ惡シクコレハ日干製ノ叶ハ

ザルニヨル。小生宅ナドニテモ小生旅中隨分ノ騷ギニテ製シ上ゲ候由ニ候。只今モマダ片付キ不申候。

モハヤ梅雨期ニ入リ候タメ雨天ツヅキニテ忙シサニ庭モ掃カザレバ草ナド生ヒ申候。

青梅ハクフベク、枇杷モイロヅキソメ、柘榴ノ花ハ美シク、葡萄ノ花ハ目ニ立タヌヤウニサキ申候。蜜柑ノ花ハ散リテ花菖蒲ハコレカラニ候。

奧田ニテモ松代ハソノ後草履ナド穿キテ面白クナリシ由ニ候。トシ子ハ別ニ苦ニヤミテ身體ヲ害フ程ノコトハアルマジクト存ゼラレ候。土用干ノコロハマタ來宅ノ筈ニ候。

御書二通共トシ子ノ許ヘ送リ申候。其後ノ繪葉書モ慥ニ拜受仕リ候。コマゴマトノ日記御手數ノ程推察イタシ候、サレバ若シ今後再ビ御記シノ時ハ追日ナラズトモ却テ面白カリシ記事ノミヲ望ミ申候。多少ノ骨折ハ歸國ノ上ノ樂ミナラント存

候。
整四郎マダ渡海イタサズ、イヅレ近日ナランカト思ヒ候。（明治卅八年六月十四日　自宅より　封書　奥田廉之助宛）

其六

拜啓。其後は御消息も不承候へ共不相變御多忙の儀と奉推察候。偖而折入つて御願仕度候は、母卅日前より發病最初は風邪位に心得居候處、格別の苦痛はなきも今日にいたるまで體力一向恢復不仕父は六十日以上も不在、それやこれやにて悲觀致廉も可有之と存ぜられ候。此二三日來從前の主任醫中舳氏の外、貴下の御診察を請ひたき旨申居候。御多忙の儀甚だ恐入候へ共、何とか御工夫の上一度御光來被成下度御懇願申上候。御都合（の、脱？）程御一報下され度候。匆々。（明治四十二年四月廿六日　自宅より　封書　奥田廉之助宛）

其七

拜啓。御書狀唯今落手仕り候。例の件無滯相濟候由、先日とし子よりも申越され候に付、承知致し候ことに候が、先以て恐悅至極に存じ候。とし子よりは全負擔一萬圓と申候へども將來四五萬のものに相成可申、土地殊に祖先傳來の緣故も有之候ことなれば、一時の苦痛は素よりの事に候へ共今年は或は貴家のために空前絕後の大豐年たるべく存ぜられ候。仰の如く先年來の開墾事業漸次其步を進め候時は、小生の地方などには比肩すべきもの少き田地持に有之候。とし子の臥牀もさることながら、將來のためには心丈夫に持ち候て可然と存申候。まだ物に馴れ不申候故なれど、こなたの母などは今少し我慢强く候。前途に光明あり之に向つて身心を勞すること何とも申樣なき果報者に可有之候。それにしても畜の收入には喫驚仕り候。又谷田具銀行の處置も心地よき次第信用の一大財產たるは今更感

ぜられ申候。こなた母の喜び非常のものに有之候。先は小生も喜悦の餘り不取敢如此に有之候。匆々。（明治四十三年九月十五日　自宅より　封書　奥田康之助宛）

藤倉新吉宛

其一

雪ノ日ニ家ヲ立チ出ヅ。小山カラ上野ヘノ汽車ノ中ニ京ノ女アリ曰ク、舞子ハンハホンマニ綺麗デオマス、（氣ノ毒ニモ小生ハマダ見マセン）曰ク疏水疏水チフイヤハリマスガ、闇ラウテ闇ラウテ辛ドウテ辛ドウテドモナリマヘンガナ、ホンマニ。（此ハ有名ナ疏水ノ隧道ノ舟ガイヤダトイフコトナリ）

十日夜九時新橋ヲ立ツ。名古屋以西ハ菜ノ花ヲモテ飾ラレタリ。祇園ノ糸ザクラ今サカリ、早速名物ノ芋棒ヲクフ、芋棒知ラヌモノハ京ヲ知ラヌモノトノコトナリ。十二日朝。（明治四十一年四月十二日　京都五條森方より　ハガキ　藤倉新吉宛）

其　二

我がこひは鮨の山葵の鼻ひびき泣きもなかぬに泪ながさむ
かも川の大はしのうへに牛鳴くをけさききしかば今宵逢ひにけり
此二首一力の大廣間にて妓へ書いてやる。わかりまへんといふ。余曰くわかつたら大變だ。
あらし山に雨後の花を見て妓竹子にあたふ。
時じくに散り來る花の笹の葉につきてはとれぬ思ひぞわがする

（明治四十一年四月十五日　京都五條旅舍より　ハガキ　藤倉新吉宛）

其三

京日記

十一日。午前十一時七條停車場につく。東山に遊ぶ。名物芋棒をくふ。夜虛子を賀茂川河畔の旅舍に訪ふ。橋上の人織るが如し。
十二日。午後三時より深更まで祇園吉花に遊ぶ。先便報ずる處の如し。
十三日。夜都踊を見て祇園一力に遊ぶ。老妓來吉に逢ふ。此夜一力の樓上に雜魚寐す。
十四日。午後二時より再び一力に遊ぶ。藝子舞子前日と大差なし。來るもの、老妓來吉、及び吉代、竹子、喜子福、舞子は千賀菊、松勇、おふく、岸勇、仲居はおとよさん、おいまさん、お梅さん、おツヤさん、來吉は豪い婆さんなり。喜子

福、おふく、岸勇、千賀菊、おいまさんと庭で鬼ごつこをする。牡丹櫻の風に鱗るの趣あり。宴はてて祇園の夜櫻を見る。來吉、おツヤさん、吉代同道、余はおふく、岸勇に手を引かる。二人はいづれも年十二。岸勇の美おどろくに堪へたり。二人左右より曰く、ナンゾイイモンカフトクレヤス。卽ち頭大の風船玉を買ふ。群集ぞろぞろと余等のあとを跟いて來る。（明治四十一年四月十五日　京都三條萬屋別莊より　ハガキ二枚つゞき　藤倉新吉宛）

其　四

けさ此を書いて居ると雉子が頻りに鳴く。此所は谷になつてゐるから日はまだ當らぬが、吉野の町と如意輪寺道の上部には菜の花やらさくらやらに朝日が一杯にさし掛けて居る。此から奈良へ行く。十八日朝。（明治四十一年四月十八日　吉野山温泉より　ハガキ　藤倉新吉宛）

（編者曰、裏には吉野附近の見取圖を長塚氏自ら描き說明を施しあり）

其　五

吉野ヲ立ツテ多武峰、初瀨ヘ行カズ、コンナ所ヘソレテ今義經千本櫻ノ鮨屋ヘヨッテ鮎鮓ヲシタタカタベタ所ナリ。オ里ハンノ姿見ノ井戶ノ側デ此ノ葉書ヲカク。維盛ノ黑髮塚ナド庭內ニアリ。オ里ハンノニイサンノ權太ハンノ手植ノ梅アリ。十八日。（明治四十一年四月十八日　和州下市町鮓屋より　ハガキ　藤倉新吉宛）
（編者曰、裏には吉野附近の見取圖を長塚氏自ら描き說明を施しあり）

其　六

せむぐりせむぐり步きよつたら足がきつう痛みよる。そやけどなあんたはんほむまに奈良を見んことに建築やとてな、佛畫やとてな、彫刻やとてな、よう物がい

はれへんさかいに一遍なとお出でやす　藤くらはむほんまにそやおまへんかと誰かが申候。匆々。四月十八日夜。（明治四十一年四月十八日　奈良より　ハガキ　藤倉新吉宛）

其七

生駒一郡ヲ除イテハ日本ニ建築物ナシ。

いまのならは以前の左京の一小部分に不過、昨日大極殿の趾へ行つて見申候處、當時の規模の雄大なりしに驚嘆致し候。今の東大寺でも領域の大なること想像以上に候。西の京の藥師寺でも今は小さけれど、素は八町四方の境内なりし由、唐招提寺の講堂は平城宮の建物の一部に候。奈良は一度見ねば生れた甲斐はなしと存じ候。（明治四十一年四月二十日　奈良より　ハガキ　藤倉新吉宛）

（編者曰、尚一枚奈良にて出したるハガキあり。それには「唐招提寺梵網會の團扇」として略畫な描き説明を施しあり）

其八

いくら書いても葉書の盡きざるに閉口致し候。

こゝまで書いた所へ、西陣の問屋で此度知合になつた人が來て連れ出して島原へはひり込み候。尤も明日道中を見る準備に候。寢るのは西陣へ來てね申候。廿一日夜。（明治四十一年四月二十一日　西陣より　ヘカキ　藤倉新吉宛）

其九

（編者曰、上部に櫻の木二三本の略畫を長塚氏自ら描く）「コレハ何デヤ。「サクラデヤ「サクラナラ木デヤ此ハ草デヤラウ「草ノヤウデモサクラデヤ「サクラナラドコノサクラデヤ「御室ノ櫻デヤ今サカリデヤ「ドンナサクラデヤ「コンナ櫻デヤ地面ニツイテサイテルノデヤ御室ノサクラハ浮世繪ノヤウジヤ「浮世繪ハ歌麿カ何デヤ「浮

世繪デモソンナ處ヂヤナイ又兵衞ヂヤ。

又兵衞に逢ひぬ御室の花盛　蕪　村

（明治四十一年四月二十二日　京都より　ハガキ　藤倉新吉宛）

其　十

明日ハ太夫ノ道中ダ。今日ノ簪ノガノビタノダ。

（編者曰、上部に神輿渡御の畧畫を長塚氏自ら描く）朝東寺の雜沓を見て、御室の花を見て、引つ返して伏見稻荷の神輿の渡御を見申候。今日は稻荷樣が御旅所へ御出に成る日に候。みこしの華美絶無ならむ。

ホイト、ホイト、ホイト、ホイト、ホイト、ホイト、ホイト、

と口早に叫びながら舁ぎ行く處みものに候。

コンナニミルモノガオホクテハツカレテシマフ。（明治四十一年四月二十二日　京都より

ハガキ　藤倉新吉宛）

其十一

（編者曰、上部に鰐口の畧畫を長塚氏自ら描く）よくわからぬがこむな形と存候。島原から歸りに壬生寺の壬生念佛を見る。かういふ鰐口を叩いて、高い舞臺で無言の狂言をやる。皆假面をかぶつて振事の奇妙なる一寸ひよつとこにも似て居り候。島原も壬生寺も外へ出れば目の及ぶ限り菜の花にて目もさむる計りに候。廿二日夜。

（明治四十一年四月二十二日　京都より　ハガキ　藤倉新吉宛）

其十二

太夫ガ出來タ、三枚歯ノ塗下駄デオ練ノトコロダ。

（編者曰、爰に太夫の繪を長塚氏自ら描く）

島原の角屋（スミ）は振つたものに候。襖は皆應擧・岸駒・蕪村づくめに候。仲居のおせいさ（以下數字不明）

其十三

（編者曰、上部に繪馬を長塚氏自ら描く）妙ナモノガ出來タ。コレデモ繪馬ダ、今日ハ東寺ノ雜沓驚クバカリデアツタ。大賓（マツリ？）ニ彷彿タリダ。古着店ノ多イノニ喫驚シタ。コレハ百姓ガ群集スルカラダ。其百姓ガ此繪馬ヲ見テドレガ今年ノダヤレ尾ガ短カイ長イ。尻ガコケテルドウシテルト騷グ。馬ノ形デ今年ノ豐凶ヲトスノダ相ダ。東寺ノ宏大ナ建物ハ目的物デナクテ一間四方位ナ繪馬堂ヘ來ル。堂ハ繪馬ガ三枚シカナクテ今日ダケヒラクノダ相ダ。

（編者曰、右二通アララギ第八卷第六號長塚節追悼號所載藤倉新吉氏に宛たる繪端書の寫眞版より採錄）

松山貫道宛

其　一

久しく御目にもかゝりませんが、お變りも無之と推察致します。私もこの十四日から開かれる筈の結城町の共進會を是非見に參りたいと思ひますが、其當時は定めし御在宿だらうかと思ひますが、如何でございます。一度お訪ね致したい願であります。近頃私は農作物などを見るのが好きに成りました。何でも眞實でなければ興を惹きません。

このへはがきの砂沼の湖水は、私が十一の春から、十五の春まで、日夕親しんだ

處であります。（大正二年十一月五日　岡田村より　松山貫道宛）

其　二

御在宅ならば、先日の葉書へ御返事があつたことと思ひます。私はそれを待つ暇なく上京しました。必ずお目にかかれるやうに思つて居ます。

文展を出て、私は博物館へ行きました。一つは眼を洗ふ程の積りであります。二三日中に歸國して共進會を見に行きます。

少々用事がありまして、七日に上京、今日やうやく文展を見ました。この（葉書の）「寒林幽居」の如きはなかなかの評判ですが、私の目には、街氣充滿した低級な作品としか映じません。一體が南畫といふものに就ては、昨今兩年の旅行から、考が變つて、價値の一段に非常な疑を持つ様に成つたのですが、翠雲の師の田崎草雲には氣品といふ大なる特長がありました。さうして高弟たる翠雲は、甚しく

素行の修らぬ人であります。然しながら先輩の既に凋落しつくさうとして居るいまの世には、蕩兒かれが如きも名を成すのであります（大正二年十一月十一日　東京郡須館より　松山貫道宛）

其　三

此間は御葉書を難有う存じます。入院してからもう二ヶ月も過ぎて、今日から溫度表が三枚日に成りました。

遂近頃に成つてからしみじみと人の情もうれしく、人の爲め自分のため、いろいろと考へさせられることがあります。私は從來幾らか人の心理に就いて理解があるやうに思つて居たのでありましたが、それはまるで間違つて居たといふことを漸く知りました。實は一つもわかりはしなかつたのです。さうして同時に自ら耻づることもあります。

こんなことでは決して何をいふのかおわかりには成りますまいが、今はこれだけを申上げて置きます。是非お目にかかりたいと思つて居ることがありますが、當分は望が叶ひますまい。

事件というても、非常に小さなことですが、見やうによつては、決して輕々しい譯ではなく、困つて居るものがあります。私に關聯して居ますから、私も心を勞します。それが直接あなたにお話しすれば、大變いい結果を生ずることと信ずるのですが、今は其機運が熟さないのだから、仕方がないのでせう。もうさう急速を要する問題でもありませんから、九州から歸つたら、御在否を伺つた上おたづね致すことに致します。

私はこれから九州へ參ります、三度目です。（大正三年五月十五日　橋田病院より　松山留道宛）

其四

拜啓。私こと一昨日歸鄉、直ちに御葉書拜誦仕り候。難有奉存候。倩而御心配被成下候件に就いては、近來にいたり、殊の外複雜に相成、是非もなき次第と觀念仕り候ことにも有之、隨而貴宅御訪問の儀も心には懸り居り候へども一時は中止仕度、思案の末先便にて申上候ことに有之候。然るところ御葉書に接し、深厚の御同情感謝の外無之、一應は御高諭も拜聽仕り候て、眞相を誤らざる工夫仕度と心づき申候に付、御申聞の如く、三日には必ず光明寺まで參上可仕、御挨拶までに右申すすめ候。頓首。

追而昨日は疲憊を感じて筆從はず、幾度か書きさすて申候。今日漸く認め終申候。書中禮を失し申候段は不惡御許容被成下度候。

尚此狀時間の切迫を感じ申候に付、電報にて御報申上置候。（大正三年六月一日　岡田村より　松山貫道宛）

廿五

病院へはひつてからもう四十四日目です。まだ少しは居るだらうと思ひますが、實は暑いうちを日向へいつて、青島の海水浴場でおくらうと思つたのでした。それがいつに成るかわからなく成りました　日向は一端を汽車で通過した丈で、ほんとうに見ません。素朴でいい處だといひます。宮崎の町にはあなたのお近くから出た武井準君が居ます。私知人で、是非來いといつてくれます。

どこも近年にない暑さださうでしたが、病院の中もかなりにひどいことでした。何せよむかしからの千代の松原なんですから、砂が燒けます。ここでは蟬の聲をききません。また到底草深い山の中に見るやうな潤澤ある白百合の花もありません。然し夾竹桃の花が紅白共に見ごとにさいてます。この大學の構内にも、蒙古

軍を防いだ石壘のあとといふのがここだけは涼しい松山の中にあります。私の病氣は幾らかいいのだ相です。然しまだ痛みがとれませんから、自分にてどうなのかわからないでゐます。唯現在に於ては、私は日本の内でどこへ行つたとて、ここで久保博士の待遇の如き厚い同情をうけることは出來ません。どうしてかうだらうかと自分にも不審な位です。博士は世界的に名聲を馳せて居る人で、私の咽喉を燒く人は、この人以外に一人もありません。家を出て既に六十日、まだ歸期はしかとわかりません。（大正三年八月三日　福岡大學醫院西二ノ一より　松山貫道宛）

其　六

御手紙をいただいて、それなりに申譯もありません。日向へ來てから、一通差上げようと思つてたのですが、來る匆々意外の大時化が五日間も續いて、食物にも

困る次第、志した青島の勝地は泊る宿にも窮して、日向は私に幸な所ではなかつたのです。それで一つには、こんな南の方まで來て見ました。昨日鵜戸を立つて來て、思ひがけぬ景色に出あひましたから、今少し南へ行つて、十四五日頃まで に福岡へもどらうと思つてをます。歸國はどうしても十月になりませう。其節は一度是非御訪ねしたいと思ひますが、まだ何分にも熱がありますから、旅行も舟車の便がなければ全くいけません。お目にかかつて、いろいろおはなし申上げたいのは山々です。盃には例のお宅へお出でのやう承りましたが、其盃にこの葉書を差上るのも偶然とはいひ、何かの緣でせう。

（鵜戸神宮は）石垣の下は怒濤が巖を嚙んで居ます。日向の人は此神宮を非常に尊信してゐます。鳥居の內が窟で、そこに社殿が建てられてあります。鸕鷀草葺不合尊がこの窟で生れたといふ傳說から神に祭つたのです。いい處でした。（大正三年九月三日　日向油津より　松山貫道宛）

其　七

海から見る鵜戸の窟（絵葉書）をお目にかけます。

私も最早博多へもどる積で居ます。連日のしけで困りましたが、漁さへあれば、日向はいい處です。滯在となると一日五十錢で、うんと生がたべられます。しかし私はあまりいい時期でないのに來ました。鵜戸で丈は十分魚がたべられました。

（大正三年九月三日　日向青島より　松山貫道宛）

其　八

岩窟の中に、かういふお宮が建てられてあります。鵜戸の鼻といつて、其沖は舟行の難處ときこえて居ます。私は昨日小蒸汽船で通りましたが、連日の時化なので非常に困りました。

此からまた暫くの間御無沙汰致します。（大正三年九月九日　日向青島より　松山貫道宛）

倉田龍次郎宛

其一

拜啓。過日東蔣田高木氏方にて一寸御願申上候陸稻の種子、一は尾張糯と呼ぶもの、一は戰勝陸稻と命名致候ものの由、望む所は後者に候へども、前者も少々御取寄下され度候。早々。（明治三十九年四月廿一日　自宅より　ハガキ　倉田龍次郎宛）

其二

御参考にも相成可申と綠肥として栽培致候大豆一株差進め申候。目方は二百九十匁有之、更に大なるものは三百二十匁に達し申候。一昨年差進め候ものは、一株百匁にて其大なるに愕き申候ひしが、今年は百匁以上のものは無數に有之、一反歩六百七十貫匁を算し申候。綠肥としての大豆の栽培も少し見當つき申候。其内御目にかかり申度存居候。匆々。（大正二年（推定）八月三十一日　自宅より　封書　倉田龍次郎宛）

其　三

拜啓。兼ねて御願申上置候竹林種子、使の者何時差上候てもよろしく候や　今年は綠肥用豌豆の蒔付に意外の時日を要し、まだ兩三日はかかり可申見込、尤も麥は今秋僅に一反二畝歩に限り申候へば、數日の内に季節を外さず蒔付相濟可申候。十年前の炭燒の名殘只今も粉炭非常に多く候へば、麥蒔の際堆肥へ混合致申度、如何の結果を來し候かを見んと欲し候。

日外申上候青莢豌豆は、役所へ御とどけ可申候や、同時に大豆もあの外澤山有之候。十月廿四日夜。（大正二年十月二十四日　自宅より　ハガキ　倉田龍次郎宛）

金井氏宛

其一

拜啓。過日は筑前へあて御見舞下され難有奉存候。扨而小生其後も別に異狀も無之候へば漸次本復のことと相信じ申候。一昨日ふと便宜を得て大社へ參拜仕り候。鐵道の開通せる今日、京都よりは一日にて參り得ることに有之、團體など續々入り込み申候。旅中意を盡さず、先は右まで申進め候。（大正二年四月十七日　出雲大社よ

其　二

此間中の御手紙により早速差上可申反物代遂相後れ申候。七八圓とのことなれど兎に角十圓丈振出し申候。これにて可然樣御取計らひ相願候。帶の件はそなたの御申越通り致可申とのことに有之候。小生も近日來風邪引のため大事には無之候へ共、餘り他行せぬことに致居候。遠藤樣へも遂御無沙汰に相成申候。皆々樣へ宜敷御願申候。匆々。（大正二年八月三十一日　自宅より　封書　金井はな子宛）

其　三

御送附の反物は正に落手仕候。今は何事も不申早速仕立申候。次に墓參の件はそなたへ參り時日も淺き故、差しひかへ候て可然と父上も申され

候。自分に於て左樣に相考申候。

自分も久しき以前風氣と心得居候處、萬事懶く二ヶ月餘も手紙書き不申、何方へも疎音に相成居候。くれぐれも内原へ參ることは事情も存在せること故、當分は見合せ後日折を見てのことに致さるべく候。（大正二年九月廿八日　自宅より　封書　金井はな子宛）

其　四

拜啓。此程は流產とのこと何とも遺憾の次第に存申候。冬の出產には母もそなたをうみて以來非常に煩ひ、今日本復せざるも其爲めと申候へば、あとは申すまでも無きことながら非常の御注意可然候。外より手當等と御家内中共ぬかりは無之筈故、何も申すことは無之候へども、自分の心持にて聊も無理すまじく、此點くれぐれも母上よりも申いて候。只今頃は身體の自由も出で來て隨分あぶなき節と

存申候。小生も一度遠藤樣へ參らねば濟まぬことに候へども、近來毎日八度或は其以上も發熱午後は寢て居る樣の次第、疾に鎌倉あたりへ參らねばならぬ筈のものを、父上の御病氣かたがた非常に後れ後れに相成申候。小生も此間中も奧田へ東京の學士を呼び候際見て貰ひ候處、格別のことはなしとのことなれど、熱はありてそのためか大儀に有之候。格別のことなしと申す故、殊更大切にせねば成らずと存申候。無理は出來不申候故遂左野へも參り不申候。其内其内と存居候ひしため、まだ弔みの狀も差上不申候　遠藤樣御令嗣御つとめに候ならば、可然御とりなし被下度賴み入れ申候。

尙奧田へあて毎々の御厚志、御兩親樣等の御心づきに無之ては、そなた一人にては及ぶまじきこと御一同樣へもよろしくそなたより御傳へ被下度候。匆々　（大正二年十二月十四日　自宅より　封書　金井はな子宛）

其五

毎々の御手紙に候處、小生去月下旬歸宅後非常に工合宜しからず、在京中は廿日間位に一貫匁も體量を增し候處、歸宅後すつかり減少して上京前と容態少しの變りもなく相成申候。三四日中に伊豆の伊東へ轉地の筈に候故、此度は少し氣長に療養可致候。母は六十日來臥床、近日聊か宜しけれどまだ駄目に候　中軸の病室へ參り注射して貰ふことに相成居り候へば、暫の內家には誰も居らぬことに成可申候。下妻の祖母に留守を賴み、親子三人皆みじめに有之候。小生は手紙書くこと非常に苦痛に候故、今後は容易に音信致す間敷、工合よければ手紙も書き可申候へども、工合惡ければ此位困ること無之候。病人へ見舞は忝く候へども手紙の返事を必ず書けと申すは病人を苦しめることに成り申候。それ故返事なき時は工合が惡いと御斷定なさるべく、親類の義理など當分何處へも御免蒙るべく候。內

原の母人去る六日中氣に罹り候に、遂に死亡、今日が葬式に候も誰も參り兼ね候。自分等に對してそなたのこゝろづかひは誠に感謝の外なけれど、右の次第故承知ありたく、何よりも皆々様へ對して大事大事と御つとめ可有之希望致候。二月廿七日夜。（大正三年二月廿七日　自宅より　封書　金井はな子宛）

其　六

こちらも大變冷やかに相成、昨日などは雨故袷きるものも見え申候。そなたは其後達者にて御暮しのことと存じ候。小生は六月に參り候儘なればゞ、大分の日數に相成候。此間は日向地方へ參り候へども、折惡しく風雨の季節にて失敗致し候。其爲め却て身體に疲勞を覺え困り居り候が、昨日あたりより急に恢復のしるし見え申候。咽喉はまだ惡しく候に付當分手當を受け申度心組に候。皆様へよろしく御傳へ被下度候。十月一日。（表面）

ここが岩見重太郎の生れた處に候。敵討は丹後の天の橋立に候。（繪葉書の說明）繁四郎出征のこと昨日順次郎の書信にて承知致候。小生も是非一日逢つて置き度候へども、門司あたりからの乘船に非れば叶ひ不申候。店員の岡部氏へは何か書ければ書いてあげたく候へども、出來兼ね候も知れず候に付、そなたよりよろしく願ひ候　直接ならばいくらでも話も有之候へど、さう書くことは到底出來不申候。（裏面）（大正三年十月一日　福岡市外大學通平野旅館より　福岡百景名島の風光繪ハガキ　金井はな子宛）

安塚千春宛

其一

拜啓。過般は御見舞に接し只管難有奉存候。入院以來既に五十日に餘り申候へば半ばは過ぎ候ことと存候へども如何に候べきか。食餌のためか血色は在郷當時よりも宜敷見かけには病人らしき處も無之生死をわかぬ患者とは知らぬ人には心づき申さぬことと存申候。唾を嚥むに咽喉にいたみを感ずるは依然たる有樣なれば多少心もとなくも存ぜられ申候。東京はいま以ての外此の病に宜しからぬ由に候へ共、此處動き難ければ何とも致兼候。九州に參る便宜も有之故心はあせり候へども今少しの辛抱致さでは相叶ひ申間敷候。ここへ參りて小說の趣向など浮び申候へどまだ手もつけ申さず候。されど歌は不思議に出來申候。五十日に只一回ながら夜の一時過ぎまでふかし申候こと有之候。いばらき抔へ發表致可申かとも考居候。病院と申候ても以前は有名なる汁粉屋に候へば庭は可なりに贅澤にて思ひきつて大きな石など橫はり居候。されど今は花は更になく只一つ凍れるが如くして

生命を保ち居候ものゝ日に疎き山茶花に候ひしが、此も一昨日の雨に散り申候。昨日おつと見申候に半開の花只一つ低き枝に殘り居り候。此の花我が心を惹き我が心をいたましめわれに材料を借し申候。乍末筆橋詰氏へも暫らく御疎遠に打過ぎ申候。筆執ること懶く候ゆゑ如何とも致難く候。(明治四十五年一月廿八日　根岸養生院より封書　安塚千春宛)

其　二

甚だ申兼ますが二月十六日の讀賣新聞を頂戴致す譯には參りますまいか。學校に必ずあることと存じます。給仕が迷惑とは思ひますが何卒して御願申升。念のため申上ますが鷗外さんの譯の寂しき人々の第一回の分が載つて居るので有升。學校では格別保存の必要も無いだらうと思ひますが。それから此間中から三冊四冊と雜誌が一遍に來ますので餘程骨折つて期日に後れぬ工夫をして居ます。處が此

度の白樺、中央公論、早稻田文學の三つは暇があつても通讀するのには少々日間取れました。早稻田文學の方は到頭おくれます。此も念のため申上げ置升。（明治四十×年五月廿五日　自宅より使便　安塚千春宛）

三重吉の赤い鳥も見ました。此は古いホトトギスにある同人の出世作の千鳥を見ると、油が抜けてる様に見えます。千鳥は緊張した名篇でありました。青木健作といふ人の虻抔と共にホトトギスでの骨折つた作品でありますす。千鳥は『千代紙』の中に出て居ます。千代紙も是非會で買つて頂きたい。生田長江著新叙景文範。上田敏譯アンドレエフの心。それから雜誌の方へ文章世界を加へたらどうです。

其　三

一昨日上京今夕歸宅一遍に澤山の雜誌が來て居るのに喫驚卽席四册だけの通讀御

返し申します。三田文學と露西亞文學とは最終に願ます。此れへは何とも書き込みません。月日をしかと書き込まぬ人がありますが不都合であると思ひます。小生は廿一日に復上京しますから書籍は數日間御あづかりを願升。（年不詳四月廿日夜自宅より使便　安塚千春宛）

其　四

七日に一寸他出致します。書物をおまはしのことはお見合せを願ひます　小生の希望からいひますと雜誌の閲覽日數は極短くても宜しいのですが、中身のあるものは從來三日としてあつたものを五日位にして欲しいと思ひます。如何ですか。（年不詳七月五日、使便　安塚千春宛）

爲櫻の編輯は何日締切にや、十七八日頃で間に合ふならば小生一寸文章談をものすべく候。書中もらしましたが叙景文範難有存升。

其五

御葉書が今朝とどきました。本當に思ひ掛けないことです。私も今年の夏は暑いのに困りましたが朝顔が咲き出してから幾分凌ぎよく成りました。私も五十日になりますから三四日中に退院します。然し難澁な病氣ですから自分にはよくも感じませんが大變よく成つて居る相です。一度日向の海邊へ行きたいと思つて居るのです。そしても一度久保博士に手術をしてもらつて歸國するのです。あなたも大切に御願ひ致ます。（大正三年八月六日　福岡大學醫院より　ハガキ　安塚千春宛）

其六

けふの午後には此の小さな島々の間を縫うて行く小蒸汽に乘つて南へ行く積りです。ここも日向の南の方です。意外に景色のいい處です。私も十月に成つたらお目にかかれることでせう。（大正三年九月四日　日向油津港の繪ハガキ　安塚千春宛）

其七

御葉書難有拜見致しました。私も大分暇どつてしまつて何だか今年の文展を見ることが覺束なくなりました。只七面鳥を見られないのが殘念なのです。餘り長くは居らずに共うち歸りたいとは思つてます。熱が八度以上に昇つたきり三十日もさめないのには全く困りました。それだから手紙書くのが億劫でたまりません。こちらも三四日以來非常に寒くなりましたが巷の間ではもう冬になるのにそれ程の感じもしません。どうしても鄕里の自然に接觸して居るやうな氣分には成れません。以前は歸りに奈良の秋を心掛けて居たのですが、もう御所柿もあるかどうか疑問になりました。それでも奈良は餘所に見て歸る譯には行きません。古畫を四五點見なければ氣が濟まないからです。そして今度は十二年振で伊勢へ參つて行かうかと思ひます。汽車に乘りつづけが出來ないから隨分念入りに注意して行

かねばなりますまい。

兎に角今月中には歸りたいと思つてます。さうして家へついたら只寢て居たいと思つてます。一時氣乘りのした歌がぴつたりとまつた儘熱がさめるといいがとのみ思つて居るのです。（大正三年（推定）十一月八日　福岡市外平野旅館より　封書　安塚千春宛）

大山萬吉宛

其一

なかなが御拜借の日本人及び家庭の友御返却申上候。日本人碧梧桐旅行後の分改めて拜借仕度、此者へ御貸與被成下度願上候。（年不詳九月二十七日　大山萬吉宛）

其二

拜啓。さき頃御依賴申上候、書籍六册、正に拜受有難く存じ申候。俄に一友をえたるの感あり。机上賑はしく相成候。代金不足分も候はば差上可申伺上申候。（明治三十八年二月二十八日　大山萬吉宛）

其三

御おくり下され候書册、たしかにうけとり申し候。御立春の分いか程位に候や。そのうちさし上げ申すべき心組に候。先は御禮まで一筆申上候。

小生等の發行にかかる雜誌、本月號一部さし上申候。御覽下され候はば幸に候。ことしの春寒さなかなか除き不申候ところ、昨今はめつきり暖く、こぶしの花も過ぎ申候。（明治三十八年四月二十日　大山萬吉宛）

其四

拜啓御送附の書冊十五十六とも正に落手いたし候。かねて御たてかへの內へ二圓程さし上申候。餘は休暇中御目にかゝりうる事と存候へば、その節申上ぐべく候。小生房州清澄山に止まること一週日、利益する所有之、去月末下山、海岸を周遊して日を過し、漸く去る九日に歸宅仕り候。蠶のいそがはしき時節とて、庭には草など生じ居り候。麥かりも半ばにてやすむ間も無之、田植もそのうちに候。小生の炭燒もなかなか上達し難く、苦心まかりあり候。一年もたち候はゞ、よき炭をえむかと存じ候。煙よりとりて製する品は、思ひの外結果よろしく候。書冊はまだしみじみよみ不申候へども、頭腦の惡しきと閑なきとは是非もなきことなれば、いそぐまじと存じ候。（明治三十八年六月十四日　大山萬吉宛）

（編者曰、　書冊とあるは早稲田の講義錄をいふ。）

武井準宛

其一

十日にこちらへ參り、二十日に入院しました。最新式の方法で昨日燒いて貰ふ筈でしたが、助手の注射が利目が薄かつたので、到頭うまく行かず、復た明日といふことになりました。

昨年の春とは違つて、今年はかなり熱も出ますし、日方も一貫三四百匁も減つてますからどうも大儀でいけません。一昨年かと思ひますが、お話の青島の海水浴場へ行つて見たいやうな心持もしますが、地圖では宮崎から僅かのやうですけれど、其宮崎が何處から汽車をおりて行くのが便利なのですか、私には一向に見當がつきません。御多忙の處恐入りますが、道順をお敎へ下されば幸です。

青島は只今でも宿料等は低廉なのでせうか。私達には其點が何より大切な條件なのですから。青島といふところは地理學上に非常に珍らしい處ださうですから、是非一度は行つて見たいと思つてゐるのです。砂にくるまつて日光浴をやつたら私の身體には格別宜しからうと思ひます。

此間或る新聞に田植唄の部に、

　妖肥の殿樣淸岳泊り亂れ補かよ帶こひし

といふのがありましたが、何だか技巧もうまく或面白い意味が含有されて居さうです。淸岳泊りなどいふ處がどんなことなのですか。お知り合でお分りになりますまいか。一寸お伺ひ致します。

先はお願まで右申上ます。（大正三年六月二十八日　九州大學附屬病院西二病棟第一室より　武井準苑）

富田如夢宛

其一

拜啓。故片野君に就いては、交際もなき間柄に候こととて別に申上ぐる程の感想等も無之候へども、唯一度偶然水戸の停車場に落合ひて談話を交換したること有之候。同君のまだ在學中のことなりしならん、制服の上に短きマントを着け居られ候が、其マントが片在所にうづくまる小生には珍らしき位に有之候。其折小生は只短歌ばかり作つて一般文藝には更に交渉なかりしことに候へば、聊かながら自分のことなど語りしに、同君は微笑せられしことに有之候。作者、殊に小生の如き一向に世間見ずのものが、自分の足許のことのみ申候ては、藝術に就いて智

識も理解もありし同君からは、隨分可笑しかりし譯と存じ申候。然しながら同君の態度は極めて謙遜にて且婉曲に有之候ひき。此は生涯を通じて同君の美點なりしならんと存じ候。其後一度しみじみとお目にもかかりたしと存じ候も、小生には惡疾を發し、更に機會も發見し得ずして、同君の訃音に接し申候次第。小生に於ては物の解つた、人をそらさぬ同君をかすかに心に描くのみに有之候。（大正三年四月　富田如夢宛）

渡邊源五郎宛

其一

拜啓。此程は御丁寧なる御手紙に添へて、殿中一折見舞として御恵贈下され、難有奉存候。御教示の旨は日夕心に念じて忘れ申間敷候。

先便にも申上候ことかと存候へども、在鄕の日よりも血色殊の外宜しく、過日平方の叔母上參られ候節も、餘りに病人らしく見え申さざるため、醫者に欺かれて入院致居候ものなり抔申され候由、後にて聞き知りて一笑仕り候程に有之候。或は大事に至らずして止み可申かとも存ぜられ候。只向後相應に時日を要し可申、此は是非もなき次第と存申候。

扨乍末筆過般は男子御出生の由、申後れ候へども、改めて御祝ひ申上度、皆々樣へも可然御傳へ下され度願上候。祖母上樣御在宿の由御案じ下さらぬやう御とりなし下され度御願申上候。

先はお禮かたがた如此に御座候。匆々。

追而順次郞よりも宜敷と申傳へ候。本人熱度も六度幾分に落つき申候へば、

なほ力つき申すことに有之、此又御休心の程願上候。（明治四十五年一月三十日
根岸養生院より　渡邊源五郎宛）

其　二

岡田博士の許可を得申候に付、本日一先退院仕り候。八月一杯在京。其上は九州へ發足仕度と存居候。右御通知まで不取敢如此に有之候。匆々。（明治四十五年二月二十日　下谷より　渡邊源五郎宛）

其　三

小生只今此の病院にて治療を受け、既に十日に相成申候。養生院にて切取申候處を更に數十倍の大きさに一遍に手術仕候。傷の痛みも漸次なくなり申候に付、近日退院のことと存申候。尤普通ならば外來にて宜敷ものの由に候へども、當醫院

長塚節書簡集上正誤表

（長塚節全集第五巻）

頁	行	誤	正
九	頁附	6	9
一八	五	骨粉三百、貫匁	骨粉三貫匁（?）
六三	七	藏の屋根、の	藏の屋數（?）の
六六	一一	來年、半ば	來月（?）半ば
七三	四	其前、十日	其後（?）十日
七四	四	只、母、上のみ	只口上のみ
八〇	七	半年たち	半月（?）立ち
一三六	一	岡本寛、殿	岡本宮殿
一九七	四	八月十五日夜	八月十五夜（?）
二六〇	一一	矢田具銀行	矢田貝（?）銀行
二九九	六	妖、肥	飫肥

三五七	三	御買却	御賣却
四六七	六	自宅より	東京より
四六八	六	ひよひ例の	とよひ(?)例の
五六一	九	徒歩にのみに、	徒歩にのみ
五六三	七	如此人	如此人
五六四	一〇	詢に	洵に

【附言】右の正誤表のうち(?)標を付けたのは、アララギ、山鳥渡等の資料を標準とせば、誤植ではないのであるが、恐らく誤であらうといふ推測をしたのである。その他、文章の續き具合になかしなところもあつて、誤植であらうといふ說もあつたが、其等は誤植ではなかつた。右の正誤表は、高橋正一。森山汀川。岡麓。結城哀草果諸氏の御好意を參考して作成した。歌集の第二正誤表は、村田利明、鹿兒島壽藏の兩氏の御好意を參考した。なほ誤植御氣付の方々はどうぞ東京市青山南町五ノ八一、青山腦病院内齋藤茂吉迄御通知にあづかりたい。四六八頁六行の「ひよひ例の」は原書簡と照合したが、正しく「ひよひ例の」であつた。併し書あやまりだらうと思つて此處に書いて置いた。

に友人有之候まゝ、入院となることに致し申候。宿屋に居るよりも便宜おほく候故、今少々此處に辛抱致す積に有之候。依然として熱は無く、見掛に縺りは出で不申、體量も健康時と大差無之候樣に有之候。

此地早咲の花は散り申候へども、如何致し候ものか、寒さは一向に拔け不申、隨分身にしみ申候。

病室に大和河内のものあり、作物及農事の咄などきき候に面白く候。河内の柏原農事試驗場附近に葡萄の產地あり、袋をかぶせて蔓につけたるまゝ、四月頃まで保たせる術をよくする由、一貫目二十五圓に賣れ申候旨。一房五圓位に當る由に候。

苦竹に花さく時期の迫り來り候ため、何處の竹林も見すぼらしく相成申候。此事他日新聞へ發表致度と存居候。

竹林のことに就いては茨城縣の勸業課などにても無頓着に驚き申候。縣費の林業

の項にも竹林の保護奨勵は無之候。京都は全國一の產地なれど、決して恐るるに足らず、鬼怒川の沿岸の如き絶好の土地はあまり數おほくは有之間敷と存候。京都も五囘も參り候ては、市中はさらに面白からず……郊外はやはりおもしろく候。菜の花漸く咲きかけ申候。油障子を屋根にして畑へ胡瓜を作り居り候百姓にきき申候に、三十坪未滿にて三百圓、よく上る年には四百圓を算すと申候。唯今花さき瓜の形をつけ申候。田は一反歩から三石五斗の收穫、麥はそれにて二石五斗位の由。土質は最上なれど、麥へ無闇に人糞尿をかけ候ため、只今どの田の麥も葉先が皆枯れて黄色に有之候。然し土入は必怠り不申、風通しがよくなる故、增收ありと百姓は申居候。

大阪の市場には……惡しく値もやすき由……故と申候。御所柿が一番よろしき由……こちらが進みて居る……知れ不申候。

文字不明に相成申候故、よくよく御覽下され度候。明るい處にて光線をうまくと

りて御らん下され度候。(明治四十五年四月五日　京都醫科大學十二病舍耳科より　渡邊源五郎宛)

其四

此地久保博士の診察を受け申候處、大分よろしく相成候て、只一ヶ處疑はしき處ある故、そこを今から燒き可申とのことに有之候。月曜より毎日通ふことに相成、暫時滯在の筈に有之候。右一寸御報まで。

太宰府は日本の靈地に有之、觀世音菩薩の像の如き驚くの外無之候。(明治四十五年五月十日　福岡市外東公園武井準氏方より　渡邊源五郎宛)

其五

種梅記の御葉書難有拜受仕り候。京都病院へ何か御惠贈下され候ひし由、はじめて承り候。早速京へ問合せ申候。不日相分り可申と存候に付其上重ねて可申上、

不取敢右まで申すすめ候。

此地太宰府における古代の佛像天下の珍品に有之候。

箱崎八幡香椎宮に詣で候。小生一度此橋渡り申候。箱崎は宿所より近く候。宮の建築は特別保護と申すことに候。

博多灣の風光すこぶるよろしく候。

此地はまだ單衣の人〻少く郷里に在りし日は常に暑かるべく想像致候に、此ちまた格別の感じ致申候。（明治四十五年五月十七日　福岡武井氏方より　渡邊源五郎宛）

卅　六

開聞嶽登山の記念に一葉差上申候。そのために疲れを格別に感ぜざるは意外に有之候。（明治四十五年五月二十九日　鹿兒島より　渡邊源五郎宛）

其七

全島大豆を作り、又大豆の收穫を誇り居り候。畑の九分まで大豆なるはおどろき申候。種類は生娘と申候。（明治四十五年六月十九日　壹岐より　渡邊源五郎宛）

其八

祖母上樣のために珠數を求め、弘法大師の廟所にて加持を受け申候。此山靈氣欝積す。此山いまが盃に候由、偶然とは申ながらめでたく存候。（大正元年八月十三日　高野山地藏院より　渡邊源五郎宛）

其九

拜啓。過日は玉蜀黍の種子御惠贈被下難有奉存候。扨祖母樣よりも大略は御きき

被下候ことと存候へども、父の病症はまだ源因も不明にて、發熱盜汗去り不申、こまり申候。それにしては、肉體の疲勞はさまでにも相見え不申、或は潛伏性のものに非ずやとの懸念も有之由に候へども、疾病に對する抵抗力の强きを示すものかと申すことに有之候。只今の處藥もこれと申して無之由。只管榮養療法に手頼る外無之とのことに有之候。熱度は最高此數日間には八度五分、最低六度三四分に有之候。

右御參考までに申進め候。匆々。

尙々美濃國なる坪井竹林翁より、春中本縣へ出張の旨通知有之候ひしが、果して參られ候や。其節は私博多に在りて出縣することを得ず候ひしが、私の竹林もやうやく緒につき來り申候。今年にて六年目、しかも六町五反歩を算するに、今年まで家の負擔は僅に二百五十圓を越え不申候。一見不思議に相見え可申候へども、此は御面晤の折申上げ候はば明瞭可仕、其內御目にかかりたくと存申候。（大正二

年六月一日　國生より　渡邊源五郎宛）

渡邊柔い宛

其一

御見舞を頂戴したと申して、國から書留で送つて來ました。御心配をかけて申譯がありません。

私も今のところ大分よい相です。それに久保博士といふ人に見てもらつて居るのですが、此の人のおくさんは私の名も知つて居ますし、一昨夜の如きは夫婦して私を料理屋へ連れて行つて御馳走するやうな譯ですから、都合がよくあります。

今日は雨で外へ出るのが困りますが、天氣に成つたら、ここの名物の非常にうまい物をあげます。

うちへ歸つたら太閤樣の小判形のお守といふのをあげます。歸りに高野山へ行かうと思ひますから、其時は兼ねて御依賴の珠數を屹度おみやげにあげる積りでゐます。

この(繪端書)ぼつさりしたあたりが關所(刈萱の關)のあとで、刈萱今道心は此處の人だといひます。私はここらを三度も行つて見ました。(明治四十五年二月二十七日　渡邊ゑい宛)

青木輸兒宛

其一

御たづね申上候うつろ舟の來歷くはしく御しらべ被下難有奉存候。

マカガヤク金色姫ガナリシトフクハシ桑子ノ神モノガタリ

（明治三十四年四月十五日　岡田村より　ハガキ　青木輸兒宛）

其二

拜啓。下總神崎よりさし上候はがき御覽のことと存候。

小生は二十八日に成田へ參詣の上前記の地へ滯在仕り候。梅見がてら香取へまゐり候と雨にて阻せられ候とにてやうやく一昨日歸途に就き昨夜歸宅仕り候。當分

在宅いたすべく候。筑波山にてよめる霞の歌は十首にいたり申候御目にかけ申候。追て過日は懇なる御もてなしありがたく存候。みなみな樣へ宜しく御傳へ下されたく候。（年月未詳七日　岡田村より　封書　靑木轍兒宛）

其　三

拜啓。いつもながら厚き御もてなし難有存申候。柿澤山にいただき途中少々困難いたし候。空腹を覺え候ため一つへらして持ちかへり候。皆々珍らしく賞味仕り候。今日「心のはな」一冊、子規隨筆一冊御おくり申上候。隨筆は小生さき頃一冊相求め候ところ兩三日まへ先生遺族のものよりおくられ申候ものに有之、一冊あまり申候に付さし上申候次第に候。全篇通讀いたし候時はほぼ昨年中からの先生を知り得べく候。御熟讀下されたく候。卷頭の手蹟五月四日附の狀を最後のものならむと有之候へども、小生のもとへは八月十五日あたりに出され候もの有之候。

病牀六尺の原稿を九日にかかれ候やう記され候へども、九日の新聞に掲げられたるものにて七日にかかれ候ものに候。當日は小生訪問夜にいりてかへり候。實は小生に筆記さする積りのところ忘れてとんだことをしたと後に申され候。小生かへつてから深夜に自らかかれ候よし、氣分よくて書き候には無之候。いづれも書體のたしかなる長病人の筆とは思はれ不申候。早々。

庭前の紅葉ことしはいつになくうつくしく候。筑波のもみぢにまさる數等と存じ候。（明治三十五年十一月二十日　岡田村より　封書　青木健児宛）

横瀬夜雨宛

其一

けさ京都から奈良へ。それで今夜は宇治川のほとりにやどる。まだ見なかつた新藥師と博物館とが奈良へひきつけ申候。(××年十二月二十一日　宇治より　横瀨虎壽宛)(明治四十三年?)

其二

お葉書本日とどきました。お待ち申ます。母はまだ歸りませんが、壯健で見物をしてをるといふ便で安心しつつ留守居してをるのです。小生一人でもお晝の支度位は出來ますから可成時間を早めてお出下さい。話する時間が餘計になるからです。雞が近頃卵を生みはじめて、一日に八つも九つも出來ます。村に豆腐もあります。早く來て下さい。(明治四十年四月八日　岡田村より　横瀨虎壽宛)

其三

昨日の葉書御らんのことと存じ候。幸此頃は天氣もよし、鬼怒川堤もはじめてならば、いくばくか目を喜ばすに足ることと存じ候。
兩親も今日明日には歸宅可致、常々御噂致し居候こと故、嘸よろこばれ候はむと存じ候。書一つ畫一つ老兄を樂しましむるもの有之候。

ウツカリサカサニ書キ申候。ヨロシク。

きのふみし葉書のかへしきのふ書きけふもかきつつ待ち遠みかも
わすれ草わすれて春はもえなくに來といひしことはな忘れそね

（明治四十年四月十日　岡田村より　橫瀨虎壽宛）

其四

今日は思ひもかけず、雨になり申候。淋しさは一人に有之候。雨晴れなば土しめりて心地よく相成可申、其時庭を掃いてお待ち可申候。

我庭の辛夷の雨にそぼぬれて松雀も鳴けど待つに來なかず

青桐のすぐなる幹に涙なす雫流れて春雨ぞふる

（明治四十年四月十日　國生より　横瀨虎壽宛）

其五

豫定の如く一日出發。昨夜此地へ來り申候。土地の女は皆色白く、顏の形よく候。但氣の利かぬ處は是非なく候。口さへきかねば我慢なるべく候。青森灣を見た處が嬉しく候。今日青森から弘前まで參るべく候。（明治四十二年十月四日朝　陸奥東津輕郡野內村淺虫溫泉より　横瀨虎壽宛）

其六

男鹿の島めぐりもして見申候。明日半島一周を終り、二たび八郎潟畔に出づべく、八郎潟は有繋に候。

珍談既に山積致し候。（×年十月十二日　羽後男鹿半島北浦より　横瀬虎壽宛）（明治四十年？）

其七

思ひがけなく京へ來て、思ひがけなく三日も續けて祇園で遊んだ。風流懺法の一力の大廣間で、三千歳、喜子福、松勇に逢うた。三千歳は別嬪だ。昨夜は舞子二人に手を曳かれて祇園の夜櫻を見た。あまり美しい舞子なので、人がぞろぞろついて來た。何ぞいいもん買うとくれやすといふから、頭大の風船玉をかつてやつた。二人はどつちも十二だ。明日はよしのへ行く。（明治四十一年四月十五日　京より　横瀬虎壽宛）

其八

御葉書難有存申候。茨城言葉は他地方の人士に分つても分らなくても、茨城のしかも純粹なる百姓を書く以上止むを得不申候。

それよりも何よりも、小生は病氣になつて、妹の家に來て居ることが小說の稿を繼ぐ爲に大打擊に有之候。病氣と申しても外科の部に屬し、肛門を切開し、逐日快方に向ひ居候へども、或は痔瘻に成らねばと申すことに候。さすれば萬事休み申べく候。

離緣ばなし。軍職を擲つてもお前の爲ならばと申されし中尉殿、如何なる風の吹き廻しに候ものか、他人のことながら困つたものと存じ候。女に我執あるが原因にはあらずや。詩的なること彼が如きは少なかるべし。然しながら實用向には不適當なるものか。其點においては、冷却して家事に斡旋すと稱する信州の方、遙

かに賢にして且有望なるべし。信州は其の內容は知らざれど、墮落せざりしだけそれだけ蕾は堅し。

然し、小生まだ此の如き詩的の婦人を見しことなし。

古河の來ること極めて幸なれど、病の癒ゆるに至らざれば焦心しても詮なく候。餘病發せざれば、十日にして歸宅するを得べく候へど、古河は其以前に來ることならむ。逢ひしとて、小生の如きものが噺をする程には進步し居らざれど、それでも逢うて其優美なる體格動作をつくづくと見申度候。

以前大兄より趣向を與へられたる「腕」の主人公ともなるべきもの、此地に候由、聞き申候。明日あたり、妹の夫と共に其の家へ參る筈に候。美貌絕倫の由、年は十六、些か邪氣は止めずと申候。

先は右迄申進め候。(明治四十三年七月三日　河間村大字奥田奥田虎之助氏方より　横瀨虎壽宛)

其九

拜啓。過日武井準氏御來訪。大兄よりと申して、新橋青柳のかすてら一折贈られ申候。難有御禮申上候。武井氏は御急の容子にて、腰かけのまま暫時對談して歸られ申候。日外小生旅行歸りに御宅へ伺ひし折見かけ申候以來、時も隔ち候ため、先方より名乘られ候までは、一向分り不申、小生をたづね來られ候人として、はじめは怪訝に存じたる程に有之候。同氏の噂は折々大兄より承知致居候ことに有之候が、肺病の全治せし由など直接きくに及びては、ひたすら羨望に堪へざる次第に有之候。小生は此の病院を出たる上は、兎に角久保猪之吉氏を訪ねて參り申度心得に有之候ひし折柄、武井氏を得て頗る心強く感ぜられ申候。二十日頃には福岡へ歸着、其の上にて手紙を送らるべしとのこと、只々それを待ち居候。

一月に入つて、寒さの募り候ためか、患部よろしからざるやうにも感ぜられ、少しは心細く相成申候。どうしても福岡へ參りたくて堪り不申候。死ぬとしても

それでなければ殘念に有之候。

新年になつてから病院へはおとづるる友人もなく、二日おき三日おきに參り候。舍弟も窒扶斯にて、七日以來病院の一室に横臥したる儘に候。小生が時々見に參る譯合　尤もこれは熱も九度までにて、決して危險の處なしとのこと故、それだけは大いに心配もうすき次第なれど、また何となく心細きもの有之候。

近頃つくづく考へ申候。小生が若し大兒なりしならば、女子文壇の才媛は、必毎日の如く慰藉しくるるならん。然しながら、櫟の枯木に西風の吹きわたるが如き索寞たる小生の境涯には、婦人の情味は求めて得べからず。病院の庭に、日に疎き山茶花の二三輪凍りて殘れるを、朝毎に必ず霜を踏んで見に行くことを怠り不申候。山茶花は池のあなたに、人の目にはとまらず、葉がくれに萎んで淋しく候。これを譬ふるに、女子文壇の才媛は溫室の蘭花植物の花なるべきか。しかも小生には此の花を見るの機會遂に來るべからず。山茶花に心を遣るのみに有之候。小

說の腹案二つ三つ成りたれど、筆執る勇氣もなく候。如此にして心は只九州に馳せ申候。

まづは御禮のしるしまでに、右申進め候。匆々。（明治四十五年一月十五日　根岸養生院より　横瀬虎壽宛）

其十

名張少女の給仕で、今夜飯を喰つた記念にこの葉書をおくる。

梅の木の下は一杯の山葵畑である。山は何處も櫟の木であつたのはなつかしい。

こゝらの百姓の娘が、おしやらくした處はなかなか見あげたものである。（明治四十五年三月二十二日　大和月ヶ瀬より　横瀬虎壽宛）

其十一

今日あたりは、遠く宮島あたりへ參り居候筈にて、思ひがけず此處へ入院仕り候。あまり長くもかからぬ樣子故、其の上は西遊の旅程を果し可申存居候。（明治四十五年三月二十八日　京都醫科大學病院十二病舍耳科より　横瀨虎壽宛）

其十二

天下の靈地太宰府に來りしことを幸と致申候。今度歸國したら、必御尋ねして、山の如き土產咄致可申候。

武井君夜雨集が欲しいといふので、小生のを國から送らせ申候。小生は當分滯在に候。（明治四十五年五月十二日　福岡市外武井準氏方より　横瀨虎壽宛）

其十三

二十八日開聞嶽に登り申候。

武井君の新夫人の月旦は、御面會の日までお預りに致し置き候。（明治四十五年五月二十九日　鹿兒島より　横瀨虎壽宛）

其十四

武井君に男の子生れし由なれど、暖く成るまで病院へ入れおくなりとて、家には泣き聲もきき不申候。（大正二年三月三十一日　千代の松原より　横瀨虎壽宛）

其十五

藤の花がざらりとさがつて、軟風が埃を吹き立てます。もうすぐに夏が來ます。私手紙の言辭は丁寧なことを切望します。さうでないと、切角人に手紙など貰つても、不愉快に堪へません。

病氣はいくらかいい方でせう。少し位無理をしても、それほど熱も出なくなりま

した。

博覽會はまだ見ません。

工科大學の朝鮮藝術の展覽會は見ました。藝術家はえらいとつくづく思ひました。

今年も九州へ行きます。（大正三年五月一日　楢田病院より　横瀬虎壽宛）

其十六

御介兄御上京とのことですが、私はまだお目にかかつたことのない方です、おたづね出來るかどうかと思つてゐます。どうも工合が本當でなくて、博覽會もまだ見る機會がないのです。

私は弟が發明して特許を得た鑛山の機械がどんなか見たいと思ひます。二つとも特許で外國のよりもいいのださうです。それを無慾な彼は無償にて人にやつて、他の人が出願したのです。

橋詰君が京都へ行かれたといふのは、どういふ機會からなんですか。私も今頃には奈良の藤を見られることと樂しんでゐたのですが、今年は迚も駄目になりました。明年も生きてゐたら、高野山へ掛けて行きたいと思つてゐます。奈良へばかり六度も行つてゐて、藤花を知らないのを常々殘念に思つてゐたのですから、羨しくてたまりません。私の處へ歸りに寄つてくれればいいと思つてゐますが、どういふものですか。京都は一寸見るといけないところになつてゐます。期待する處があまり多過ぎるからで、要するに頭が本當でないからで、何でも同じこと、醒めて見ねば駄目です。（大正三年五月六日　橋田病院より　橫瀨虎壽宛）

其十七

二十九日附の御手紙が今日とどきました。

私は六月の十日にこの土地へ來て、二十日に入院しました。咽喉は燒いてもら

つたので大分にいい相です。今暫くすると武井君をたづねて宮崎へ行くつもりです。さうして青島の海水浴場にしばらく居る筈です。私の身體も今年は大分惡く成つて居て、熱がどうしてもとれません。ここでは久保博士のために非常な厚遇を受けて居ます

お手紙の中のことは大分に事實とは相違して居ます。先方の本人に對しては、私は殆んどこれに加ふる言葉を知りません。それは孰れの人に聞かせても只嘆稱する外はありますまい。成る程神田の病院へ訪ねて來たことはあります。然しそれあるがために、本人は手紙を書くことの自由をも許されなく成つたのです。詳しいことはお目にかかつておはなしせねばわかりません。君が私をうらやむ筋は少しもないのです。決して眞相を傳へないのが世態の眞相なんですから仕方がないのです。私も神田の病院に居た時は精神に苦惱がおほくて、何とも仕方がなく成りましたから到頭出ました。さうしていづれは來なければ成らぬ處故、直ぐに

こちらへいそぎました。それだけです何がいいことがあるもんですか。運命といふものがこれです。私はいま自身の病氣に就いては左程に苦しまないが、不時に起る出來事には困ります　然しいまそれもうすらぎました。おん母上様は其後どうなんですか。大變なことはないのでせう。私よりも宜しくとお傳へ下さい。俊男さんといふのは昨年こちらでお目にかかつた人でせうか。

博多の松原も暑い處です。一寸手紙書く位でも汗がぐつしよりです。（大正三年七月十九日　福岡市外大學醫院西第二病棟第一室より　横瀬虎壽宛）

其十八

御書中、昂奮の點有之候へども、小生の實情を知悉せられざるが故と存申候。小生を羨やまれ候如くなれど、さる甘露の日和は嘗て小生には來り不申候　武井氏令弟は、小生にかかる事件に就いては珍説をもたらしたることと誇りかに語り申

候ものと窃に苦笑を禁じ不申候。徒らに大兄をして憂へしむる處、自然の惡戲とも申すべきか。

小生には苦惱と煩悶との外なく、九州に來ることを樂み申候次第、委曲はここに盡さず候。解釋の仕樣によりては、小生は終始幸福の人間なりしに相違なかるべきも、遂に薄倖の生涯に過ぎずと存申候。求めて孤獨の境涯に甘んじたるにあらず。すべて皆運命にほかならずと存申候。十六七歲以來讀書の自由を失ひ、最後に如此難症に罹りて、今年殊に病勢のよろしからざるを覺え申候

大兄と小生と同時に生を續けつつある間は、いつも大兄は小生よりも一年の長生には候はずや。大兄は身體の自由を失ひたりと雖も、終始頭腦健全にして、小生に比して幾十倍の智識を吸收し得て、しかも命數において限る處なし。これを小生の現狀に視て、何のうらむところか候はむ。離れたるものの終に合ふべき機會なきを觀念したる小生は、決して自ら求めず、冬枯の曠野にひとり取り殘された

る如き境遇を甘受して、更に自暴自棄に陥り申間敷と存申候。
小生は如此に候。定めし意外と覺召され候ことと推察致し候へども、事實は拒ぐべからず。昨日一書をしたため候ひしが、炎暑の苦しさに、疎略に過ぎしを恥ぢて、追而如此に有之候。
何事もおつと御觀念可然と存申候。（大正三年七月二十日　福岡大學病院第二病棟より　横瀬虎壽宛）

其十九

其後は君の心理に何の變化もありませんか。私もこちらへ來てゐる爲、やうやう平靜の狀態を保つて居ることが出來てます。君も何事も苦しまないで下さい。私のことなど羨むところは少しもありません。
それよりも「いばらき」の歌壇を主宰するなら、もつと君自身の修業を力めて下

さい。從來のところでは、萬葉集を愛讀した人らしい處が少しもないのを遺憾と致します。萬葉を心讀し體得して居れば、も少し違つたものに成ります。勿論口調の似た似ないの問題ではありません。

我々は藝術家として、人にちやほやいはれるのが目的であるべき筈はないのです。何時でも自己の良心に、聊かでも滿足を與へ得る程度にまで努力するに在るのです。發表した全部の立派なれとは、人間に望むことは不可能です。只その十分の一でもいいから、其人の特色が發揮されねばならないのです。

私も三四日中に退院して、日向へ行きます。（大正三年八月八日　福岡大學醫院西二ノ一より　横瀨虎壽宛）

其廿

日向の南の方まで來て見ました。景色はいい處です。

武井君が、君に怒られて居るといつて氣にして居るやうです。さうして、頻りに君に就いて心配して居ます。どうですか、武井君からの手紙に返事を書いては。同君は親戚と絶つと言つてましたが、君だけは別でせう。（大正三年九月三日　油津より　橫瀨虎壽宛）

伊藤左千夫宛

其一

漸く越後も信州近く相成候。此地より七里にして和山の温泉といふは信州に相成候。

玆は知人の家にて昨日着致候　マイ茸といふ木の子の大なるには徑三尺大抵は一尺位有之候由、今日これを御馳走に相成候　切り取つた一片を見て驚き申候。只の茸と異り銀杏の葉の如き枝の集りに候。マタタビの實の鹽漬もたべ候。今日彼の有名なる七つ釜を見る筈の處雨にて籠居、或は山中五六日手間どるならんと考へ

られ候。和山より間道草津へ越ゆるつもりの處、今は通行あるまじとのこと、さすれば三國峠をたどり可申候。（明治三十九年十月發行 馬醉木第三卷第六號所載 越後國中魚沼郡仲深谷村より 伊藤左千夫宛）

其二

秋山の溪谷に七泊して昨日出立、今日此所まで廻り申候。アケビ蔓細工の名所に候。

昨日途次大赤澤といふ所に、秋山第一の熊捕の名人長右衛門をおとづれ申候。彼れ今年七十七、正月より中風にて半身不隨意に相成居候。六十四の時に熊のために手足をくひ折られ候程の傷を受け爾來其業を廢したる由なれど、十三才より六十四まで凡そ百頭は突きとめたるならむと申候。顏長くして鼻高く白髯を蓄へたる所立派の老人に候。（九月三日）（明治四十一年十月發行 阿羅々木第一卷第一號所載 信州秋

其　三

此處でも冬は寒く、また年末は忙しげに候。午後に來て今夜ぶらぶらと京極から蹴上まで歩いて見申候。一寸宇治と奈良とを見て歸らうかと存候。今度の旅行は竹の研究の爲にて、潮音、蓼圃の家へ泊る。十二月廿日。（表面）（京都東福寺山門樓上の羅漢（運慶作）の繪ハガキ　明治四十三年十二月二十一日　京都より　伊藤左千夫宛）

其　四

嘗て聞いて居た若冲の卅幅今度岡崎で見せて居る。君はいつかつまらぬといつて居たが僕はさうは思はぬ。成程隨分不器用なもののやうであるがあれだけの努力とそれに伴ふあれだけの强みと厚みと力とは我々は十分尊敬せねばならね。ここ

へ來て二度入札があつたので行つて見たら栖鳳の畫が非常に多かつたが僕は文展で敬服して居た彼に對して全く失望せざるを得なかつた。四條派の通弊の薄つぺらが鼻につく　才氣のみの産物がどれだけつまらぬかを今更のやうに感じた。其處へ行くと若冲の卅幅の如きは段が違ふ。僕は彼が力一杯にあの大幅へ餘裕もなく寧ろ窮屈なまでに畫いたのを多とする。段々掛替へるのでまだ七幅しか見ないが、大きな牡丹の花を一幅へ四十三も書いてその隙間にはびつしりと小てまりの花を胡粉で畫いて居る。僕は今自分が製作をするに就いて暗示を與へられたやうな心持がする　僕は製作に取り掛つたら力限り根限り自分の良心が滿足する程度に、さうして一つは其作物を尊敬し、讀者を尊敬し、同時に其心は作者自らをも尊敬してかからねばならぬと思ふ。七幅今日掛替になるから午後より行つて見るのである　（明治四十五年五月發行　アララギ第五卷第五號所載　京都より　伊藤左千夫宛）

其五

昨日嵐山へ行つた　花は掛替のない好い時期であつた　嵐山へは三四度行つて、いつかは著莪の葉の上に花片がねばつてついて居た　雨の日行つたことがあるが、今度ばかりは本當に惚れこんでしまつた

大悲閣の下から三軒屋まで船で下つたがこれがまた頗るいいものである。龜山公園の赤松の林の間から大堰川を見おろす處はすべてが美化されてゐる　公園は嵐山に對して居る山で思ひ掛けず京都の市街から足もとには嵯峨の竹林、それから廣澤の池お室の塔までずうつと見わたされたのは愉快であつた。今一度吉野へ行つて見ようかと思つて居る

京都は市中はすつかり駄目になつた　郊外はまだ感じがよい。三度目の銀閣寺も見た。さうして感服して來た。

僕は今體重が二年前より却てふえて居る。（明治四十五年五月發行　アララギ第五卷第五號所

其六

東京朝日で見ると、光聲會の平福君の島の女といふ奉書の紙へ書いたとかいふ繪が非常にいいといふが、君見て實際よかつたら僕は欲しいと思ふんだが（アマリタカクナケレバ）其時分には何とかしてくれまいか。僕のかへりは少し時日がたつけれど。右御相談まで。（表面）

太宰府へ二度行つた。天拜山へも登つて見た。又行つて見ようと思ふ。近くだから何でもない。（五月十四日夜）

いよいよかへりとなれば奈良へよるが、觀世音寺の佛像をよく見ておいて、奈良を見たらどう見えるだらうと樂みにして居る。（裏面）（筑前觀世音寺の寶物納骨利陵王納骨利の繪ハガキ　福岡市外東公園裁縫女學校前武井氏方より　明治四十五年五月十五日　伊藤左千夫宛）

其七

明後日頃はいよいよ出立のことに相成候。耶馬溪へ向ふ筈なれど昨日から雨季に入りし様なれば覺束なく候。平福君へは老兄より御はなし願上候。此の東光院といふのは僕の居る東公園卽ち千代の松原から半里足らずの處で國寶の佛像が十五軀もある。本尊の藥師如來は祕佛だが特に開帳して貰つた。それも一度ではなく二度行つた 本尊の外にも一つ藥師如來があるがそれと他の十二體—十二神將—は維新の頃廢寺になつたのがあつてそこにあつたのださうだ 兎に角にといふので貰つて來てさうして邪魔になるといふので、十二神將は天井へ投げ込んで置いたのださうだ それを明治卅七年に調査委員が行つて何でもいいから古い物があつたら出せといふので始めて天井のをおろした。卽座に國寶といふことになつて坊さんも驚いたさうだ 東光院に從來あつたのは其祕佛の藥師如來とこの阿彌陀

如來の二軀丈であとは貰つて來たのである。筑前ばかりでなく筑後を併せた福岡縣には實に意外に貴重なものがある。（大正元年八月發行 アララギ第五卷第八號所載 福岡より 七月三日 伊藤左千夫宛）

其八

五日に耶馬溪へ踏み込んで、尤も馬車に搖られて昨日難道を六里も來て彥山町へ泊つて今日登山した。惜しいことに二日とも雨だ。彥山にはいい處がある 耶馬溪は駄目だ 山其物がつまらぬ上に樹木がさうすつかり無い。（大正元年八月發行 アララギ第五卷第八號所載 彥山より 七月七日 伊藤左千夫宛）

其九

（編者曰、前部は紙むしり取られ不明、全體水漬汚染せり）

今は僕は毎日自分が經營してゐる竹林を一度づつまはつて見なければ氣が濟まない。筍がぐんぐんと明地へ出て來るのを見るのは愉快である。まだ從來の竹林の中へは出はしまらぬ。今年は少し後れた樣だがそれも十日の内だらう。百姓の麥の取入の爲には此處降らない方がいいが、竹の爲にはうんと降つてもらはねばうまく無い。何といつても僕は自己獨特の經營法を案出して、人の一年で出來るものを三年もかかつてやつてゐる。去年は旱魃のために陸稻が非常の凶作であつたが、僕のは平均四俵近くに當つてゐる。どうも陸稻はとれる樣に思はれて成らぬ。今年もかなりうまくやらうと心掛けつつある。僕は數年前から梅を四段步程植ゑて置く。これは其收入だけを一家の經濟とは別にしておいて、それで村の貧乏な小作人のために色々な有利な方法に消費したいと思つて居る。僕は性質が狷介で直言を好むから、自然忌まれる樣に成る。陽に從つても陰には逆ふやうな傾がないともいはれまいと思ふ。だから僕には其緩和劑が必要である。何も百姓共を籠

絡しようといふのではないが、自分の苦しい懐をいささかも痛めることなく、彼等に多大の便宜を與へて自己もそれに滿足しようとすることは、どう考へても惡いことには思はれない　百戸の村落で一年に百五十圓か二百圓もあればそれが殆んどすべてのものを濟すことが出來るのである　實に容易なことでありながら、富者は決してそんなことをしない　僕はこんな小さな未來を空想しつつ梅の枝を剪む幾分の愉快を感ずる　二三日前この希望を病父に告げた　母に丈は二三年前語つたけれど父には打明ける機會がなかつたのだ　父は喜んでくれた　さうして年はとるべきものだ　色々なことを聞く　あれなら大丈夫だといつて母に語つて非常な安心をしたらしい相だ　病父が以前から僕の性情が村の者との折合が面白くなくはなからうかといふ懸念をして居るのを僕は知つて居る　若し病父が不幸にしてこれで恢復しないにしても、僕の將來に對しては必ず安心してくれることと思ふ　僕は竹林の成就するのを父に見せたいと思つて居るが、出來なければ止

むを得ない。只前にもいつた様に病父は胃が大丈夫だからそこに一縷の望が繋がれてある。僕は父母と共に長く生きてそして一村がもつと幸福を享受しうる様にしてやらなければ成らぬ。家庭の人間としては怎んなことも考へなければ成らぬ。だけれど君に逢へば古美術の話をしたいと思ふ。二箇年の旅行は僕を或點に於て妙に頑固にもしてしまつた。然し自分から決して悔いようとはしない

あとはもう逢つてからのことだ。書くにかぎりはない。（六月十三日　伊藤左千夫宛）　編者曰、封筒はあれど違へるものらしく年月等不明）

其十

廿七日の喜多の能樂に虛子君から招待を蒙り候に付上京仕度存居候。廿六日の午後茶場町へ御伺ひ仕る考に候。

いろいろはなしも有之候。病父は其後少しよく成安心仕り候。（裏面）

其十一

法隆寺、奈良、京都、

法隆寺へ來て夢殿の祕佛も開帳して貰つた。此は久保よりえさんの手で、近角常觀氏の紹介狀を得たからである。如何にも感謝に堪へない次第である　法隆寺が日本第一といふことで一寸思ひ出すが田舍の寺々へ行つた其筋の人々などが相應にお世辭をいつて和尚さんを喜ばせると見える、宇治の平等院の賴通の護持佛といふのを見た時、かういふ相貌の圓滿なのは他にはないさうですと說明されたし、伊豫の太山寺では鎌倉時代の建築でこんなによく保存されたのはない、日本一ださうですと聞かされたし、筑前の志波といふ所の普門院では小さな本堂が今度其筋の目に止つたのだが此の桝形の品のいいこと類がないといひますと頻りに佳

持は誇つて居た。播州の鶴林寺では本堂が觀心寺造りとかいつて、其本堂の形はもう此堂一つになつて仕舞つて他にはないといふし、高野山の金剛三昧院といふのは堂々たる寺院で、多寶塔は特別保護にもなつて居て中の五智如來も共に國寶だが、寺の若い和尚は隨分美術の鑑賞家も來るが此の五體の佛さん位圓滿な佛さんは他にはないといひますといふのである。寺傳運慶で鎌倉時代の作だから、隨所に見るやうに如何にもきちんと屆いた作には相違ないが、我々が見ても高野山中にもつといいのが幾らもあるのである。然し此寺の小栗宗湛筆といふ梅花雉子の圖の襖は大きなもので、幾枚か打つ通しで、幹を横へた梅が五間幾らかある、實に堂々たるものである。此寺は貞永年間の建立で焼けたことがないといふ位だから其境地も高野山中第一らしい。固より襖も第一である。遍照光院といふ寺には書院の襖十枚を大雅堂が彼の平生に似ないで骨折つて書いて居る。大雅堂としては日本に此位なものはないさうですと此處でも日本一の自慢である。無闇に人

が譽めたのに相違ないのである　僕は譽められるといふことがなかなか容易なことではないものだと思つた　大雅の筆といふものは我々には實際いふと分らないものである　然しながら僕は南畫といふものに十分疑を懷きはじめた

南畫は一般に氣韻といふやうなことを頻りに稱道して居ながらどうも重量の足らぬものが實際に出來上つて居る樣である　蕪村などでさへよく誰々の筆意に倣ふといふことをいつて居る　僕には此がどうも變なことだと思はれる　萬葉調だとか古今調だとかいつて歌を作り分けして見るのと同じやうなものぢやないかと思ふ　要するに遊戲の分子が多過ぎる　僕には華山にさへ輕薄の氣が免れないと思ふのは古人の筆意だとか何だとかいふことを氣にして居るからだと思ふ　宗教畫などを見るとそんな處ではなく、もつと大切な方面に專心努力して居るらしい

僕は今迄實に馬鹿にしきつて居た應擧に金刀比羅神社の書院の山水を見て、大に尊敬の度を加へた。應擧には巫山戲た處がない。若冲でも、蕭白でも、極めて眞

面目である　氣韻を目的とし、學問を鼻にかける傾のある南畫の先生達に薄へらな處の免れないのは心の土臺に一點の巫山戯た處が蟠つて居るからだと思ふ　若しも我々が國寶の調査委員に成り得た場合があつたとしても、應擧や若冲や蕭白には一も二もなく編入せねばならぬものがあるのに、南畫の多くの場合には乾度首を撚らねばならぬだらうと思はれるのである　奈良へ昨日來た　非常に便宜を得て明日は三月堂の中へも入れて貰ふし、戒壇院の四天王も見せて貰ふし、東大寺の寶庫へも入れて貰へるのである

二枚の葉書へ書いてしまつてまだ此處に少し餘白があるから埋めて畢ひたいと思ふ　四國を立つた日に書寫山へ登つた　次の朝には同じ播州の鶴林寺といふのへ行つた　太子堂などは品のいいことと實際何ともいへなかつた　百濟の獻納といふ梵鐘がある　寺から田圃一つで高砂の相生の松のある尾上神社で其處に此の鐘がある　鶴林寺のよりはずつと大きいし、それに天人の天降つて居る模様もある。

だが疎末な堂で手がとどくもんだから參詣人が撫でさすつてつるつるにして畢つて居る。堂の中へ柵を結つたらよからうといつたら、神社では始めて氣がついたらしかつた。尾の上の鐘といつて昔から餘り有名なので却てこんなにしられたのかも知れない。其日はずつと和歌山へ越えて、紀三井寺で古鐘を見た。一日の内に國寶の鐘を三つも見るなどといふのは本當に勿體ないといつていいと思つた。

和歌山では天守閣へ登つた。然し城は電車が長いトンネルを出て泉州から紀州へはひつて軌道が下りに成つた時一帶の平地の中央に屹然として居るのを見た方がいい。だが書寫山から降りて途中でひよつと見出す姫路の城の方が上だ。到頭天守へは登らなかつたが、白鷺城と名に立つたあの眞白な姫路の城は全く天下の名城である。

日本一の自慢で又思ひ出したが、耶馬溪へはひる處に中津といふのがある。其中津の自性寺といふ禪寺に大雅の書畫大小四十八枚が襖へ貼り交ぜになつて居る

大雅の書がこれ程澤山ある處は日本の内でも他にはないさうですといふ　實際能書の大雅が書體の變化を盡して居るので、我々は畫よりもいいと思ふのだから自慢も尤もだが、金刀比羅の書院の岸岱の菖蒲や柳の襖を、岸岱としては日本にこれ程の大作はないさうですといはれたのには少からず當てられた。（八月十八日　奈良より　伊藤左千夫宛）（大正二年三月發行　アララギ第六卷第三號所載　以下二通同上）

其十二

僕は三四日の内に法隆寺を二度見て、二度共夢殿の祕佛を開帳して貰つた。東大寺の寶庫へも二度入れてもらつて、天平の彩色畫にも驚いたが更に大佛殿の發掘物（此は前便にも書いたか知れないが）を手に取つて見た。寶劒は柄も鞘も腐つたが、黄金の唐草模樣が鮮かである　徑一分位の眞珠を入れた壺は銀へ金の象篏をして彫刻を施したものだ　土中へ埋めて畢ふのにさへ聖武天皇はかういふことを

なされたのである。も一つ驚くのは今の人の締める革帯などに使ふあの美錠が然かも黄金のが此の發掘物の中に有ることである。一枚の瓦に過ぎないが此は國寶である。歴史部に屬しては居るが僕は大なる藝術品だと思ふ。今度も此の瓦を見た。一枚の瓦ではあるが、僕はどれ程教へられ勵まされ且つ慰められたか知れないのである。ほのかながら此の相貌を熟視してくれ給へ。僕は此で旅行の繪葉書を四百枚も書くことになる。君への物質的の土産はないのだから宥してもらはねばならぬ。（八月廿九日 京都より 西國七番大和岡寺國寶岡本宮殿腰瓦の繪ハガキ 伊藤左千夫宛）

○

日野の法界寺の阿彌陀堂も生粋の藤原時代の藝術である。鳳凰堂と共に本尊は丈六の如來で定朝の作である。面貌の互に光つて居る處も面白い。堂は檜皮葺で外形の品のいいこと勿論のことであるのみならず、堂内には須彌壇の四本の柱には曼陀羅が描いてある。煤けたり、剝落したりして居るが、模様や佛像の精巧緻密な

のが明かに分つて居る處もある　遙に天蓋を仰ぐと四壁に天人の風に御する處が描いてある　其外側の壁には四方に四體づゝ十六體の如來がある　醍醐と日野を見たのは昨日のこと、今日は鳳凰堂を見た　二度目である　二三日内には歸國するが、も一度宇治へは行く。（八月二十九日　京都より　法隆寺阿彌陀堂壁畫の繪ハガキ　伊藤左千夫宛）

岡　麓　宛

其　一

賀正　甲辰一月

一日ふもとの里より筑波へ行くとて、霜のふりたるを見てよめる歌のうち一首

つくばねのしづくの田居にたつ霧の夜凝りにこりておける霜かも

（明治三十七年一月十日　自宅より　繪ハガキ　岡三郎宛）

其　二

拜啓、一昨日はゆるゆる御もてなしにあづかり難有奉存候。今日左老をたすけて趣味歌壇の始末をつけ申候。

あしび表紙の木版至急小包にて、御送附相成候樣店員へ御さし圖下され度由、左老よりの申出に有之候。

小生は明朝歸國可致候。過日御手數下され候女學生に就きおたづね致すことを忘れ殘念致し候。（明治三十七年五月十八日　東京より　封書　岡三郎宛）

其三

拜啓旅行も漸く此十五日を以て終り申候。目的の秋山の溪谷には多少の獲物有之候。數月の後に一篇を草すべく候。十月中旬頃上京可致、其折には大兄をおどろかすはなしも致し可申候。

偖て小生昨年の病氣ひそみ居候ものと相見え、其後惱むことは無之、表面何の異狀も認めず候へども、甚だ心掛りに候まま其うち思ひきつて治療致度存居候。過般御はなしの小島といふ人は三ヶ月の後、全快致候や、御知らせ下され度願上候。

先は右まで。　匆々

庭前の秋草、小生の留守の間におどろく程のび申候。葉雞頭七尺ほどに有之候。

女郎花は土用に移植したるものなれどちつとも萎れ不申候。此位强き草は

他に少なかるべくと存申候。來年からは花作り一層上手にならむと心構居候。春から霜のふるまで花の中に暮す積に有之候。（明治三十九年九月二十日

自宅より　封書　岡三郎宛）

其　四

拜啓田舍は今日漸く元日に有之候。雪以來庭からどこからぐちやぐちやにて、足のふみ處も無之候へ共、家のうちだけは掃除をして、しづかに火鉢を擁しつつありし處へ、昨日御通知の粽とどき申候。體裁に先づおどろき申候。それから風味はまた何とも申樣無之候。母と二人にてつくづくと味ひ申候。こんなうまいものは滅多にあるべからず。慾には今少し欲しかりしことに候。珍らしきものとなると、小生は自分一人にては濟されず。二三ヶ所へ必ず分ち申候。此粽も一括に括りし所に一種の趣有之候故、食ふ丈は小刀で括り目から切りとり、あとを二ヶ所へわ

ける積に有之候。唯今二つほどたべてやつと我慢致申候。十分くへば人にはやれ不申候。おわらひ被下度候。匆々。（明治四十年一月二十二日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其　五

拜啓。此間中よりの郵便御落手の事と存申候。あれは報知新聞へ賴みてなり搜査せざれば叶はぬ儀に付、何卒至急御手數下され度、報知新聞へも小生より照會致し候へども、一向に返事無之候　此處兩三日返事無之時は、重ねて貴兄へ御依賴致したく、此葉書へは貴兄よりも何とか御返事下されたく待ち上申候。（明治四十年三月十四日　自宅より　ハガキ　岡三郎宛）

其　六

拜啓。過日御懇談申上候品々は、家族のもの上京致し候に付其節持たせ候。短冊

其他のものも、手紙を除いては小生の手もとには一物も止め不申候。御相談相叶ひ候はゞ、金子にて頂戴致したく候。なほあの折御はなし申上候春畫一卷、小包にて差上候間、宜しき樣御買却下されたく願上候。早々。（明治四十年五月二十一日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其　七

御手紙拜見仕り候。先日の品は小生に於ても所持致し居候ても、詮なきものに有之候故、御骨折の結果に候はゞ、何程にてもよろしく候間、其御つもりにて御手數下され度願上候。次に先生の遺墨は、伊藤君へ一寸御葉書御差出し下され候はばよろしき事に有之候。

右御回答迄如此に御座候。早々。（明治四十年五月廿一日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其八

波多（ハタ）や三溝（サミゾ）のクロベの中に、あやめさくとはシャラ可笑し。

上原三川、胡桃澤勘內、望月光男、三氏と閑談しつゝあり、（明治四十年六月九日　長野縣松本在淺間溫泉より　繪ハガキ　岡三郎宛）

其九

拜啓先夜は失敬仕り候。其折御願申上候件、先方の住所は本鄕五の四十七にて、姓は井上と申子爵に有之候間、何時もながら御手數は恐入候へども、逐一御精査なし下され度、姉なる人は千枝子と申候て廿四、次は艷子廿一、末は季子十八に候由、井上家は去る卅五年まで下妻と申處に居住致し居り、右のうち二人まで此地の小學校を卒業致し申候。此小學は小生も在學致し候こととて、下妻には姻戚も有之、種々問ひこころみ申候處、先づ先づ評判惡しからず、特に次女がよろし

とのこと、年齢も十二月生の廿一故、其點よりしても第一によろしかるべき見込それも下妻にての評判は五年前のことを申居候ことなれば、悉く信をおくわけには不參候。其邊のこと御ふくみの上、御骨折下されたく願上候。小生も或は此月のうちに、再び上京致す樣に、相成可申かと存ぜられ候に付、其節御精査の結果、御口づから承り申度と存居候。何卒至急御手數下されたくくれぐれも御願申上候。次に先夜御懇談の行脚の件、初秋の候を待ちて、凡そ二週日を期して決行致度と存じ居候。屹度御さそひ可申候へども、方面は只今は祕密に致しおきたくと存候。早々。（明治四十年七月廿日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其十

拜啓今頃は上京の所存に候處家事の都合にて、少々後れ可申かと存候。此間中御願申上候件、御捜索相屆候ことならば、一寸御報知なし下され度希望仕り候。次

に頂戴致すべき金子のうち廿五圓程、至急左千夫君へ御手渡し下され度候。其餘は先づ先づ當分は入用無之候　今回上京の折には、或は面白き御相談をもたらすべきかと存候　葉書にて失禮ながら右申上候　廿七日　（明治四十年七月廿七日　自宅より　ハガキ　嗣三郎宛）

其十一

御手紙難有拝見仕り候。詳細のおとりしらべ御骨折の程、深く肝に銘じて忝く奉存候

御申越のふしぶし何れも申分無之、此上は十分の運動仕り、他人に奪はれざる工夫専一に可仕候。

容姿十人なみ少し上と申も、此は東京の標準故、先以て田舍へ連れ來り候ては、必ず上の上ならむと存候。此點も頗る滿足に有之候　十六頃の寫眞を見るに、小

生殊の外氣にいり申候　只先方に嫌はれ候ては、折角の熱もさめ可申道理、此邊隨分しつかと相構ひ可申候。近日中上京可致候に付、其節改めて御禮申上ぐべく候　早々（明治四十年八月六日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其十二

拜啓、歸途此地へ立ちより申候。例の件につき聞質し候處、舊藩士共或は御用金を仰つかるならむなどの、懸念もありて、其ため回答も後れ申候由、甚だ話せぬ人物共に候へども詮なく候　然し小生に不利益の、回答はせざることだけは確に有之候。されど昨夜も御話の如く、大兄御自身に、井上へ御出下さることならば、幸此上もなきことと存申候　此處大奮發にて御決行なし下されたく偏に希望仕候。さもなくては、鮭は差上申すまじく候。右御決行の折は一寸御一報の程願上候。早々。（明治四十年八月廿一日　常陸下妻町より

其十三

拜啓。昨日伊藤君より、葉書にて今回の水難にて原稿を水中に沒し候由、報じ越し申候。軒外四尺の水と申候へば、隨分困難を極め候ことと存申候。此點如何にも氣の毒に堪へ不申候へども、水つかりの原稿をとり揚げて、困つた時の樣子が、何だか眼前に有之候樣相覺申候。

伊藤君はあれで、時としてはなかなか慌て申候。其時の樣子を想へばむしろ滑稽に有之候。小生は連日の浸水に、庭前の嫁菜が可愛想に、衰へたるならむと申おくり候。偖て過日來御懇願申上おき候件、舊藩士の或者は、先日申上候如く、御用金を仰つかる樣の懸念にて、今以て埒明き不申、只時々惣代の者の、會合をひらくにとどまり、東京への回答も不致候由、相互のために力を入れ居候者などは

迚ても、惣代などに一任しては此相談は成立の見込なしとまで申され候。小生も折角其氣に相成居候處を、その樣のことにて烟にいたし候は、餘りに遺憾に不堪候に付、今一足を進めて見たき希望、それには過日も御懇話下され候如き、方法に手頼る外は無之と存申候。御迷惑はさることながら、御自身先方へ御出の上可成ならば、本人をもとくと、御らん下され度候。小生も評判をききしのみにて、先以て雲を攫ふるが如き感も起り申候。大兄に於て一應御らんに相成候ことならば、小生は見ずともよろしき樣存ぜられ申候。此件もはじめは何の支障もなくて進行することと存居候處、以ての外に延引致候。其ためには無之候へども、庭の芙蓉此も以てのほかに後れ申候。

我が植ゑし庭の芙蓉頭くれなゐのかそけくみえて未だ染めずも

（明治四十年九月三日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其十四

昨日は前日の支那料理の、ききめ相見え少々不折流のことに相成申候。しかし向後はたびたび不折流になつて見たくと存候　鯉の味わすれ難く候。

扨てまたまた例の件今日先方へ御いでのことと存申候。此状御手もとへ届き候時は入違ひに御手紙到達いたすべきかと存じ候へども一寸思ひつき候こと申上候。先便にては、本人を御らん下され度よし申上候へども、それも是非共希望いたし候ことに候へども、更に出来うべくば、本人の寫眞最近の者を、一葉御手にいれ御おくり下され度願上候。先便にも申上候如く、下妻よりも一人上京致させ可申候へども、貴兄の御盡力は十の九までは成功のことと信じ申候。第二回目だけにては、或は如何かとの懸ねんも候へども、更に今一回御足勞下され候ことならば、先方に於ても何よりもまづ、義理にからまれ申ことにも相成可申と存じ候。貴兄も隨分迷惑至極の御事とは存じ候へども、乘り掛けた船向ふの岸まではおとどけ

下されたく願上候。橋わたしとも船頭とも成つて御骨折は近頃御器量を増し申すことと存じ候。巫山戯て中には無之候。御腹だちくだされ候ては困り申候。小生此れまでは緣談に格別氣のり不致候處、今回は全く不思議にて、此樣なる手紙をしたため候こともも樂しみの一つに相成居り候 御腹だちにならずにおわらひくだされ度候。天下は泰平に有之候。

二分心のランプを點けて、此手紙を書いて居ると、緣のそばに今日さいた芙蓉の花がいい加減に萎んで白々と見え申候。芙蓉の花は夜見ても美しく候。御わらひ下されたく候。草々。

此手紙書きてありしかば書めてし芙蓉の花を夜もめでけり。

いまゆ後手紙を君に書かまくは芙蓉の花に灯ともして書かむ。

夜みれば殊によろしき白花の芙蓉なるべき其女子を。

（明治四十年九月廿日　自宅より　共書　國三郎宛）

其十五

拜啓。秋冷漸く相加はり申候。庭の錦木やゝいろづき晴天の持續するを樂み申候。兼ねて鬼怒川の鮭一尾、呈上可仕約束仕り居り候へども、鬼怒川は支流とて獲物も殊の外少く、なかなか求め候ことも不相叶。若し手にいり候とても停車場へ十里も有之候土地故、京地へとゞき候までには味を損じ候ことゝも存ぜられ候。今秋などの模樣にては、先づまづよき折に出逢ひ候曉に、自ら提げて參るより致方は無之と存じ候。さりとて一尾何とかして、差上たくと存じ申候まゝ、品は劣り候由申候へども、利根川の新鮮なるものを差上げ候はゞ、先以て味を保ち候儀と、幸ひ取手と申處に小生の緣者有之候故、其者へ申遣し水あげ早々の品を汽車便に托し候樣、取はからはせ可申候。御手もとへとゞき候節は、鮭は其日のものと御承知相成たく願上候、荷つくりは如何樣にいたし候や、小生地方にては青笹の枝を以てつつみ申候。銀色の大魚を笹の枝につつむこと小生は大好きに有之候。た

だ秋も既にたけて、鮭もいささか其時期を過ぎたるの憾み有之のみに候。先づ普通は只燒いて醬油をかけ申候。てり燒き味噌漬さまざまに候へども、出來うるならば粕漬にいたしたく、此に及ぶ味なしとは一般の申處に候。利根川の鮭は鬼怒川の鮭よりも常に一貫目に就き五十錢位は廉に候へば、其味も多少の相違は有之ことに候へども、京地に於ける川口の品或は北海道めぐりのものよりは、數等上なるべく存申候。

芙蓉の花全く過ぎて、葵ばかりになり申候。鬼怒川の鮭たべられぬよしは御了解に相成候ことと存ぜられ候。來年の秋にもならば鬼怒川の鮭、靑笹の枝に包んで、自身にも持參いたす樣相成たく候。

次に品物とどき候ことならば、下總取手町高安松之助と申者へ、品物のとどき候由一寸御報じ願上候。此者より送らせ候儀にて、此者は同地の骨接にて十三枚と申せば、數里四方に知らぬもの無之中々威張り居候人物に有之候。可成ならば御

手紙はよき封筒によき紙を選び墨をよくすつて、念入に御したため下され候こと
ならば、田舍者の癖として非常に喜びて人々に振りまはし可申、小生の面目にも
有之候　草々、（明治四十年十月十九日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其十六

拜啓。先便の終りにふと歌を作りかけ申候處、其後一つ二つとつくり足して別紙
の如く十三首に相成申候。改め候ものも有之候　ことしになりてより此樣に出來
申候こと全く珍らしく候まま、早々御目に懸け申候　おわらひ下され候はば本意
に有之候。うたもよみ口ひらけ候はば、なほ出來可申かと存じ候。今年もまたこ
れから間に合ひ可申と存じ申候。次に例の一件以來の小生の手紙まだ御手もとに
候はば、其手紙の末にしたため候歌ども、葉書へなり御しるしの上、其手紙の日
取と共に御報じ下され度、此はこれまでの分を一纏めにして、或は何かへ出して

見むかとも存じ候へども、小生は得るに随つて書きつけ候故、手控といふもの無之相忘れ申候次第、今日聊をしき心も致し候譯に有之候。内證のことなれば、何かへ出すことは見合せ申すかも知れ不申候。葉書なり何なりにて御報じ下され候ことは、必ず御忘れ無之樣願上候。手紙は既に反古に相成居候こととは存候へども、念のため右御願仕り候。早々　（明治四十年十月十九日　自宅より　封書　岡三郎宛）

編者附記「別紙の如く十三首に相成り」云々の歌は次ぎに掲ぐ

其十七

青笹につつみて鮭はおくらむと今年はやらず欲しといふとも
鬼怒川の鮭をほりすといふ人はいふべき時はいまだ來ずけり
白銀の鮭を小笹につつまひてやるべくあらば豈憂へむや
鬼怒川を晝は淀に居夜さればいく瀬の網も鮭は越すといふ

いさゝかのことのさやりに成らなくば鮭にも人は如かずといはむ
藁燒けば空のまなかに立つ煙の成りもならぬに消ぬとふものか
秋雨の垣根の紫苑うちしなひ心がからに我なぐさまず
さびさびに心おもへばいちはやく辛夷の黄葉ちりそめにけり
此日ごろ秋の落葉の散る庭は掃かばさやけし心はあらず
食稻つく臼の底ひに打つ藁のなよなよしもよこころともなく
秋茄子の幹にも似るか來しかたは久々にして絶ゆらくは今
我が庭の芙蓉の莢のさやさやに心落ち居むはいつの日にかも
我が心水つく稻の穗も出でずしどろになりて秋行かむとす

（明治四十年十月十九日　自宅より　封書　岡三郎苑）

其十八

拜啓　田舍の秋はますますおもしろく相成申候。うたのよみ口ひらけ申候ためか、其後すらすらと出來申候。秋もくれがたのさま御目にかけ申たくと、ふと思ひたち候處、昨日三十首ばかり出來申候。まだ頭の奥にいくばくかものの殘り居り候やうおぼえ申候程に、今少しつくりたし、四十首位にしておん目に掛け可申候。觸れこみのみ仰々しくて、おわらひの種に成り申さむかと存ぜられ候。御らんの折つまらぬと覺召され候か、一つ二つは物に成り候か、又はいささか駭かし參らすべきか、鬼や佛などは出で不申候。只これがために大兄の歌ごころを動かすことをえば望外の幸に有之候。

柿の木に攀ぢてかきをくふなど、近來小供らしく相成申候へども、其所にいふべからざる樂みは有之候。柿の梢のゆさゆさと搖れ申すに手をのべて、もぎとる處、大兄にもさせて見たくと思ひ居り候。卽ちここらが田舍者の歌の種に有之候。

先便申上候拙詠いかが御らん下され候や、あのうち一首落ち申候。

秋風はころいたしもうらさびし櫟がくれにさわがしく吹くと申すうたなれどあのうちへいれ候時は、調和致し可申かと存申候。

鮭にまだときどき不申候や、近來雨おほければ、時々利根川の水嵩に變動を來し可申、隨つて漁にも關係いたし連日店頭にのぼらぬことも可有之、其やうなる時は自然おくれ申候ことに有之候

小生も鬼怒川の鮭はたべ不申候。秋茄子の味頗るうまく貧厨はこれにて乏しきを告げ不申候。秀眞君へまたからかひ申候。

土芋も洗へば白し鑄物する人にこひむは浴みして後

など申ことに有之候。追而おん日にかけ可申候。早々。

臺所では只今母と妹と下女と三人にて芋がらの皮をむき居り候。雨の音しとしとときこえ申候。雨によろしきもの薬雞頭ことしはじめて小生はつくり申候。

妹は客に參り居り候。（明治四十年十月廿三日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其十九

拜啓。いつも參堂の折は、氣長に相構へ候て御迷惑の御事と奉存候。されど大兄のおはなしが餘り面白く候まゝ、どうしても尻がたち不申候。だんだんの御仕込にて耳學問は大分上達仕り候。一生のことには餘程の得と存居り候。偖て今年は手筈までいたし候鮭も、御手もとへはとどき不申、何とも面目なき次第、此間中御はなし申上候柿だけは是非共差上申度と、歸宅早々問質し申候處、今秋は柿は以ての外の不作にて、大抵は既にもぎとり候由、折よく天秤商ひをいたし候もの來り候に付、相談いたし候處、今頃枝へつけおくは押しの強き人間故、格別に高く候へど、それにてよければ見つけ申さむとのことにて笊へいれて持つて參り候　昨日枝からもぎ候ばかりに有之候。柘榴は小生の庭なる木になり申候。

留守中庭の都合にて、皆もぎ候由にて母が小生のためにとつておいてくれ申候。酸味なくして甘味おほく上等の品に有之候。少々差上申候。小春の日和は思ひの外に打つづき暖くして心持よろしく候。麥は既にもえいでてほのかに青く見わたされ候。芋ほる處は頗るおもしろく小說の材料にいたしたくと存じ申候。桑畑は大抵黃葉してたまたま桑の枝を、ざわざわとゆるがしながら畝間の芋をほるものも有之候。庭は苔青く掃けばすがすがしく、一日たてば錦木の葉、山茶花のはな散りかさなり申候。梧桐の黃葉も今一霜にてなくなり可申候。淺草の銀杏樹も、今行かねば美しき黃葉は雨の如く散つてなくなり可申候。障子の外には雀がやかましく囀り居り候。障子をあけ候處、はらはらと逃げ申候。葉雞頭既に枯れて、錢菊眞白にさきほこり候。田舍は此故うれしくて堪り不申候。早々。

明日は思ひきつて大演習見に飛び出さむかと存候。（明治四十年十一月十五日）

其廿

拜啓、十七日に御おくり申上候箱入の柿は、まだとどき不申候や、最早日數も經過いたし候ことなれば、途中に間違なき限りは御納め下され候筈に候へども、ことしは兎角くひちがひおほく其邊何とも申上兼ね候、箱へは籾がらを以てつめ候故、ひまどり候とて、潰れ候て物にならぬ樣のことは無之と存じ候　唯柘榴が腐り可申と懸念に不堪候

兼ねて御約束の名篇は、其後御運びのことと存申候　是非其來春のホトトギスを飾られむこと、希望のいたりに有之候

小生も兩三月のうちには、一篇を公に致したくと存じ候、只小生は寡聞なる上に經驗と申すこと少しも無之候故、兎角億劫にて手をつけ兼ね、思ひながら延引仕

り候。然しながら、小生は自己の唯一の資本たる努力は、毛頭をしみ申すまじく候。骨折ることを以て小生は唯一の武器と心得居り候。田舎者は到底田舎のことを書くより外は無之候。

今夜下女下男は蕎麦をひくとて、石臼をごろごろとめぐらし居り候。繩にて括りたる竹の棒が、ぎりぎりと軋り申候。蕎麦は日のうちに洗つて、庭へ干して夜になつてひき申候。百姓どもの家にては庭の土のうへで打つて、それを箒で掃きよせて、更に干して其儘ひいてたべ申候。平気でうまいうまいと申候。百姓はこれから、子供は青洟を垂らし、老人は爐のほとりに頭へ白い灰を冠つて焚火し、壯年者は埃臭くなつて木の葉掻きに忙しかるべく候。櫟の枯葉がころころと轉がつてあるく處など、淋しさに不堪とて貴兄の如きは三日と居たたまらぬことと存申候。大演習には遂世間の騒ぎにうかされて飛び出し申候。草臥れ儲けなれど、壯快は壯快に有之候。百姓等は四日分位の食物を、脊負つて出掛け申候、彼等は桑

畑でも何處でもごろ寢に候。小生等は桑畑などへはいね不申候へども、隨分脚には骨折をかけ申候。此邊も貴兄には六かしからむと存じ候。（明治四十年十一月廿六日自宅より　封書　岡三郎宛）

其廿一

『編者曰、はじめ破れてなし』

小生の御返事は以上の如くにて、以ての外簡單に有之候。要は實質の存在如何に止まり申候。

次に小說葦切は、小生には一向感服出來兼申候。近來鼻孔に一種のフキ出物出來申候程にて、頭の具合もよろしからぬためか　我慢してよみ終り申候。

○アレハチットモ潮來ノサビレタ靑樓ガ現ハレテ居ナイ。

○所々田舍ノ景色ガ力ヲ入レテ書イテアレド、チットモ田舍ラシクナイ。ツマ

リ部ビタ感ジガ寫シ出サレテナイ。

○人物ガ皆田舍臭イ所ガナイ、會話ダケデハ東京人ノシテ居ル所デアル。

○脈絡ガ通ジテ居ラヌ。事件ノ推移ガナイ、故ニ始カラ終ノ章マデ皆一樣ノ書方故飽キテ仕舞フ

○主人公ノ政チャンハ子供故、只目デ見タ形バカリヲ表ハシタト云フカモ知レンガ、ソレニシテハアンマリ細カ過ギル、ドチラニシテモ注意ガ足ラヌ、

○ドコトイツテ際立ツタ描寫ガナイトイツテイイ、ソレハドコデモ同ジ樣ニクドク書イテアルカラ、一ケ所ノ際立ツタ感ジガナイ。

○讀過シテ何等ノ印象ヲモ與ヘナイ、小生ノ如キ潮來ヲ知ツテ居ルモノニハ直チニ不自然ノ感ジガアルガ、知ラヌモノニモ作者ノ寫シタ部分部分ノ景色ガ腦裡ニ描カルルコトハアルマイ、只曖昧ニ竝列シタ材料ヲ思ヒ浮ベルニ過ギマイ。自己ノ描イタ景色ガチツトモ讀者ノ腦裡ニ印象サレナケレバ、目的ハ

寸毫モ違セラレヌノデ、文學トシテ價値ハ零デアル。

○全篇通ジテ豐國アタリノ錦繪デアル。一寸美シイニハ相違ナイガ、隅カラ隅マデ芝居氣ガ失セヌ。拵ヘ物デアル。

ざつと以上の如くに小生は感じ居り候。頭の具合が惡き故、間違つたことをいふかも知れ不申候へども、東京にのみ居住せらるる貴兄などは、寫生趣味とかいふ點に於て、驚かるるかも知れざれど、以ての外に候。いくら田舍に材料が多いとてあんなにこてこて竝べるやうに、目の前に轉がつては居り不申候。少しも驚くに足らず候。只作者は頗る自然の觀察に注意したるためか、第一章の終の麥が蝶になつた所などは、大に稱せざるを得ず候。されど五頁下段の叙景の如きは全く不明瞭に候。

最後に作者は材料を聚めるに骨を折つて之を表はすに骨折が足らず候。第十章の洪水など「雨が降つた水が增した」こんなことで利根川の洪水は表はるるものに

無之候。かへすがへすも此邊は人を馬鹿にしたるものなり。小生は如此小說を終まで讀まさるることを苦痛に感じ候。如此小說のみを連ねてホトトギスを廿錢に買はされ候ことも喜ばしきことには無之候。御下問に預り候ため、以上怱卒に申述べ候。實は虛子君へも手紙出さむと存じ候へども、筆とるが億劫故いやになりて止め申候。草々

十二月五日　　　　　　　　　　節

傘谷兄

甲羽といふ役者の燈籠流しの中の藝者の描寫は、よしきりの作者の力を入れて寫したものよりは、遙かによく表はれ居り候。

御惠送の品物、明日とどき可申候。難有御禮申上候。

伊藤君は蕨が上京するから雜誌の相談をすると申候へども、蕨は到底齒牙に懸くるに不足。貴兄は十分貴兄の意見を表示して、局を結ばれむことを

望み申候。
亂筆〳〵〳〵
御免〳〵〳〵

マダマダ

豐國ノ錦繪ナラバ只一日デ頭ニ入ル故苦痛ハナイガ、文章トナルト、一字一句順ヲ追ウテ、時間ヲ取ラネバナラヌカラ堪ラヌ。（明治四十年十二月五日自宅より　封書　岡三郎宛）

其廿二

拜啓。御盡力により新刊アカネも出來いたし候由、到達の日の速かならむことを祈り居り候。御作の小說先以て拜見いたし度待居候。左千夫君の隣の嫁は到る處に評判よろしけれど、小生には甚だ不透明に感ぜられ候。御作は定めてツヤある

ものならむと、陰ながら推測仕り候　二月分の滿へ何か書く様との仰せ、只今手もとに一篇も無之困り申候　就ては舊稿ながら、旅中の一節を綴りたる寫生文、甚だ短きものに有之候へども差上申候。御ゆるし下され度候　此地は舊年内もあと一日にて、明後日は正月元日と申ことに有之候　今日久々にての雨天明日晴れずば勘定方の人々は難澁いたし可申候　小生の小説高濱君のもとに有之候は、孰れより御ききに相成候や、小生は非常に厭に非常に下品に感じ申候處、高濱君は傑作なりと申來り候　斯く申され候て小生は何となく恐ろしき様覺え申候　材料は田舍のしかも小生の居村に起り候出來事にて、過日一寸御はなし申候通りに有之候。人物には卵屋の（ツアヽ）豚の仲買の四ツ又など出で申候「さうだんべえなあ」と申す言葉も全體にわたり申候。三月分のホトトギスに載する由、其節は腹藏なく御批評くだされ度願上候。

只今下男共繩綯ひ草鞋作りを終りてバシャバシャと風呂にはひり居り候。雨の音しとしとと聞え申候。誰やら板の間のむしろを片づけ候樣子にて、藏鍵がガチャンと鳴り申候。（明治四十一年一月卅一日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其廿三

拜啓。御主人樣御不在にても有之候や、小生より先日差上申候手紙の返事まだ參らず、或は御不在かと存ぜられ候。若し御不在に候はば、先日小生より差上置候帶封の原稿、（切手ハ二錢）富士見町四丁目八番地、高濱淸氏へ御屆け下され度願上候（明治四十一年二月十日　ハガキ　岡三郎宛）

其廿四

コンドノ手紙ノ返事來ヌコトハ止ムヲエズ候。アカネへ出ル松虫草ノ批評是非オ

待申居候。

チラシタマフ勿レ。（明治四十一年三月十七日　ハガキ　岡三郎宛）

其廿五

玉章難有拜誦仕り候。漸く安心仕り候「テーブル」に掛けた絨布、云々のあたりは小生もいささか心づき居候ことに候へども、ふと思ひ浮べ候ては、なかなか止め難く、其ままに相用ゐ候次第、向後はよくよくつつしみ可申候　關山峠の朝の景色は小生も少しく身をいれ申候だけ御手紙殊にうれしく奉存候　只全體にわたりての御意見とは如何のものに有之候や。決して御遠慮なく御きかせ下され度願上候。或は作りものの感ありとのことか、又は輕薄の感ありとか申すことには無之候や。孰れとも小生の切に拜聽致度は如此非難の聲に有之候。

芋掘なども、各所より意外に稱賛の辭を蒙り候へ共、小生は決して其様なるもの

には無之と存じ候、只國民新聞には、

「徒らに長く書くといふことに興味を持つて居る人らしい。」

と申す短き冷評に有之候。しかし小生には深く此語が身に染み申候。それから或二三人の素人の評なりといふをきくに、喰ひ足らぬといふことに一致いたし居候。尤も虚子君よりも未だ作者としての態度が、寫生文式を脱せぬとの非難有之候ひしが、此喰ひ足らぬにてつくづく考へ申候。芋掘には各種の人物を皆客觀して、作者の乘り移りたるもの少しも無之、隨つて輕薄の感を免れずと存じ候。左千夫君の、人物が活々しない、人間を面白がり過ぎて居るといふは、其點を申たるかとも思はれ候。御意見如何に有之候や。

只今開業醫といふものの執筆中、此は馬鹿に長く成り相にて覺束なきものに候。今二三日にて完結可致候へども、來月は一寸京都の花見に行く積故、それから後にゆつくり添削の積に有之候。京都行の折は何かと御注意願上候。島原の太夫のこ

とも承り度候　先は右まで、匆々。

アカネの寫生文も御批評下され度偏に御願申上候。此は近日中に必ず一書云々との御約束により安心して待ち居候　其邊はくれぐれも御ふくみ置願上候。（明治四十一年三月二十二日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其廿六

拜啓西京行いよいよ決行致すことに相成申候。八日の夕刻には貴宅まで伺ひ可申候。珍らしき土産物持參可仕候。

京見物は贅澤なれど思ひ立つては是非もなく候。吉野までもと存じ候。

（明治四十一年四月六日　ハガキ　岡三郎宛）

其廿七

昨夜九時發只今無事着致し候。近江湖畔の菜の花にはおどろき申候。本願寺に普請あり、葦簾の中でヨイヨイヨイヤサと音頭をとりながら重き蛸でも打ちおろす樣なり、其悠長さ加減おどろき申候。切に大兄の御光來を待ち入候。或は催促に電報の十回も打ち可申かと存居候。(明治四十一年四月十一日　京都烏丸通五條南入龜利方より　ハガキ　岡三郎宛)

其廿八

拜啓。薄葉の御手紙難有奉存候。上京も兎角延引自らも心もとなく存申候。過日來母が不快にて臥床致居候こととて、如何とも致兼候。父が不在と申候ては、三人のみの家族のうち小生の他出は到底許さぬことに有之候。是非もなき次第とは存候へ共、只管焦心致居候。しかし今月はどうしても思ひ切つて上京致度と心構をり候。上京のうへにて萬事御配慮を煩し度希望仕候。晴れやかの上京に無之候

故、蟄居同様に致度と存候　其間心しづかに述作致候こと相叶ひ候はゞ、此も妙と存じ候。只今の處島原の太夫の道中を書く積なれど、俗事に妨げられ迚ても望は叶ひ不申候　書きたくても書けぬこと、いまいましさの限りに有之候。扨而アカネの態度は非常に面白く相成申候　赤人論は小生の天然を愛する由、中よくり候手紙に對する議論に候　而して頗る當を得たるものに候　田子の浦と和歌のうらの二首のみは、小生異存有之候　其他は同感に候。しかし惜しいことに、甲之君は未だ天然の趣味を解せず候。

四月と云ふ月を、つくづくと觀じ申候。一日には辛夷の蕾の白くなりたるを見しのみなるに、昨日はもう滿開に候。蛙も三日の夕刻より盛に鳴き出し申候　此からの一日一日は油斷なり不申候。匆々　（明治四十一年四月六日　自宅より

封書　岡三郎宛）

其廿九

拜啓。一昨日は何時になくめざめ申候に付、御暇も不申立ちかへり申候。七時半の列車に間に合ひ申候ため、意外にはやく參り申候。今月中にはまた一寸上京致し可申候　淺井忠氏の遺墨の展覽會は、見遁し申こと不相叶と存候。偖て過日父より御願申候件は、其後先方の系統甚だ面白からざること分明致し候に付、もはや捜査の必要も無之候に付、御控へ下され度願上候。歸宅致し候處、何となくがつかり致し申候。いつもながら亂筆にて申上候。不惡願上候。匆々。（明治四十一年五月一日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其卅

拜啓　今月分のあかねに就き、三井君へ長い手紙書き申候。いろいろ小生の苦情も有之候へ共、我々の書いたものは、肉慾だといふがそんなことは平氣なもので

あるゝ男女の通ずる處を此次には書く積だと申候ゝ何でも三井君も意外なりしなるべく、又大に怒り申候ことと存じ候。然し三井君のいふ處も頗る愉快に候へば、縱横にやるがよろしと存じ候　眞面目にやる惡口ならばどれ程やつてもよろしと存候ゝ大兄にもそんなことには構はず、大に突つ込んだ小說をお作りに相成候は如何に候や、自然派などと大兄はさう毛嫌ひする柄には無之と存じ候ゝ自己の眞實を吐露してする以上、何處へ遠慮も要らぬことと存じ候ゝ此間の御はなしの趣向是非御綴り相成度候ゝ但しあの泥棒の兒の噺は、「武藏野」の中のモーパッサンの糸屑と同樣に付、見合せ候て可然と存じ候。何でもいいから是非とも御執筆の程願上候ゝ匆々。

なほなほ此間名古屋で秋圃に逢ひしに、我々の歌は出來不出來は兎に角、一度は見せて貰ひたいとのことに付、ふと昨年秋差上候手紙の歌を今回はあかねへ出して見度と思ひうかべ申候ゝ大兄へ差上候手紙のことなれば一寸困り

申候。尤も先頃は左千夫君へおくりおき候を出す譯に成つて止めに相成居候次第なれば左千夫君へも相談掛け申候。出してもよいといふなら出して見度と存じ候。原稿は小生方に有之候故、御手數を煩すことは無之候。

昨日雨、母と旅中をかたらひて歌十首ばかり出來申候。小生には珍らしきことに付、此は出す積に有之候。淺井忠氏の遺墨展覧會見度と存申候。期日は何時に有之候や、同時に御通知願上候。（明治四十一年五月五日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其卅一

明日上京、左千夫君相たづね可申候。御宅へもうかがひ申度存候。明後日に相成申候。御用も御座候はば、左千夫君へ一寸御報願上候。（表面）（明治四十一年六月十二日　水戸より　太田西山御殿繪ハガキ　岡三郎宛）

其卅二

御返書拜見仕候。先便にては申足らざりし爲め、いたく大兄へ疑心を挾み候樣にも相當り何とも申譯無之候　小生も上京の念は山々に候へば、事情すつかり父へも打明け十日後二三日のうちに、是非共御相談仕度と存居候　大抵望相叶ひ候儀と存ぜられ候

浮說の出處は只今ふつと、胸にうかび申候。御面談の折可申上候　碧梧桐の手紙餘り猛烈なるため一人にて包みおくわけにも不參、卒爾に先便認め申候ため、遂に御氣さはりにも相成重々申譯無之候。御宥恕の程願上候。

何事も御面談の折に讓り申候。匆々。（明治四十一年八月五日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其卅三

拝啓、御申越に從ひ上京可致候處、其後左千夫君より手紙參り候に付、其結果同君へ依頼致して上京不致候　不悪御願申上候
小生は此廿日に出立上州草津の奥より案内者を傭ひ、信州秋山の溪谷に入らむと存じ候　此山路旅客未踏の地に有之候　首尾よく成功せば、なかなか面白き事實も伴ふべくと存じ候
先は右まで　匆々　（明治四十一年八月十六日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其卅四

拜啓上州草津ノ奥入山ヨリ、岩魚（イワナ）釣ヲ案内ニシテ此秋山ヘ越エ申候、此間十里、今年ニ入リテハ此間道ヲ通過セシモノ小生ノミ、入山ヨリ六里ニシテ案内者ノ小屋、此ハ彼ガ溪流ニ岩魚ヲ釣リテハ、夜雨露ヲシノグタメニカハグルミノ木ノ皮ヲ以テ葺キタル、莚二枚敷ケバ席ノナイダケノ小屋ニ候ガ、此所ヘ一泊シテ翌日

秋山ヘ入リ申候　難道トモ難道トモ道ナキ處ハ、虎杖苧麻ヲフミシダキテ進ミ候。岩魚釣ハ此ノ深山ヨリ八里ヲ草津ノ溫泉ヘ出デテ、岩魚ヲウル由ニ候。此ノ秋山ノ溪谷ハ一昨年ノ彼岸ニ來リシコト有之候ガ、中津川ニ添フ信越兩州ヲフクメテ秋山ト惣稱致シ候。食フモノハ素ヨリナケレド岩魚アリ僅ニ口腹ノ慾ヲ滿ス、サレド此ノ一軒屋ノ溫泉宿ニハ砂糖モ醬油モナキノミカ只今鹽モ品切ニ候。溫泉ハ對岸ノ河原ニ湧キ、激湍ニ架シタル一本橋ヲワタリテ行ク。浴槽トテナケレバ、ゴリゴリト砂利ニ臀ヲコスリツケテ溫リ申候。熱イカラト少シ搔キ立テレバ、木ノ葉ノ腐ツテコマカニ成ツタノガ浮キ出シ、湯カラ出テ見レバソレガ身體ニヘバリ付キ居リ候。此溫泉ニ今居ル老爺ハ七十ナレド、今年ノ春モ熊突キヲシテ熊ヲトリシ由、此溪谷ノ住民ハ皆熊ト格闘致シ候。此ノ切明カラ郵便箱ノアル所マデハ二里半、郵便局マデハ七里バカリ有之候。ソレ故此葉書モ書イテハオケド何時函ヘ入レラレルカ分リ不申候。兩三日間此溪ニ祭アリ青年ノ本能ヲ滿足セシヨ

候。此ハアトノハナシ。（明治四十一年八月廿日　長野縣下高井郡堺村切明温泉より　ハガキ　岡三郎宛）

其卅五

昨日澁といふ所にて數日來の、東京新聞を借覽致し候に、ホトトギスの廣告あり、伊藤君の小說掲載さるる由、而して其筋書に讀致つておどろき申候。廣告の如くば潮音を書きしものなり

今夏伊藤君西遊の後、潮音方にて不快なりし由申候、それにて十分推察可致候。潮音氣がついたら不快ならむ、不和の基にならねばと存ぜられ候、讀まねば詳しくは知り兼ね申候。（裏面）

秋山の溪谷に七泊一昨昨日出立、山又山を越えて草津につき申候、澁峠とて上つて下るが七里の難道を越え申候。此四日間右足に出來たる腫物のため、非常の難

儀致し候。澁峠も信州に面する方は晴なるに上州分に下れば驚くべき濃霧にて、草津の如きは三四日以來白濛々たる底に有之由に候　足がいたくて淚が出相に候故、明日は一日休息可致候　實は淺間へ登り度初志なりしが、此天候ではとても覺束なく候　此宿に美人あり（表面）（明治四十一年九月五日　上州草津溫泉山本館より　信州澁溫泉琵琶湖繪ハガキ　岡三郎宛）

其卅六

拜啓　伊藤君の家は昨日の雨にて、殆んど床に水のつくばかり相成隨分の騷ぎ致し候由、今日もまだ庭は一杯の水に有之候。一時間ばかり話して歸り申候。あの邊に住む人は全く不仕合と存申候。移轉したいけれど千圓はかかるから、それも出來ぬとこぼし居り候　小生は今朝歸鄕の筈に候處、殘る用ありて午后三時半に出立致し可申候。例の一條にて本鄕へ御出で下され候折は、出來ることならば本

人を一日御らん下され度、其邊は何とか御工夫相立ち可申と存ぜられ候。又小生の母が八釜しいとの先方の懸念に候由なれど、世評には左樣のことも候べけれど、此邊は小生も數年以來心掛け居り候こととて、毫も懸念は無之候。今回の緣談は先づ母が非常に氣乘り致し候て、持ち上り候ことなれば、苛めがましき樣のことはなし得べき道理も無之、他人の口の端にかかり候樣のことは、仕出來し申すまじく小生はかたく信じ居候。よくよく御ふくみ下され度願上候　早々。（明治四十一年九月十九日　自宅より　封書　岡三郞宛）

其卅七

拜啓先頃中御目にかかり候折歌を國民新聞の國民文學欄へ掲載候樣、虛子君へ御話し下さる由御申きけ有之候處、昨今秋冬雜詠十五六首を得申候に付、右御配慮にあづかり度と存申候　如何のものに候や　左千夫君へ體裁よく致さねばなるま

じくと存申候　御意見相うかがひ申候。匆々。（明治四十一年十一月廿三日　ハガキ　岡三郎宛）

其卅八

拜啓過日は御高諭誠に難有奉存候。一途只創作に志し可申候、今回の小説は迚ても幼稚の評は免れ不申候、今月或は來月中には、鰥夫と申す小説を書かんと存居候、此は今回のものよりも、纏り可申かと豫期致居候

歌のことにつきては、小生は只自分の歌が出來候はゞ、其時自分の歌だけを載せ申度との、存念に外ならず候。虛子君は或は小生が選者になる希望と、誤解致居候ことには無之候や、一寸疑も起り申候。右葉書を以て甚だ失禮に有之候へ共、御禮かたがた如此に御座候。（明治四十一年十二月二日　自宅より　ハガキ　岡三郎宛）

其卌九

拜啓昨日潮音君より手紙參り、例の濱菊一條にて、小生の意見等問越され候。大兄へも照會致し候へ共、委細を盡さず候由。小生は洵に此の間には閉口致し候へ共、伴を申ことは小生の能はざる處故、逐一申述ぶる積に有之候。潮音君は以來絶交の覺悟に候由、此は必然のことと存候。同君の手紙は其常識的にして、些も激する處なき今更感じ入申候。

小說御出來の由。日本婦人新年號は、是非共一冊御惠贈被成下度相待申居候。小生のは前半は物にならずと存候。後半だけ御らん下され度希望仕り候。唯小生としてはどうして出來たかと自分も思ひ申候。匆々。（明治四十一年十二月十一日 自宅より

封書 岡三郞宛）

其四十

拜啓昨日途中にてひとつ、今日さるかたへひとつ、みやげ物つかはし申候　其に面目をほどこし申候　御厚志の程、難有奉存候　粽のとゞくをひた待にまち申候。此もすこし吹聽致度と心構いたし居候　匆々　（明治四十二年一月十七日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其四十一

拜復御移轉の由此より何かと御都合よろしかるべく存ぜられ候　唯南新堀とは少しく意外に有之候　されど電車有之候ことなれば、格別不便のことも有之まじく、訪問の客などの餘計に參らぬ利益は定めし可有之と推察仕り候　兎に角御家政上の面目を一新せられ候儀と、小生は御喜び申上候

小生數日前より惡寒を感じ一昨夜は九度五分の發熱にて、昨日より臥床の姿に有之候　十年以來嘗てなき床上の人となり申候　うつぶしに成れば腰いたく、御向

になれば足くたびれ候て、今朝夜明などは獨り苦しみ申候。此も兩三日にて全快可致とは存候へ共、常に健康を誇り居たる身のいまいましさに堪へ不申候　過日御願申上候雜誌御郵送下さる由、御多忙の折をも辨へず申上候て、御氣の毒に存候。今夜も眠られず候まま此狀認め申候　匆々

小生例の治療のため、三月中旬か下旬頃上京致度と存居候へ共、人目を忍びて永代の近くへなり下宿致度存居候。如何のものに候や、尙治療者の手加減にて、三ケ月といふもの二ケ月位には出來申すまじく候や、其邊の處も御暇の折御しらべ被下度、尤も此は病勢如何によることとなれど、何とか其處に工夫も可有之候。又一ケ月の費用一切としては何程位用意致し候はば足り可申候や、他人へは伺兼ね候ことなれど思ひ切つて御尋ね申上候。御迷惑はさることながら何卒御返事被下度願上候。（明治四十二年二月十九日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其四十二

拜啓風邪をひいて無理を致候ため、まだ臥床いたし居候。雜誌まだ御發送無之候はゞ、文章世界三號だけは御發送下さらずともよろしく候に付、右思ひつき候まゝ申上候。（明治四十二年二月二十五日　自宅より　ハガキ　岡三郞宛）

其四十三

拜啓只今上野方面より、伊藤君、胡桃澤勘内、古泉千樫兩君同道相うかゞひ申候。前記三君は大龍寺へ向はれ申候。伊藤君よりは宜敷と申ことに有之候。

○

持参致候は廿一代集の一部にて、水戸藩主源烈公の手澤の書と申す由。朱書は皆烈公の筆に候。全部取揃有之候。所有者は水戸の者にて好事の人に賣却致度旨にて、小生へ依賴有之候。他に心當りも無之候に付、上京を幸に大兄へ御相談申上

ぐる次第。望み手も有之候はば、一寸御手數被下度御願申上候。

此書册小生などには薩張難有からず候へ共、相當の希望者もなきに非るべしと、所有者へは申置候。可成至急を要し申候。但し小生の信ずる處にては烈公朱書に相違無之候。漢籍の方却而賣行よろしかるべく候へども、精々御勘考被下度、御迷惑恐入候へども御願申上候。

小生は水戸よりこなたへ參り候て、時日も經過いたし候へば、明日あたり歸宅の筈に候。御面會致候はば、珍談も有之候ものを、遺憾に存申候。匆々。（明治四十三年四月十七日　東京より　封書　岡三郎宛）

其四十四

拜啓過日は御不在之處へ相伺ひ殘念仕り候。時間の都合にて重ねて申出で難く、歸來只管御返書之程相待申居候。御多忙の折柄恐入候へ共、何卒先日申上置候樣

御取計らひ被下度、なほ格別見込も相立ち不申候はゞ、彼の書籍は

水戸市上市南三ノ丸　柴孫次郎

宛に御郵送被下度御願申上候　御迷惑之程は御推察申上候へ共、此には少々事情も有之候次第、不悪御配慮被下度右重ねて得貴意候　匆々　（明治四十三年四月廿五日自宅より　封書　岡三郎宛）

其四十五

拝啓御無理之御願致候歌集之内、一冊如何に候や、持主より請求致来候に付、何卒（水戸市上市南三ノ丸、柴孫次郎）宛に御郵送被下度御願申上候、此は恐入候へ共、至急を要し候に付、其御含みにて御願申上候。匆々。（明治四十三年五月五日　自宅より　ハガキ　岡三郎宛）

其四十六

拜啓梅雨も晴れる晴れるとばかりにて、鬱陶敷頭おもく候。「土」の筆も澁りて動かず、動坂より賜はる東京の珍味に接しなば、筆もすらすらと動くやうに相成可申か、只釣られ候ては罪な人と恨み可申候。それとも明日にも來るかしらと、空を仰いで待ち申候。十一日。（明治四十三年七月十一日　茨城縣眞壁郡河間村與田氏方より　ハガキ　岡三郎宛）

其四十七

今日は勉強の後頭痛く成り堪へ難く候に付、此にて御免被下度候。蟬の聲はまだ鳴き申候。蜩は動坂にも鳴き候ことと存候

拜啓　御惠贈の品今日正に落手仕り候　京都の製法と申すことにて、殊の外吹聽打ち寄りて樂み申候　小生も始めての品とて暫くの間は打ち眺め申候　然し斯樣

に御厚志に預り候ては今更御催促申上候こと、勝手がましき仕打と御氣之毒の次第にも有之、何とも汗顔の外無之候。御詫は幾重にも可申述、先日の書狀は御火中被下候ともいづれともして、御宥恕之程奉願上候。小生の病氣は格別之事は無之候にも不拘、肛門の周圍と申すものは、甚だ暇どれ候ものの由にて、如何共困り居り候。人間といふものの情なきものにて、少しの損所ありても元氣乏しく、強ひて筆とり候てもうまく參らねば苦痛のみ多く候。然し御蔭を以て今日は格別愉快を感じ申候。猶更小生は動坂から小石川の電車まで歩き候こと有之候故、蠣殼町まで御足勞の程身に染みて難有奉存候。田舍は明日から六月の祇園祭とて、田植の後の遊び日に有之候。漸く晴れて青田の畔の萱草の花何とも申やうなく美しく候。先は御禮まで。匆々。（明治四十三年七月廿日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其四十八

拝啓　水害當時は態々御見舞被下候處、何かと取紛れ失禮仕り候。小生地方に於而も隨分ひどき處も有之候へ共、居村のみは格別のことも無之候。然し出先にてはかなりの目に逢ひ申候。病氣も中途に打棄て「土」の脱稿迄は骨折り可申候。成るべく早く結末をつけよとのことに有之候へ共、百卅回位にわたらねば濟み申すまじく、段々厄介物にされ申候。社の營業部に於ては、殊に澁面致し居る由申候。女學生に喜ばれぬが一つの原因と申候。小生も不評判は覺悟の前故、驚き不申候へ共、回數の短縮は堪へ不申候に付、手加減をせぬため社の不利益になるならば、社のためにはじめたること故、只今にても中止すべき旨申遣し候。それもこれも身體の工合惡く後から追はれ候ことのみ苦痛に候。思ひながら昨日まで三日怠け申候　今日十五日からの分を淸書致すことに有之候。先は右まで申進め候。匆々。

（明治四十三年九月十日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其四十九

拜啓。上京の目的物に候芳崖の遺墨展覽會も、十五日まで延期之由、今日讀賣新聞にて承知致し候に付、小生の方も延期仕り候「土」も今少しの處故こちらにて原稿認め申度候　其の方餘程便利に有之候。冗漫なる「土」も百五十回にて完結の筈に有之候。筆を執りはじめてより滿六ヶ月と更に數日を費し申候　こちらにて書きあげ候て上京致候へば何かとゆつくり噺も相叶ひ可申候。實は小生此の中旬には京都方面への旅行相試み度心算、大垣の北三里の地が第一の目的地故、潮音をも訪問可仕、東山一帶の紅葉後れねば三尾の紅葉も探り申度心得に有之候。奈良へ參りては御所柿も味ひ可申、時間があれば讃岐之高松に親戚の者を訪ね申度と、慾望は限りも無之候　七、八日頃の上京と存じ候。或は其の足にて旅行致可申か、斯う書くうちにも氣がもめ候てたまり不申候。

四月中も御目にかからず積る噺は山々に可有之候。御宅までは田端停車場から何

町位に候や、上野から参るよりも近からむと存じ候へ共、如何に候や、至急御通知被下度候。
昨夜よく眠らずさくさく致居候、匆々。（明治四十三年十一月二日　ハガキ　岡三郎宛）

其五十

拝啓御懇篤なる御葉書今日拝受仕り候。實は小生明後日出發之筈に有之候處、目算全く外れ候て京之秋もとても追ひつけ不申、十二月初旬の寒き夜行の汽車に手頼らねばならぬ事に相成申候　尤も十日少し過には妹を連れて一寸上京見物させたく心構致居候へ共、其の節はどうも御うかがひ致兼候ことと存申候　小生も非常に遺憾に存居候ことながら是非もなしと諦め申候　右不取敢申進め候　匆々。
（明治四十三年十一月五日　ハガキ　岡三郎宛）

其五十一

かへりには御たづね可仕候。

拜啓、今日兼ねての志望を達して、竹林の智識を得べく、美濃の大垣を差して參り可申候　時間の乏しきためおたづね不仕候。

別封は昨夕櫟林を狩り立てて獲たる、昨年生の雉子に候。うまきこと受合故是非共御手もとにて、御料理被下度希望仕り候。

小生の旅は最短十日間に候へば其の間に左の項是非共御取調被下度、年末にて恐入候へども何卒御願申上候。

茨城縣結城郡飯沼村大字崎房　秋葉三太夫次女　きし子

右本月（年？）春三輪田女學校を卒業致候者に有之候が、在校中の品行成績容貌等一切の事項、御手のとどき候だけ十分御聞質し被下度奉願上候。此は素より新夫人としての資格調査に有之候。何分ともよろしく吳々も御願申上候。匆々。

（明治四十三年十二月十五日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其五十二

拜啓　寒くなつたり暖くなつたり晴れたり曇つたり其うちに雪に成り可申候。小生も今年はつくづく貧乏之味を嚙みしめ申候。
別封は小生の自慢して差上申す品物に有之候。一つはぜんまい一つは夕顏の干瓢に候。いつか差上候天蓼木の實の出た越後の山中より小生の知人へ送り來りしものに候。先頃も申上候通り、中學校の教師で小生の近くへ來て居る人の細君が、越後の山中の者にてそのお婆さんが娘可愛さに、天蓼木と此とを年々送るが例に相成居候。熊と格鬪する人間の住むあたりから、六七里の下流に此お婆さんの家は有之候　小生二度まで參り候。昨年參り候時は、干瓢を作る時期なりしため、屋根の廂へどの家でも此を干しておきしを見申候。普通の長い夕顏を二つに割つ

て、其各をば更に切り放さないやうに四つに裂いて、棕梠の葉のやうな形に屋根の廂へ干し申候。此邊のことは今年中に白樺雜筆といふ題にて、一篇を草したく考へ居り候　小生の居村から七八里北へ行けば立派な干瓢の出來る野州の地なれば、干瓢は少しも珍らしからぬを、世間を見ないお婆さんが娘可愛さに手づから作つて送る處、小生には上等の柔かな干瓢よりも興深く候　其代りこの干瓢いくら煮ても牛蒡の如く硬く候　夕顔六本だけの分を君へ差上申候。うまいものや上等のものは小生方に無之候　又有つたところで君に送るべく、それは餘りに普通と存申候　此の干瓢に至りては蓋し珍の珍なるものなるべくと手前味噌以ての外に吹聽仕度候

秋山第一の熊突の名人大赤澤の長右衛門の病牀を訪ひし時、此の干瓢を作り居たるを見申候。此も白樺雜筆へ。

尙小生の家にうまいラツキヨあり送り可申や、色は濱の船頭の如く黑く候。

漬けてから四年に成る品物なり、酒が全く砂糖に變じたる微妙の作用を見るべく候、御所望ならば差上可申候　匆々。（明治四十三年十二月二十四日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其五十三

拜啓　御葉書難有奉存候　小生は別に何とも成り不申只此の數日間は寒中に稀有なる雨と快からぬ暖かさとに頭腦を苦め居り候までに有之候　手紙を書くことがどうしても厭なる癖が只今も起つて、それにて御無沙汰致居候　此の癖は小生の普に満ち只一つのものに有之候　此れ以上申上げ候ことは、小生も苦しくて堪り不申候　少し氣乘りがして參れば長い手紙にて驚かし可申候　先日探索方御願申上候所、両親は至極の賛成なれど、本人が田舎は厭と申すことの由にて、不調に終り申候　本人の年の足らざることが、無分別ならしむる所以と存候　匆々。

（明治四十四年二月三日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其五十四

拜啓久しく御たよりも無之或は御家内に何事か有之候ものかとも打ち案ぜられ申候。唯御多忙故と申すことならば何よりの事に奉存候。雨十日目にして晴れ今日風涼しく、靑苔の上に梧桐の影長く横はりて徐ろに動搖致居り候。雨中稀に蜩をきくに寂しく候ひき、今夕は如何に候べき、蟄居の身所用のため明後日上京可仕候へば、兎に角一寸は御たづね仕度存居候。匆々にして歸鄕のことに候へば、心ゆく御はなしは承り難かるべくと存申候。運命は大兄をして健鬪の態度に出でしめ申候。小生も大兄と同一の運命に陷り申候。小生は土に依りて衣食すべく、竹林は小生が唯一の加護者たるべく候。現下筍の成長時期、日として竹林を巡視せざることなく、近く形成せらるべき林相を胸裡に描いて獨自ら樂み申候。「土」以

來筆執る機會なく惱める頭腦を强ひて讀書に力を致申候。自己の本性の下根なるを知るの外何の得る處もなく、只管に筍の生育をもどかしく監視致居候。近況此の如く候。匆々

若し小生おたづね申候て御都合よろしからずとならば、明後七日にとどく樣に淺草區黑船町十五飯田方へ葉書御つかはし願上候。(明治四十四年七月五日 自宅より 封書 岡三郎宛)

其五十五

拜復。濱金八と申す人の存在をすら、小生は今日まで知り不申候。されば如此人ありて書肆へ如何なる交涉を開始致候ものか、小生には一向合點不參不思議のことを聞くものかなと驚かれ申候。小生は著作上のことに就いては法文が如何樣に規定しあるものか更に辨へ不申、指定せられたる手續を經て著作權を確め置かざ

れば、作者は法律上無能者に相成可申ものに候や、兎に角「土」出版に就いては貴兄以外に何人へも委任したることは無之、又委任するとしても貴兄へ無斷にてする樣のことは思ひもよらぬことに有之候。若し此後交渉進行して書肆に於て引受けくれ候場合は、法律上のことは御迷惑ながら貴兄へ御委任致度希望に有之候。

今年風おほく田舍人は作物の被害を呟き申候

小生は今年はじめての百姓なれど、夏蕎麥大豆などいまいましく候　竹も二度の風にて無殘の目に逢ひ申候　竹は小生死活の分岐點に立つて栽培しつつある處、目として其土を見ざること無之候　筍の枝漸く開き候處へぢつとして雨蛙の乘つて居るなど、まだ畫工も知らざるに非ずやと思はれ候　夕暮近くなればおどろくべき多量の水を吸收する若竹は、枝の先から玲瓏として透徹せる水球を止むことなく蓄へては且つ落し申候　雨蛙は冷たき水滴の頭上に落つる時、比較的大なる目をぐりぐりと動かし申候　細き若竹の幹を抱いてぢつとして居ることも有之候。

どんな時でも咽喉をふくふくと絶えず動かすが彼の特色に候　雨蛙も可憐なるものには候はずや、只其の聲を限りに鳴く時のみは鬱陶しき雨の來るべきを感ずるが故に、さびしく心細く候。今日天曇りて風やまず騒々しく候。小生は畑の陸稲の十分の收獲ある樣にと心に祈り申候。昨日堆肥の製造に手を貸して今日身體いたく候。一昨夜は殆んど眠らず、此は珍らしく三年目にて歌が頭に浮び出でし故に候。眠るも惜しき故蚊帳の外にランプをともして書きつけ申候。乘鞍岳を憶ふといふ題をつくべきものにて、十三首程有之候。内容は何もなく候故、つまらぬものに極り申候。あらら木の記念號へ發表可致候。其節は御笑可被下候。何は兎も角「土」の方は萬事御委任仕度希望に候故、可然御運び被下度願上候。匆々。

（明治四十四年七月卅一日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其五十六

拜啓突然上京一兩日は滯在可致候、其間暇を見て一寸御伺ひ申度候へ共、御在宅の御日取も相分り不申候に付、御通知の程願上候　電話ならば番町四番へ御かけ被下度、小生不在にても相分り可申候。十六日（明治四十四年十一月十六日　小石川高田豐川町四三小布施氏方より　へかキ　岡三郎宛）

其五十七

拜啓昨夜診察を受け申候處、如何にも卽刻に申渡され小生も大いに面喰ひ申候。それにつき是非共御目にかかり度候へ共、日曜までには餘暇も有之間敷推察仕り候。一寸葉書にて御返辭被下度願上候。廿二日。匆々。（明治四十四年十一月二十二日　小石川區高田豐川町四三小布施氏方より　へかキ　岡三郎宛）

其五十八

昨夜は失禮仕候。榊田氏へはまだ參り不申。今日午後岡田博士の診察を受け申度心得に有之候。木村氏も曖昧の話に有之候へ共、此人を手頼る外は無之かと存ぜられ候。身體は別して變化も無之、只心の落つかぬが困り申候。先程人形町にて乘換、水天宮前までの間にて、鼠骨氏に邂逅、日本橋の菊地といふ人がよろしかるべしなど一寸申され候。如何のものに候や。御しらべ被下度願上候。匆々。（明治四十四年十一月三十日　東京より　封書　岡三郎宛）

其五十九

拜啓昨日入院仕り候。何か御申きけに相成るべき筋も有之候はゞ、腹藏なく御願申上候。（明治四十四年十二月六日　中根岸根岸養生院より　ハガキ　岡三郎宛）

其六十

拜啓今日はわざわざの御來訪恐縮の至に奉存候。御もたせの品近頃不足の折柄に有之候。根岸には碌なものも無之候へば、數日間の樂みに有之候。手足の丈夫なる病人に候へば、折々は運動に出で申すことに有之候。手術は今日から受け申す筈、何處にも切取る由申候　先は右御挨拶まで如此に候。（明治四十四年十二月八日　中根岸根岸養生院より　ヘケト　晒三郎宛）

其六十一

拜啓昨夜第一回の手術を受け申候。場所が場所故極めて簡單に何の苦痛も無之候。此の手術造詣ある人何人も知悉せざるの理なしと存候に知らずと稱したる木村氏に對し小生は深く疑はざるを得不申候。今日只小生は在院の長きにわたるを恐れ申候。（明治四十四年十二月九日　根岸養生院より　ヘガキ　晒三郎宛）

其六十二

拜啓其後御病狀如何に候や、こちらも寒く心細く存申候　伊藤君もふつと消息無之風邪など引かれ候にかと案ぜられ申候　匆々　（明治四十五年一月十五日　下谷中根岸町養生院より　ハガキ　岡三郎宛）

其六十三

意外にふりつづく雨に私もこまり申候。齒がいためども下駄もなければ外出も不叶ぼんやり致居候。兩三日前芳雨君來り大兄が大に前年に比して、おもしろく成りしと申居候。箋きれて是非もなく候　小包にしてなり御送を願上候。（明治四十五年二月三日　下谷中根岸養生院より　ハガキ　岡三郎宛）

其六十四

拜啓昨日の御話如何相成申候や、春陽堂ならば小生も非常に望む處にも有之、是非共成立致候樣御盡力願上候。實は今日參上可仕筈之處、齒痛のため昨夜一睡も致不申惡寒を感じ候譯合故、遂失禮仕り候。前申上候筆はすつかりきれ申候ため手紙も差控居候場合、何卒市内小包にて御とどけ被下度偏に御待申候。退院の上は今一度木村氏に診察を受け申度候へ共如何に候や、篤と御相談申上度、此はいづれ拜眉の折に可申上候。十二日。(明治四十五年二月十二日　下谷中根岸養生院より　ハガキ　岡三郎宛)

其六十五

拜啓本日禿氏氏來り春陽堂の番頭來り御噺の七十五圓にて取極め申候。午后槇町の齒醫者へ參り候序に平福君を國民新聞社にたづね表裝の意匠も賴み申候。此上は夏目氏へ直接序文の依賴をするまでに有之候。齋藤、禿氏兩氏への謝金は何程

にて可然か、御面會の上相定め申度と存じ候。組込の見本近々持參可致由、春陽堂申候に付、其上は又御指教相仰度いづれにしても月曜日に相伺ひ可申候。御ふくみ置被下度候。今夕養生院の副院長に診察を受申候に、木村氏の咄とは大に異り申候。いづれが正しきか判斷に苦しみ申候。只何事も二三日の後に可申上不取敢御報までに申進め候。匆々（明治四十五年二月二十三日　下谷上車坂町那須館より　ハガキ　岡三郎宛）

其六十六

拜啓　十二の組見本今朝とどき申候。それに付是非共御面談申度候へ共御都合は如何に候や、明後日曜の午前丈は小生の方時間あき候故、御たづね仕ること相叶ひ申候。午後は人を待合せ候約束有之差支申候。日曜日午前御在宅に候や御知らせ被下度候　小生は火曜日あたりに歸鄉仕度存居候。（明治四十五年三月一日　下谷上車坂町

其六十七

拜啓御宅を訪問仕候處御留守、小生方へ御出の由、尤も待つ樣にとの仰は承知仕り候へ共、何分共大兄に對しては小生時間の上には信用不仕候に付、直樣取つて返し申候。然るに小生出掛け候て間もなくおたづね被下候趣、今日も此にて半日を無駄に費し遺憾千萬に存じ候　小生より差上候葉書御覽被下候ものに候や、御落手なされ候てのことならば大に御恨み申上度、實は何とか御返事有之ことと存じ昨夜あたりも非常に心待に致居候處御消息も無之故、今日午前は御待受被下候ものと存じ、それも御多忙の處を空しく御引止め申すことも不本意に付成るべく急いで參り候次第、小生は田舍者に似合はず約束の時間はなかなか正確に相守り申候。大兄も書ける手にてたつた一通の葉書へ怠り候ため全く行違を生じ申候こ

とと存じ候。今日は四時頃までは在宿それから有樂座へ見物に參り可申候。思ひ掛けぬ寒さと曇とにてそれやこれや心持よろしからず困り申候。只半日なれど上京以來時間を無駄にしたるは今日がはじめてに候。（明治四十五年三月三日　下谷上車坂町那須館より　ハガキ　岡三郎宛）

其六十八

給仕の女が一皮むけて居るので、何處だときけば伊賀の名張だといふ、卽ち名張をとめである。かういふ時酒の飲めないのは殘念の次第である　外から土地の若衆らしいのがみいちやんと呼んだら、戶を締めながら彼女はおはひりやすといつた　隣は百姓家であたりはすべて野幕である　梅は七日おくれた　梅は兎に角櫟の木が一杯なのにひどく惚れた。明日は笠置から京へ。（表面）（明治四十五年三月廿一日　大和月ケ瀨より　月ケ瀨風景桃香野の渡船の繪ハガキ　岡三郎宛

其六十九

當病院に入懇の人有之耳科主任教授に診察を受け申候處、暫時入院のことに相成今日其運び致申候　かの患部を此度はそつくり切り取るものの由に候。外來でもよいとのことなれど宿屋に居るよりも廉價にあがり申候故早速參り候。昨日は午後四時の汽車にて姫路までと思ひしものをすつかり目算違ひに相成申候。これで今年も思はぬ京の花見致すことに相成申候。「土」の出版に就いては小生方の申分一向通り不申、本屋のいふなりに相成申候。（明治四十五年三月廿六日　京都醫科大學附屬病院十一病舍耳科より　京都三十三間堂の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十

ここは流石に養生院の全く營利的なのとは違ひます。成るべく早く入院者には退

院をさせる方針ださうです。さうでないと患者を澤山取扱ふことが出來ないし隨つて研究といふことに差支が生じる譯なのです。小生の友人で內科に一人小兒科に一人共に學士で助手をして居るのがあるので、特別に教授の診察も受けました。本來なら入院はさせないのをそんな手蔓からここへ厄介に成りました。手術は專門學校出の助手がしました。岡田氏がとつた全體の幾十倍を一遍に切取つたのです。少し大きく取つたのでなかなか捗ざとり難く二時間半かかりました。醫員の不馴な爲でもあります。廿七日に手術していまでもまだ痛いのですが此は養生院で仕た時もおなじですから何でもないのです。もう退院してもといふのですが、どうしようかと思ひます。

ここは當時三等室によりほか空席がなかつたので雜居をして居るのです。二等は一室のみで一等はないのです。それで馬鹿に廉價ですから宿屋に居るよりも却て輕便に思はれる位です。京はまだなかなか寒いのですが、それでも昨午后から外

出して丸太町橋から二條の橋の方へ出たら何處かの別莊らしい川端の構内に彼岸櫻がさいて柳が黄色く成つて居るのです。どうしても京の花見をしなければならなく成りました　花の中には美術展覽會もあります　昨日も骨董屋の入札があつたので行つて見たら栖鳳の作品が大分にありました　輕快な筆致は感服するが矢張應擧以來の薄つぺらな處が免れません　どうしてもう光悅だとか宗達だとかいふ俤はなくなつたのでせう

今日は日曜日なんですが何處かへ行つて見ようかと思ひます　京も大分見たのですが今度はいつもの樣に暢氣でもないのです。

末筆ながらどうか本屋の方へ御掛合下さい。小生にはうまく參りません。著者へくれる部數のことも十分のやうにお願ひします。（明治四十五年三月三十一日

京都醫科大學醫院十二病舍耳科より　封書　岡三郎宛）

其七十一

此で二度目の吉野登山、全く偶然の出來事に候。今日來り此も偶然に藏王權現の祭典に町内の血氣のもの輿の如き大鼓臺といふものを揉みにもむ處、僧侶の先驅が奴姿で勿體ぶつた足の運び樣をして練る處など見申候。此前は少し花に後れたりしが今度は眞盛に候。但し先度も雪ふり候あとなりしが今日も今朝少し積る程ふりし由なり。傷のいたみ殆んどなくなり候に付一昨日退院仕り候。（明治四十五年四月十二日　吉野山より　大和吉野山一目千本櫻の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十二

開聞登山を記念するために一葉差上申候。（明治四十五年四月廿九日　鹿兒島より　開聞嶽（薩摩富士）の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十三

今日方廣寺の大黑天堂で吉川氏の龍を見申候。昨日ならば甲子の日で何でもなかりし由なれど、今日は只の日と申すことにて特別に見せて貰ひ候。此繪葉書一組求め候處坊さん小判形の守といふのを一つくれ申候。龍は寫眞で見たよりも天井を仰いで見た方が餘程よく見え申候。南禪寺の景年のよりもいいのではないかと存じ候　景年はまだ見不申候。天龍寺のは沙汰の限りに候。京へ來てもう卅日に相成り博物館も三度見申候　何といつても繪畫はこちらが豐富で心持よく候。明日いよいよ九州へ向けて出立可仕候。匆々。（明治四十五年四月十九日　京都烏丸通五條下ル龜村方より　新築大黑尊天堂の繪ハガキ　岡三郎宛）（編者曰、繪ハガキには繪の說明記入あり）

其七十四

汽車は日向の一角をかすつて通り候故、九州も八ケ國を通過致し候。長崎へ渡航の甲板上に天草の女共數多く見うけ申候。此は公然浦鹽への出稼の由。

憎い立神あの野母崎を樣の帆影を今かくす
此の俗謠おもしろくは候はずや詳しくは後日に。（表面）
太宰府の蹟は九州といはず日本の靈地なるべし、唯驚くの外なし。當分こちらに滯留致居候へば御葉書など賜はるまじく候や。（裏面）（明治四十五年五月九日　福岡市外東公園裁縫女學校前武井準氏方より　國寶筑前觀世音寺佛像阿彌陀如來の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十五

東大寺の狛犬と全く違ふ處に又面白味はある　向つて右の狛犬が左の足で抱へて居るのは子犬である　實物を見ると恐ろしく線が複雜な彫刻である。
太宰府へは二度行つた。博多から十七錢出せば汽車に乘れるし、さきの停車場のすぐそばに温泉もある　天拜山へも登つて見た。水城のあとの古堤防が今あるから面白い　昨日から電氣で燒く治療を始めました。何かお知らせ下さい。思ひき

つたことを書いて下さい」（兩面に亘る）（明治四十五年五月十四日　福岡市外東公園裁縫女學校前武井氏方より　筑前觀世音寺之狛犬（國寶）の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十六

博多の地は古蹟に富んで居るはいふまでもないが、こんな佛像が（暫く佛像として置きます　背が線香立てゝ大へんです）あるかと思へば四里行くと觀世音寺には國寶がぞくぞく立つて居る　極端と極端である（表面此坊主こそ論外なものだ　近づいて見ると險惡な相貌で、はなれて見ればこんなに踊ををどつて居る」（裏の銅像の說明）（明治四十五年五月十五日　福岡市外東公園武井氏方より福岡名勝東公園池畔の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十七

公園といつても何もありはしません。寫眞のつまらぬ樣につまらぬものです。千代の松原の一部だと思つて遠くて想像して見るに限ります。（明治四十五年五月十五日　福岡市外東公園裁縫女學校前武井準氏方より　九州帝國大學醫科大學精神病學教室の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十八

小生の宿のすぐうらは電車で隨分喧しい。

此電車は箱崎行と札が掛けてある筈である。いや違ひます、救助網がおりてないから箱崎から來たのです。（裏面）

此處は市ではなくて千代村の内であります。それで市外と申す。今日は總選擧の當日であると、葉書を書いて居て思ひ出しました。（表面）（明治四十五年五月十五日　博多東公園武井氏方より　福岡百景千代の松原の繪ハガキ　岡三郎宛）

其七十九

豐川氏の還暦之祝があつた様ですが、先生もどうぞ、といはれませんか。君も手紙を長く思ふ存分のことを書く様に成ると人間が賤くなります。（表面）此の像も遠くから見ればまだしも辿ても至尊の身を以て、國家に代らむとした熱烈な上皇の傳なとは何處を尋ねてもありはしない。側へ行つて見ると相貌は平々凡々。（裏面）（明治四十五年五月十五日　博多東公園武井氏方より　元寇記念碑遠景の繪ハガキ　岡三郎宛）

其八十

荷車か何かおいてある處に小生は一寸泊つて居ます。ずうつと行くと箱崎八幡になります。

くろい處に氷菓子が見えるでせう。こんな店此へんにおほい。大道にも夏蜜柑賣が大變です。枇杷が盛に出て居る。

それで居てまだ袷を着て居ます。（裏面）

外東公園にはおどろきました。

辨慶が杖あとは正反對なる處おもしろいと思ひます。（表面）（明治四十五年五月十五日 博多東公園武井氏方より 福岡醫科大學病院通りの繪ハガキ 岡三郎宛）

其八十一

如何にも承知したと申され候。御手紙を待申候。（表面）（明治四十五年六月二日 福岡市外東公園裁縫女學校前武井氏方より （福岡百景）西公園より見たる玄海の夕照の繪ハガキ 岡三郎宛）

其八十二

君の手紙いくら待つても來らず芥屋に來てうらみをいひおくる。（表面）（明治四十五年六月十一日　芥屋大門より　筑前芥屋大門正面並に東方之景の繪ハガキ　岡三郎宛）

其八十三

頭から鹽をつけてたべるというて子供の時分に威されたことがあつたが、此の大砲のやうな恐ろしい凹んだ眼で見ますよ、手紙をくれないんだから　千代松原は間もなく立ちます。（表面）（明治四十五年六月廿五日　對馬國嚴原より（對馬）廿四珊加農砲（雞和高濱港）の繪ハガキ　岡三郎宛）

其八十四

どうです手紙を書きましたか。歸つたつてお土産なんかあげないからようござんすよ。

今夜海が少し悪いが博多へもどり升。（表面）（明治四十五年六月廿九日　壹岐國勝本港より
壹岐國勝本港小敷繪の繪ハガキ　岡三郎宛）

其八十五

耶馬溪から來て彥山へ登つて雨にふられて二日寢轉んで暮しました。晴れたから明日は耶馬溪へもどり升。宇佐を見て別府溫泉へはひつてそれから松山へ一寸行つて見る積です。（表面）

耶馬溪から峠を越えて難道を六七里步きました。
登りが一里少しあまりです。
山はなかなか急峻でかういふ處を通ります。（裏面）（明治四十五年七月九日　彥山より　漱
彥山裏廻り鐵鎖の繪ハガキ　岡三郎宛）

其八十六

土産は持つて行かない譯なんだからこちらから一つ贈り升。耶馬溪の名物です。私も大に振つて居ると思ふのですが、只一つ虫がついてやしないかといふ懸念です。其時は諦めて下さい、さうして根岸流に周圍を削つていい處だけたべて下さい、耶馬溪は九日目で出て大に無理といふ無理をしたので自分ながら瘦せたのには驚きました。これからは無理しません。（表面）
手紙も書かない人はかういふ高い巖の上からぽうんと投げてやらうかと思つて居升。（裏面）（明治四十五年七月十六日　別府温泉より　耶馬溪帶岩の繪ハガキ　岡三郎宛）

其八十七

首がふたつのぞいて居る處が振つて居る故お目にかけます。
明日は四國へ。（裏面）（明治四十五年七月十八日　別府より　濱脇藥師温泉女湯内部の繪ハガキ　岡

三郎宛）

其八十八

昨夕ここへ來ました。平家といふものは實に豪いものであつたと思ひます。（表面）（明治四十五年七月廿六日　宮島より　嚴島神社所藏（國寶）平家納經の內の繪ハガキ　岡三郎宛）

其八十九

關西の山概ね皆淺し、此山獨り靈氣鬱積す。（表面）
此山は今が盈である　此も何かの緣と申しませうか。（裏面）（大正元年八月十三日　高野山地藏院より　高野山不動堂（特別保護建造物）の繪ハガキ　岡三郎宛）

其九十

法隆寺では夢殿の祕佛を見るし東大寺では三月堂寶庫戒壇院の四天王等を見た。僕はいま愉快である。（表面）（大正元年八月十九日　奈良より　興福寺藏天燈鬼之像（國寶）の繪ハガキ　門三郎宛）

其九十一

拜啓一昨日歸京昨日參堂仕度と存候處、事故あり不果。一度はお目にかかり度と存候。月曜にあらざれば御在宅は無之候や。數日間は滯在の答に有之候。（大正元年九月十七日　下谷上車坂町十四那須備よりハガキ　岡三郎宛）

其九十二

御葉書只今拜見　然る處小生約ありて今朝成田附近へ參り申候。泊りに相成可申か。若し夜分歸京相叶ひ候はば電報にて御知らせ可申上、然らざれば泊りに有之

候。廿三四日頃まで滯京故御目にかかりうること疑もなく候。（大正元年九月十九日 下谷上車坂町那須館より ハガキ 岡三郎宛）

其九十三

廿三日月曜日に參堂可仕候間左樣御ふくみ被下度、御都合宜しからず候はば、下谷九二九へ電話にて御報願上候。（大正元年九月二十日 下谷上車坂町十四那須館より ハガキ 岡三郎宛）

其九十四

決して手紙を書かなく成つた物臭の田舍者も。文展を一度は見度、七日に上京可仕候。九日の日曜にお訪ね仕度心組。尤も午前十時過位に相成可申。其前には赤坂溜池あたりを百姓の用事にて尋ねまはる必要有之候。田舍者のこと故尋ね當ら

ぬ時はお訪ねの時間聊か後れ可申候へども、大抵の處ではなかなか時間は正確に守り可申候。九日には大兄をお訪ねして、齋藤君をおどろかし、平福君まで參る筈に有之候。

御訪ねの件は、御差支有之候はば、差控可申候に付、八日中に那須館、下谷上車坂十四へ御葉書賜はり度、七日では小生まだ參らぬ節は、鄉里へおくる樣のことも出來可申候　（裏面）（大正元年十一月五日　自宅より　常陸大貫瀨より南朝忠臣國宗祐の城址を望む繪ハガキ　岡三郎宛）

其九十五

久保博士は喉頭は結核の疑さへなしとのこと、喀痰の檢査にも病菌を發見せずとのよし申され、心強く歸國可仕候。（表面）（大正二年三月二十八日　博多千代松原より　筑前觀世音寺之寶物（國寶）納骨利陵王納骨利の繪ハガキ　岡三郎宛）

縁むすびの神の本殿は雄大おどろくべきものに候。（裏面）（大正二年四月十八日　出雲杵築より　出雲大社樓門及本宮の繪ハガキ　岡三郎宛）

其九十七

先頃御はなしの品欲しいと申す人有之候に付、大兄より直接郵送のことに御取計らひ被下度候。

岩代國信夫郡瀬上町　門間春雄

と申したしかの人物故品物を差送り候ても大事無之候。暫く前鮟鱇十句の幅を漸く手に入れ候由申候。多分大兄御所持のものならむと推し申候。然る時は今回の行道も不思議の縁に可有之候。大至急に小包にて御送附被下度、先方の返事は小

生方へ參ることと存じ候。
鮟鱇の句を購入したる例も有之候故、値段の處も運びよかるべく存ぜられ申候。
短册も一枚求め候由故此もうか（まゝ）く參らむかと存じ候。
先は不取敢右まで　匆々

大兄も時々は長い手紙など御書きなされ候ては如何に候や。手紙は後へ殘るとて懸念遊ばされし樣に候へども、自分が豪かつたら少しはまづいことも逸話として傳はり可申、つまらぬ人間に終るならば何が殘り候とて大事有之間敷候。何も彼も遠慮は無用に可有之候。（大正二年七月二十日　自宅より

封書　岡三郎宛）

其九十八

拜復今回のことは門間君の疎畧には無之、全く小生の罪に有之候。貴家の事情等

も承知致居候筈にて、徒らに日を過し候こと何とも申譯なき次第、然しながら不日解決され候ことに有之候間、少々御待被下度奉願候。原稿は貴兄の御都合も可有之と存じ過日齋藤茂吉君と會談の折ふと話し出し申候處、是非共讓受け度とのこと尤も此は今春旅行の際、久保博士夫人へ見せ申度――但し讓渡す等の意味には非ずして先生の眞蹟に接したることなしとの故に――持參致候を幸に歸途潮音君より今回申込候様、小生よりも同君へ御願致置候。鹽谷鵜平氏へ見せ申し評價を乞ひ候處、暫くして五十金より百金の間なるべき由手紙にて申來り候こととも有之候に付、齋藤君へも百金と申候處、幾分の割引を乞ふ旨に付、大抵は相談も相叶ひ候ことと返辭致置申候。八十金位には取極め申候こと大丈夫と存申候。鵜平氏ならば百金も出し申さむかと存ぜられ候へ共、此もしかとは申兼ね候。それに小生も今回の分大抵は舊藏の品故、手のとどく處卽ち小生の交遊の範圍を出でざること希望に堪へず、それも餘りに價格に相違有之候ても思ひ切り難く、何とか

致さずては成り不申候へ共、然らざる限りは前申候手の届く範圍に止め度、此位の處ならば貴兄の御許しも出て可申と存じ候。門間君の方少し後れ候も知らず候に付、我が病の方を取急ぎ齋藤君へ取きめ候はば調達方は速急に相運び可申候。此狀と同時に同君へ手紙にて申送るべく候へば、急ぎ同君と御會見被下度、御在宅の日を葉書にて青山南町帝國腦病院同君宛に御通知被下度願上候。何とも彼とも小生の手ぬかりにて心ばかり忙しく、御詫の仕樣もなき心地に有之候。齋藤君には正岡先生のもの一點も所藏無之、しかも伊藤君の手澤のものは此際遠慮したき由なれば、同君にして貴家へ伺ひ申候曉には、話も面白く運び可申候。貴兄とは頗る氣心の合ひ可申人物、御迷惑に非る限り小時間御はなし被下度、何にしても日外の御送金を要すべき分丈至急手配相叶はずては小生も氣が氣でなく困り申候　幾ら書いても盡き不申候故此丈に致申候。

先日御惠與の菓子は申樣なき立派の品、只今もまだ樂み申候。此は別事ながら伊

藤君の柩にすがりて泣きしは、土屋文明にして齋藤茂吉には非ず。現在の茂吉は此の如き淺薄のものに非る故、岡君に對して取消しを頼むと同君の態々の來書、然も二枚つづきの葉書に認め申候。匆々。（大正二年八月十三日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其九十九

昨日は失禮仕候。折角之御心づくしに候へ共、小生一存にも參り兼ね候譯合も有之、根岸養生院へ入院のことに取極め申候。菊地といふ人參る由に付或は此人手術の任にあたり可申か相分り不申候へ共、何も彼も考へ申さぬことに致申候　今日正午より一時までに電話にて御通話も無之候故、面白からぬ儀も有之候かと推察仕候へ共、小生は是非なきことと觀念仕り候。若し岡田氏にてうまく參らぬ様ならば復たかさねて御配慮にあづかり申度と只今より御願申上候。匆々

入院は明日に候。今日に致し候とて四の日は厭ひ不申候。佛者の所謂四ツ

の恩に報ぜんため一日も餘計に生命を延長せんとして名醫の術に從ふものとするならば四の數は嫌ひ申す間敷く候。さには候はずや　何事も見樣間樣考やうに在るものと存候。（大正二年十二月四日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其　百

只有り合せの紙へしたため申候。小生夏中よりいささか熱も加はり來り候處、先月來段々宜しからず。近日は八度三分位は昇り候て、半日は寢申候。何を喰うてもうまからず候に付、玄米をたべはじめ申候に、咽喉の通り結構に有之候。實は既に鎌倉あたりへ轉地の筈に候處、父も春以來の大患一時輕快、冷氣と共に甚だしく大儀に相成候ため、見すてて參ることも相成不申、遂自らも漸く大事に相成可申かとの懸念も加はり申候。就ては昔ての御話の石塚式も斷行仕度、其内上京（或は新年匆々）可仕候に付、指導のものなど、詳しく御しらべ被下度、右奉願上

候。在宅日數もまだ少々は有之候に付、御わかり相成候ならば一寸御示し被下度、咳出で困り候ひし際、例の咳の藥に就き御尋ね申上候へ共、御返事無之、かなりに長き間咳をつづけ申たることも、此夏位のことに有之候。今回は少々それとは異り居候故御忘れなく御願申上候。されど過日は長らくの御病氣と承り候ひしが、斯様のこと申進め候て、御迷惑に相成候はば、それは御宥し被下度候。匆々（大正二年十二月十五日　自宅より　封書　岡三郎宛）

其百一

喉頭結核再發の爲め表記へ入院することに成りました。お知らせ致します　明日早速手術をしてもらひます　一昨年とちがつてもうそんなにおどろきません。

大兄にお弟子を二人御紹介したいと思ひます。

自宅に居る間は二週間ばかり玄米をたべてました。

末廣町でおりて二軒向ひ合うた黒燒屋のも一つ南の橫町を、一町ばかり西へ行くと神尾の醫院で、白い棒杭が打つてあります。

只今御多忙の處わざわざ御出には及びません　（兩面に亘る）　（大正二年十二月二十六日神田金澤町二二金澤醫院神尾氏方より　大谷金山綱木口途上の繪ハガキ　岡三郎宛）

其百二

小生も其後に成りて非常に工合よろしく、まだ熱もさめきりには無之候へども、十八九日頃までには退去可仕候。實は二三日前引きとる筈にて延べ申候。

先頃お願申上候女ども二人、其内御伺ひ致すことと存申候。矢張貫書などと申さず大兄の筆蹟其ままに御教授御願ひ申候。昔のものはなかなか上達六かしかるべく勢抜け可致と存じ候。いい先生と申おき候間其御積に御ふくみ置被下度候。

（大正三年一月十七日　神田金澤町二二神尾氏方より　ハガキ　岡三郎宛）

其百三

本日急遽退院歸國仕り候。不取敢御通知迄申上候。體量は約一ヶ月に一貫二百匁を恢復し聊か元氣に有之候間御安心被下度候。（大正三年一月二十三日　神田金澤町二二神尾氏方より　ハガキ　岡三郎宛）

其百四

一時は非常に輕快を覺えしも復たあともどりにて、今度は表記に暫時横臥しておつと辛抱することを餘儀なくされ申候。ゆるされ居るは粥と卵のみのさびしさに有之候。一寸御知らせまで。（大正三年三月十五日　神田錦町三丁目橋田病院より　ハガキ　岡三郎宛）

其百五

御起居如何に候や　日外御はなし申上候弟の家内其うち参上致度由申居候も、乳飲兒を抱き居り候ため遂延引に相成候が、今回愈參上仕度旨申出候へども、以前の如く水曜日ならば差支無之候や、實は小生も御消息無之ため如何致候ものかと少々懸念致居候場合、一寸御葉書被下度候

小生熱度も下降段々宜敷方に有之候　然し御多忙中わざわざ御來訪は恐入候につき、御辭退申上候。（大正三年三月三十日　神田錦町三丁目橋田病院より　ハガキ　岡三郎宛）

其百六

私も大分快い方で熱も殆んどさがりました。今年は御身體よろしからずとのこと

どんな風ですか。醫藥の外に何とかてだてもありさうなものと思ひます。今度九州の久保博士が學會の爲めに上京された序に見て貰ふ約束で、明日は晴雨に不拘午前八時迄に上野の精養軒へ行きます。大抵外出しても差支ないことと思ひます。（大正三年四月四日　神田錦町三丁目橋田病院より　ハガキ　岡三郎宛）

其百七

御不在に御うかがひ致してからふと考へました。或は御多忙中無理をしてここへお出でになりはせぬかといふことです。私も非常にいい方ですから、無理をしてまでお出でには及びません。それでは何とも恐縮にたへません。若し御暇があつて御出でに成る場合には前日に是非共御知らせ下さい。さもないと晴天の日には暫らく振りで遊びに出掛けようと思つて居るからです。博覧會もまだ見ません。私には珍らしく歌が出來ました。（大正三年五月三日　神田錦町三丁目橋田病院より　ハガキ

葉書一枚でもいいのですから是非下さい。

其百八

私もここへはひつてもう二ヶ月です。大分工合がいいと思つて居た處、四五日この方出來が惡くて少しづつ熱が出ます。先頃は私はわざわざあなたへ伺つたのでした、水曜日を木曜日とばかり思つて居たので失策してしまひました。あの時は大きによかつた時です。それでも一寸また伺はうかと思つて居ます。あなたがどう成つて居るのか、ちよつともわからぬために此二ヶ月どの位悶々して居たかわかりません。あなたにどのやうな變化があつたのかなどと想像して見ることもあります。三月末の御葉書に御病氣とあつた時は殊にさうでした。もう何ともないのですか。私も出られる限りはぽつぽつ外出したいと思ひますから、こちらへ御

出には及びません。どうか葉書でもいいから一枚下さい。それで滿足したいと思ひます。どうも氣になつて堪りません。くれぐれも私の居ない處へ御出に成るやうでは御氣の毒ですから御出には及びません。（大正三年五月十一日　東京神田橋田病院より　封書　岡三郎宛）

其百九

小生二十九日の午後に退院のことに相成申候に付、一寸御報申上候。近日精神に動搖を來すことありて結果おもしろからず困却致居候。（大正三年五月二十七日　神田錦町三丁目橋田病院より　ハガキ　岡三郎宛）

其百十

私はこちらでは非常なお世話に成つて居ます。燒いた處は大分にいいといふこと

です。然しからだの方は今年は惡いので殘念に思ひます。

いましばらくで私は日向の海岸へ行かうかと思つて居ります。（裏面）（大正三年七月二十日　九州醫科大學附屬醫院西第二病棟第一室より（福岡百景）鵜來島より西公園を望むの繪ハガキ　岡三郎宛）

其百十一

さわらびはかむろ松よりたけたかく庭の築山春たけにけり

かういふ歌はもうつくらないんですか、先頃のおはなしの歌是非おくつて下さい。さうして手紙でも葉書でももつとざつくばらんに書いて下さい。通り一遍では物足らなくていけません。（裏面）（大正三年七月二十八日　福岡市外大學醫院西二ノ一より　玄海の奇勝机島と柱島の繪ハガキ　岡三郎宛）

香取秀眞宛

其一

しばらく御目にもかかりません、近來はいかに御暮しですか。田舍の秋は寂しくて面白くてたまりません、又氣まぐれにこんなものを作りました。怒らずに御覽のほどを願ひます、おこるといふなら日本堤をかよひなれた人には不似合と申したくなります

秋の日にかわく更紗のさらさらにきかなくひさし老いにけらしも

更紗ほす庭のいなごはおのがじしいもじ見むとてつどひ來らしき

へなづちのよごれ見まくと泥田なるいなごがともはけだし來にけり

眞途なくただらのをちに光るもののいもじが日からきららかにして

注連縄のすびし蔭にいそはくと煤びたらずやあたらいもじを
おろそかに庭にな立ちそ山茶花の花さへいなといひて萎まむ
此ごろは外にも出でずといささかは白くぞあらむ煤びたれども
芋の葉の妹もいなまむ二たびは日にはな焼けそさめけむものを
土芋も洗へば白し鋳物する人をこひむは浴みしてのち

明治××年十月二十二日（推定明治四十年）

其二

拜復。久々にての御狀うれしく披見いたし候。玉稿朱書して御返し申上候。有體に申候へば全然失敗に候、取材の宜しきを得ざりしに歸し可申候、小生の作「馬醉木」に載せ候ものは、不出來なるは申すに不及候へども、アッサリしたものはアッサリ表はさんが目的にて、主觀の必要は認め候へども、いつも極り切つたる

同人の主觀が氣に食はず候まま、あのやうなものも試み申候。此後も時々出し可申候。今月の分へも少々載せ申候、是非とも有體に御批評下され度待居候「海底問答」に就き御稱揚恐縮に候、語句の粗笨なるは自らもしか思ひ居候。左千夫君の批難はさることながら、潮音君は面白き由左千夫君の許へ申來候、岡君との間にはとても申樣なき面白可笑しきことに候。岡君に聞きたまへと申候。（明治××年八月十一日）（推定明治三十七年）

其　三

此鐘が朝鮮製のものとしては第一らしい。少くとも今迄見た十六口の内では第一である。一體雲州のものは霧のためか綠青の工合が素晴らしくいい。只雲樹寺のは見るさへなかなかだから困つてしまふ。盜まれちや大變だといつてかうしておくのである。今日大社へ來た。（出雲杵築より　鐘に閂打ちたる繪ハガキ　香取秀眞宛）（推定大

其四

五日の朝美術學校へ行きました、まだ御登校にならないといふ頃でした。雪村の虎の、躍動といふよりも流動して居るのに驚いてしまつて、それから立林帛川といふ人の花には。その力強くて傍の光琳の草花が全く顔色ないのに飽氣にとられました。然かも。名を知るのも初めてで。帛の字が讀めな（「いな」二字脱か）どはどうです。かういふものを見ると。二三日心が妙になつて居ます。佛畫では孔雀明王はよかつた樣です

何時かもお話したことがありましたが、ブトナイ製の銅器といふものには、何ともいひな（い一字脱か）面白い味があると思ひます

卒業生の鑄造で。朝鮮鐘の模造がありましたが、形狀は、すつかり向の通ですが、

唐草の模様などは、自分で工夫したらしいのですが、あの鐘の大きさに比してあら過ぎる處を、私の見た幾多の鐘の記憶を喚び返して見て、大分興味が有りました。三井寺にある模造は本當の模造ですが、なかなかよく出來てました。御多忙中こちらへ御出には及びません。辭退致します。（大正三年四月八日　ハガキ　香取秀眞宛）

寺田憲宛

其一

近咏の内左に

蜻蛉（トンボ アキツ カゲロフ）十首

子をおふ子子をおはざる子打群れて蜻蛉釣るべく野の小道ゆく

ひらひらと水をかすむるかげろふのあしの葉末を遂にはなれず

おほきなるまなこ動かし野の道のかわきしつちに蜻蛉とまれり

いでみづ（洪水）の黒き泡よるきしのべの折れたるあしに蜻蛉うごかず

里川のゐくひにとまる蜻蛉のよつのつばさにゆふひかがやく

糸つけてふりまはさるる蜻蛉のとばれぬ羽をうちふるふかも
粟の穗のみちを埋めてたるる野に山ひくくみえて蜻蛉とぶなり
いりひよわくさしくる野邊の溜り水かわかむとして蜻蛉群がる

方言を用ひて

赤とんぼゆふひにむれてとぶ庭をかねやまとんぼ横ぎりてゆく

蜻蛉の眼は頭にあり

竹の先にしきりにうごく蜻蛉のかしらはやがてまなこなりけり

目白十首

獨活の實の黑くしなれば籠さげて目白とるべく人野邊をゆく
野の家の垣根の小道雨はれて目白はなかず鵙が音ぞする
柿の木に目白くひよるききつけて籠の目白のひとしきりなく
野良の木に捕らへし目白よくなきて都の人の籠にかはれつ

秋の日のはれわたる日をあたたかみ籠の目白のみづあむるかも
いさかひの籠に來りてとらはるる愚かなる鳥目白あはれなり
かごのなかに目白御付かで死ぬころぞ秋やうやくに寒くなりゆく
木の枝にやどる目白の推合に長きひと夜も明けはなれゆく

人を嘲りて

金故にとらはるるみは籠の中のわが養くらふ目白にも若かず

同

そらのいろみどりにずみて秋の日のあたたかき日を目白なくなり

雜咏

竹くらき里の小道の夕暮に大きくみゆるきりのなかの人
うちむれていり日にさわぐむくどりの竹藪こえて田をこえゆく（も脫？）
風つよき雞頭にとまる蟷螂（カマキリ）のふりかへるまなこなにをかもみる

かごにゐてきうりにいくるきりぎりすかひなきひげをなにうごかす
かれてたつきびのよかぜのさわがしくなくなる蟲はくつわむしかも
（編者曰、右封筒無く單に八日と記しあるのみ、推定明治三十一年十月頃？）

其二

拜啓仕り候　時下不順の候何くれと御注意被下難有奉存候。小生儀は御父上樣はじめ御懇篤なる御世話被下候故、幸身體に異狀等も無之、毎日呑氣に暮しをり申候。只今の御身の上などと申候ては少しく大業には候へ共、この日頃嘸かし御窮屈の御事と奉存候。實は小生節々御伺不申上候ては不相濟儀には候へども、性來の不精者心ならずも遂々御無音に打ち過ぎ申し候段不惡相願申上候。この後は詠歌の取りやり方々、互の消息も漏らす樣致度希望のいたりに有之申候。さて御おくり被下候御うた、誠に御心底のほど忝く奉存上候。右一首の意は充分に聞え申

候へども、語調の上に整はぬところ有之候まま、左のごとく添删いたし候。如何のものにや御笑覧被下度候。

あけくれに君がたよりぞまたれけりひとりある身のつれづれにして

「あけてくらしつ」ニテハ語ヲナサズ

愚弟順次郎こと、これも今年の卒業にて隣村の間柄なる松田仲助と申すもの同伴、一昨夜汽船にて上京致し、二人共六月末迄御厄介に相成をり候間此段申上候。小生も昨年六月始より當地にのみまかりあり、故郷へも疎遠に相なり居り候故、今月中には一先歸國いたす所存、日限などはいまだ定かならず、何れ其節可申上候。

なほなほ貴兄と小生との間柄は何事も兄弟同様、末ながく御交際申さむは御互の心には候得共、長幼の別のみは無之様致したく候。年こそは小生が上に候へ、何かにつけ却て小生の方が遙に年少も同じく、常々敬服仕り居り候次第、今更打ち

あけ申候。御書面にも弟上と御へりくだりあそばされ候事、小生の光榮ながらふつつかなる身の如何にも恐縮のいたりに堪へ不申候。宜しく御含み願上候。
なほ御父上樣には明日御歸鄕の筈に有之候。
自分手柄話申上げ恐入候へ共
生れしはをのこなるらむあやめぐさふきしのきばにのぼりたてたり
右は僥倖にも新小說にて一等に入選いたし候。右一寸筆序に。（差出年月未詳　自宅より　封書　寺田壽宛）

（寺田壽曰、雜誌新小說の懸賞歌壇で（佐佐木信綱選）五月幟と云ふ課題に一等入賞して、金を五圓貰つた當時の長塚の顏が浮んで來る樣です。馬喰町の拙父の宅で大福餠を一圓とか買つて皆に食べさした話もありました。長塚がこの年始めて上京した年です。水戶の中學校を止めて神經衰弱でぶらぶらして居た頃です。明治三十二年六月頃か）

其三

いろの赤黒きままに澁となづけてとしごろかひおける犬あり。さる人の借りにきにければ繩つけて家のをとこしてひかせやりけり、こころなのわざなりけり、そのいへにありけるほどなにもののつれゆきていさかひなどさせけん、いたく疵かうぶりていけりともあらずなりぬ。借りてゆきし人のいと罪ふかくあはれにおもひて、癒ゆるまではやしなひてむなどいひこしければそのままにおきけり。ひよひ例のまだきに、大戸引きあけけるに、足ひきずりながらいりきにたるは澁なりけり。近きころゆきてみたるには、ものくふべくおきいづるのみなりしを、こはいかなることよといひあへりしに、借りてゆきし人やがてきたりぬ。疵もはや心わづらはすほどにもあらねば、あすはおくりかへさむよし人々いひけるをあらずなりたれば、うちおどろきいそぎきたりしとてよろこびぬ。さても畜生の心なさよ。

家といへばこひしかれかも疵ありてありけぬいぬのよるひとりきぬ

近きわたりに婚禮のことありけるが、あくる日嫁みせとてきたりぬ。人に手をひかるるものからうつむきがちにつつましくのみぞある。心なの村の小供よ、つきまとひありくに、をりをりはかほなんどのぞくめり。をと(ぬ脱?)心のはぢなからめや。

手引女の婆にひかれてくるをとめ子等さはみるなをとめはぢらふ

(明治三十二年十月十二日　自宅より　ハガキ　寺田寅彦)

其　四

拜啓。過日御依賴の國歌評釋本日郵便にて御送り申上候。右は拜借の金子有之候へば、その內御返濟の積りにて買求め候次第に候間、左樣御承知被下度候。正價三拾六錢に有之候。のこりは後日迄御猶豫を請ふ。

扨て小生去る二十日九十九里より歸京、例の如く爲す事もなく消光罷在候。うら恥かしき次第に有之候。二十五日の夜に久々にて逢ひたる友の家にて、四方山の話の末鳥といふ題にて歌よまんとのことにて、餘儀なく唸りいで候ところ、珍らしくも一時間餘にて三拾六首程記し付け申候。素より怱卒の際歌に相成候や如何はしき限りに候へ共、左に書付け申候間御一笑被下度候。

縄くちし引板の鳴子の風になりて畑の粟生を雀とびたつ

うらうらと春の日たけて菜の花に家まばらなり雛のこゑする

あたたかきのきにつりたる鳥籠にカナリヤなきて粟くひこぼす

わが庭の梅おほかたはさかりすぎていまうぐひすのこゑしきりなり

永き日をのきに雀の巣をくむと藁ついばみていそがしくとぶ

椋鳥のむれてとびゆく冬の田のはてに村あり入日かたぶく

木枯に木の葉とびみだれ荒鷹のとまれる枝もうちたわみつつ

大空に雲ひろがりぬあくる日は雨ふるらんか雁ひくくとぶ

枯蓮の枯れたる沼はこほりゐて石はうてども鳥たたずけり

樹の枝にやどらんとしてくる鴉の小枝にとまりあたりみまはす

水の上にうかべる鳥のふねゆけば水にかくれてとほくうかびぬ

いろいろのとりのこゑしてなく百舌の尾をうちふりてたかだかになく

柿の木のこずゑにのこる柿の實に目白きてなく日は寒くなりぬ

天の戸をあけて朝彦いまかいづる初鷄なきぬをちこちの家に

金網のをりのなかなるあらわしの空うちあふぎかかなくあはれ

朝風にみの毛ふかれて白鷺のきしの葦間にうごくともなし

雨のなかにとびかふ燕家にいりて巣にもとまらずまたとびいづる

空の上になきし雲雀のなきやみて河のむかひの畑におちけり

人まねをわがものがほにうちかたる鸚鵡のごときやつこいやしむ

冬さればとほきくによりわたりきて門の榎にとりぞむれける

鳶たかくまふ日ははれてけむだしのけむりの下に山ひくくみゆ

大浪のうちよするごとにとびたちて磯のいはほに鷗群れけり

雪ふれば餌をもとめかね群鳥の野をとびめぐるあはれなりけり

村雨はあとなくはれて森の上に虹たつゆふべ時鳥なく

こえし人こえてゆく人いこふなる麓の茶屋に雉子つりてあり

淺草の寺の家鳩なれなれて豆まきやれば群がりてくる

たまたまにからすなくこゑききつけて老いたる人のまゆひそむらく

窓の下に赤きさうびの花さきて籠の小鳥のこころよくなく

翼もて世をもおふべきおほとりのせにうちのりてそらかけんいかに

わが庭の梅の老木の木のうれに四十雀の巣をむすびけり

鳥とると藁にもちつけ野にいでて雪かきはらひはがおきてまつ

樹のもとにいこひてひとりものぞおもふ鳥もなかざる山奥にして

ひとつ檻にやしなはれたる鳥だにもあらそはざるを人の子にして

をさな子のあまたあつまり手をうてばよろこぶらしも孔雀尾をはる

よのなかに聖うまるるしるしありて鳳凰とぶといふはまことか

いやふとき枝を折りきて大鷲の巣をくむといふ山のおくがに

右の内二首にても三首にても歌に相成候もの有之候はばよろこばしく候。目白は貴兄の趣向を盗み候へ共、多少異なりたるふしも有之候へば、まづまづ御みのがし可被下候。早々。（差出年月未詳　自宅より　封書　寺田憲宛）

（寺田憲日、この頃正岡先生の門を十數回も通つて教を乞ふべく飛び込めなかつた時代です。面白い手紙が澤山あつたのですが散り散りに成つて見當らない。明治三十二年十月頃ならむか）

其五

拜啓仕候。過日御示し被下候玉詠三首、趣向はなかなか面白く拜見仕候。されど語路は例によりていまだしきものに有之候。

　さらさら（はらはら）と小笹にそ（そ）よぐ雨の音を枕そばだててきくよさびしも

雨ならば「はらはら」と致す方よろしく「そよぐ」は「そそぐ」とすべく候。若し「さらさら」をその儘にすれば霰抔に致すべくや。

　さらさらと笹に霰のふる音を…………

霰よりは雨の方却て宜敷有之候。

次に凧の歌二ツ、初めのは木末に凧が引きかかれるやうにきこゆれど、それにては如何のものにや、御再考あらまほし。

また終の歌はおもしろきものなれど「ふみあらしつつ」は耳障りにまた殺風景なり。只麥畑をかけあるくとしたらばよからむかいかに。

小生の近詠左に書添申候。御一笑被下度候。

凧（未定稿）

よりいとの管にまきたる糸もちて貧しき子供凧もてあそぶ

鍬形のかぶとかぶりしもののふの赤き繪紙鳶を土産にもとめつ

凧もちてよろこぶ稚子のひたすらにかけてあるきぬ凧あがらなくに

きれやすきいとの白糸みじかきに風はふけども凧あがらざりき

いたくふく風をよろこび野にいでて凧とばしけむいにしへしのばゆ

風をいたみ凧をあぐればその凧のそらにめぐりて遂におちけり

道のへの枝にかかれるやれ凧の白けはてけり雨のふれれば

野の森の木立ほのかにたそがれて凧の唸りのならずなりけり

しだりをのたりをの凧の風を得て大空しぬぎあがるぞうれしき

山山の上にきれぎれの雲たてばその日風ふき凧おほくあがる

猿

きものきてたちまふ猿の餌をみれば餌にとびかかり舞はぬぞをかしき
心太を清水にひやす山の茶屋に山に得しとふ子猿つなぎぬ（鹽原所見）
親猿にゑじきをみせておやにやらず子猿にやれば親猿いかる
猿の子にたはるることのおもしろく道ゆく人のゑをなげてやる（鹽原所見）
山畑の粟の穗ぬくとくる猿の枝にとびつきにげてゆくかも
あしびきの秋の山里霧おりて友よぶ猿のほうほうとなく
夜の市の道のかたへに莚しき猿ひき男猿を衣はすも
かへりゆく人を戀しと白猿の海にいりしちふ猿物語
親猿をしたひよりくる子猿みて獵人悔いし猿ものがたり
猿の群の河をわたるといだきあひて橋になるちふ猿ものがたり

庭を掃除して

梅の木の花さく枝にかかりたる杉の枯葉は竿もて拂ひつ

そのつちを人にとられてそのつちにいへする人をあはれとぞおもふ

なほかずかず有之候得共、さまではとて筆を擱き申候。（明治三十三年三月十八日　自宅より　封書　寺田憲苑）

其　六

拜啓　御懇篤なる御手紙にそへてうまいものを頂戴仕り御禮の仕樣に困り申候。いつも貰ふばかりにてさし上げ候ものは無之、はなはだ不本意の至りに有之候。秋葉君と御あひの由、同君よりも端書にて承知いたし候。同君もまことに氣の毒に候。昨年はやはり卒業間際の病氣にて一年を無駄にしてしまひ、今年も病氣にて未だ學校へも行かれぬ始末、何とも不幸のことに存候。されど今年のは卒業してからのこと故、まだまだ思ひ切りがよろしく候。今後丈夫になられ候はば却而よろしきかも知れ不申候。

御書添の五首の歌、これは手を入れぬが宜しく候はむかと存候。人が手を入るるよりは自分がおほく作るがましに候。

只字體の鮮明を欠きしは遺憾に候。

小生の歌は駄目に候。日本の課題にて近來たえず作り居れども採られず、技倆未だ足らざるに、先生の標準は日一日と高くなる故、追ひ付くどころのさわぎでは無之候。

日本へ出ない歌に六なものは無之候。御目に掛けぬがよろしかるべく存候。

下館の田宮氏は近來いかがなされ候や。音沙汰を聞かぬこと久しきものに候。尤もこちらより頭を下げて行く必用もなき故、別に手紙なども出さねど、どうやらさきごろ俳句の批評をしたのが氣にくはぬ樣子に候。

義郎君や平九郎君の前で小生を傲慢の何のと述べ立て候由に候へども、正面から小生へ向はずに、それではちと筋道が違ふことと存候。

こんなことも貴兄へ御聞かせ申すはこれも見當の間違ならむも、つひ筆の序にかいて仕舞申候。

木取部（キトリベ）の反身（ソリミ）の大臣（オトド）みじかけれど蚯蚓（ミミズ）の跡の文字はなかなか

これではあんまり罵りたる歌に相成候。人には見すまじきものに候。ひどく變なことばかりかいて仕まひ申候、貴兄へは却て御氣毒に存申候。あしからず御承知を乞ふ。

これからはこんなことはかき申すまじく候。早々。（明治三十三年四月十四日　自宅より　封書　寺田憲宛）

其七

拜啓、其後は御無音に打過ぎ申候。御免被下度候。さてこの度は玉詠たく山に御示し被下難有存候。右評等は後廻しにいたし、小生の近狀一寸可申上候。さる二

十三日出京、二十七日はじめて竹の里人を訪問致し候。同氏は御存之通りながながの肺病にて、床の上に起き直ることもなりがたきあはれなる有様なれど、來客あれば一々これに應答いたされ候。その元氣なるには驚くばかりに候。小生のまゐり候時もただちに居間へ通して、隔てなく談話いたされ候。この日短册二十枚ほど頼み申候ところ、早速書いてくれ申候。二十八日午後にはまた日暮ころ迄、いろいろのことをききもしかたりもしてかへり候　こえて三拾一日この日も訪問いたし候ところ、即景拾首宛よまむと線香をたてて歌をつくり申候。二本ばかりともすうちによみをはり申候。かりそめのことなればよきものは無之候へ共、右は本月三日の日本新聞に「竹の里人をおとなひて席上によみけるうた」と題して掲載せられ候。少々恐縮の次第に有之候。左に書き記して御覽にいれ申候。

うた人の竹の里人おとなへば病の床にゑをかきてあり

荒庭にしきたる板のかたはらに古鉢ならび赤き花さく

生垣の杉の木ひくみ隣屋の庭の植木の青芽ふくみゆ
茨の木の赤き芽をふく垣の上に小さき虫のいでてとぶみゆ
人の家にさへづる雀ガラス戸の外にきてなけ病む人のために
ガラス戸のなかにうちふす君のために草もえいづる春をよろこぶ
古雛をかざりひひなの桑をかけしその床の間に向ひてすわりぬ
若草のはつかにもゆる庭にきて雀あさりて隣へとびぬ
ガラス戸のそとにかひおく鳥の影のガラス戸すきて疊にうつりぬ
枝の上にとまれる小鳥君のためにただ一聲をなけよとぞおもふ（坐上に剥製の鳥ありし）

主人のよまれたるは矢張日本紙上に「わが家の長物」と題して文中にはさみての せられ候。四月一日午後竹の里人の家にて歌の會あり出席致候。題拾にて各一首づつよむことに有之候。一人必ずその座に拾首宛をよまざるを得ざる次第に候。

同會の記事は例によりて竹の里人の手にて日本に掲載せられ候。小生のものせられたるは四つばかり有之候。

桃花

庭の隅に蒔きたる桃の芽をふきて三とせになりて乏しくさきぬ

星

夜になれば星あらはれて晝になれば星きえさりて月日うつりゆく

化物

もののけは三つ目一つ目さはにありときけどもいまだみしことのなき

剝製の鳥

木の枝にとまれる鳥のとまりゐてにぐることもなし鳴くこともなし

四日に京を辭して、徒歩して千住より草加越ヶ谷を過ぎ、菜の花麥畑の心地よきをながめながら、桃林のなかをすぎて桃の花のうつくしき見、粕壁に一泊、翌日

歸郷仕候。途中のうたも少々有之候へ共これは後日御覽にいるべく候。
御示しのうた數甚だおほく、一々批評せんことは六ヶ敷候へ共、一概に申候へば舊思想の大分拔けざる事、趣向の上にわざとらしきことおほき、言葉のまとまらざる、これ等は缺點のおもなるものに候はむ、されどこれもさのみ苦にするには及ぶまじく、誰も最初はこれとおなじことにて、ひとつの題を得ても精々よみて二つか三つ、それからあとは押しても突いても出づまじく思はるるものに候　小生等只今にて左樣に有之候、前申候三ヶ條は申す迄もなく、追々に心づくものには候へ共、早く知るは早き丈利益に候間申上候。か樣に缺點は有之候ものの漸々よみ數もおほく追々におもしろく相成候は、これ進歩のしるしに有之候、なほゆるゆる御勉强を祈り候　實際に申候はば譽むべきものは曾て殆んど一首も有之間じく候。さりながら今日の面白からざるは、昨日の面白からざるよりはおもしろく、幾分の進歩いたし候はば、遂には時々面白きものも出づべき道理に候　なほ

一首宛の批評及び前申候三ヶ條の非難も、詳しくは御面會の折申述べく候　今後とても決して御賞讃はいたす間敷候間、よくともわろくとも新作はありたけ御示し被下度候。

なほ申すことは澤山有之候へ共、頭が痛みて致方無之候間これにて筆をとどめ申候。早々

なほなほ書きもらし候。鶯の歌拾五首とはよくもよまれ候。さりながら鶯などは隨分六ケ敷、よきうたはおほくよまれぬものに候べくと存候　近日は押砂地方に菜の花さきいで候由、鶯の拾五首よりも菜の花のうたが望ましく候。遠くから見た所にても、近くから見た所でも宜敷候。菜の花なれば如何樣のところをよみ候も宜敷候間、右菜の花のうた拾首是非本月一杯に詠出でて御郵送被下度候。切に御願申候。苦しさは御察し申候　されど所望いたし候。成丈ならば一樣の所よりは變化あるがよろしく、數の少き

よりはおほきがよく候。されど十首以下は嚴禁に候。この度の菜の花のうた實情なる丈　君にみせばや　が一番面白く拜見いたし候。（明治三十三年五月十一日　自宅より　封書　寺田寅彦へ）

其八

九月廿一日、人ノ家ニ朝顔ノカラムヲ見テ

松ヲウヱ茄子ヲツクレルカタハラニ朝顔ハヒテ垣ニカラメリ

朝顔ト葡萄ノ棚トアヒ並ビ葡萄ノ蔓ニアサガホカラム

朝顔ノ蔓ノビイデテ葉モ茂リ赤キガ中ニ白キモマジル

モトアラノ棚ヲハハセシ朝顔ノイヤ長蔓ノシゲリハビコル

朝顔ノ棚ハフ蔓ノノビノビテ下葉オツレドイヤ茂ルカモ

朝顔ノシボミシ花ノカタハラニ莟タチタリ葉ガクレニシテ

朝顔ノ赤キツボミハ赤クサキ白キツボミハ白クヒラキツ

棚ニシテカラム朝顔ソノ蔓ノタレシトコロニツボミフクレツ

朝顔ノツルハ横ハヒカラムガニ棚ヲツクラクヒククトモヨシ

コノ庭ノ朝顔キリテツナゲラバサキ村ユキテ木ニカラムベシ

途上ニヨミタル

松原ヲユキノハルケミ村ニ出ヅ村ヲメグリテ蕎麥ノ畑白シ

近作ツマラヌモノニ候へ共、御目ニカケ申候。其後ハ歌信一向不通、玉詠モ候ハバ御送リ被下度候　忙ガシケレバ忙シキダケニ御勉强可然候。野ラノ景物モ活氣ヲ呈シ候　利根川近傍ハ殊ニヨカルベクト存候。（明治卅三年九月二十四日　自宅より　ハガキ　寺田憲宛）

其九

地藏ノウタ厭味アリ、殊更ニ地藏ハ甚ダシ、能ク考ヘ給ヘ。コヨリシテ云々大々的厭味ノウタナリ、コヨリナドシテ歌カキオクハ大タハケナルベシ。

朱ノ橋ノタモトノ白百合ハ趣向ニ於テハヨシ、サレド第一第二ノ句ハ改メタシ、コレニテモヨケレド今一層神橋ラシクシタキナリ。

義和團バナシイヤナリイヤナリ。

朝モヤノ中コレモイヤナリ、嘘ハヨムナカレ。歌ハ正直ニヨムベキモノナリ。或飛ビハナレタル嘘ヲヨムニモ、正直ノ心ナカルベカラズ。

電報カナシ、餘リニ露骨ナリ。歌ニハ落付キガナカルベカラズ、マシテ人ノ死ヲイタムヲヤ。

七尺ノ古太刀、嘘ヲ云フニモ程ノアルモノナラズヤ。

斥候フタリ、コレモ露骨ニテイヤナリ。

鯉ノボリハ初心トイハン。
二人ガ名ヲバ、實ニ厭味ニモ幼稚ニモ程ノアツタモノナリ。蓮ノ花ニ文字ガヨク
アラハレタラバ不思議ナルベシ。又二人ガ名ヲカキテ流ストモイカナルモノニヤ、
クレグレモ正直ニ正直ニ。
ハタタ神云々、四五ノ句ハコレニテヨシ。先ヅ第三ノ句モヨカラン。サレド第一
句ハダメナリ。強イ事ヲ云フニハ鷲ヲ用フルナド初心ノコトナリ、コレコソ不必
要ト申スナレ。
瀧ノウタ、キレギレノヤウニキコユ。
鷲ノカガナク、只強クトバカリ思ヘド調ニ強キトコロナキ上ハ、イカニ強キモノ
ヲ用フルモ一首ハ弱カルベシ。
入海ノ、ナントナクボンヤリナリ。
朝顏ノウタ、コンナコトヲヤル故、一題デイクラモ出來ヤシナイ。

若キ身ノ云々、若キ身ノハ少シモキカズ。ワケノワカラヌウタナリ。恐ラク作者ニモワカラヌナルベシ、作者ニワカラヌヤウニテハ人ニハ一向ワカラヌモノナリ。

注連ハリシ、アリサウナコトナリ。サレドコレハ俳句ナドノ方適當ナランカ、歌ニスルニハモ少シ工夫ナカルベカラズ。

菊苗、ツマラヌコトヲ云フモノカナ。

芭蕉云々、ココニモ正直ニト勸ムルノ外ナシ。ワレモサキニ「人知レズ戀ウタカキシ芭蕉葉ノキレギレニナレトアラキ風フク」ヲツクリタレド、今ニシテハ恥ヂヲルナリ。螢ノウタモワザトラシ。

總テヲ通ジテワザトナルコト多キ、カヘスガヘスモ殘念ナリ。實際卽チ言ヒカヘレバ自然ヲオキテ、歌ニスベク句ニスベキモノナシ。自家ノ理想ヲ言フニモ實際ナルベシ

少シノ重ミモナク空浮々(カラウカウカ)トシタルハ由來鐵幹ノ調ナリ。コレヲ知ラズシテ鐵幹ノ

眞似ヲナス危險言フベカラズ。今コノ歌ヲ見ルニ又頗ル鐵幹ノソレニ似タリ。殊ニ北淸事件ヲヨミタル如キハ甚ダシトモ甚ダシク、其弊ニ陷リタルモノナリ　此ノ如キハソレラガ絕對的ニ排斥スルモノナリ　此ノ如キモノニ滿足セバ、ワレラハ少シモ歌ニ苦シムコトハナカルベシ。

從來ソガ書ヲ致シタルモノ一再ニ止マラズ、常ニ苦言ヲ放チテ鐵幹ヲ學ブナカレトイヒシモノ、此ノ如キウタヲヨマザランガタメナリ

過グル日萬朝報ニヨリテソレハ子規一派ト鐵幹トノ爭ヲ知リタリ　而シテ明星ノ上ニ鐵幹ノ子規ニ與フル書アルヲ知リタリ（但シ明星ヲヨマズ、只廣告ニヨリテ知リタルノミ）蓋シ鐵幹ノ口氣頗ル暴ナルベキヲ想フナリ。今鐵幹一人ノ論ヲ聞キテコレヲヨシトスルモノハ誤リナリ。心醉者ナリ。言論ハ其ヨッテ來ルトコロノモトヲ探リ、兩者ノ論旨ヲ比較シテ始メテ其可否ヲ言フベシ。凡ソ人識高カラザレバ漫リニ人ノ言ニ服シ易シ、故ニ一人ノ言ニノミ聞クハ頗ル危險ノコトナリ。

今若シ鐵幹ノ論ヲヨマン人ハ敵手タル子規ノ文ヲヨメ。余ハ固ク信ズ。鐵幹迷ヘリ、子規ハサメタリ、迷者ノ言ハ危ク、醒メタルモノノ言ハ聞クベシト。明星ヲ無二ノ友トシ、鐵幹ノ歌ヲ歌ナリトスルモノハ、遂ニ歌ヲヨミ得ベキニアラザルナリ。歌ヲヨマントスルモノハ萬葉ヲヨメ、萬葉ヲヨマンモノハ日本ヲヨメ、子規ノウタヲヨメ、而シテ明治ノウタハナルベシ。雷會若菜會ノ徒ハ今日未ダ歌ヲヨミ得ト稱スベキモノニ非ズ、此ノ輩ハマタイハザルベシ。カノ鐵幹ノ讀賣新聞ニノセタル戀ノウタ十二首ノ如キ、イカニ極端ニ彼レノ弊ヲ現シタルカ、彼レノ戀ハコシラヘナリ。彼ノ戀ハ少シノ重ミモナシ。彼レノ戀ハヨツパラヒノ囈語ノ如キナリ、故ニ人其眞意ヲ探ル能ハズ、支離滅裂ナリ、彼ガ如キノ徒暴慢自負、任ジテ以テ天下歌壇ノ先進者トナシ、天下ノ歌人乃公ヲオキテマタアルナシトナス。豈惡ムベキノ至リナラズヤ。

ワガコノ短評頗ル酷ニ失ス、然リト雖酷ナルハソコナフニ非ズ、短所ヲサシタル

ノミ。乞フ諒セヨ。

萩十首

アシビキノ山ノ萱原茂ケレバ萱ノ中ニシ萩サキイヅモ

ヒマアラノ垣ニシゲレル白萩ノシラシラミエテ夕(ユフ)月ノボル

白キ萩ハミラクシヨロシシカナガラ衣ニスラクハ赤キ萩ヨシ

萩ノ上ニ雀トマリテ枝ユレテ花ハラハラト石ニコボルル

萩ノ花ニヌケル白玉トラマクト水ニシアレバトリガテニスモ

ミソ萩ハ萩ナラズチフシカレドモ花ニシアレバ萩ナラズトモヨシ

野ニ生フル萩ヲトモシミ折リテクト花ハ全ケドソノ葉シヲレツ

アシビキノ山ノ平(タヒラ)ノ萩原ハ人シ刈ラネバイヤシゲルカモ

ミ秣ノ萱ヲ刈ラスト野ニイデバ小萩ガハナヲヲリテタバラナ

ミチノヘニシゲレル萩ヲナツカシミヲリテシミレバ花ノ乏シキ

葡萄五首

八ツヒロノブダウノ棚ノ長ツルノイヤヒロゴリニヒロゴリソタル

茂リ葉ノブダウノ棚ノムラサキノユヅ玉房ノイツクシキカモ

八ツ桶ニブダウヲミテテムラサキノウマシウマ酒カモシケラシモ

ムラサキノ玉ヲムスビシ太房ノブダウノ房ヲ水ニヒヤシツ

棚ヲハフブダウノツルノ茂リ葉ノ葉ガクレニシテ玉ノ房タル

○

紫ノブダウノ房ノタレ房ノ下フク風ノ夕涼シモ

百合

赤百合ヲカツテウヱタル藪ノ中ニ赤百合サキテ草生ヒシゲル

黒百合ノ花ハアレドモ谷フカミ岩タケトリノマレニトルチフ

クサムラノ百合ニカラミシ蔓草ノ山芋ハアマクトコロハ苦シ

カリテスム長屋ノ庭ニウヱツベクサ百合ノ花ハヒトモトニシテヨシ

高原ヲ二荒ヘコユル道ニシテ花オホキ百合ヲ谷ニ見タリキ

山モトノ百合ヲトモシミ分ケ入リシ山百合オホミ折ラントオモハズ

山ノ田ニオチコム水ノキシノベニ白百合サケリクサノカクシテ

湯ノ村ノ山ノトカゲノクサムラニヲリタル百合ヲ湯ニイケテオク

赤百合ノ花ラモテレバ葉ノモトニムラサキノ實ノココダミノルモ

ナメウヱシ畑ノ赤百合根ヲホルト花モツコロノサ根フトカラズ

百合ヲ竹籔ニサグリテ

人ノ家ノ竹ノ林ノタカヤブノ下草ワケテ百合ヲモトメツ

竹ヤブニ百合ヲサガセバ蔓草ノ百合ニカラミテ竹ニカラミヌ

竹ヤブノ草オシワケテ蔓草ノ蔓タチハナチ百合ノ花ヲル

百合ノ花ヲラントイリシ竹籔ノヤブ蚊ヲオホミ手サシ足サス

久方ノ日イリトホサヌ竹ムラノ籔ノクラキニ百合ノ花アリ
竹ムラノヤブノシゲリノ草ノ中ニ百合ヤスヤスモナガクノビタリ
竹ヤブニカクレシ百合ノ二花ノソノヒトハナハヤヤシヲレタリ
白百合ノ花ヲタヲリテ手ニモテバ花ヲオモミカ莖折レントス
白百合ノシヲルル花ノ花ビラノウスクシナレバモノ透キテミユ
白百合ノ花ヲ手ヲリテ夕庭ノ莚ヲタタク庭トホリケリ

百合ヲ活ケテ

ハシヰストイケタル百合ニ月サシテ疊ノ上ニナガクウツレリ
白百合ノイケシフタ花月サセバタタミノ上ニヒト花ニミユ
風ソタルサ百合ノ花ノウチユレテタタミノ百合ノタチハナルミユ
月カカル木ノ枝ナガクサシクレドタタミノ上ノ百合ニサヤラズ
木ノ枝ニ月ノカカレバ木ノ枝トサ百合ノ花トトモニウツレリ

ヒサカタノ空ユク月ノカタブケバタタミノ上ノ百合ナナメナリ

ハシチカクランプヲオケバウツリタルタタミノ上ノ百合ナヽナルモ

トモシ火ノランプヲオケバタタミナルサ百合ノ花ハ庭ニウツレリ

トモシ火ニ庭ニサシタル百百合ノナガヽシアレバ百合トミラエズ

月サシテウツレル木末トモシビニウツレルサ百合庭ニアヒケリ

○

山里ノ湯イヅル村ノ山百合ノ玉ノヲトメヲワレコヒセリキ

戀十首（萬葉ニナラフ）

岡ノベノ小松ガシタノ萱原ノサヤニミナクニ人シコヒシモ

ムラサキノ衣ニスルチフ月草ノウツラフ人ヲワレコヒメヤモ

ワギモコハモノナ思ヒソウツソミノ人ニソムクトモ妹ニソムカメヤ

ヤハラカキ妹ガ玉手ヲシキ妙ノマキテヌラクトワガ血汐ワク

吾妹子ハコトナアラセトイハヘ瓫ヲイハヒホリスヱ神ニイノルカモ

天地ノ神ノ妹背ノ戀力山ニ火ヲフキ空ニタツルカモ

ウツソミノイノチハツヒニ死ニヌトモ骨シ全ケバソガ戀モユル

吾妹子ハサハナ泣キソネ玉ノヲノイノチ死ナズバマタモアハンカモ

人ニシテコヒモフ心アラズセバ毛モノニダニモシカズケンカモ

沖ツベニシキ波立チテ漕グ舟ノセンスベシラニコヒワタルカモ

○

下ツ毛ノ那須野ノ原ハイヤヒロニ諸木ハアレド栗ノ木オホシ

ミチノベニ栗ノ木アレバ道ノ中ニ栗ノ實オチヌ栗ノイガモオチヌ（差出年月未詳

自宅より　封書　寺田憲宛）

（寺田憲曰、この頃は正岡先生を毎日尋ねて、もう長塚は天下の歌人に成つた積りで氣を吐いて居た時分です　明治三十三年十月十日頃か）

其十

カキカゾフ二子ノ崗ノ神ノ木ニカケテシスバユサキクアリヤト

漕グ舟ノカトリノソセノニヒシボリソレシノメラバ行キテノムベシ

琴瑟相和

秋葱（アキネギ）ノ二（フタ）コモルナスフタリシテコモラフ室（ムロ）ニ入ヲユルサメヤ（明治三十三年十月二十日　自宅より　はがき　寺田憲宛）

其十一

吞氣ナル御手紙云云ノ語ニムクユ

徒ノ文トミラメカ吾文ハ人ヲイツハル文ニアラナクニ

イナダキノツツミイタハリ日ニシテハ二（フタ）日三（ミ）日シテカキシ文ゾモ

長文ヲカケバサハリアル吾ニアレド君ガタメニハシカモ厭ハズ
君ニヤリシ文ノ長文カズニシテハ二手ノオヨビ折ルトモ足ラジ
君ガタメニワレイツハラズシカニアルヲ君ハカクモフ事ココニ終ル
（明治三十三年十月廿四日　自宅より　封書　寺田憲宛）

其十二

次に小生の近詠少しばかり申上ぐ可く候。

雷八首

くろくもの野にたつみれば鳴神のなりもならずもうちひそみをり
なる神のなりとどろけばうちよりて蚊帳にひそみて念佛（ネブツ）まをさく
あめつちをうちとどろかし落つる神杉の梢に火のはしらたつ
なる神は遠く走りて天の川くづるるがごとそそぐ雨かな

馬ひきて夏野を行けばおどろしく神なりいでて馬たちさわぐ
金村の鳴神の社をろがみぬこの身ひとつはまもらせたまへ

水戸地方にて海の方に向ひし雷は、必ず海よりかへり來るもののよしいふ

ひむがしの海に走りしなるかみの雲うちかりてそらかへりくる

われ幼き時は雷を恐るること甚しかりしが、年長じて今はかへりて快きばかりになりつ

エレキテルそらに起ると知るからにももちなる神恐ろしからず

エレキテルは電氣なり、平賀源内の著書にあり。

二百十日六首

風もなき二百十日の雲さけてそらあらはれぬ稻の穗の上に
おすすきのはつかに白き穗の上を二百十日の雲はやくとぶ

ふきあれの二百十日は風なくて出水よぶ聲雨ふりつづく

砂畑のもろこしいたくふきをりて二百十日の風過ぎにけり

風あれて二百十日も過ぎにけり粟おこしみる野まはりの人

庭前の景を

朝顏は花さきつくし蔓あれて二百十日のそらくもりけり

月十五首

すすき生ふる小路を栗の畑にいれば栗の實落ちて月靜かなり

さえわたり水もたるべき月の前をさはらぬ程の雲ぞ過ぎゆく

枝ながらこよひの月にそなふ可く田舍の阿爺が柿うりにくる

あきらけきこよひの月夜おもしろし夜はあくれども月てりわたる

田の中の村のにはとりしばなきて月まだのこる稻の穗の上に

ひとりみる高嶺の月はさもあらばあれことしの月は家にしてみる

單衣きて肌冷かになりにけり月遂にかくれすすき風さわぐ

はらはらと廣葉ふれあふ音はして芋のはたけに月さしのぼる

月ゆらゆら垣根をこえて昇りけりのきにつるせしもろこしの穂に

利根川の河原はるけみ桑うゑしはるけき河原月すみのぼる

日にうとき木蔭にもゆる曼珠沙華（マンジュシャゲ）ほのかに赤き草原の月

中秋を

をみなへしさしては穂芒吾亦紅（ワレモコウ）小瓶にさしてけふの月みる

雨雲に月はかくれて供物机の上に小き灯ともる

蕎麥畑の月みにくればほろほろと卷藁たたく音かすかなり

今年中秋月なきに去年の今夜病院の窓に「雨雲のかしこや月の昇れるとなほうちあふぐ望の夜のそら」と詠みたることなど思ひいでて

去年のけふは病院の窓に歌よみき月なきそらをなほぞ仰ぐと

朝顔

野分して朝顔の棚倒れけり鉢うちまろび花土にさく

秋すでに朝顔の蔓のびのびて薄にからみ木にはひのぼる

得て春耕先生を訪ひまゐらせたる折のこと思ひいでて

葉雞頭は赤く柘榴は青かりきあるじ春耕ゑに耽る宿

初茸

初茸を筵につらぬきかぐはしき木犀の花をそへて送りつ

盗兒

をりをりにものを持去る貧しの子うゑて盗むか人数へしか

あはれ人の盗人の子とそしられてみもいつしかに物ぬすみならふ

赤人 狂體

なれが世は辛くしはあらじいろ赤きはたけの隅の唐辛子くへ

（明治三十三年十一月十六日　東京本所横網町より　封書　寺田憲宛）

其十三

拜啓。近頃の御様子承度存候。さて小生去月中歸國の存念に候ところ、公判もこの十八日と延期なりしことに候へば、それ迄滯在せむと只今迄まかりあり候。然るところ控訴院の都合にてまたまたのび申候。この次は何れ來年のことと存候。左候へば小生も近日中には是非共歸國可致候　さて過日御面會の折にも申上、且つは承り候こと等にて略了知仕り候へ共、貴兄には歌は全然おやめに相成候由には候ものの、なほ幾分は關係せらるる樣のことは無之候や、これ迄一年餘りもやり來りたるものを一朝にして而かも目立ちたる出來事もなきに、捨ててかへりみぬといふは常人のなし難きところにして、またあへてすべきことにも有之間敷候、それ故折々は手帳を繰り返すこともあるならんと存ぜられ候。それが又小生には

望ましきことに有之候。かく推察しかく希望するにつけ一の心配は作ひ申候。これを申上候ては或は今更御心を損するやも不知候へ共、言はずに居るも苦しきことに候へば申上ぐる次第に候。鐵幹を師として明星に力を添へらるる等のなされ方がありはせぬかと申すが、卽ちそのおそれに有之候。

明星の可不可はこれ迄いくたびも申上候こと故、いまさらくどくどしく論ずる必要もなけれど、常識を失ひたる人のもとに、常識に外れたる詠歌のおどろく計りに連ねられありと申すことだけは、明星といふ名をいひいづると共に申さではかなはぬことに有之候。さる沒道義の書が、歌界の事情に通ぜざる地方の青年を誤ることの甚しきは吾々同人のいつも慨嘆にたへざるところに有之候。されば今回の發賣禁止の如きも、理の當さに然るべきところと寧ろひそかに喜び申候。吾々同人も決して明星といふ雜誌の滅亡を喜ぶものには無之、寂寥を極むるこの社會に、是非ともかくの如き雜誌の繼續は望みてやまざるところには候へ共、其記事

の陋劣卑野なるにいたりては、到底ながく其生存を許すべきには無之候。小生等ひそかに今回處分の理由を漏れ聞くに、決して粗末なる裸體畫が累をなしたるに非ず候。つらつら考ふるに、從前の內務に相たるもの多くは專門の智識に乏しきもの、國風の上に些の解することなきものなり　故にこの方面に於ては等閑に附してかへり見ることとなかりしなるべく候へ共、今の末松は曾て充分ならぬ迄も鐵幹の問に答へて長文を讀賣紙上にのせたること有之候　國歌新論と題して坊間に散在するものはこれに候　而してその後と雖否を歌學上にさしはさむことに候へば、社會の表面上にとにかく一勢力ある明星の如きは、再三其手にしたるところのものなるべく候。其夫人が佐々木信綱の門下たり、且つ自らも之と交りあるを思はば、この間の消息推察するに難からざるべく候。故に比較的斯學上の智識ある內相が下したる發賣禁止の命令は、從來の內相がなしたるに比して、その輕重論ぜずして明かなるべく候。かくの如くにして明星が蒙りたる嚴命は、歌の雜誌

が風俗壞亂を叫ばしむべき性質のものにあらざるを思考せば、明治の歌界否文壇が蒙りたる一大恥辱にして、未曾有の醜事と稱するに憚からざるべきことに有之べく候　實を申せば小生は明星の第八號は、小川町の店頭に一たび手にしたるのみにして、之を讀みたることは無之候　同人の言に其八號に於ける鳳某といふ少女の歌と、其消息と、鐵幹の作物と對照せば、略了解し得べきところのものありといひしをききて既に之を讀むの勇氣なかりしものに候。風俗壞亂は志あるものの夙に口にせしところ、裸體畫のごときは吾人の問ふところには無之候。このことありてより旬日、明星は號外の名の下に末松博士に與へて裸體畫を論ぜりとききく　小生は又この號外を讀まざれば詳細を知るに難しと雖も、之を同人の知るものに質すに、論據は只裸體畫にありといふを以て、一顧の値なきことと知り申候。風俗壞亂の問題が出て來るところは、裸體畫に基づくものには無之が故に候　なほこれをきくに、今回のことを口實として寄附金を募るの擧をなせりといひ、是

下の名が實に其發起人として連ねられありときくに至りて、小生は殆んど今はたへがたく存候。未婚の少女をして汚らはしき戀を歌はしめ、志あるものを嘆ぜしめしは明星には候はずや、潔白水の如き青年をして、其向ふところを過たしむるものは明星には候はずや、今は個人の私行を發くにも躊躇せざるべし ×××××・・・・・・××××××に候 ×××××××××自らほこるといはしむるものは・・に候。かくの如き×××××の下に幹せられ、醜汚の文字を以て滿さるる明星を、今もなほ足下は財力を投じてまでも保護せらるる御所存に候や。說をなすものは申し候。號外に名を連ぬるものは僻遠のものあり、或は之に謀りしや疑ふべきものありと、萬一にも之を信ずべきとすれば利己の行爲またいふの要は無之候。要は足下が知りしか知らざりしかの二つに有之候。知らざりしとすればもとより足下に責なし、知りしとすれば自ら心事を明かにするの責は有之べくと存候。小生は今はこの上を論ぜざるべし。返書によりて其由りて來るところ

を知り度相待居候。長文は要なし、何卒至急御返信被下度候。

長所の存するところには必ず短所の伴ふものに候。貴兄が明星を愛し明星を保護して、小生をしていつも苦言を發せしむるものは貴兄の長所が然らしむるものに候。これ短所の存するところに候。貴兄は憐愍の心に富めり、鐵幹が明星を出すに於て苦心せりといふをきて、氣の毒になりしには候はずや、其結果財を投げ打ちて助けんとするの義擧に出でしには候はずや、表面より見れば卽ちよし、然れどもこれは賢なるものの行爲に非ず。人を救ふはよし、人を救はむとならば其人を見ざるべからず。只これだけ申上置候。よくよく御思考願上候。暴言は何分にも御海容被下度候。貴兄の御分りになる迄はかくつもりにてこれ迄は居り候へ共、これにて議論もやむ樣致度ものに候。早々。（明治三十三年十二月十七日　横網町より封書　寺田憲宛）

其十四

木の芽ふくころにしあればいなだきのつつみよからずものうくてありき

あら小田をかへすがへすも返り言わすれてゐたりいやながきけに

○

おほふねのかとりの小田のくろのべのなたねの花は過ぎぬらむかも

かみ埼ゆそがひにみゆるおし砂のはたのにひ桑いまもゆらしも

○

吾とものうたをあつめし酒の巻君にみすべしみしのちはかへせ

（編者曰、右封筒なく四月三十日と記しあるのみ、推定明治三十四年頃？）

其十五

唐銅の筒形小瓶とりよろひ活けし梅が枝夜に日に見つ

天行くや雲形刻む唐銅の小瓶の梅はいまか散るらん

例によつて相おくれ候へども、御禮のしるしまでに寸楮呈上仕り候。

さてこのたびは突然相伺ひ、思ひの外の長逗留にも不拘品をかへての御もてなし、嘸々御迷惑の御ことと恐縮に存申候。

成田の梅林は五日ばかりのうちに見違へる程花になり候ため、おなじものを繰返して見るやうにても無之、まことにおもしろかりしことに有之候。

途中の景色他には一向緩りも無之、取手と申す所へ一泊翌七日無事に歸宅仕り候。

庭前の老梅三株やうやく咲きそめ申候。鶯も來て鳴き申候。

されど梅林の中は、春色のいたるも遲きかのやうにおもはれ申候。片田舎は時々ほかへ出ねばとてもやり切れ不申候。

この后も折々御伺ひ可申候。

御投恵下されし候品一折は家内一同にて賞味仕り候。一折は根岸へつかはし申候。

珍らしきものと喜び可申候。ひしほを頂戴仕り候へば手前味噌少々申述べく候。日本の週報は課題を以て募りたる歌俳を毎號掲載することに候。是非御覽あつて然るべく候。週報ばかり卽ち月曜日の日本ばかりを購讀することを得申候。一年分一圓に候。他に郵稅一回に五厘一ヶ月に二錢を投ずれば足り申候。

尤もこれは小生の方より御おくり申てもよろしく候。都合相計り可申候。

先週の週報と今週の週報とには小生の長歌掲載の榮を得申候。それは春の川といふ課題に應じて鬼怒川の歌、籬といふ課題にて作りたる睡猫の歌の二つに有之候。

いづれ近日のうちに右週報さし上げ可申候。御一笑下されたく候。

なることならば今月中水戸よりかけて多賀郡諏訪の梅林を見にゆく所存に候へども、大兄御入來とあらば他出せずに御待ち可申候。御高來の程偏に御願申候。但し片田舍は片田舍の積にて御出下されたく候。

改めてみなみな樣へよろしく御とりなし下されたく候。

槻ガ枝ニコガラムレタリ初春ノ成木ノ餅ノナリナルガ如
陽炎(カギロヒ)ノ夕日射シスレ五百枝サス槻ガ枝コガラ腹白ニ見ユ
コレハ一寸目ニ觸レタ景色ナリ　(明治三十五年三月十九日　自宅より　封書　寺田寅彦)

其十六

拜啓　宗五郎神社より佐倉へまゐり兵營相たづね候處、舍弟儀定期休暇にて國許へまゐり候由、それからその日のうちに當地へまかりこし候。
今日あたり東京へと思ひ候ところ、天氣がおもしろからず一日延し候。
兎に角このたびは時間に制限ありて、心おち居ずのこりをしく存候。
いつもながらの御もてなし、皆々樣へ宜しく御つたへ下されたく、小生の希望は何よりもうまいものが難有、うなぎの佳味はいつまでも相忘れ申まじく候。御母上樣(へ脫?)は別して御願申上候。御わらひ下されたく御つたへ下されたく候。

なほ申上度候へどもこれにてとどめ申候。心おちつき候はばまたゆるゆる申上べく候。

雙生丘にのぼりて

クスノ木ノ木垂ルシゲ丘ハ秋風ニ吹カレノ瓢コロブスガ如シ
秋風ハイタクナ吹キソ白波ノイ立チクヤサバ瓢ナカラカン
秋風ノ吹ケドモコケズヒタ土ノソコヒノ杭ニツナグ瓢カ
ナリヒサゴ堅々サニ切リテ伏セタレドソノ片瓢アリカ知ラナク

(推定　明治三十五年九月五日　發信地不明　封書　寺田寅彦宛)

其十七

「いづのちわき」難有奉存候。

拜啓、先月十九日正岡先生長逝の報に接し匆皇上京、初七日も濟し二十六日歸宅

の所存に候ところ、所用ありて延引、二十八日の暴風雨に逢ひ翌日出立、土浦より筑波下へ一泊、今日午后歸宅、貴兄の御端書拜見仕り候。早速御見舞下され難有存申候

東京にては左迄にも候はねども、汽車取手に近づくに從ひ樹木の損じたるもの漸くおほく相見え申候。尤も家屋の潰れたるものは、龜有より土浦迄の間に五十餘戸を數へ申候。土浦の町も慘狀を極め候。土浦より藤澤小田等潰家のおびただしき目も當られぬ有樣、大木の根子拔きになりしも中折れのもの只々あきれるの外なし。何處も何處も滅茶滅茶、どこから手を付けてよいやら分らぬといふことなり。小生の家も建屋だけは何ともなけれど、屋敷の大木涙の出る計りに荒され、流石誇つて居た杉の森も丸でカラッとして見る影もなく、當日の模樣をきくに、とても風の中を歩行するなどといふことは出來難かりし由、五十年にも百年にも曾てなき風なりといふ。畑も田も大分荒されて、くふに困るもの何人といふこと

を知らず、きく處によれば下館あたりは殊の外慘狀を呈し候由、何とも嘆かはしき限りに存候。

先は御返事迄、早々。（明治三十五年十月一日　自宅より　封書　寺田憲宛）

其十八

久々にて御目にかかり候ところ、用事等有之候ため思ふままに御話し申すことも叶はず、殘念に存候。その折一寸申上候小生の近詠、日本へ揭げられ候ものの是非御目に掛け度、今日御送り申上候。これは小生はじめてかやうのものをよみしにて、御着帶の方は先づ好評と申す側に有之候。

小生のうたを自慢するにては無之候間、以下記すところを少しく御きき被下度候。さきにも申上候通り、うたは人に分らぬ樣にては何にもなり申す間敷、いまはじめてにてはなく、自分に分らぬうたは決して人には分り不申候。明星の「小生の

詩」の如きは十中の七八迄は誰にも分るまじく候「日本」のうたに至りては古語が大分有之候にもかかはらず皆よくわかり申候。萬葉の長所は卽ちこれに候。なほ明星誌上の、子規子に與ふといふ論文の少しも要領を得ず、かつ亂暴なる恰かも鐵幹自己のうたの如きことは小生には分り申候　左千夫と話してみてなほよく分り候。信綱が鐵幹に詫をいひしとて、根岸會に何の影響も有之間敷候　信綱は只子規をかつぎ出し候へ共、それは信綱一己の仕業にて、子規には此ほどにも感じ不申候。隨而信綱がどうならうが何でもなきことに候。信綱は根岸會には一切無關係の人間に有之候。

左千夫は自信強き男にて、一旦自分が言ひ出したらば詫びるなどいふことはせぬと申居候。例令他を罵りたるにもせよ、罵り得べき丈のことを罵りたるにて、自分は慥にかく信ずるからは詫はいらぬことに有之候

信綱などは惡くいうたり、あやまつたり、實に今度の事なども話しにはなり不申

候。鐵幹も子規を罵りおきながら次號ですぐ謝罪、重寶な筆も候ものよ。あやまる程のことをいひおきて只取消す、それで事がすむなら御前は盜賊だといふても、取消すとさへいはばそれにてよきにや。鐵幹は子規を破廉恥漢と申候。破廉恥と申すことは竊盜とか强姦とかを申候。言ひやうにも事を缺きたるものに候。
こんな事いふもいや故よし申候。
次に苦言を申上候。(明治三十五年十一月十三日　自宅より　封書　寺田寅彦宛)

其十九

賀正

さき頃より炭燒といふものになり申候。めでたくまかり在候。平九郎君へもよろしく。(明治三十八年一月七日　自宅より　封書　寺田寅彦宛)

其廿

拜啓　ひさしく疎遠に打過ぎ申候。ほのかに承り候へば、分本兩家打揃うて御よろこび事有之候ひし由、御祝言はなはだ申後れ候て申わけも無之候。扨て御存じの伊藤左千夫君御尊宅へまかり出で、御所藏の幅類一切拜見いたし度由申居候ことに候が、或は此月の中にも罷りいで候も不知候。同君よりも一應大兄へ照會の上のことに可相成候へども、其節は宜しく御願申上候。畫家平福百穗君も同道いたすやも不知、別に御馳走はいり不申候。刀畔氏のもとへも御案内下され候はば此上なきことに候。右決行せられ候とも馬醉木發送の後に有之候へば、中旬以後かとも存候。馬醉木へ御寄附のこと難有存申候。欲には「心のはな」への御寄附と金額に於て顛倒いたし候こととならば更に妙なりしならむと存じ候。左千夫庵にては屢々大兄の噂いで申候。南畫會の入場券御送り下され候趣左千夫君よく申居候。左千夫君は大にしてふとり百穗君は小にしてふとり居候。一は黑く一は白く候。

左千夫君は武骨にして田舎爺の如く、平福（百穗君）は比較的やさしく候。草々。

なほなほ蕨四郎儀去月末出征の途にのぼり候。その折は御父上様には一方ならぬ御配慮に相成候。

小生は昨秋以來炭焼になりてつとめ居候 なかなか上手にならず候て困りいり候 いつか御面會の折くはしく申上度と存候。（明治三十八年五月六日 自宅より 封書 寺田憲宛）

其廿一

小生この二十日頃房州の清澄山へ參り、月末に歸宅いたし度、歸途は左千夫と御たづね仕度心ぐみに候。アシビもまだ出で不申、御さしつかへ候やも不知候へども、その頃と御待下され度候。（明治三十八年五月十六日 自宅より ハガキ 寺田憲宛）

其廿二

ナンヂヤ、モンヂヤ樹下の御手なみ一日もはやく拜見つかまつりたく候。

拜啓、過日はいつもながらの御馳走にて、近來の氣保養仕り候、皆々樣へよろしく御願申上候。

東京よりの御書状たしかに拜誦つかまつり候、左千夫君の失敗談など目に見るが如くに候。

左千夫君よりも御寄附に就いては、厚く御禮申上ぐる樣と申來り候、改めて御厚志感謝たてまつり候。

刀畔君へは繪葉書二葉さし上置候、歸宅いたし候所、そこここ草だらけにて皆々忙しきことを託ち居り候、旅行前に口を閉ぢ候炭竈、その儘にしてこの頃あけ候に、非常の良炭をえ申候

これから少し骨を折り可申候、煙から採つて製する醋石五十圓ばかりになり申候。

其廿三

拜啓。御旅行中はたびたびの御通信にあづかり候へども、以ての外の御無沙汰申わけも無之候

一昨日上京左千夫君のもとへ泊り申候て、夜ふけまで打ち語り申候　銚子より御手紙のおもむきなど同君より承り候。話の進むにつれて、以前一寸相談有之候緣談に付き、詳しき事情等も聞き知り申候　御苦心の程洵に推察に餘りある次第、令妹の不運殊に同情の感に堪へ不申候　此事最初は唯御父上樣より小生の父へ談話有之候由にて、小生は母より承知仕り候儀、小生は目下自己の境遇上妻帶の意志無之候まま、何の顧慮もなく小生の意中母へ申おき候。暫くして順次郎より父宛の手紙にて、御父上樣よりの御話に、本人卽ち小生の心の儘に強ひていふに及

ばず、なほ他に相應の口もあれば話はそれなりにても宜しとのこと承知、最早該縁談は小生の腦を刺戟する程のことも消え失せ申候。左千夫君一夜貴兄の御述懐をきき候こと、同君より聞きしり候て意外のことに驚き申候。洵に同情には堪へぬ次第には候へども、從前より決心いたし居候ことを捨て去ること能はず、小生は如何ともするに由なく候。小生一家の現狀は、到底小生をして安じて他人を交ふる能はず、些少にても自ら安心を得るに非るよりは、決して他人を交へまじきは當然のことに自信いたし居候。かやうのこと申居候ては何時か年齢も過ぎ去り可申、好配偶はその時え難からむと申候人も候へども、小生は生涯の獨身をも多くの非難なしに遂げうべしと信ずるものに候へば、左様の場合には只運命と諦め可申候。廿七才の今日までは、未だ一たびも身持ちに於て人の非難をうくべき行爲無之候。家に孩兒のこゑをきくものは必ず幸ならむと存候。されど小生には自ら省みて恥づる所なき點が唯一の慰籍に有之候。思はず他に外れ申候　御令妹の

御身の上左千夫君より承り候如くば、御苦心にも及ぶまじくと存じ候。断然として拒絶するに如かず、小生をして云々の如きは寧ろ姑息なり。若し小生にして同情の念禁じ難く、事貴兄の望むが如くせしならばこれ實に義俠者なり。此くの如くにして義俠者たるをうる時、貴兄が一家の小波瀾位をば事ともせずして、無垢の一少女を救ふに斷然たる處置を執ることをえば、卽ち義にして勇なるものなり。目前の小波瀾のために將來の大事を忍ばむとするまでに、貴兄の腑甲斐なきを信ずること能はざるものなり。談未だ決せずば速に拒絶せよ。何物の前に假借するものぞ。左千夫君の言の如くば最早此の考慮を要する問題に非ず候。草々

不在に候はば行先へ御屆下され度候。（編者曰、以上封筒の表へ認む）（明治三十八年八月二十一日　東京淺草黒船町十五　飯田氏方より　封書　寺田寅彦宛）

其廿四

拜啓。卽九時發の列車にて出發湖北に下り、大堀の渡しを過ぎて、取手にいたり水海道迄馬車、同所より徒歩にて夜にいりて無事歸宅仕り候。湖北より取手まで汽車ならば十二錢、水海道より石下まで馬車十二錢、合せて二十四錢を節することを得たるは愉快に有之候　さてこのたびつらつら大兄の身のまはりを見候に、これまでとは違ひ極めて質素に極めて落付きたるやうにて、或點に於ては淋しとも申さば申すべきものと存候。日頃の御心勞はかくも表面にあらはれ候ものかと、いたく氣の毒に存ぜられ候ものの、また甚だ大兄のためによろこばざるを得ざる儀に有之候。

憚なくいへば、今日の質素は他家よりまゐられ候大兄の身としては當り前の話にて、口を極めてほむべき程のことにも候はず、これまでとても申候通り、從來の如きは不相應のおごりと申すべく、一隅を見て全般を推しうべしとせば、大兄の身のまはりを見るときは、一片の愁なきを得ざりし次第に有之候。

大兄今日の幸棒が外部の刺戟によらずしておこりたるものならば、なほさらよろこび可申候へども、悟らざるものにまさること萬々に候。

人間はいかなる場合に遭遇するも、それを善用することによりて悉く自己の利益たるべきものと存候。

大兄今日の逆境に接して、ながく一身を持するの道に於て得るところあらば、幸これに過ぐまじと存候　いかに候や、逆境はいつまでも繼續すべきものにも候まじく、やがて順境の來らむ日大兄なほ今日の苦をわすれず、質素に一身を持し得るか刮目して待つべく候。

西浦の月を見ざりしは遺憾に存候。

また逢はむ日は御心配なくてあられむことを奉祈候。

いつもながらあつき御もてなし、御兩親ならびに皆々樣へ宜しく願上候。

（編者曰、右封筒なく單に十三日と記しあるのみ、推定明治三十八年十月頃？）

其廿五

拜啓　過日は御多忙の折へ參上御馳走にあづかり難有御禮申上候。別して御母上樣へは宜しく御傳へ下され度候。佐原はもはや汽車は無き所へ參り候て、潮來まで間道を行き牛堀へ泊り、夜半土浦行の汽船へ乘り申候、宿の女の風儀の惡しきには驚き申候。小生も餘程劍呑なる目に逢ひ申候。竹は今日の所隨分荷出中に候へば數日中には御手許まで相とゞき候運びに相成可申候。

別紙伊藤君の書狀御披見にいれ申候　木村秀枝といふ人よりも、時々寫眞版を印刷費つきにて寄附有之候趣、初刷へもと申候へども伊藤君は繪の方を希望に付、木村君へは二號より寄附を仰ぐ由の文意、過日の御話の如く初刷への御寄附は御決行下され度願上候　以上の如く木村よりは每號寫眞版を寄附し、小生等三人にて拾圓を出金し（此拾圓は月々の不足額）折々の寄附金を餘分のものと致候はゞ、

隨分見込も有之ことと存ぜられ候。如此にして過日の御話しの如く、參拾金なりいくらなり御助力を仰ぎ（月々いくらとしてなり）候はば、大に面目を改め候ことと存じ候。其邊宜しく御勘考下され度願上候。左千夫君の第二の條件たる廣告が、寄附金を以て支へ得られ候はば幸これに過ぎずと存じ候。

乍末筆御病氣はもはや宜しきことと推察仕り候。

鯉のうま味は過日つくづくと感じ申候　鴨の柔かさ申すに不及、汁粉の二杯は自身に驚き居候旨、御母上樣へかさねて御傳へ下され度候。それにて腹のこはれざる所至極不思議に候。近來は御馳走ならば腹にはかまはずつめ込む主義に有之候。

貝多羅葉は下妻光明寺といふ眞宗寺に、本山より分配を受けて什物と相成居候位にて、此邊の人誰も知り不申候。小生宅へ來るものには拜ませ居候むねこれ亦御傳へ下され度候。草々。（明治三十八年十一月十三日　自宅より　封書　寺田寅彦宛）

其廿六

拜啓。今夜は父母といろいろ相談いたし候ことも有之、夜をふかして只今牀に就かむと致候處、十一時も半を過ぎ申候　日中より近來になき寒さとて、外は月冴えて庭は土堅く霜をおき申候。心落ちつかず熟睡覺束なく候まま一筆認め申候。夜も更け候こととて頭も宜しからず候。

東京にては思はず下館のをばさんに逢ひ申候。昨日同伴小生も下館へ下車、一夜御厄介に相成申候。令妹にも逢ひ申候。數年前とは容貌も全く變りて、愛らしく娘らしく相見え申候　されど嫁入沙汰は如何にも酷なるべく、溫柔にして怜悧なるさま面に顯れ候へども、新調の洋傘が何より嬉しきさま、何の邪念も何の慾念もなきが如くに相見え、此口より仰の如きことをいひ候こととは殆んど信じ兼候程に覺え申候。先日も申上候如く、廿歲近くにならずては全く嫁入の沙汰は無理

と存候。尤も御家内の御意向にては姉妹の多きこととて、一人にても早く縁付けむとの思召道理には候へども、時期達せずば詮なかるべく、此點父兄の苦心止むを得ぬことに候べく候。時期と申候て身體の發育の程度によることと存じ候。身體の發育不十分にては精神の狀態も不完全なるべく候道理、身體も精神も發達せざるものに、嫁入など強ひ候ことは、一方より觀察すれば冷酷なりと存じ候。如何に善良なる家庭に在るも、四面の刺戟は小さき心には隨分の重荷なるべく、年歯も行かぬものが、幼兒を抱いて苦慮すること憐なることには候はずや　令妹の如きは今正に春風の暖かに吹き渡るが如き有樣に候。前にも申候如く、只何とはなしに嬉し相に恥かし相に笑ひ居候こと、小生は只その高潔なるを感じ申候。過重の刺戟を加ふるは、落花を泥土に委するの感に堪へ不申候。更に差出口ながら一言申添度候。下舘の家は只今極めて平穩に相見え申候。をばさんとても母なき姪を養育することとて、老人の情格別のことと推察いたし候。永之助氏の規律立

ちたる仕込も、女の身だしなみに於て利する所大なるべく候。兩親の許に在るよりも却て甚だ心安かるべき筈、されど少しの苦痛をも心に感ぜしめざるは敎育上如何のものに候や、憚りおほき申條ながら、小生の妹は兩人とも宅に在る間は隨分思ひ切つて使役いたし候。小生なども憫然なる感じ起り候ことも有之候。母などに物を言はれ候時は稀には不快の面持いたし候ことも見受申候へども、長妹の如きは今日になりては却て母へ感謝いたし候。身體の苦勞も精神上の刺戟も思ひの外に感ぜざる由申候。小生の家庭などは申すも恥かしき次第なれば、小生も徐々として改善の途を講じつつあるものに候。母には如何なる時にも、小生の意見を採用せしむるだけの信用を買ふことに勉め居り候。今日の所は母に對する小生の希望は、殆んど達せられつつあるを窃に喜ぶものに候。

話は別途にそれ申候。

何所にも春風の吹くものとは限らず、女が十八にもなり候はば大方は心も落付き

可申もの、今妹の如きも其年齢に達し候はば、之を温情なき繼母のもとに使役することと寧ろ父兄の慈悲なるべく候　老人の手にのみ教養されたるものは、迚も世間の苦痛には堪へ申すまじく、如何に勝手元を働くとて、下館の如き出入少き家族にては何事も知れたものに候　冷かなる母のもとに幾何の苦痛を嘗めさせ、多人數の奴婢の間に交りて、多忙の世話を味はしむること、他日の利益計るべからずと存候　下館の家にては今年の如き暖なる冬なるに拘らず、久しき前より炬燵を切りおく樣子、そのくせおばさんも永之助氏も炬燵には近寄り不申候へば、全く二人の姪に對する愛情の結果に外ならず候。されどこれ喜ぶべき方法に候や、思はず埒もなきこと長々と申述候。甚だ失禮の申條と心付候へども、婆心止み難く思ふまま申上候。小生は兎角すれば獨り心中に彼樣のこと繰り返し考へ候こと屢々に候。

此間の御述懐同情に堪へ不申候。如何にも家庭に面白からぬ秘密あるは言ふべか

らざる苦痛に候。稀に遇ふ人ならば、極端なる不快の行爲も忽ちに念頭を去り可申候へども、殆んど寸時も離れざる人々の間に、面白からぬ感情の起り候ことは、積り積つては堪へ難き程のことと推察いたし候。貴兄の繼母に厚きは小生の驚嘆いたす所に候。御話によりてこまごま承知仕り候へども、御話なくとも一泊二泊の間にも直ちに消息は相わかり申候。知れざる人は無神經なりと申度候。從前よりも小生は父母とも話し候て、小生の迚ても及び難き所と嘆じ居り候。詳しくは不申候へども折々左千夫にも話し候。同氏も感じ居候。小生へは「君は獨りで居るからなり」と同氏は申候へどもそれのみには無之、畢竟天稟の相違と信じ候小生には圭角多きを自覺いたし候。心掛け候ても思はぬ時に表はれ申候て困り申候。

繼母といふもの何れの家にても大抵は滿足せず、兎にも角にも外見の圓滿を保つは、子弟の側より數等へり下らざれば叶ふまじく、これ必ず非常の苦心なれど、

飜つて思へば精神の修養上一通ならぬ利益と考へられ候。繼母の子に對する恩愛の情うすきは止を得ぬことにて、自分の子とても「さと子」は愛情乏しき由なれば繼母に在りて然るは無理とは申し難く、子の方にても冷かなる人と疎遠になり勝なるは必然の理に候。されどかかる現象は常に父兄の心を苦しめ候べく、之を目睹して口にも色にも表はし難き貴兄の心中は察し難からず候。貴兄の心づくしは既に母なる人も感謝し居ると申せば、隨て世間の人も知り申すべく、知らずとも人間の行爲として恥しからぬことを自覺する時は、一種の慰安の念起り申すべくと存ぜられ候。前日も申上候如く、何事も今五六年の間にて貴兄の年齡も卅に達すべく、令妹達も皆良緣を得候こととならんと存候。時間程强き力のものは無之、年齡の長ずれば長ずるだけ自己の權利は擴張せられ候。小生などの此三兩年は父母の仕打驚く程に候。寧ろ氣の毒の感じ起り申候。

誰にも憂慮は免れぬ所にて候へば是非なきことながら、多少の煩悶は起り申候。

小生なども家運の衰頽には年來心の安まる折も無之候。筆の序に打明け可申候。昨日も水戸なる高利貸より他人のために差押を受け候。尤も近來は各債主の許ば小生自身に言ひ延べにあるき候故、彼樣のことは無かりしことなれど、高利貸のみは如何とも詮なく候　水戸には日々有之候へども漸く片付き候て、只一口思ひ掛けず殘り居候。年末とて手痛く感じ申候。この件も公賣の延期には小生參らず候ては不叶、面白からぬ乍らも、只管頭を下げて懇願せずてはならぬ次第、馬鹿馬鹿しさ限りなく候。小生一家の借財も兩三年來母と共に調達して返濟したる金額は隨分多額に上り候へども、利子の積ること驚くばかりにて、親子三人他人には知らしめぬ苦痛、小生の一身には少なからず感じ申候　借財のためには始終各所を奔走いたしあるき候へば、時間の空費も少なからず候。小生も今少し理財の道に長じたる性質にて、絕對に何等の欲念をも去つて仕舞ふことを得ば、幾何か可なるものあるべけれど、小生にはそれ程までには抑制いたし兼候。家内の狀

況など、事の序に伊藤左千夫氏に打ち明け候外は、決して人々に語りしことなく候へども、苦心の存ずる所は、表面にいたくあらはれざる間に始末いたし度點に有之候。苦き經驗を嘗められたる貴兄の前に、彼樣なる事申候事は恥ぢ入り候次第なれど、心中洵に此の如くに候

小生は酒を飲まず、煙草を用ゐず、賭事をなさず、未だ曾て婦女子に迷ひ候ことも無之候。前三つの者は性質之を好まざることなれば、接せざるは當然のことに有之候へども、小生とても情火の内に燃ゆること無きわけにあらねど謹愼いたし候が、反省して些少の疚ましさをも感ぜぬ故に寧ろ却て愉快に有之候　人は屢々小生に妻帶を勸め呉れ候へども、一家の基礎の堅まるべき見込立たざる間は、懇なる勸めにも從はぬ所存に有之候。一家の基礎の定まらざる時に他人を交へ候ては、勢ひ秘密は免れ不申、無垢なる若きものの前に秘密を抱藏するは、迚ても小生の堪へざる所に候。素行を修むることは、内に顧みて自己を慰むる唯一の方法に候。

歌を作ることは、素行を謹むに大功有之候。情慾の常に作歌の方面に向ふが故に候。されど作歌は樂みの外に大なる苦みを感じ候。素行を謹んで自ら慰むることが、小生には苦痛なき良方法に候

小生自身に婦女子を知らずと申候ても、人は決して信じ不申、時々他行致候ことを、人知れず情慾を滿さむが爲めなりと人の申すことを聞き候て、驚き候ことも有之候　幸にして兩親は小生を信用いたし呉候。されば母の如きは幾日旅中に在るも、小生を案ずることはなき樣子、却つて小生の望を達せしむることを喜ぶが如くに候。近來母が全く小生の申すことを用ゐ候樣になり候も、素行を謹み居ることが第一の原因と存じ候　此の如くにして何を以て今更行を亂すことを得申すべきや　小生は未だ自ら金錢を得べき方法を知らず、祖先の餘德によらずしては何を以て立ち申さむや。茲に思ひ至る時は悚然たらざるをえず候。炭を燒くことは或は此の點に於て、多少の滿足をえ可申候。貴兄の千萬金を利するが如き愉快

なることは炭を燒くものには味ふことをえず候。幾何にても糊口の道を求め得ることが愉快に候　只年來の粗漫なる習慣は兎角にはかばかしからず、隨て成績は擧り申すまじく候　思はずまたつまらぬこと申上候。幾重にも御憫笑下され度、今夜も父母と家政上の話など致候て精神興奮いたし候。意中のあらまし書終り候てこれより快く眠り可申候。

なほ一つ申上候。

下館なる令妹の妹君を十一郎君に配せらるる思召の由、貴兄の結婚に於て小生は不思議の運命なるを感じ申候。平九郎氏の當時に於て更に驚き申候。今又思召の如く左樣に血族の結婚を重ねざれば、相互の圓滿は保たれ申さぬことに候や、小生の得て知らざる所、只運命の不思議なるを嘆ずるの外無之候。

平九郎氏の令閨が進退を平九郎氏と共にせむと申され候こと難有心掛と存候　夫婦といふものの彼樣なるものか、此點のみは曾て小生の知らざる所に候へども、嘆

稱を禁じ難く覺え候。小生もいつかは配偶を求めざれば叶はず、現在母を憂へしめざるが如くせば、人また小生を思ふこと此の如くなるべきか。いつまで書き候ても盡き不申候。既に三時も過ぎ候へばこれにて擱筆いたし候。前后の錯雜せるは宜しく御判讀下され度候。（明治三十八年十二月十三日　自宅より　封書　寺田寅彦）

其廿七

啓。十八日附ノ御狀今日拜受仕候。

御厚志ノ段何トモ申ヤウ無之候

過日ハ思フ儘ノコト遠慮モ不仕、アトニテ失策致シ候ヤウ思ヒ申候。自分ノ胸中ナド猥リニ人ニ打チアケ候テ、唯人ヲシテ憂ヘシムルニ過ギズ、智惠ノ足ラザルコト甚ダシト慚愧ノ至リニ候。委細ノ御申キケ此上モナク忝ク存候ヘドモ、猶豫モナク御厚志ニ預リ可申程ナラバ、甚ダ苦心モ致スマジキ仕儀、酒造ノ成績ハ一

ニ貴兄ノ手腕ニ出デ候トモ、現在ニ於テハ何事モ獨斷ニテ相叶フマジキ御境遇ナレバ、例令御厚志ノ多額ニ上ラザルコトナリトモ、尊大人ヘハ秘密ニ有之候ベク、秘密ハ何時カ知レ申スベキ道理ナレバ、其曉ニ於テ諦メヨキ尊大人トテ物ハ申サレマジク候ヘドモ、貴兄ニ對スル信用上ニモ關シ候如キコト候テハ、小生ノ堪ヘザル處ニ候

御厚志ニ浴シ候トテモ何等ノ條件モ附帶セズテハ、小生ノ負擔ハ餘リニ輕ク候コト之モ苦心ノ種ニ候

小生自身ニハ多少ノ讀書ヲモナシタルタメカ、財産等ニ執着ノ念甚ダシカラズ候ヘドモ、小生宅ヨリ出デタル七十餘歳ノ祖母ハ母ノ親ニテ小生ノ兩親ハ共ニ養子ノ身分、小生宅ニテ生レタルモノ、今日此ノ祖母一人ヲ餘スノミニ候）ナドニ彼レ此レ申サレ、或ハ他ノ近キ親族ナドヨリ、逢フ度毎ニ物ヲ聞カサレ候ガ甚ダ心苦シク候。心ノ修養ノ足ラザルニモヨルコトト存候。一ツニハ何等カノ方法ニヨ

リテ一時ノ急ヲ救ヒ、徐ロニ體面ヲ保チウル計ハ母ヲ安ゼシムル所以ニ候。小生ノ母ハ十年前ハ隨分八ケ間敷人ニテ候ヒキ。兩三年前ノコト目下臺灣ヘ參リ居候弟、養痾ノタメ歸省致候コト有之候ヒシガ、此時母ノ小言ヲイハヌヤウニナリ候トテ、不思議ノヤウニ申居候。先年小生ノ家ヲ離レ居リ候頃ハ、父ノ所行ハ少ナカラズ母ヲシテ煩悶セシメ候。而カモ母ハ只一人ニテ家ヲ守リ居候コトトテ、誰モ之ヲ慰ムルモノナク、自然ニ小言勝ノ人トナリ候ニ外ナラズ候。小生ノ宅ニ住ルヤウニナリ候テハ、何時ノ間ニカ小言モ言ハズナリ申候。當時ニ於ケル小生ノ病軀ハ頗ル母ヲシテ愛憐ノ念ヲ起サシメタルニ相違ナク、常々小生ノ所說ヲ容レタルモ、同情ノ結果モ影響イタシ候コトト存候。今日ニ於テハ母ハ全ク昔日ノ人ノ如クナラズ、小生ヲ愛スルコト切ナルト共ニ、小生ヲ賴ムコトモ多ク候。母ヲ安ゼシメント欲スル小生ノ希望ハ止ム時ナキ次第ニ候。只其方法ニ於テ當惑致候。

母ノコトヲ申候テ、端ナク貞淑ナル御母上樣ヲ思ヒ出デ、深厚ノ同情禁ジ難ク覺エ申候　幸ヒ叔父上ニモ漸次順境ニ向ハセラレ、義郎君モ成人セラレ候コトナレバ、老後ハ幸福ノ月日ヲ送ラレ候コトナラント存候。

先日モ申上候如ク、一人殘リ居候妹ハ近日ノウチニ緣付キ申候　先方ニテハ小生一家ノ衰運ハ知ラザルコトトテ、家屋ノ構造ナドヲ見テ相當ノモノニ思ヒ居候由、苦笑ヲ禁ジ難ク候　或人ハ醜體ノ世間ニ表ハレザルウチニ嫁ヲ迎ヘテハ如何ナド申シ、父ノ如キモ、嫁ヲトルマデハボロヲ出シタクナイ、ナド思ヒ居候樣子、カクテハ人ヲ欺クコト甚ダシク候。家運ノ衰頽ニヨリテ配偶ヲ求メ得ズバ、運命ト諦メテ怨ムマジク候。

思ハズマタツマラヌコト申出候。心弱クト御憫笑下サレ度候。猿島ヘハ何時ノ頃御出ニ候ヤ。妹ヲ連レテ上京致候アトニテハ、折角ノ御出ニ對シテ失禮致候コトナシトモ限ラズ候。折ヨク候ハバ遠來ヲ待チ可申、淋シキ村落ノ淋シキ家内ノサ

マ御覽ニ入レ可申候。

母ハ只今上京中、二三日立タバ歸リ可申候。御厚志ノ程申候ハバ嘸喜ビ可申候。

只御厚志ニ從ヒ候テ宜シカルベキカ否カ、小生ニハ去就ヲ決シ兼候。

水戸ノ件ハ四五日前兎ニ角延期ヲ乞ヒニ罷出候。一月末マデ開キ届ケラレ候。歸途再ビ永之助氏ヲ訪ネ申候。四年モ服藥ヲ癈セザル由、小生ハ自身ノ經驗ナド少シク申述候ヘドモ、俄ニ用ヰラレ相ニモ無之候。何モ彼モ承知サレ候ニハ困リ申シ候。斷然トシテ藥ヲ斥ケ、精神的ニ療養スレバ一年ノ內ニハ健康ニ復シ可申候。

オ縫チヤンハ見ルモ氣ノ毒ニ存候。アレ程眞面目ニ柔順ニ、少シノ不平モイハズシテ立チ働キ候コト感心ノ至リニ候。此ノ如クニシテ將來モ不幸ノ生活ヲ續ケ候コトナラバ、悲運ノ甚ダシキモノト嘆息ノ外無之候。何所カ相當ノ口ハ無之候モノニヤ、世話好ノ老婦（身分アル人）有之候ニ付、小生ヨリモ談ジ見ント存候。

成否ハ相分リ不申候。貴兄モ御苦心ノ事ト存ジ候へ共、重ネテノ斡旋希望ニ不堪候。早々。（明治三十八年十二月廿日　自宅より　封書　寺田壽苑）

其廿八

拜啓。郵便物正に落手仕候。思ひも掛けず候。御厚志の程かさねがさね申上げやうも無之候。刀畔氏へ御相談下され候事も、御苦心の程偏に肝に銘じ申候。仰の如く目下の御身分には過重の要求恐縮の至に候へども、饑ゑては食を擇ばざる次第と御憫笑下され度候。

先日も母よりも申上候筈と存じ候、水海道町植田清五郎へ一時書替の地所に就き非常に苦心いたし候儀、僅に權利を失却致さざるだけの手配はつき申候間此點のみは安心に有之候。尤も一年の延期に候へば、明年の末には相應の苦心に有之べくと存じ候。御書狀によりて御盡力の段は重々承知仕り、最早此上の御厚志を煩

はし候ことは義として望むべくも候はず、時節の到來を待つの外無之、猥りに貴兄を苦しめ候樣の仕打は、如何にも慚愧に堪へ不申候。

つくづくと相考へ候へば、貴兄も一家の經營上には金錢の問題に不足もなく、衆人の羨むべき地位に居られ候へども、仲々さ樣にたやすき境遇には無之、周圍の刺戟は常にモドカシキまでに金錢の不足不自由を感ぜらるるならむと推察仕り候。畢竟は貴兄の一片義俠の念が然らしむる次第と存じ候。人の苦痛を何の事とも感ぜぬ人ならば、貴兄の地位に在りては決して何等の煩悶も不自由をも感ぜざるべく候。隨而貴兄の目下の境遇は、決して他人の見るが如き幸福なるものならざるべきを思ひ申候。小生等の要求なくとも、金錢上の御配慮は一通りならずと存じ候へば、小生等の申出は眞實貴兄を困却せしむるに過ぎざることと申譯も無之候

先は御厚志に報ゆる日の速かに來らむことを祈り申候のみ。時期の到來せる時は

かさねての御配慮を煩はし度右御禮までに申上候。早々。（明治三十八年十二月二十八日自宅より　封書　寺田寅彦宛）

其廿九

拜啓。書留郵便物正に拜受致し候。いつもながら御心づくしの程難有存申候。久しく御煩ひの由申すまでも無之候へども、例の風邪といふもの御熟考の上餘程なら ず豫防の方法に御苦心相成らず候ては、向後隨分御苦痛を免れ申すまじく候。いささか小生の存じよりも申上度、小生自身の上より見候時は、只今は血色も稍人なみに相成候ものの、數年前は到底生存覺束なき由、噂され候こと唯今になりて人よりきき申候。それが何時ともなしに丈夫に相成候といふは、醫藥などいふもの全然頼にも不致、全く適宜の運動の結果に出でたるものと存じ候。小生は暇あつてもなくても、何處といふことなしにぶらぶらと散歩致し候　或は一日がけ

にて二三里の所へ遊びに行きしことも有之候、冬季に入りて襯衣一つにて村中驅けまはり候ことも有之、知らぬ人には氣違と思はれ候ことも有之候。かやうに振舞候ため、村のものは爾來決して小生のすることには不思議の感をいだかず相成申候。此外には餘り心配せぬことに致し置き候。これも丈夫になる原因なりしならむと存じ候。貴兄も可成暇をつくりて、一週間以内位の徒歩旅行を決行致され候ては如何に候や、必ず車や馬に乘らぬことにて、隨分身體に苦しみを掛け候樣に心がけられ候はば、旅中は少々瘦せ候ことも有之可申候へども、胃の活動と共に歸宅後は忽ち恢復致し申べく、身體の抵抗力も漸次加はり可申候。夏の海水浴も宜しく候へども、貴族的に金錢によりて安逸に日をおくり候ては、十分の結果は有之まじくと存じ候。小生の如き貧乏の旅行も苦しきもの故、宿屋にて甘き物をくふ位は實に結構に候。左樣にして何も道程を貪るの要はなき故、ぶらぶらとあるき候はば一所に長逗留よりは遙に面白く遙に有益に候、人は心の持ち樣にて

暇がないとすれば何時にてもひまは無之、有るとすれば相應に暇の有るものに候。身體のためには替へ難し。前申候如く可成ならば、暇をつくつて散歩せられむこと切望に不堪候。なほ一層進んで小生と共に御旅行相成候覺召ならば、小生の暇の折には御同道可仕候。草鞋の一錢も惜しみ、宿料は必ず値切り可申は小生の主義に候。これは小生もなかなか苦しく候へども、これだけの苦しみを堪へうる樣になれば、身體はもはや風邪などには冐され申まじく候。篤と御熟考下され度候。

（明治三十九年二月二十二日　自宅より　封書　寺田寅彦）

其卅

拜啓。數日前多賀郡の山中へ參り、歸途下館へ立ちより候所、近日御出の由承り申候。其節は小生宅へも御出下されたく、尤も此の二十七日は妹の新客にて少々込みあひ申候に付、其後に候はば凡てに於て好都合に有之候。前以て日取のこと

も御通知下され候はゞ、御待ちうけ可申、小生も他出勝にて候へば打ち合せ無之候ては、不本意至極に存ぜられ候場合も有之可申と存候。萬一小生方へ御たちより相成かね候はゞ、小生より下館へなり相うかがひ可申候。尙々釀造の結果至極の趣奉大賀候。昨秋參堂の折不圖貴宅の井の歌をよみ申候こと有之候ひしが、何となく緣ありし樣思はれ候て竊に愉快に有之候。ただ其作拙劣にて世には出し不申候。竊に御目に掛け申候。一笑に附せられ候はむことを望み申候。早々。

千葉の野を潤す水の、利根河の淵にのぞめる、眞木よろふ雙生が岡の、日おもての底つ巖根を、いや深と堀り井の水は、水溜る深田をいなみ、堅田にとうまし稻覓ぎ、八十駒の胸曳く車、八十車駒牽く米を、五尺や六尺の桶の、大桶の邊に滿て釀めば、薫はしみ底澄みにほひ、味酒と汲みのよろしき、うつの眞淸水。

（明治三十九年三月十九日　自宅より　封書　寺田憲宛）

其卅一

拜啓、此十日程は寸暇も無之自宅にも碌々居つかれ申さぬ有樣、しみじみと手紙など認め候こともなり難く失禮致し候次第、不惡御了承下されたく候　扨て御愛嬢此度の御事如何に申上候て宜しかるべく候や、殆んど詮術も無之候。三人まで同じ病との仰、御悲嘆の程御推察仕り候由申上候より外は無之候。去る人の申候に子を持たぬものには人情は解し難く候由、小生などに世の中のこと些少なりとも相わかり候筈も無之、子に對する愛情と申すもの到底考もつき不申候へども、御來狀に接し候ては思はず一種の感に打たれ申候。佛者の言と申もの五年前なりしならば、左樣にも感ぜしめざりしならむと思はれ候へども、唯今にては何となく尊く感ぜられ申候。されど如何程道理を申きけられ候ても、悲しき折には唯々悲しく感ぜられ申候。小生には左樣に有之候　道理はしかと合點參り候ても、貴

兄に於ても必ず涙の外は候まじくと存ぜられ候。心悲き折には泣くなと申候ても、泣かぬ譯には參り申すまじく、思ひの儘に嘆き悲しみ候て始めて聊か諦もつき申すべき道理と愚考仕り候。御心中御混亂の狀決して推察に難からぬ旨御挨拶致し候以外、此場合如何に繰り返し候ても他に申樣も無之候。されど最早二週日にも相成候ことゝて、御心中いくばくか平靜の態にも復せられ候ことゝ存じ候へば、一二鄙見申述べたく書添申候。初はやめ申すべきかと存候へども、平生の情誼構へて遠慮すべきに非ずと思ひ返し申候。

御悲嘆はさることに候へども冷酷に申候へば、思ひて返らぬことゝて是非も無之、唯憂ふる所は貴兄の身體に有之候。これまでとても強健無比と申す程には無之に痛く心を刺戟致し候ては、或は意外の疾患を釀し申さずとも限らず候。小生の如く子を持たぬものには、子の愛といふことも解らず、子を失ひての悲しみも明瞭には解り不申候へば、貴兄へかやうに申候ては、身の程知らぬやうに相當り候へ

ども、貴兄は小生と比べて年齢の相違も有之候上、系統上愷に子の多きを推知するに難からず、小生の如き何時妻帶とも知れぬものより見れば、唯今の小生の年齢には必ず一子を舉げ得るに相違なく、小生が妻帶の年齢には、二人三人の子を抱かむことと期して待つべしと存じ候。子の多きを以て人世の幸福の一なりとすれば、未だ俄かに悲しむべきには無之候。唯今日以後壯健なる子女を得るの道は他にもあらず、貴兄御夫妻の身體を強壯ならしむるに有之候、運動滋養等のことは申すに及ばず、心を苦しめぬことが第一の要件に候。貴兄の御氣象此點尤も工夫を積まざるべからず候。可成心配せぬ樣に致したく、小生は先年病院を出でて更にチブスに患され候折など、恰かも父が入牢の當時に候ひしが、家へも歸らず何事も知らずに打ち過ぎ申候。知らざりし譯には無之候へども、徒らに病後の身を苦しめ候も詮なきことと母の注意によりて、家へ歸れば種々の事も目撃して、心に苦みも多かるべくと、終に歸宅も致さず、爲に身體の恢復も速かに相成申候樣

覺え申候。薄情の樣に候へども、これも止むを得ぬ次第と悔い不申候。貴兄に於ても心配の程度に御注意あらむこと切望に不堪候。身體の强壯を計り候ことならば、次に生まるゝ子の左までに丈夫ならずとするも、更に其次なる子は更に丈夫なるべく候。日外も申上げ候如く、以後は旅行の時日の例年に幾倍せむことを望み申候。貴兄の如く家業に大功あるものが、日に二圓三圓の旅費を使用致し候とて贅澤にも過分にも無之候。身體を强壯にして愉快に家業に從事することを得れば、却て得策に有之候。小生をして更に冷酷に申さしむれば、自分の身體を强壯ならしむる計を爲さずして子女の多病なるを悲しむは聊か非理の譏有之べく候。以上申上候こと或は不遠慮に過ぎ候樣覺召され候はむも筆の序になほ一言を添へ申候。貴兄の今日の悲しみあるは之を人に聞き候に、結婚の年齡の若かりしと、血族の結婚なりしとが原因の樣に有之候。されどそれも申してかへらぬ事なるに、不祥の言と覺召され候も知れ不申候へども、更に申上候こと御聞き取り下された

く候。生理上には慥に一の過失に相違無之候へども、當時の事情は萬止むを得ぬことにて、要するに親戚相互の圓滑を保つため、殊には亡き人のために一切を犧牲に供したる感有之候。生理上には過失にても、子弟たるの道には遺憾無之候。此點が御熟考を煩はし度所に有之候。今日死別の悲あるは、一切を犧牲としたる道義上の結果なることを思ひ致れば、よくよく御勘考相成候て可然と存じ候。血族の間柄にても、生れ落ちて年頃に至るまで見もききもせぬ同志の結婚は、其影響少なかるべくと考へ申候所、家畜に於ても左樣にて、常に隔離し置きたる同胞の子は差支なき樣に申候。つまり隔離されたるものよりは、隔離されざるものは結果宜しからざる由に候。貴兄の御結婚の當時は道義を棄つるか、多くの犧牲を肯んずるか、此二途の別はなく、而して一たび道義に傾きて今日の結果を見る、寧ろ必然と御諦め可相成候。三人の子女も極端にいへば道義の犧牲に候。斯く申候へば、自己は悲しみに世を送る樣生れたるには非ずやと樣に覺召さるやも知れ

不申候へども、人間に德義の心盛なれば、茲に必ず一切を打消して慰安の道に開け可申候。人間行爲の恥かしからぬが何よりには候はずや。

生理上に過失の候上は今後の子女と雖、或は必ず息災なりとは速斷致し難かるべく候。昔し左樣の結果を生じ候時は、如何の工夫によりて諦め申され候や。小生の近村には八人までも生長したる男子を失ひて、末兒のみ無事なるものも有之候。貴兒の不幸はまだそれ程には及び不申候。更に極端に申候へば、これ迄の樣に子女をあてにせぬ事に有之候。希望多き人の望叶はざれば隨て苦痛多く候。最初より希望少なければ失望も無き道理に候。夫婦の間に子女を設けむとすること、子女の必ず壯健に發育せむことを欲するは人情の常にして、小生の申條は如何にも非理非常と覺召され候はむかと存候へども、貴兒には屢々繰り返す如く遺憾ながら生理上の過失あり。悲痛するも假かに及ぶべからず、畢竟するに犧牲の觀念を離れず、一意人間の義理といふことを忘れざらば、或は失望も少なかるべく候。

隨つて或は安心の方法なるやも知るべからず候。若し能ふべくば斯の如くにして精神の安慰を求め、一方には身體の強壯を計られ候はば、他の生理上の缺陷を補ひて、健全なる繼嗣を得らるべきことと存じ候。不攝生なること從來の如くにして而かも一方に生理上の缺陷あるにも拘らず、健全なる子女を得むとするは、未だ至らざるものと申す外は有之間敷候。貧賤なるものは金錢の缺乏を以て意とせざると一般、何事にても最初より無きものは無きが爲めに苦しむことは少なく候。小生は煙草の味を知らざる故燐寸なしとて困ることも無之、手持無沙汰と申すことも知り不申候。妻帶せしこともなければ、婦女子といふもの未だ解し不申候故、獨身の淋しさといふことも能くはわかり不申候。無きものは無きが故に苦しむことは、有りしものの無くなりしものの樣には感じ申すまじく候。隨て有るものもなくなりし時の心持を常に持ち居り候はば、諦めもつき可申に候。誠に不祥の言をならべ候て、時も厭はぬ恐有之候へども、眞實小生は斯く考へ申候。人には過

分の幸福の様に思はれ候貴兄の如きも、不幸の伴ふこととつくづく感じ申候。平九郎君の第二子も生れて幾程もなく死去せられ候由、これも慥に生理上の問題ならむと存じ候。同君の結婚も情誼上止むを得ざるものとすれば、是非もなき次第に候。唯他の妹君をして、更に此の過失には陥らしめぬ様御心掛専一と小生は切に申上候。以上申候こと唯々貴兄を苦しめ候のみに候はば、悔いても及ばざる儀に候へども、小生は決して左様の意思には無之候。

過日御書状を賜はりし折不取敢返書認め可申筈の所、近頃財政の整理のため、或る所より一割の利子にて抵當物件の殆むど大部分を差入候て、九千圓程を借入候ひしため、日々他出のみ致し、此手紙の如きは筆をやめては一二日を隔てて書き申候始末に候。九千圓の大金も迚も全部の償却は思ひもよらず、小生も少々驚き申候。迂濶には濟まされ申さぬ儀と、今後の方法など打ち案じ申候。これも貴兄に語り候て、徒らに貴兄の心を苦しめ候のみとは存じ候へども遂書添申候。親し

く御目にかかり日外の御禮も申述べたく候へども、それも成り難く候。唯々御自愛を祈り申候。皆々樣へも宜しく願上候。早々。（明治三十九年五月三日　自宅より　封書　寺田畫宛）

其卅二

拜啓。過日舍弟韓國へ轉任の際送り來り候品、少量には候へどもさし上申候。熊本の朝鮮飴と同質の樣に候へども、口に含むと同時に芭蕉の味を感ずる所、頗る珍とするに足れりと存候。舍弟の書狀に婦人はともすれば臭氣を厭ふと申添へ候通り、女などは檜の木の葉の臭ひありて好ましからずと申候。兎に角御風味下されたく候。

飴ハ庖丁ニテズツト押シツケテ切ルガヨク候。前へ引イタリ弱ク押シタリシテハ駄目ニ候。

去る八日所用にて上京、十一日午后歸途に就き暮近く相成申候ため、杢之助氏のもとへ參り一泊致し候。先日貴兄御出の由種々の滑稽話など傳聞仕り候。其節散歩に御出に相成候て矢つ張足をいためられ候趣、これは餘程御勘考の上、御奮發不相成候ては、なるまじくと存候。リードとかいふ人の法も必ず惡しき事には候まじけれど、其說明の如く萬能なるものには無之と信じ候。催眠術を修めたるものは何の病も同術にて治しうるが如く申し、電氣を應用する人は、同じく電氣が非常の功ある如く申候。何れも功あるは事實に候へども、何病もと申す譯には參らぬことと存じ候。小生などには現に醫術は何の役にも立ち不申候。想ふに貴兄にも同樣と存じ候。リードといふ人の法などは詰り消極的に候。或種の病に治し可申候へども、それは强健ならしむる所以には無之候。强健といふことは外部の刺戟に堪ふることを申候。藥を服して美味をとる位の事にては、迚ても風邪を引

かぬ様にはなり不申候。長き病氣は輕くてもなかなか根治すべきものに無之、隨つて左程に氣にするにも當り不申候。直らねば直らぬなりに丈夫になる工夫が肝要と存候。小生などは兩三年來斯樣に心掛け候ため、頭は兎角すぐれ不申候へども、寒暑風雨に堪へ申候故格別苦にも相成不申、頗る安心を得申候。貴兄には未だ其工夫乏しと存じ候。海水浴は結構の事に候、されど家に居つても美味に飽き候ことにては、海岸へ行つても左程の功顯見え不申ことと想はれ候。海水浴などいづれ甘いものを食うて、ごろごろ寢て居るならむと察せられ候。抑も誤りに候。これもせぬよりも宜しき譯に候へども、迚ても强健にはなれ申すまじく、外部の刺戟に抵抗するなど思ひもよらぬ所に候。それにはいつも申上候如く、長途の旅行に如くものは無之候。海水浴などは身體極めて安逸に候。安逸に身體を持してそれで丈夫になることならば、何も苦心も心配も要る所には無之候。身體を苦しめ候故、結果として丈夫になり申すことに候。貴兄には神崎の町を尻まくりになつ

て歩く勇氣有之候や、それが出來るならば、更に進んで草鞋穿きになつて自宅を出づる勇氣有之候や、それも出來れば最早申分無之候　貴兄よりもずつと年長の人にても、隨分草鞋穿きに相成候ことに候。仕度をして出れば始めて旅情を生じ、旅情を生ずる時はじめて苦痛にも堪へ申候　如此貴兄に旅行を勸め候ても、それは迚も小生の如き仕方は御勸め申す譯には不參、二里にても三里にても足の許す限り歩くことに致し、十日歩けば四五日位保養することとなされ候はば、日數も四十日と經過する間には相應の健脚に相成可申候。必然のことに候。目前にかほどの結果を得可申に、徒らに安逸に日を送られ候こと齒痒さに堪へ不申候。經費の點より申すも、三週間滯在するだけのかかりは要すまじく、眞實徒歩にのみによれば、四十日にして四十圓を越ゆること有之申すまじく、海水浴場などへ參られ候故、客舍の如何も八ケ間しく申され候へども、徒歩の旅行に七日もたち候へば、最早左樣の小言はなくなる可申候。身體もよきほどに疲れ候時は、これこそ

旅籠の座敷が難有樂しき所に相成申候。なほ御決行の思召ならば申上ぐる箇所も有之候。是非とも御決行の程希望の至りに候。一里の道も歩かぬに足がいたくなる樣にては、男子の面目立ち申すまじく候。永之助氏と五十歩百歩の間と存じ候。小生も暇あれば御同行致し可申候へども、小生はいささか忙しき用事も有之候。七月の末には越後より佐渡への旅行を決行致し度存じ居候。四五十日を二十日位にて仕上げ申度と心掛け居り候。よくよく御思案下されたく候。早々。（明治三十九年六月十三日　自宅より　封書　寺田寅彦宛）

其卅三

御手紙拜見仕り候。連日の降雨も漸く恢復致し候事故、山中定めし面白きながめと存じ候。小生は伊香保は未見の地に候。草花の萎れたるは湯へつければ生氣を恢復する由、貴兄室内の裝飾何々の花などに候や。榛名は必ず見ねばならぬ所と

存じ候出來るなら歌の幾十首を示して驚かし給へと御すすめ申上候。
小生は先月二十八日に用ありて常陸の平潟に至り、三週日に晴天僅に三日といふ不運に逢ひ申候。いまいましき儘跣足になつて洋傘をたよりに押しあるき申候。歌三十首をえたるがせめてもの心やりに候。近來少しく興湧き來り候。再び榛名湖の歌などを作りたまへと御勸め申候。御地には歷々の名ある人々群集する山、面白からむと存じ候。平潟からの歸りに永之助君を見舞ひ申候。何でもなき日にすぐ四十度の熱とはおどろき申候。如此人には滋養劑のソマトーゼとか糖燐酸とかいふものを服せしめ非常に遲緩したる諸機關を少しく恢復せしめて、適度の運動をせしむる外は無之候。小生は糖燐酸がうまくて第一と存じ候、見舞に贈らむかと存じ候。貴兄も下館へ御出の節には、他の土産よりは此如ものを御持參可然と存申候。小生は來月半過ぎには行脚に出で、越佐兩國を經て山形仙臺に遊ばむと存じ候。頓首。

順次郎は唯今佐渡の金掘をいたし居候。（明治三十九年七月二十四日夜　自宅より
封書　寺田憲宛）

其卅四

拜啓。未だ御入湯の御事と存候に付一書さし進め候。只今こちらは大豆の莢垂れはじめ、手作りの南瓜も漸くに何く様になり申候。氣候の順良なるため野らは何時も申分なく、夕暮などに散歩致し候ては爽快此上もなく候。山中も定めしいまは百合の花のさかりにて候はむ。いくばくか湯治の效もあらはれ候や。尤も湯治と申もの、冬になりて風邪を引かぬと申様の效驗も有之もの故、卽座には知れ申すまじく候はむか。馬醉木記念號漸く出來申候、表紙の立派なる詢に愉快に有之候。若し賣行よきものとすれば全く貴兄の御厚志に因るものと可申候。此皆左千夫君へ申送り候。

山中の御高吟有之候はば拜見致したく候。榛名へは御出に候や、燕尾の瀑と申すは見るべき價値も候や。

小生は二十日頃出立、先づ松島より金華山を見て引つ返し、會津より越後に出で、佐渡へも航したき所存に候。此行も歌よみたき志望に候へども、近來兎角不評判にて困り申候。小生も自身に聊か悟り申候へども急には改めかね候。御歸りの節は永之助君を御見舞相成候ては如何に候や　過日一書を認め、一日も早く妻帶して只一人の母を安心せしむるは君の大責任なり、肉體と精神との關係の至大なるを思へば一半は心の持ち樣にて丈夫になりうべしとの文意にて相送り申候處、左なる旨返事有之候。小生は氣の毒に堪へ不申候。先は亂筆にて如此に候。草々。

（明治三十九年八月七日　自宅より　封書　寺田寅彦宛）

其卅五

明日山形へむけ出立の筈に候。或は歸國まで御無沙汰致すやも不知候。

拜啓。一昨日金華山をたちて鮎川といふ港まで參候所、此日に限りて鹽竈行の汽船來らず、昨日漸く仙臺に歸り申候。此行全く松島を一週して殆んど遺憾無之、殊には牡鹿半島の萬石の浦と稱する入江の幽邃限りなき形勝の地を過ぎ、金華山の晴雨を賞して、終生忘るべからざるものなりと存じ候　貴兄若し海水浴場に遊ばるるならば、松島を遊覽して石の卷に航し、坦々たる一里半の街道を車にて渡波に到りたまへ。此地は萬石の浦の入口にて、淺くして波靜かに候。入江の中島は鹽田にて、鹽田は極めて淸麗なるものに候。渡波は只今高平公使の在宿せるを以て、浴客多くなりし程の所故、都人士には知られぬことに候。

此度の旅行は歌は作らんとは思はず、紀行文にして發表致す所存にてかきはじめ候。其節は御らん下されたく候。頓首。

安產の守一つさし上申候。御納め下されたく候。（明治三十九年九月三日　仙臺市

其卅六

拜啓。御狀に接し切に御目にかかりたき心地致し申候。或は此月末には利根を下り可申かと存じ候。

玉咏今一息と存じ候。更に萬葉を精讀せられ候ことならば、一躍して堂に上ることをうべくと愚考致し候。

筐川と申所にて舟遊を催され候由、羨望に堪へ不申候。然し貴兄の三首の歌は、却つて他の人々の數十首にまさらずやと存じ候。

小生は四十日の旅行に殆んど歌は無之候。從來小生は事實に拘泥し過ぎたる弊有之、隨て餘裕ある作品に乏しく、屢々人の攻擊もうけ申候。旅中每日日誌をつけ申候所。よくよく自身の缺點に心づき申候。斯樣に心づき申候所、歌を作ること

は兎角恐ろしきものの様に相成申候。暫時辛棒して沈黙致し可申かと存じ候。旅中の噺も少々有之候に付、是非共参堂致したく工夫仕るべく候。早々。

なほなほ今日下宿より葉書参り、御伯母上様御危篤の由承知仕り候。連日の衰弱もはや恢復の見込も無之候ものか、痛心の至りに有之候。（明治三十九年十月十九日　自宅より　封書　寺田寅彦）

其卅七

拜啓。兼ねて御約束の件に付、妹より別紙の如く回答有之候に付、其儘御手許までさし上申候。文面にては兎角に面白からぬ樣子、和文を少しも學ばせぬといふことなど隨分時世後れに有之候。蓬原女學校現在存立致候とも、先づは不適當と存候。實踐女學校は規則書御取よせ相成候や。令弟の中處にては入學には試驗を要し候由、唯何事も修學の目的と、修學すべき本人の如何に有之、本年卒業の令

妹の如き固く窟の如くば、多勢のものと伍して美事に修學相叶ひ候や。然りとて現在の通りにては、將來資產ある家の主婦となりし折など些少ならず困り可申候。此邊何とかよき工夫無之ものに候や　左樣に急に擇さずとも適當の處を見つけ、まだ十八九位のものならば、十分の監督のもとに、少くとも一年位は裁縫料理作法等の稽古せしむべきは、貴家の相應なる義務と存じ候　世人は婚姻を以て一生の大事と申候へども、婦人に於ける婚姻前の敎育も讓らざる重大事と存じ候。男子ならば結婚後にも隨分交際の方面も廣まり、修養と申すことも不知不識の間に積みうることに候へども、現在の日本の中流以下の家庭にては、女は先づ人の妻となれば大抵は進步も止り可申候　夫に篤志のものありて、絕えず妻を敎導する樣なるものならば兎に角に候。故に小生は常に日本の女は嫁になれば馬鹿になると申居候。强ち無理ならずと存じ候。貴兄も其邊に留意して急がずに適當の箇所を尋ねて、御敎育の程希望致し候。腹藏なく申候へば、貴家はむしろ令妹達を敎育

するに適せず、家族といふ以上は全く家族らしき所なかるべからず候。家族らしき有様は現在の貴家には迚ても望まれ不申候。貴兄とて其邊ばかり苦にする譯にも參るまじく、其邊の調和出來候とも物事を覺えるには如何致可申候や、敎育の實行方法は一に貴兄の意志によりて決し可申、令妹達に於ける一生の大事に候。素より繼母などの嘴を挾むべき所になく、また如此相談などは全く以ての外に候。小生も自分の末の妹のためには隨分苦心致し候　彼は不幸の女にて碌々敎育も受けず、今日は氣の毒ながらに一つの形を作り申候　小生方のは第一は金錢の問題にて、第二は家族の出來事等が原因に候へども、人には語らねど小生は竊に歎息致候。貴家の如きは金錢及び家族の問題が、敎育といふ方針を妨ぐるなどは毫も無之、現狀唯擇ぶ所が大問題に候　此點に就ては例令多忙といふとも適當なりと思ふ時、貴兄自ら上京して搜査致候こと尤も得策と存じ候。人の一生のためには、其位の勞力と苦心とは辭すまじき儀と存じ候　何時もながら餘計の事まで申述べ

候。不惡御承知なし下され度候。唯小生は令妹達の甚だ不幸なるを歎じ申候。幸ならしむるも不幸ならしむるも、全く貴兄の方寸に存じ候。十分御熟考の上御決行の儀くれぐれも希望仕り候。早々。（明治三十九年十一月二十九日夜　下總取手町釜屋より封書　寺田憲宛）

其卅八

拜復。黑船町あての御手紙附箋の上今日廻送相成申候。小生は三日出立、四日夜歸宅致し候。御同樣年末の多忙、歸宅の翌朝より奔走毎日夜にいり申候。御用向は早速八木下氏へ申おくり候。

此間は左千夫君庭に水などを打ち、前日わざわざ買ひ求めおきたる菓子も食はず、今か今かと待ち居り候次第に候。餘り御出なきにつき近くの電話をかりて、御歸國のこと漸くわかり申候。定めて急用出來候ならむなど申合ひ候。早々。（明治四

十年二月七日夜　自宅より　封書　寺田憲宛）

其卅九

拜啓　此間中は御手紙難有奉存候。小生方へもぼつぼつ直接の注文も有之、御厚志の程肝銘の至りに有之候。其節少々差上おき候藥御落手のことと存申候。かねて御噂申上候契沖阿闍梨の萬葉代匠記稿本の斷片と稱するもの二幅打ち續き居候もの故、二幅共進上仕りたく小包にて御送り申上候　此品は以前水戸侯の倉庫に有之候ひしとか申候て、水戸の市長淸泉と申す今は故人に成り候人の許に有之候品に有之候。或人は之を水戸の國學者吉田令世といふ人の筆にて、此人は頗る契沖を景慕し文字も契沖其儘なりと申され候。如何のものに候や、さる疑あるものを進呈仕り候は、甚だ禮を失する次第に候へども、所持致し候人は契沖なりと信じ居り候。小生には孰れとも判じ難く候。先年岡君の噺に、吉田令世といふ

人の歴代の和歌を論じたる一書は頗る見るべき價値のものに候由申され候。小生も一見致したくと思ひ居り候　契沖の眞蹟は伊藤君より分與を受けたる短冊も有之候に付、御望みに候はば何時にても差上げ申すべく候。茶一貫目程遠に御送り可申筈にて延び延びに相成申候。苦くして品質は先づ先づ劣等に候　唯々これ以上のもの一寸手にいれかね候に付此位にて御諦め下され度候　白紙の中のは掩ひを掛けたる品なれど、延び過ぎたる芽故うまく無之候　但しこれは急須へ少し餘分に入れて、ぬるま湯をさして少し時間をおきてつげば、少しは飲め可申候。熱湯を注ぐこと禁物に有之候。澤山の方は申迄もなく熱湯にて飲むべきものに候。次に母も昨秋以來身體すぐれ不申、尤も只見ては血色もよく、内外ともに立ち働き居候ことに候へども、生來嘗て知らざりし頭痛少時も去らざる由にて、神經を惱まし居候へば、地方の醫者も注意致しくれ、自身も上京して專門大家の診察を受け度と心構へ致し居り候へども、家事に追はれて一日一日と延び、漸く昨朝父

と同道にて上京致し申候。家族の少なきも此樣なるときには困り申候、小生一人になり候ため、暫時妹を呼びよせ申候　これとて嫁にやりしものなれば、すぐに歸さねば相成り不申、父も暇取れ申候用事有之候故、其間は淋しき留守居を致さねばなり不申候。

博覽會見物に參り候折に、御宅へも伺ひ度と存居候。早々。（明治四十年三月十三日
自宅より　封書　寺田寅彦宛）

其四十

拜啓。時候も漸く順に復し、此黴梅にては秋の收穫も十分なるべき由申合ひ候。扨て此程は御留守居の趣、御父上樣御歸りの後は何方へか御出の御覺悟も有之候や。

次に御配慮下され候市村氏は、兩三日前の「いばらき」新聞を見るに、西茨城郡

へ轉任相成候次第、最早谷田部へ御出で相成候ても詮なきことに有之候。小生とは或は縁らすきには候はずやと存候。山口縣へ照會致し候方も未だ何の返事も無之、孰れとも決し兼ね候。黒船町の尊大人よりも何とも御通知無之候。小生も縁談のことに就ては人々より切なる勸めも有之候に付、今年などは何とか取極め度と存候へば、此場合兎に角疎略に過ごすまじく存じ候程に、近々上京致し度心組に有之候。實は過日も申上候一方の談も甚だ有望の見込にて、時宜によりては此方に決し候も不計候。かくては黒船町の尊大人へ申譯なきことに相當り可申候へども、捜査の結果一方が自分に最も適したりとの見込相立ち候以上は、止むを得ぬ儀と存ぜられ候。然し此もまだ正式の話には進み居らず候に付、如何相成候やは分明ならず候。此事は他人へは決して御洩し下さらぬ樣願上候。事の決せぬうちは人には知らしむべからずと存じ候。うなぎ、ぼら甘き時節、御地へも相うかがひ度と存候へども叶ひ申すまじく候。早々。（明治四十年八月三日　自宅より　封書　寺

田憲苑）

其四十一

拜啓。一昨夜岡君のもとにて御手紙に接し貴意承り申たく存候處、歸途をいそぎ候こと有之、昨朝出立致候ため不斷殘念に存申候。過日申上候ことは、小生の衷心を吐露して些少の粉飾も無之候。其言僻せりと雖小生も既に三十に達し候今日、其舌乾かざるうちに前言を撤回するが如きことは思ひもよらぬことに有之候。偏せりと雖確信なり、決して自己の全部を沒却して叩頭致すまじく候。

今回の出來事は其結果は只父子の間の不幸を釀し、幾年間の交情を損し、更に小生に於ては自ら悲しみ、他の貴兄の如きをして徒らに憂へしめしに過ぎず、他に何等の得る處もなし、此を何とか申候べき。昨日汽車奥州線を過ぎて、古河附近の水害地の今日なほ漫々として潤水の湛ふるが如きをみて、獨り窃に泣き申候。

（明治四十年九月二十七日　自宅より　封書　寺田憲宛）

其四十二

拜啓。一昨日伊藤君よりの書狀に接し、貴兄に對する所爲の妥當を缺きて、今更悔ゆとも及ぶまじきを悲しみ居候處、昨日更に貴兄の御手紙にあづかり、全く陳謝の辭なきを苦み申候。千言萬語をつらぬるも遂に足るべからず、衷心ふかく悔悟の念に不堪、僅に左の二章を賦し申候。御熟讀下され候はば、幸之に過ぐるもの無之候。頓首。

利根川の堤くえしかば、押しひたす水の底ひに、田も畑もなべて朽ちぬ、萍とあたざりしかば、よわくして皆くちぬ、我心つよからねば、さまざまに我は悲し、我がこころあはれ。

○

とね川のつつみくえしかば、おしひたす水のまにまに、漕ぐまじき村の隈々、棹とりに船を漕ぐ、我がこころ悲しければ、いふまじきことのくさぐさ、いひ出でていまぞ悔し、我が心あはれ

（明治四十年十月三日　自宅より　封書　寺田憲宛）

（寺田憲曰、此の書四十二、第四十三信の前に猶一信あり。餘程面白い出來事であつたのですが、故人は發表を好まぬだらうと思つて拔きました。）

其四十三

拜啓　小説を書いて少しばかりの原稿料をもらひ候ためふと思ひたち、先づ京都に來り祇園嵐山の花を見て、十六日吉野に入り、今日吉野を出でて奈良まで參り申候。吉野は淺き感じの處に有之候。山の方まで麥畑と菜の花とで埋め居り候。櫻の林の上に菜の花が黄色くさいて居る處など、意外の感じに有之候。花は數日

後れて失望いたし候、建物は藏王堂水分神社など目を驚し申候、水分神社は太閤時代の建築にて、森厳の感を起さしむ、土俗ミコモリと訛り、子守神社と申し居候。本居宣長は此神社の申子なる由に有之候。一昨年鹽竈より守を差上候て譽められ候こと有之候へば、今回も子守神社の守差上申候。御受納なし下され度候。明日秋篠寺西大寺などを巡覽して、明後日京都へ戻り島原の太夫の道中を見、壬生念佛を見て歸途に就かむと存居候。祇園の舞子と鬼ごつこをしたり、舞子に手を引かれて夜櫻を見たりしたる噺は後日に讓り可申候。先は右まで。早々。（明治四十一年四月十八日　奈良より　封書　寺田憲宛）

其四十四

拜啓。藥三週間分別封郵送仕り候間御受納なし下され度候。かねて御約束の短冊も明日小包郵便に托し可申候。如何樣にも御處置相成度候。

小生は明日出立暫時旅行可致、目ざす處は上野草津の溫泉より、更に奥なる入山と申す所より案内者を頼み、旅客の嘗て越えしことなき峻嶺を越えて、信州秋山の溪谷に入るに有之候　首尾よく目的を達し候上は何物をか得可申候。秋山の地は小生一昨年秋参り候土地にて、其時は彼岸に際し單衣にては寒さきびしく、迚ても凌ぎ難かりしため早々に立ち歸り申候。今年は十日位は滯在して、人情風俗にわたりて觀察致し度と心構いたし申候

右御挨拶まで如此に御座候　早々。（明治四十一年八月十九日　自宅より　封書　寺田憲宛）

其四十五

拜啓。豫定の如く上州草津の奥入山より大倉の難所を過ぎて、此の秋山の溪谷に入り申候。大倉は間道、今年此を越えしもの小生の前一人も無之由に候。案内者は深山の溪流に岩魚を釣り、八里の間を草津へ賣りに行く男に候。途中彼の雨露

を凌ぐ小屋に一宿して、雨の夜を明し申候。秋山は中津川の溪谷の總稱にして、信越二州に跨り此の切明の温泉は只の一軒、次の和山の温泉は四軒、更に其下流の上野原と申す處漸く十四軒有之候。此の溪谷のもの皆熊突を得意とす。彼等は熊と格鬪致し候。今年七十に成る老爺にきくに、今春も熊を突きとめたりと申候。曰く年はとつてもさきは畜生、氣轉がきけば大丈夫なりと。秋山の溪谷に三日程祭あり、夜になれば男女集りて踊ることに候が、其謠の句に「からす踊かひよこひよこと」「をうどり蹴こめ、下駄の前齒のかける程」「せい出して踊れ西の黒雲あれ雨だ」等有之候。なかなか面白く候。若いものの宴會へ小生も列席致し候。尚數日間此溪谷に滯在食ふものもなくて瘦せたるべき身を起して、信州飯山より草津に越え、輕井澤に出で歸宅可仕候。切明より郵便箱までは二里半、局までは七里、此葉書は序があれば投函すべく候に付、何時御手に入るやらしれ不申候。先は右まで。（明治四十一年八月三十日　長野縣下高井郡堺村切明溫泉より　ハガキ　寺田憲宛）

其四十六

拜啓　切明を昨日出立、一里下流の和山まで參り、今日同所出立、六里の山道を此の秋成の郵便局まで參り候。岩魚少々小包にて差上申候。ほんの少々なれど生の時は六百匁程有之候。斯樣の包四つ程荒繩にて肩にかけ參り候。藁を括りしはシナの木の皮にて候。大抵腐るまじと存候へ共、腐りたらば御免下され度候。只自分の荷物の外に、四つの包を肩に掛け參り候處丈御笑味下され度候。朝より夜に至るまで餘り強からぬ火に煮ぬき、醬油をさして御料理下され度候。御宅のうちには御存じなきお方も候ことと存じ差上申候　切明にて小生爐のほとりに在りて、數回あぶり候魚に有之候　油紙は越後特有のものに候。（明治四十一年九月二日越後中魚沼郡秋成局より　ハガキ　寺田寅彥）

其四十七

拜啓　淺間の山麓六里が原に三日も滯留致居候へ共、依然として雲ふかく、遂に登山の目的を達せず、輕井澤より碓氷峠の新道を橫川に下り、南面より今日榛名に登り、伊香保を經て此町へ宿り申候。湖水の風光は申までもなく、伊香保平の雲霧頗る妙に候。赤城ゟ迚も六かしく候に付、旅行は此にて切上げ申候。早々。

（明治四十一年九月十一日　上州澁川町より　ハガキ　寺田憲宛）

其四十八

拜啓。今年は冬のいたることはやく、霜のために楓葉はおほく害せられ候。愛宕の岡の紅葉は如何に候や　もはや季節にも有之、定めし御多忙のことと奉存候。此月は上京の覺悟に有之候ひしも、所用にとり紛れ遂沙汰やみに相成申候　定めて御待うけ下され候ことと存申候。申譯も無之候。ふと今日思ひいで候まま此の

狀したため申候。障子の外に風のおとをききつゝ、小生失意のことのみおほく候。其うち御目にかかりたきことも可有之と存申候　早々　（明治四十一年十一月二十三日自宅より　封書　寺田憲宛）

其四十九

拜啓。またまた女子御出生の由、御一門の御隆盛奉大賀候。小生十一月には上京致度と存居候處、前便申上候次第にて意に任せず殘念に存申候。兎に角來春を期し申候。扨て數日前水戸へ參り候處從兄に誘はれ、七日夜十二時急行にて平泉まで乘車、八時より三時まで同處に遊び、八日夜松島に下車十五夜の月を賞し、十一時三十分同じく急行に乘込み、九日朝六時過水戸着、同日歸宅仕り候。中尊寺は實に壯麗天下第一に候。二夜は汽車にねて費す處は只一日に候。但し汽車は二等にて、小生は一錢をも要せず候。水戸までの積にて懷中甚だ乏しかりし爲、士

産物も買ひ不申候。唯僅少ながら氷餅を求め候。一箱さし上申候。信州の氷餅とは異り湯にとけ不申候。唯やはらかにしてたべるに過ぎ不申候。先は右まで。早々。

別紙小爲替券封入致し候に付、御地名産ヒシホ御郵送願上候。此は母の大好物に有之、汁のしみ出さぬ様御注意下され度候。(明治四十一年十二月十一日自宅より　封書　寺田寅彦)

其五十

拜復　御病氣の由おどろき入申候。もはや御全快と申候へば、御容態も平生と大差なきことに存ぜられ申候。小生も近來痩せ申候に付、汽車にて二週間位にて青森秋田の邊迴遊致度計畫に候。多分實行相叶ひ可申、出發は月末に候。

今夜漸く原稿書き終り申候。來月のホトトギスの小説に候。此で五六日頭をいた

め申候。
庭の葉鷄頭八尺以上に相成申候。いまはうるさき程小生の庭には花おほく候　葉鷄頭が六十株位可有之候。先は右まで申上候。早々。（明治四十二年九月二十日　自宅より　封書　寺田畫苑）

其五十一

男鹿半島を一週して昨夜秋田へ參り申候。今日午前を市中の見物に費して新庄まで參るべく候　明日は最上川を下る筈に有之候。
當地榮太樓より名物蕗の砂糖漬一折送らせ申候　御笑味被下度候。男鹿一週中嫁を三人見申候。此嫁を見出し候ため、小生の文章は出來可申候。旅行中都合四人の嫁を見申候。一人は青森の美人に候　（明治四十二年十月十四日　秋田市より　男鹿舟岩及鎧島の景の繪ハガキ　寺田畫苑）

其五十二

拜啓、今日あらゝぎ記念號を見て、大兄の既に昨日の人に非るを知つて只管おどろき申候　數十首の歌悉く整然として情味の横溢せる處傑作を以て許すべく、曾く音容に接せざる間に、如此變化を見たるは、大兄の心理に何等か開くべき或物の存在せるを否む能はずと存候　さもなくては技巧の進歩位にて、如此なることは到底有り得べきことに無之と存申候　小生も香取君の嘆ずるがごとく、氣疲れて昔日のごとくなる能はず、されどもなほ斯道に關係せるが故に、大兄の作の如きに接觸して、直ちに其眞價を知り得たるがごとく思考するを自ら樂み矜とし、且つ慰み可申候　小生は近來唯竹林の經營に腐心するの外他を知らず、更に農事の一端を解すべく心掛居り候　歌人として無に歸せる小生今後に於て大兄に會せば、語る處は却て意外の邊に在るべく候　大兄と相見ざること二年なるべきか、

三年なるべきか、世事にたづさはりては、再び昔日の如く放浪することを許されず候　詩集を贈られたる時小生は禮よきことを申して、手紙書くことは出來不申候ひき　あららぎを見ては思はず此手紙を認め申候。早々（明治四十四年九月六日　白宅より　封書　寺田憲宛）

其五十三

拜啓。御惠贈の品二つとも正に落手仕り候。御厚志の程誠に難有奉存候。此處は格別に候ものか、食事の粗惡なることおどろく計に候へば、ひしほは殊に思ひつきの品に有之候。幾日か樂み可申候。昨夜第一回の手術を受け申候。簡單にして些の苦痛も無之、起居何の拘束も無之候。院長は此の手術に於ては方今只一人なりと自稱致居候由に候が、如何のものに候か、何と申しても小生も大事に大事をとらねば成らぬ身體に相成申候。二回程ツベルクリンの反應を試驗致し候へ共、

矢張結核菌の存在をたしかめられ申候。此の間も篤と御申きけに候へ共、小生只今にては心も落つき申候に付、神經のために病勢を增進せしむるが如きことは無之候。平に御安心被下度候。扨て此間の瓜畑の御噺ふと氣が向き申候に付、昨日一寸つづり申候。題は青瓜と白うり、事實は甚だ簡單にして普通の女に讀ましむべき甘きものに有之候。瓜小舍は小生昨年一度書き申候故、再び繰り返す譯にも參り不申候　兎に角短き一篇何かへ發表致度と存居候。

讀むもの何ものにても申越せとの仰、何にても嫌ひは申す間敷候　御厚志に甘へたきは山々に有之候。

病氣を宣告されし當時の歌十ばかりも出來申候。情なきもののみにて、小生自身すら只々可笑しく感ぜられ申候。何時か御目にかけ可申時も可有之候

今日は只速に手術を終りて、在院の日の長からざるをのみ望み申候。

先は御挨拶まで右申進め候。早々。（明治四十四年十二月九日　東京市下谷區中根岸根岸養生院

其五十四

新年の御慶めでたく申納候。
扨て昨日至誠堂より新年號四冊到着、今年落手仕り候郵便物の第一番目に有之候。何せよ凡てが大冊とて、此處數日間十分相樂み可申、御厚情の程只々難有御禮申上候
年末の御書狀によれば御不快御臥牀中との由、其後如何に有之候や、最早御快癒の御事と奉遙察候。
小生も唯今の處如何相成候ものか一向相分り不申候へ共、兎に角頼むべき人を頼み申候より外は無之、岡田氏の手を離れ候ての上は、福岡の大學たる久保氏を手頼りて參り可申かとも相考へ居り候。

東京も此より追々寒さきびしく相成可申候。轉地の命に接する日の早く來らんことを希望致居候。

先は御挨拶までに右申進め候。早々。(明治四十五年一月二日　東京市下谷區中根岸根岸養生院より　封書　寺田寅彦)

其五十五

拜啓。再々の御書狀難有奉存候。小生病狀其後變化も無之、何せよ惡性のこと故、十分長く辛棒不致ては相叶ひ申間敷と存候。

扨て八木下老人より既に御きき及びの由に候へ共、順次郎こと七日以來橋田病院に横臥致居候。熱は九度に止り申候處、一兩日更に下降仕候由、少しも心配には相成申さぬ旨直接院長よりもきき申候。去る十二日参り候時、大兄へも御知らせ申上ぐる樣と本人よりも頼まれ候ことに候へ共、一つには今少し經過を見てのこ

とと存じ今日まで差控申候次第、不惡御了承被下度候。

次に先頃御はなしの瓜小屋の噺は別封女學世界へいたづら仕り候。粗雜に書捨て申候もの故、其の御積に御覽被下度候。

此處へ參り候てより短篇小說四つも腹案成り申候へ共、億劫にて筆とる勇氣も起不申候。其内認め申度と存居候。

新刊の書籍またまた御惠贈被下由、御厚志の程深く感謝仕候。先は御報かたがた右申進め候。（明治四十五年一月十七日　東京市下谷區中根岸町根岸養生院より　封書　寺田寅彦宛）

其五十六

拜啓。過日の御手紙に對し早速御返事可仕筈に候處、あれは小生に於て容易ならぬ大問題にて、頓にはいづれとも申上かね、遂々今日に及び申候。御承知の如くあの孔雀を手に入れ候際は、先師の筆蹟をも擧げて犧牲に供することをさへ厭ひ申

さざりし次第、ために碧梧桐氏の誤解を招きて、一時は非常の迷惑を蒙りたることも有之、小生には隨つて愛惜の念も加はり申候。昨年の旅行以來小生はつくづく日本人の手に成りたる南畫のつまらなきに驚き、蕪村華山と雖も許さざるに至り申候。要するに彼等には餘りに遊戲の分子おほく、自分ばかりが豪ら相に氣取りて見ゆる處、然も故らに無慾とか恬淡とかいふことを標榜せるらしきを厭ひ申候。然し柳里恭のあの孔雀には上手の氣少く、比較的莊重の部に屬すべく、更に輕薄の分子を認めざる處、南畫に口を噪すこと多ければ多き丈、むしろ異數に感ぜられ申候。柳里恭は一般の色彩の妙なるを以て鳴るものに候へ共、眞蹟は少きらしく、頻々として新聞紙上に表はるる名家の入札目錄にも曾て其名を記さず、今春西本願寺の第二回入札の際陳列しありたる花卉の三幅對も見申候へ共、徒らに鮮麗に過ぎて眞僞をも疑はしめ候。曾て美術協會に於ても桧鷄頭の小幅を見申候へども、此も纖細に過ぎて更に重厚の態なく、只記憶に存するに過ぎ申さず候。

明治三十六年はじめて京都に遊びし際、博物館にて見たりし鷄冠花蟷螂圖紙本着色は今尚眼前に髣髴して去り難く候　繪畫目錄を見るに半井樸といふ人の出品にて、吏員に聞くに、現在は所在も明かならざるかに申候ため、今春は特別觀覽も請求不致候ひき。此畫質實にして毫も浮薄の態なくむしろ地味に傾ける處、後年伊藤左千夫君の宅に彼の孔雀を見るに及びて、是有る哉と感嘆仕り候　柳里恭は大和郡山藩主の族臣にして、生涯を富貴歡樂の間に送りきといふに、彼の乞丐の徒と茶道を樂めりといふ逸話も傳はり候程にて、餘程世故にも長けたるべく、風流の極致を解したるべく想像せられ候にも不拘、他の南畫の輩とは異りて、其畫に毫も風流を衒ふが如き風は無之、かたがた小生は鷄冠花と孔雀の二幅によつて柳里恭の眞價を認め、更に只一幅の孔雀の畫によつて自ら乏しきを感ぜず候譯合、孔雀を奪ふては小生に畫もなく幅もなく成り申候。然しながら大兄の御懇望に至る動機は孰れより來り候ものに候や、次第によりては今一度勘考の餘地もなから

ずと存申候　重ねて御状賜はり度希望仕り候。草々。（大正二年六月十六日　自宅より
封書　寺田憲宛）

其五十七

年賀狀難有御禮申上ます。小生は宿痾再發のため客臘末ここへ入院しました。たいした事もない樣で既に手術は濟みました。此から月のなかば迄居たら一先づ歸鄕して、更に暖地へ出向きます　平塚へ行かうかと思ひましたが、平福君は是非共三保の松原へ行けといひます　どちらにしようかと思ひます。（大正三年一月七日
東京市神田區金澤町二三金澤醫院より　封書　寺田憲宛）

其五十八

小包難有拜受しました。

これで私もおそくも三四日の内に退院が出來ようかと思ひます。一寸歸國してそれから九州へ行く積りです　何とも御禮の申樣もありません　みんな友人などが心配してくれます。どうかしてよく成つて見たいと思ひます。（大正三年五月二十日東京市神田錦町三丁目橋田病院より　封書　寺田憲宛）

其五十九

私は十日の午前に到着しました。

丁度其日に拂出證書が久保博士のもとへとどいたと申して、翌朝夫人さんが自分で持つて來てくれました　私はこちらでは實にいひ樣もない厚い待遇を受けます。部屋がないので直ぐに入院は出來ませんでしたが、明後日の月曜日には入れてくれます。雜居でなく一人の部屋をわざわざあけてくれます。都合によつてはそれが無料でいいことに成るかも知れません。今日も藥をもらつても只でした。私の

咽喉を焼く人は日本に今たつた一人なのです。これは神尾學士がさういつて、私にこちらへ來ることを勸めてくれたのです。私は今人事の限りを盡すことに成つて居ます。もうどうなつても悔はありません。

私の今居る所は病院から二三町で、近い郵便局といふと博多東公園郵便局です。病院の門前に在ります。各郵便局の帳簿には筑前筑紫郡の部に出て居ませう、市外地ですから。然し表には博多東公園郵便局と出て居ります。何しろ御厚意によつて助かります。入院が無料であれば餘計にいいのですが。私にも近來精神に動搖することがあつて困つて居ます。名醫の手術を受けて一時快癒に向つたならば、心持も違つて來ようと思ひます。然し私は今自分の病氣のために苦惱することはちつともありません。御挨拶までと存じ右申上げます。（大正三年六月十三日　筑前博多東公園大學前通り平野旅館より　封書　寺田憲宛）

其六十

私は先月二十二日にこちらへもどりましたが大分身體が疲れて困つて居ました。昨日から不思議に熱がさめて居ます。どうか此分でつづいてくれればと願つて居ます。あなたはどうですか　私は當分こちらに居ります。毎日病院へ通ひます。私の弟も今度出征することに成つて五日に立つ相ですが門司あたりで乘船ならば一目逢つて置きたいと思つて居ます、どうなりますか。遺憾なことに私は大分に瘦せてしまひました　これから取り返さねば成りません　私も近來歌を作りますが鍼の如くの三などは非常にいけないのですから、あれは飛んだ間違をしたものと思つて見て下さい。そんなこんなで厭に成つたから歌を作るのを止めたら、齋藤君から困るといつて來ました。（大正三年十月一日　福岡より　名島の風光の繪ハガキ　寺田憲宛）

書簡集上終

巻末記

一、島木赤彦氏が「長塚節全集」の編輯を思立つた時に、長塚氏の書簡をも蒐集して全集中に收めようとした。これに、大正四年六月に私共協力して「アララギ長塚節追悼號」を發行したとき、やはり長塚氏の書簡を集めて載せた。その考に本づいてゐたのであつた。

一、諸家の好意によつて澤山の長塚氏書簡を恩借することが出來、大正十一年六月から信濃上諏訪の森山汀川氏がそれを筆寫しはじめ、大正十四年夏に大體その爲事を終へた。その間丸三ヶ年である。長塚氏の書簡は、封書の場合でも、端書の場合でも、讀みにくい箇處がなかなか多い。それを責任以て筆寫するといふことは非常にむづかしい爲事なのである。然るに森山氏は丸三年かかつてそれを成就して呉れた。それでも誤寫はやはり免れなかつた。例へば、『仲買』が『仲間』になつてゐたり、『横町の齒醫者』が『横町の齒醫者』と寫してあつた如きである。さういふのは、校正の際に盡く訂正した。

一、本書に收めた長塚氏書簡は、直ちに書簡から筆寫したものと、「アララギ長塚節追悼號」、なりをりアラギ」に載つた長塚氏の通信をその儘筆寫したものと、横瀬夜雨氏編「山鳥の渡」中の長塚氏書簡をその儘筆寫したものとの三通りあつた。そのうち、「アララギ」「山鳥の渡」から轉載したものには正しく誤植と

おもはれるところが幾つかあつた。其等は原書簡を以て校合が出來ないので、校正の際にひどく難澁したのであつたが、大體は訂正し得たつもりである。例へば、『金米糖』が『米糠』の誤であつた如きである。

一、句讀點は島木赤彦氏が大體打つたのであつて、少しく不滿足であるが、校正も三校四校となつてからでは奈何とも爲方がなかつたのでその儘にし、大切の場合だけ句讀點を訂正した。そのため原書簡には假字で書いてあるところを漢字に直したところもある。それから明かな誤字、思違ひの場合は校正の際に直したところもある。例へば『たとへ』を『たとひ』とし、『お婆さむ』を『お婆さん』とした如きである。これ等は晩年の長塚氏は盡くさう直して書かれてゐるからである。

一、書簡を一讀して、どうも意味が通じにくいので、誤植ではあるまいかといふ疑惧の念を起すのであるが、それらは誤植ではないのである。書簡の文章は多くの場合いそいで書くから、推敲の足りないこともあるのである。

書簡各通末尾の『ことわり書』も盡く一定してゐるといふ訣には行かなかつた。それは最初筆寫の際大體の約束が出來てゐなかつたので雜然としてゐた。それを校正になつてから一定しようといふので、やうやくここまでになつたのである。

一、島木赤彦氏の編輯方針は、本書に收めた、伊藤左千夫、岡麓、香取秀眞、三氏宛の書簡は、これを「書簡集下卷」に收めるつもりであつたが、紙數の釣合のうへで、上卷に載せることにしたのである。なほ、寺田憲氏宛の書簡は、「書簡集上」の校正がはじまつてから急に拜借して筆寫し、やはり上卷に載せること

にしたのである。これは土屋文明氏から骨折つていただいた。

一、本書の校正は、森山汀川、原田彦治、柳平末雄、山口茂吉の諸氏と私とが爲した。校了まで丸三ヶ月半を要した。それは疑問の箇處を極めるのに手間取つたからである。種々な不滿な點もあり、時としては傍訓なども施したいとも思つたのであつたが、私は差向これくらゐで滿足せねばならなかつた。ただ長塚氏の書簡は、書簡集として實に特色があり優秀なものなので、私は始終心の緊張を保つて萬事の世話に從事することが出來、ほかの諸氏も亦同樣であつたのである。

一、本書に入れた寫眞版中、長塚氏肖像は、大正三年に石原純氏が西洋の留學から歸朝された時に、神田の江木寫眞館で、長塚節、石原純、平福百穗、島木赤彥、古泉千樫、蕨桐軒の諸氏と私とが一しよに撮つた寫眞である。長塚氏は當時神田の橋田病院に入院中で、私等の願で、「鍼の如く」といふ歌をアララギに載せはじめた頃である。それから間もなく長塚氏は九州に行かれた。岡麓氏宛の封書は、（本文三六〇頁）美濃紙一枚に稍大きな字體で書いたもので、結婚の話のあつた時の書簡である。明治四十年八月六日の日附になつてゐる。第二の岡麓氏宛の端書（本文四二二頁）は端書に筆で細かく書いたもので、小說「土」を春陽堂から出版した當時のもので、明治四十五年二月二十三日の日附である。文中の「禿氏」は「トクシ」といふ姓であり、禿氏氏は當時春陽堂と關係があつたのである。文中の齋藤氏は齋藤玉英堂主人のことであり、共に「土」の出版に關係ある方々である。右岡麓氏の教示を煩らした。第三の中軸豐子氏宛の端書は（本文二四九頁、大正二年十二月廿一日發のもので、晩年には

大凡おしいふ工合に細かい字で書いた。その一つの標本として選んだのである。

一、長塚節全集第三卷の歌集に收錄し得なかつた歌が、この書簡集に幾つかある。例へば寺田憲氏宛の書簡の如きである。さういふものは相補充して讀んで頂きたい。大正十五年七月吉日。齋藤茂吉記。

大正十五年七月二十八日印刷
大正十五年七月三十一日發行

著作者檢印

長塚節全集第五卷
非賣品

著作者　長塚節

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者　左手薰

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

東京市日本橋區四丁目五番地
發行所　春陽堂
電話大手五一・四二二〇
振替口座東京二六二七